

厚生労働省

平成24年度 障害者総合福祉推進事業

盲ろう者通訳・介助員の
養成カリキュラムの内容に関する調査について
報告書

平成25年3月

～日本のヘレン・ケラーを支援する会[®]～
社会福祉法人 全国盲ろう者協会

目次

はじめに	1
第1部 盲ろう者向け通訳・介助員養成事業に関する調査	3
第1章 調査の概要	5
1. 調査の目的	5
2. 調査の対象	5
3. 調査の基準日	5
4. 調査の方法	5
5. 回収結果	5
6. 調査項目	5
7. 利用上の注意	5
第2章 結果の概要	7
1. 基本的事項	7
(1) 通訳・介助員の養成目標	7
(2) 平成23年度の養成講習会実施状況	8
2. 平成23年度通訳・介助員養成講習会の実施状況	8
(1) 実施体制	8
(2) 予算額	9
3. 平成23年度通訳・介助員養成講習会の運営状況	9
(1) 広報方法	9
(2) 応募受付方法	10
(3) 受講対象者の要件	10
(4) 受講料	11
(5) 開催日	11
(6) 講師の人数	11
(7) 応募者・受講者・修了者などの状況	11
(8) 区分・コース	12
(9) 修了条件	12
(10) 登録試験	13
(11) カリキュラムごとの時間数	13
(12) その他のカリキュラム	14
(13) カリキュラムごとの講師、内容の決め方、テキスト	15
4. 現在の養成における課題	47
(1) 受講者についての課題	47
(2) 運営についての課題	47
(3) カリキュラムについてのニーズ	48
(4) 養成に当たっての全体的なニーズ	51

5. 盲ろう者の状況	54
(1) 視覚・聴覚の両方の身体障害者手帳を有する盲ろう者の人数および 通訳・介助員派遣事業の登録盲ろう者の人数	54
(2) コミュニケーション方法ごとの登録盲ろう者の人数	54
6. 通訳・介助員の派遣の状況	54
(1) 登録通訳・介助員の人数および稼働した登録通訳・介助員の人数	54
(2) コミュニケーション方法ごとの通訳・介助員の充足度	55
第2部 盲ろう者向け通訳・介助員の状況に関する調査	59
第1章 調査の概要	61
1. 調査の目的	61
2. 調査の対象	61
3. 調査の基準日	61
4. 調査の方法	61
5. 回収結果	61
6. 調査項目	61
7. 利用上の注意	61
第2章 結果の概要	64
1. 調査協力者の基本的属性	64
(1) 性別・年齢階級・所在地	64
(2) 障害	65
(3) 職業	66
(4) 国家資格・公的資格	67
(5) 通訳・介助以外の福祉関係業務の登録	69
(6) 自治体での通訳・介助員登録	70
(7) 全国盲ろう者協会での通訳・介助員登録	72
(8) 手話経験	73
(9) 点字経験	74
2. 通訳・介助に関する学習状況	76
(1) 通訳・介助員養成講習会の受講状況	76
(2) 機関・団体主催の研修会の受講状況	79
(3) コミュニケーション方法の習得状況	81
(4) 通訳・介助員養成講習会の受講により習得したコミュニケーション方法	87
(5) 通訳・介助員養成講習会の有用度	88
(6) 通訳・介助員養成講習への要望・ニーズ（自由回答）	89
3. 通訳・介助に関する活動状況	126
(1) 通訳・介助活動歴	126
(2) 過去1年間の通訳・介助活動状況	127
(3) 担当盲ろう者の年齢層	130
(4) 担当盲ろう者のコミュニケーション方法	132

4. 通訳・介助に関する意識	134
(1) 擁護意識	134
(2) 仲間意識	136
(3) 介入意識	138
(4) 対等性	139
(5) 情緒性	141
(6) 尊重性	144
5. 通訳・介助における困難・ニーズ（自由回答）	147
(1) 盲ろう者	147
(2) 移動介助	160
(3) 通訳・介助員	161
(4) 講習会や相談の場	170
(5) コーディネーターへの要望	174
(6) 派遣事業や制度	175
(7) 活動に関して	180
(8) その他	184
第3部 通訳・介助についてのニーズ調査	193
第1章 調査の概要	195
1. 調査の目的	195
2. 調査の対象	195
3. 調査の時期	195
4. 調査の方法	195
5. 調査項目	196
第2章 結果の概要	197
1. 調査協力者の基本的属性	197
2. 調査結果についての分類結果	198
(1) 通訳技術	198
(2) 移動介助技術	200
(3) 対人援助技術	200
(4) 職業倫理	202
(5) 心理的サポート	203
(6) 近しい関係	203
(7) 熱意・意欲	204
(8) 既存の制度ではカバーできない支援	205
第4部 提言カリキュラム	207
1. 提言の目的	209
2. 提言の内容	209
3. 提言の作成経過	209

4. 提言に関する留意点	209
第5部 付録	215
1. 盲ろう者向け通訳・介助員養成事業に関する調査票	217
2. 盲ろう者向け通訳・介助員の状況に関する調査票	221
検討委員会	225
1. 検討委員	225
2. 日程	225

はじめに

平成3年の当協会設立以来、視覚と聴覚の両方に障害を併せ持つ盲ろう者に対して、社会参加の推進を図ることを目的に、盲ろう者向け通訳・介助員派遣、およびその支援者となる通訳・介助員の養成については、最重要課題として取り組んできたところである。

盲ろう者通訳・介助員派遣事業および養成事業は、厚生労働省はじめ、各都道府県のご理解の下、全国的に広がりを見せてきたところであり、平成24年度末時点では、ほぼ全国で派遣と養成が実施されるまでに至っている。そのような中で、平成25年4月より施行される「障害者総合支援法」において、都道府県（政令指定都市・中核市を含む）の地域生活支援事業の「必須」事業として位置付けられることとなり、聴覚障害者への手話通訳・要約筆記派遣と同様に、盲ろう者向け通訳・介助員の必要性がようやく認知されたものであり、私ども関係者としては感慨もひとしおである。

しかしながら、必須化されるものの、各都道府県で実施されている要請研修会は、研修時間、カリキュラムの内容等統一されておらず、その実施状況はばらばらであるといわざるを得ない状況にある。

これらの状況に鑑み、平成24年度「障害者総合福祉推進事業（厚生労働省補助事業）」の一環として、「盲ろう者通訳・介助員養成カリキュラムの内容に関する調査」を実施した。

本調査では、効果的かつ効率的な通訳・介助員養成を可能にするカリキュラムの在り方を検討する材料とするために、全国各都道府県での通訳・介助員の養成の実態について把握することを目的に、養成研修の運営方法、カリキュラムの内容に関する調査を実施したほか、現に活動している通訳・介助員を対象にその実情を把握するための調査、また、実際に派遣事業を利用している盲ろう者からの通訳・介助員に対するニーズ調査を行った上で、この調査結果を踏まえて、全国的に実施されることが望ましい標準カリキュラムの内容について、厚生労働省に提言を行った。

この提言した標準カリキュラムの内容については、平成25年3月末に、厚生労働省から全国の都道府県・指定都市・中核市に対し、養成研修事業を実施するに当たっての「基本」となるものとして公式に通知されることとなった。

なお、特に通訳・介助員を対象にした今回のような大々的な調査は初めての試みでもあり、本調査結果は、養成研修だけに留まらず、派遣事業のより良い制度設計を考えていく上でも貴重な資料になりうると考えている。

最後に、本調査を実施するに当たり、厚生労働省をはじめ、検討委員会の委員各位、また調査にご協力いただいた各都道府県・指定都市・中核市の担当部局、および養成研修事業受託団体、アンケート調査にご回答いただいた通訳・介助員の皆様、面接調査に協力いただいた盲ろう者および盲ろう者友の会関係各位等、関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。

社会福祉法人 全国盲ろう者協会
理事長 阪田 雅裕

第1部

盲ろう者向け通訳・介助員養成事業に関する調査

第1章 調査の概要

1. 調査の目的

養成研修事業実施自治体における通訳・介助員養成の現状や課題、新たに求められる人材養成への考え方などを把握することにより、盲ろう者向け通訳・介助員の今後の養成の在り方やカリキュラムを検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

2. 調査の対象

都道府県障害福祉主管課 47 カ所

3. 調査の基準日

養成の状況・課題については平成 23 年度、通訳・介助者派遣の状況については平成 24 年 10 月末日。

4. 調査の方法

都道府県障害福祉主管課に調査票を郵送した。電子データを希望する自治体については、社会福祉法人全国盲ろう者協会のホームページより、調査票のデータをダウンロードしてもらった。

回収については、同封した封筒に入れて郵送で返送、もしくは調査票のデータを電子メールに添付して送付してもらった。

調査票の発送日は平成 24 年 12 月 5 日、調査票の回答締切日は平成 25 年 1 月 18 日であった。

5. 回収結果

都道府県障害福祉主管課 44 カ所より回答が得られた（回収率：93.6%）。

6. 調査項目

本調査は本報告書の巻末に掲載した調査票「盲ろう者向け通訳・介助員養成事業に関する調査」により実施した。各調査票における設問および調査項目は、表 1-1-1 の通りである。

※ [複] とあるのは複数回答となっている項目である。

7. 利用上の注意

百分率は、小数点以下第 2 位を四捨五入したため、総数・合計欄が 100 になっていても、内訳の合計が 100%とならない場合がある。

表 1-1-1 調査項目

大項目	設問要約	設問
基本的事項	問1 所属	自治体名・担当部署名
	問2 担当者	本調査の担当者・連絡先
	問3 通訳・介助員の養成目標	通訳・介助員の養成目標を定めていますか。
	(定めている場合) 養成目標人数	養成目標人数はいつまでに、何名ですか。[数字を記入]
	(") 目標値の明記	その目標値はどこかに明記されていますか。
	問4 平成23年度の養成講習会実施状況	平成23年度に通訳・介助員養成講習会を実施しましたか。
	(実施した場合) 養成開始年度	養成講習会の開始年度はいつですか。[数字を記入]
(") 累積修了者数	これまでの修了者はおよそ何名ですか。[数字を記入]	
(実施していない場合) 未実施理由	実施していない理由は何ですか。[あてはまるカタカナすべてに○]	
通訳・介助員の養成状況	1. 平成23年度通訳・介助員養成講習会の実施状況	
	問1 実施体制	どのような実施体制をとっていますか。
	(団体等委託の場合) 委託先	どこに委託していますか。[あてはまるカタカナすべてに○]
	問2 予算額	養成講習会に関わる自治体の予算額をご記入ください。[数字を記入]
	2. 平成23年度通訳・介助員養成講習会の運営状況について	
	問1 広報方法[複]	どのような方法で広報しましたか。[あてはまる番号すべてに○]
	問2 応募受付方法[複]	どのような方法で応募を受け付けましたか。[あてはまる番号すべてに○]
	問3 受講対象者の要件	受講対象者の要件を設けていましたか。
	(設けている場合) 具体的要件	設けている要件は何ですか。[あてはまるカタカナすべてに○]
	問4 受講料	受講料はいくらでしたか。[数字を記入]
	問5 開催日[複]	開催日はいつでしたか。[あてはまる番号すべてに○]
	問6 講師の人数	講師の人数をご記入ください。[数字を記入。延べ人数ではなく実人数で記入]
	問7 応募者・受講者・終了者などの状況	平成23年度に通訳・介助員養成講習会の状況をご記入ください。[数字を記入]
	問8 区分・コース	区分(例: 手話コース・点字コース、基礎・応用など)はありますか。
	(ある場合) 各講習の名称・時間数・回数・日数	それぞれの講習の名称と時間数、回数、日数を記入してください。
(ない場合) 講習の時間数・回数・日数	講習の時間数、回数、日数を記入してください。	
問9 修了条件[複]	修了にあたってどのような条件を定めていますか。[あてはまる番号すべてに○]	
問10 登録試験	通訳・介助員に登録するための登録試験を実施していますか?	
問11 カリキュラムごとの時間数・講師・内容の決め方・テキスト	カリキュラムの内容ごとの時間数、講師、指導内容の決め方、使用テキストについて、ご記入ください。[時間数には数字を記入] [該当する口に、チェック(☑または■)]	
問12 カリキュラムごとの時間数・講師・内容の決め方・テキスト(その他)	問11以外に実施している内容があれば、カリキュラムの内容と時間数、講師、指導内容の決め方、使用テキストについて、ご記入ください。[時間数には数字を記入] [該当する口に、チェック(☑または■)]	
現在の養成における課題	問1 受講者についての課題[複]	受講者について、どのような課題がありますか。[あてはまる番号すべてに○]
	問2 運営についての課題[複]	運営について、どのような課題がありますか。[あてはまる番号すべてに○]
	問3 カリキュラムについてのニーズ	通訳・介助員の養成にあたって、現在のカリキュラムに加えて必要だと考える内容を自由にご記入ください。
	問4 養成にあたっての全体的なニーズ	通訳・介助員の養成にあたって、必要だと考える事項(カリキュラム以外)を自由にご記入ください。
通訳・介助員の派遣状況	1. 盲ろう者の状況について	
	問1 視覚・聴覚の両方の身体障害者手帳を有する盲ろう者の人数	貴自治体(都道府県)で盲ろう者(視覚と聴覚の両方の身体障害者手帳を併せもつ)は何名ですか。政令指定都市や中核市も含んだ人数をご記入ください。[数字を記入]
	問2 通訳・介助員派遣事業の登録盲ろう者の人数	貴自治体の盲ろう者向け通訳・介助員派遣事業の登録盲ろう者は何名ですか。[数字を記入]
	問3 コミュニケーション方法ごとの登録盲ろう者の人数	派遣事業登録盲ろう者が通訳を受けるときの方法のうち、最も使用する方法について、それぞれのコミュニケーションごとに人数をご記入ください。[数字を記入]
	2. 通訳・介助員の状況について	
	問1 登録通訳・介助員の人数	平成24年10月末日現在、貴自治体の盲ろう者向け通訳・介助員派遣事業の登録通訳・介助員は何名ですか。[数字を記入]
	問2 稼働した登録通訳・介助員の人数	問1のうち、平成24年4月1日から10月末日に稼働した実績のある通訳・介助員は何名ですか。[数字を記入]
問3 コミュニケーション方法ごとの通訳・介助員の充実度	現在のコミュニケーション方法ごとの通訳・介助員の充足度をご記入ください。[該当する口に、チェック(☑または■)]	

第2章 結果の概要

1. 基本的事項

(1) 通訳・介助員の養成目標

■ 養成目標

「定めている」と回答した自治体の割合は43.2%

- ・養成目標を「定めている」自治体は19カ所、「定めていない」自治体は25カ所となっている。

表 1-2-1 養成目標

	回答数	割合
定めている	19	43.2%
定めていない	25	56.8%
合計	44	100.0%

- ・6カ所の自治体が複数年度にわたる目標を定めており、「2017年度までに221名」、「2015年度までに200名」、「2014年度までに420名」、「2014年度までに250名」、「2014年度までに131名」、「2014年度までに97名」といった回答であった。
- ・13カ所の自治体が単年度の目標を定めており、その数は10名から30名で、平均は18.2名であった。

■ 目標値の明記

「明記されている」と回答した自治体の割合は68.4%

- ・養成講習会の目標値が「明記されている」自治体は13カ所、「明記されていない」自治体は6カ所となっている。

表 1-2-2 目標値の明記

	回答数	割合
明記されている	13	68.4%
明記されていない	6	31.6%
合計	19	100.0%

- ・明記されている箇所として、障害福祉計画（7カ所）、障害者計画（4カ所）、地域生活支援事業実施計画（1カ所）があげられていた。

(2) 平成23年度の養成講習会実施状況

養成講習会を「実施した」と回答した自治体の割合は93.2%

- ・養成講習会を「実施した」自治体は41カ所、「実施していない」自治体は3カ所となっている。

表 1-2-3 養成講習会の実施

	回答数	割合
実施した	41	93.2%
実施していない	3	6.8%
合計	44	100.0%

- ・実施開始年度は、平成9～23年度の範囲であり、「平成11年度」が7自治体ともっとも多く、次いで「平成15年度」「平成20年度」「平成21年度」がそれぞれ5自治体であった。
- ・これまでの修了者数は、13名～390名までの範囲で、41自治体の合計は6,423名、平均は156.7名であった。
- ・実施していない3カ所のうち、2カ所が「講師の不在」、1カ所が「予算の不足」をその理由としてあげていた。

2. 平成23年度通訳・介助員養成講習会の実施状況

(1) 実施体制

■ 実施体制

養成講習会を自治体が「団体等委託」と回答した割合は97.6%

- ・養成講習会を「直轄」で開催している自治体は1カ所、「団体等委託」している自治体は40カ所となっている。

表 1-2-4 実施体制

	回答数	割合
直轄	1	2.4%
団体等委託	40	97.6%
合計	41	100.0%

■ 委託先

「盲ろう者団体」の割合が最も多く 40.0%

・次いで、「聴覚障害者団体」20.0%となっている。

表 1-2-5 委託先

	回答数	割合
盲ろう者団体	16	40.0%
聴覚障害者団体	8	20.0%
視覚障害者団体	1	2.5%
身体障害者団体	7	17.5%
その他	7	17.5%
無回答	1	2.5%
合計	40	100.0%

(2) 予算額

平均予算は約 64 万円

・最も多い予算は約 230 万円、少ない予算は約 6 万円となっている。

表 1-2-6 予算額

	回答数	最小値	最大値	中央値	平均値	標準偏差
事業費	29	64000	1090400	394000	449663.0	242342.8
事務費	29	0	785260	6000	53312.3	143931.7
総予算額	38	64000	2301000	451000	638270.7	532698.8

3. 平成 23 年度通訳・介助員養成講習会の運営状況

(1) 広報方法

「チラシ」を使用している団体の割合が最も多く 56.1%

・次いで「自治体広報紙」53.7%となっている。

表 1-2-7 広報方法 [複数回答] (回答自治体数: 41)

	回答数	割合
自治体広報紙	22	53.7%
自治体ホームページ	15	36.6%
受託団体会報誌	15	36.6%
受託団体ホームページ	19	46.3%
関係機関・団体広報紙	19	46.3%
関係機関・団体ホームページ	11	26.8%
チラシ	23	56.1%
ポスター	4	9.8%
ダイレクトメール	9	22.0%
手話講習会での案内	13	31.7%
点字講習会での案内	6	14.6%
その他	20	48.8%

(2) 応募受付方法

「郵送」を利用している団体の割合が最も多く 85.4%

・次いで「FAX」73.2%、「所」36.6%となっている。

表 1-2-8 応募受付方法複数回答] (回答自治体数 : 41)

	回答数	割合
郵送	35	85.4%
FAX	30	73.2%
電子メール	10	24.4%
電話	14	34.1%
来所	15	36.6%
その他	1	2.4%

(3) 受講対象者の要件

■ 受講対象者の要件の有無

「設けている」自治体の割合は 85.4%

・受講対象者の要件を「設けている」自治体は 35 カ所、「設けていない」自治体は 6 カ所となっている。

表 1-2-9 受講対象者の要件の有無

	回答数	割合
設けている	35	85.4%
設けていない	6	14.6%
合計	41	100.0%

■ 受講対象者の要件

同地域に「在住」としている団体の割合が最も多く 26.2%

・次いで「年齢」28.6%となっている。

表 1-2-10 受講対象者の要件内容 [複数回答] (回答自治体数 : 35)

	回答数	割合
年齢	10	28.6%
在住	16	45.7%
在勤・在学	5	14.3%
手話経験年数	1	2.9%
点字経験年数	1	2.9%
手話技能	5	14.3%
点字技能	2	5.7%
その他	21	60.0%

(4) 受講料

「なし」と回答した自治体の割合は90.2%

- ・受講料「あり」と回答した自治体は4カ所、「なし」と回答した自治体は37カ所となっている。
- ・受講料は、「1,000円」、「2,000円」、「3,000円」、「8,000円」がそれぞれ1カ所ずつであった。

表 1-2-11 受講料の有無

	回答数	割合
あり	4	9.8%
なし	37	90.2%
合計	41	100.0%

(5) 開催日

「土日・休日昼間」の割合が最も多く95.1%

表 1-2-12 開催日 [複数回答] (回答自治体数: 41)

	回答数	割合
平日昼間	7	17.1%
平日夜間	1	2.4%
土日・休日昼間	39	95.1%

(6) 講師の人数

講師の人数は平均約12人

- ・そのうち、盲ろう講師人数は平均約5人、国リハ研修(盲ろう者通訳・ガイドヘルパー指導者研修会)受講済人数は平均約1人、協会研修(盲ろう者向け通訳・介助員養成のためのモデル研修会<旧:盲ろう者向け通訳・介助員養成研修会>)受講済人数は平均約1人となっている。

表 1-2-13 講師の人数

	回答数	最小値	最大値	中央値	平均値	標準偏差
講師総数	41	4	34	12.00	12.46	7.18
盲ろう講師人数	41	1	19	4.00	5.39	4.00
国リハ研修受講済人数	39	0	5	1.00	1.26	1.33
協会研修受講済人数	38	0	5	1.00	1.34	1.58

(7) 応募者・受講者・修了者などの状況

研修会の定員は平均約26人、受講者は平均約23人

表 1-2-14 応募・受講者・修了者などの状況

	回答数	最小値	最大値	中央値	平均値	標準偏差
定員	39	0	80	20.00	26.03	16.94
応募者数	39	3	92	22.00	25.64	18.94
受講者数	40	2	91	20.00	22.78	15.63
修了者数	39	1	45	16.00	17.87	10.46
登録者数	39	0	40	10.00	12.08	8.20

(8) 区分・コース

■ 区分の有無

「なし」と回答した自治体は 85.4%

- ・区分が「あり」と回答した自治体は 6 カ所、「なし」と回答した自治体は 35 カ所となっている。
- ・具体的な区分については、「点字等コース (64 時間) - 手話コース (64 時間)」、「初級 (30 時間) - 中級 (10 時間)」、「基礎講座 (18 時間) - 専門講座 (12 時間)」、「基礎 (30 時間) - 入門 (45 時間)」、「基礎課程 (48 時間) - 応用課程 (30 時間)」との回答があった。

表 1-2-15 区分の有無

	回答数	割合
あり	6	14.6%
なし	35	85.4%
合計	41	100.0%

■ 区分がない自治体の研修会総時間数・総回数・総日数

日数は平均約 6 日、時間数は平均約 30 時間

表 1-2-16 区分がない自治体の研修会総時間数・総回数・総日数

	回答数	最小値	中央値	最大値	平均値	標準偏差
(区分ない場合) 総時間数	31	12	27.00	64	29.71	13.02
(区分ない場合) 総回数	30	1	6.00	28	8.67	7.34
(区分ない場合) 総日数	31	3	6.00	15	6.87	3.08

(9) 修了条件

■ 修了条件 [複数回答] (回答自治体数 : 41)

「出席回数」を修了条件としている団体の割合が最も多く 97.6%

表 1-2-17 修了条件

	回答数	割合
出席回数	40	97.6%
受講態度	1	2.4%
修了試験の合格	1	2.4%
その他	3	7.3%
条件を定めていない	1	2.4%
登録試験の有無	1	2.4%

(10) 登録試験

「なし」と回答した自治体の割合は 97.6%

・登録試験「あり」と回答した自治体は 1 カ所、「なし」と回答した自治体は 40 カ所となっている。

表 1-2-18 登録試験の有無

	回答数	割合
あり	1	2.4%
なし	40	97.6%
合計	41	100.0%

(11) カリキュラムごとの時間数

最も多く時間が設定されているのは「移動介助（実習）」

・そのほか、「疑似体験」、「盲ろう概論」、「通訳技術（実習）」などに時間が多く設定されていた。

表 1-2-19 カリキュラムごとの時間数

	回答数	最小値	最大値	中央値	平均値	標準偏差
盲ろう概論	35	0	240	120.00	98.86	55.98
派遣事業のルール・運用	34	0	150	60.00	56.62	42.12
倫理・マナー	34	0	180	60.00	65.88	52.06
音声（講義）	32	0	120	30.00	34.69	36.30
音声（実習）	33	0	150	30.00	39.80	44.40
弱視手話（講義）	27	0	120	10.00	25.93	33.08
弱視手話（実習）	28	0	150	30.00	41.61	43.42
触手話（講義）	27	0	120	20.00	25.00	29.94
触手話（実習）	27	0	150	45.00	49.44	40.53
日本語式指文字（講義）	29	0	60	0.00	5.34	13.49
日本語式指文字（実習）	27	0	60	0.00	4.63	13.08
ローマ字式指文字（講義）	33	0	120	0.00	8.48	29.27
ローマ字式指文字（実習）	32	0	120	0.00	9.06	29.77
手書き文字（講義）	30	0	120	17.50	24.40	28.37
手書き文字（実習）	30	0	120	30.00	35.10	34.02
筆談（講義）	30	0	120	0.00	22.83	37.55
筆談（実習）	28	0	180	0.00	20.36	41.34
パソコン（講義）	33	0	40	0.00	5.15	11.76
パソコン（実習）	30	0	90	0.00	11.67	24.93
点字（講義）	28	0	480	30.00	62.32	99.06
点字（実習）	28	0	240	40.00	56.25	61.62
指点字（講義）	29	0	360	10.00	37.59	70.81
指点字（実習）	29	0	360	20.00	57.41	95.36
盲ろう児	38	0	270	0.00	18.68	51.42
疑似体験	36	0	480	120.00	145.00	93.34
ロールプレイ	36	0	290	0.00	41.39	73.30
通訳技術（講義）	32	0	420	60.00	75.94	89.87
通訳技術（実習）	31	0	300	120.00	97.74	97.97
移動介助（講義）	31	0	300	60.00	94.19	72.94
移動介助（実習）	28	0	900	180.00	241.07	220.78
体験談（盲ろう者）	35	0	240	60.00	86.00	54.68
体験談（通訳・介助員）	35	0	180	30.00	40.29	50.38

(12) その他のカリキュラム

その他のカリキュラムについて、26の自治体から回答が寄せられた。(11)の内容と重複すると考えられるものを除いた回答とその分類は以下の通りである。

■ 障害者福祉

- ・ 盲ろう者福祉の歴史
- ・ 盲ろう者を取り巻く福祉行政の動向
- ・ 盲ろう者福祉入門
- ・ 県内の盲ろう者の様子と作業所の様子
- ・ 盲ろう者の福祉
- ・ 盲ろう者福祉の現状と課題および生活実態
- ・ 障害者福祉概論
- ・ 障害者福祉概論および盲ろう者福祉について
- ・ 盲ろう者福祉の現状
- ・ 社会保障の展望

■ 視覚・聴覚障害

- ・ 聴覚障害
- ・ ロービジョン
- ・ ロービジョンとコミュニケーション
- ・ 視覚障害者概論（ロービジョン体験含む）
- ・ 視覚障害

■ 盲ろう者地域団体

- ・ 友の会の活動について
- ・ 盲ろう者友の会について
- ・ 盲ろう者団体の紹介
- ・ 友の会ご案内

■ 盲ろう者との交流

- ・ 盲ろう者との交流
- ・ 盲ろう者との交流（通訳実習を含む）（施設実習）
- ・ 体験実習盲ろう者と交流

■ その他

- ・ 通訳・介助員の健康管理
- ・ 盲ろう者関連グッズ
- ・ 通訳・介助員研修報告
- ・ 社会福祉援助技術
- ・ 人権研修

- ・ 盲ろう者のコミュニケーション総論
- ・ 盲ろう者通訳・介助論

(13) カリキュラムごとの講師、内容の決め方、テキスト

■ 盲ろう概論

□ 講師

「盲ろう者」の割合が最も多く 61.5%

- ・ 次いで「通訳・介助員」33.3%となっている。

表 1-2-20a 盲ろう概論（講師）[複数回答]（回答自治体数：39）

	回答数	割合
盲ろう者	24	61.5%
通訳・介助員	13	33.3%
受託団体職員	8	20.5%
その他	6	15.4%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 59.0%

表 1-2-20b 盲ろう概論（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	23	59.0%
指導内容を決めずに講師に打診	5	12.8%
どちらでもない	8	20.5%
無回答	3	7.7%
合計	39	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 55.6%

- ・ 次いで「盲ろう者への通訳・介助」44.4%、「知ってください盲ろうについて」27.8%となっている。

表 1-2-20c 盲ろう概論（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：36）

	回答数	割合
講師作成の資料	20	55.6%
受託団体作成の資料	5	13.9%
盲ろう者への通訳・介助	16	44.4%
盲ろう者の移動介助	6	16.7%
知ってください盲ろうについて	10	27.8%
その他の資料	3	8.3%
使用していない	2	5.6%

■ 派遣事業のルール運用

□ 講師

「受託団体職員」の割合が最も多く 43.2%

・次いで「通訳・介助員」29.7%となっている。

表 1-2-21a 派遣事業のルール運用（講師）〔複数回答〕（回答自治体数：32）

	回答数	割合
盲ろう者	1	2.7%
通訳・介助員	11	29.7%
受託団体職員	16	43.2%
その他	9	24.3%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 45.5%

表 1-2-21b 派遣事業のルール運用（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	15	45.5%
指導内容を決めずに講師に打診	3	9.1%
どちらでもない	9	27.3%
無回答	6	18.2%
合計	33	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 50.0%

・次いで「受託団体作成の資料」39.3%となっている。

表 1-2-21c 派遣事業のルール運用（テキスト）〔複数回答〕（回答自治体数：28）

	回答数	割合
講師作成の資料	14	50.0%
受託団体作成の資料	11	39.3%
盲ろう者への通訳・介助	2	7.1%
盲ろう者の移動介助	0	0.0%
知ってください盲ろうについて	0	0.0%
その他の資料	6	21.4%
使用していない	1	3.6%

■ 倫理マナー

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 57.6%

・次いで「盲ろう者」48.5%となっている。

表 1-2-22a 倫理マナー（講師）[複数回答]（回答自治体数：33）

	回答数	割合
盲ろう者	16	48.5%
通訳・介助員	19	57.6%
受託団体職員	7	21.2%
その他	5	15.2%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 60.6%

表 1-2-22b 倫理マナー（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	20	60.6%
指導内容を決めずに講師に打診	5	15.2%
どちらでもない	4	12.1%
無回答	4	12.1%
合計	33	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 65.5%

・次いで「盲ろう者への通訳・介助」34.5%となっている。

表 1-2-22c 倫理マナー（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：29）

	回答数	割合
講師作成の資料	19	65.5%
受託団体作成の資料	6	20.7%
盲ろう者への通訳・介助	10	34.5%
盲ろう者の移動介助	6	20.7%
知ってください盲ろうについて	3	10.3%
その他の資料	2	6.9%
使用していない	3	10.3%

■ 音声講義

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 62.1%

・次いで「盲ろう者」51.7%となっている。

表 1-2-23a 音声講義（講師）[複数回答]（回答自治体数：29）

	回答数	割合
盲ろう者	15	51.7%
通訳・介助員	18	62.1%
受託団体職員	8	27.6%
その他	2	6.9%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 46.7%

表 1-2-23b 音声講義（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	14	46.7%
指導内容を決めずに講師に打診	9	30.0%
どちらでもない	6	20.0%
無回答	1	3.3%
合計	30	100.0%

□ テキスト

「盲ろう者への通訳・介助」の割合が最も多く 65.5%

・次いで「講師作成の資料」48.3%となっている。

表 1-2-23c 音声講義（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：29）

	回答数	割合
講師作成の資料	14	48.3%
受託団体作成の資料	5	17.2%
盲ろう者への通訳・介助	19	65.5%
盲ろう者の移動介助	2	6.9%
知ってください盲ろうについて	1	3.4%
その他の資料	2	6.9%
使用していない	0	0.0%

■ 音声実習

□ 講師

「盲ろう者」の割合が最も多く 67.9%

・次いで「通訳・介助員」60.7%となっている。

表 1-2-24a 音声実習（講師）[複数回答]（回答自治体数：28）

	回答数	割合
盲ろう者	19	67.9%
通訳・介助員	17	60.7%
受託団体職員	6	21.4%
その他	1	3.6%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 51.7%

表 1-2-24b 音声実習（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	15	51.7%
指導内容を決めずに講師に打診	9	31.0%
どちらでもない	3	10.3%
無回答	2	6.9%
合計	29	100.0%

□ テキスト

「盲ろう者への通訳・介助」の割合が最も多く 46.2%

・次いで「講師作成の資料」38.5%となっている。

表 1-2-24c 音声実習（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：26）

	回答数	割合
講師作成の資料	10	38.5%
受託団体作成の資料	4	15.4%
盲ろう者への通訳・介助	12	46.2%
盲ろう者の移動介助	2	7.7%
知ってください盲ろうについて	1	3.8%
その他の資料	2	7.7%
使用していない	5	19.2%

■ 弱視手話講義

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 71.4%

・次いで「盲ろう者」42.9%となっている。

表 1-2-25a 弱視手話講義（講師）[複数回答]（回答自治体数：28）

	回答数	割合
盲ろう者	12	42.9%
通訳・介助員	20	71.4%
受託団体職員	6	21.4%
その他	3	10.7%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 56.7%

表 1-2-25b 弱視手話講義（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	17	56.7%
指導内容を決めずに講師に打診	6	20.0%
どちらでもない	3	10.0%
無回答	4	13.3%
合計	30	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 55.6%

・次いで「盲ろう者への通訳・介助」44.4%となっている。

表 1-2-25c 弱視手話講義（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：27）

	回答数	割合
講師作成の資料	15	55.6%
受託団体作成の資料	6	22.2%
盲ろう者への通訳・介助	12	44.4%
盲ろう者の移動介助	1	3.7%
知ってください盲ろうについて	2	7.4%
その他の資料	3	11.1%
使用していない	1	3.7%

■ 弱視手話実習

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 67.7%

・次いで「盲ろう者」58.1%となっている。

表 1-2-26a 弱視手話実習（講師）[複数回答]（回答自治体数：31）

	回答数	割合
盲ろう者	18	58.1%
通訳・介助員	21	67.7%
受託団体職員	5	16.1%
その他	3	9.7%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 60.6%

表 1-2-26b 弱視手話実習（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	20	60.6%
指導内容を決めずに講師に打診	7	21.2%
どちらでもない	3	9.1%
無回答	3	9.1%
合計	33	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」「盲ろう者への通訳・介助」の割合が最も多く、ともに 38.5%

・次いで「使用していない」26.9%となっている。

表 1-2-26c 弱視手話実習（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：26）

	回答数	割合
講師作成の資料	10	38.5%
受託団体作成の資料	5	19.2%
盲ろう者への通訳・介助	10	38.5%
盲ろう者の移動介助	1	3.8%
知ってください盲ろう者について	1	3.8%
その他の資料	2	7.7%
使用していない	7	26.9%

■ 触手話講義

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 62.5%

・次いで「盲ろう者」53.1%となっている。

表 1-2-27a 触手話講義（講師）[複数回答]（回答自治体数：32）

	回答数	割合
盲ろう者	17	53.1%
通訳・介助員	20	62.5%
受託団体職員	6	18.8%
その他	4	12.5%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 51.5%

表 1-2-27b 触手話講義（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	17	51.5%
指導内容を決めずに講師に打診	8	24.2%
どちらでもない	4	12.1%
無回答	4	12.1%
合計	33	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 50.0%

・次いで「盲ろう者への通訳・介助」43.3%となっている。

表 1-2-27c 触手話講義（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：30）

	回答数	割合
講師作成の資料	15	50.0%
受託団体作成の資料	6	20.0%
盲ろう者への通訳・介助	13	43.3%
盲ろう者の移動介助	2	6.7%
知ってください盲ろう者について	2	6.7%
その他の資料	2	6.7%
使用していない	3	10.0%

■ 触手話実習

□ 講師

「盲ろう者」の割合が最も多く 65.7%

・次いで「通訳・介助員」62.9%となっている。

表 1-2-28a 触手話実習（講師）[複数回答]（回答自治体数：35）

	回答数	割合
盲ろう者	23	65.7%
通訳・介助員	22	62.9%
受託団体職員	5	14.3%
その他	3	8.6%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 52.8%

表 1-2-28b 触手話実習（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	19	52.8%
指導内容を決めずに講師に打診	9	25.0%
どちらでもない	4	11.1%
無回答	4	11.1%
合計	36	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 37.9%

・次いで「盲ろう者への通訳・介助」34.5%となっている。

表 1-2-28c 触手話実習（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：29）

	回答数	割合
講師作成の資料	11	37.9%
受託団体作成の資料	6	20.7%
盲ろう者への通訳・介助	10	34.5%
盲ろう者の移動介助	2	6.9%
知ってください盲ろうについて	1	3.4%
その他の資料	3	10.3%
使用していない	8	27.6%

■ 日本語式指文字講義

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 60.0%

・次いで「受託団体職員」33.3%となっている。

表 1-2-29a 日本語式指文字講義（講師）[複数回答]（回答自治体数：15）

	回答数	割合
盲ろう者	4	26.7%
通訳・介助員	9	60.0%
受託団体職員	5	33.3%
その他	4	26.7%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 41.2%

表 1-2-29b 日本語式指文字講義（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	7	41.2%
指導内容を決めずに講師に打診	3	17.6%
どちらでもない	2	11.8%
無回答	5	29.4%
合計	17	100.0%

□ テキスト

「盲ろう者への通訳・介助」の割合が最も多く 57.1%

・次いで「講師作成の資料」「その他の資料」ともに 28.6%となっている。

表 1-2-29c 日本語式指文字講義（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：14）

	回答数	割合
講師作成の資料	4	28.6%
受託団体作成の資料	2	14.3%
盲ろう者への通訳・介助	8	57.1%
盲ろう者の移動介助	1	7.1%
知ってください盲ろうについて	1	7.1%
その他の資料	4	28.6%
使用していない	2	14.3%

■ 日本語式指文字実習

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 66.7%

・次いで「盲ろう者」46.7%となっている。

表 1-2-30a 日本語式指文字実習（講師）[複数回答]（回答自治体数：15）

	回答数	割合
盲ろう者	7	46.7%
通訳・介助員	10	66.7%
受託団体職員	3	20.0%
その他	2	13.3%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 29.4%

表 1-2-30b 日本語式指文字実習（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	5	29.4%
指導内容を決めずに講師に打診	4	23.5%
どちらでもない	4	23.5%
無回答	4	23.5%
合計	17	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」「盲ろう者への通訳・介助」「その他の資料」の割合が最も多く、ともに 35.7%

表 1-2-30c 日本語式指文字実習（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：14）

	回答数	割合
講師作成の資料	5	35.7%
受託団体作成の資料	3	21.4%
盲ろう者への通訳・介助	5	35.7%
盲ろう者の移動介助	1	7.1%
知ってください盲ろうについて	1	7.1%
その他の資料	5	35.7%
使用していない	2	14.3%

■ ローマ字式指文字講義

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 70.0%

表 1-2-31a ローマ字式指文字講義（講師）[複数回答]（回答自治体数：10）

	回答数	割合
盲ろう者	1	10.0%
通訳・介助員	7	70.0%
受託団体職員	2	20.0%
その他	2	20.0%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めずに講師に打診」が 50.0%

表 1-2-31b ローマ字式指文字講義（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	3	30.0%
指導内容を決めずに講師に打診	5	50.0%
どちらでもない	2	20.0%
無回答	0	0.0%
合計	10	100.0%

□ テキスト

「盲ろう者への通訳・介助」の割合が最も多く 30.0%

- ・次いで「講師作成の資料」「受託団体作成の資料」「その他資料」「使用していない」ともに 20.0% となっている。

表 1-2-31c ローマ字式指文字講義（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：10）

	回答数	割合
講師作成の資料	2	20.0%
受託団体作成の資料	2	20.0%
盲ろう者への通訳・介助	3	30.0%
盲ろう者の移動介助	1	10.0%
知ってください盲ろうについて	0	0.0%
その他の資料	2	20.0%
使用していない	2	20.0%

■ ローマ字式指文字実習

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 66.7%

・次いで「盲ろう者」33.3%となっている。

表 1-2-32a ローマ字式指文字実習（講師）[複数回答]（回答自治体数：9）

	回答数	割合
盲ろう者	3	33.3%
通訳・介助員	6	66.7%
受託団体職員	1	11.1%
その他	1	11.1%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めずに講師に打診」が 60.0%

表 1-2-32b ローマ字式指文字実習（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	2	20.0%
指導内容を決めずに講師に打診	6	60.0%
どちらでもない	2	20.0%
無回答	0	0.0%
合計	10	100.0%

□ テキスト

「その他の資料」の割合が最も多く 33.3%

・次いで「受託団体作成の資料」「盲ろう者への通訳・介助」「使用していない」ともに 22.2%となっている。

表 1-2-32c ローマ字式指文字実習（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：9）

	回答数	割合
講師作成の資料	1	11.1%
受託団体作成の資料	2	22.2%
盲ろう者への通訳・介助	2	22.2%
盲ろう者の移動介助	0	0.0%
知ってください盲ろうについて	0	0.0%
その他の資料	3	33.3%
使用していない	2	22.2%

■ 手書き文字講義

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 51.9%

・次いで「盲ろう者」44.4%となっている。

表 1-2-33a 手書き文字講義（講師）[複数回答]（回答自治体数：27）

	回答数	割合
盲ろう者	12	44.4%
通訳・介助員	14	51.9%
受託団体職員	8	29.6%
その他	3	11.1%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 40.0%

表 1-2-33b 手書き文字講義（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	12	40.0%
指導内容を決めずに講師に打診	9	30.0%
どちらでもない	4	13.3%
無回答	5	16.7%
合計	30	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 44.0%

・次いで「盲ろう者への通訳・介助」40.0%となっている。

表 1-2-33c 手書き文字講義（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：25）

	回答数	割合
講師作成の資料	11	44.0%
受託団体作成の資料	4	16.0%
盲ろう者への通訳・介助	10	40.0%
盲ろう者の移動介助	1	4.0%
知ってください盲ろうについて	2	8.0%
その他の資料	3	12.0%
使用していない	2	8.0%

■ 手書き文字実習

□ 講師

「盲ろう者」「通訳・介助員」の割合が最も多く、ともに 60.0%

表 1-2-34a 手書き文字実習（講師）[複数回答]（回答自治体数：30）

	回答数	割合
盲ろう者	18	60.0%
通訳・介助員	18	60.0%
受託団体職員	6	20.0%
その他	4	13.3%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 43.8%

表 1-2-34b 手書き文字実習（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	14	43.8%
指導内容を決めずに講師に打診	10	31.3%
どちらでもない	3	9.4%
無回答	5	15.6%
合計	32	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 36.0%

・次いで「盲ろう者への通訳・介助」「使用していない」とともに 28.0%となっている。

表 1-2-34c 手書き文字実習（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：25）

	回答数	割合
講師作成の資料	9	36.0%
受託団体作成の資料	4	16.0%
盲ろう者への通訳・介助	7	28.0%
盲ろう者の移動介助	1	4.0%
知ってください盲ろうについて	1	4.0%
その他の資料	5	20.0%
使用していない	7	28.0%

■ 筆談講義

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 70.0%

・次いで「盲ろう者」「受託団体職員」ともに 30.0%となっている。

表 1-2-35a 筆談講義（講師）[複数回答]（回答自治体数：20）

	回答数	割合
盲ろう者	6	30.0%
通訳・介助員	14	70.0%
受託団体職員	6	30.0%
その他	2	10.0%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 43.5%

表 1-2-35b 筆談講義（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	10	43.5%
指導内容を決めずに講師に打診	6	26.1%
どちらでもない	3	13.0%
無回答	4	17.4%
合計	23	100.0%

□ テキスト

「盲ろう者への通訳・介助」の割合が最も多く 52.4%

・次いで「講師作成の資料」47.6%となっている。

表 1-2-35c 筆談講義（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：21）

	回答数	割合
講師作成の資料	10	47.6%
受託団体作成の資料	4	19.0%
盲ろう者への通訳・介助	11	52.4%
盲ろう者の移動介助	0	0.0%
知ってください盲ろうについて	1	4.8%
その他の資料	2	9.5%
使用していない	1	4.8%

■ 筆談実習

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 63.2%

・次いで「盲ろう者」57.9%となっている。

表 1-2-36a 筆談実習（講師）[複数回答]（回答自治体数：19）

	回答数	割合
盲ろう者	11	57.9%
通訳・介助員	12	63.2%
受託団体職員	3	15.8%
その他	2	10.5%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 36.4%

表 1-2-36b 筆談実習（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	8	36.4%
指導内容を決めずに講師に打診	7	31.8%
どちらでもない	2	9.1%
無回答	5	22.7%
合計	22	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」「盲ろう者への通訳・介助」の割合が最も多く、ともに 44.4%

・次いで「受託団体作成の資料」22.2%となっている。

表 1-2-36c 筆談実習（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：18）

	回答数	割合
講師作成の資料	8	44.4%
受託団体作成の資料	4	22.2%
盲ろう者への通訳・介助	8	44.4%
盲ろう者への移動介助	0	0.0%
知ってください盲ろうについて	0	0.0%
その他の資料	2	11.1%
使用していない	3	16.7%

■ パソコン講義

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 60.0%

・次いで「盲ろう者」「受託団体職員」ともに 20.0%となっている。

表 1-2-37a パソコン講義（講師）[複数回答]（回答自治体数：10）

	回答数	割合
盲ろう者	2	20.0%
通訳・介助員	6	60.0%
受託団体職員	2	20.0%
その他	1	10.0%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 50.0%

表 1-2-37b パソコン講義（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	6	50.0%
指導内容を決めずに講師に打診	3	25.0%
どちらでもない	1	8.3%
無回答	2	16.7%
合計	12	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 45.5%

・次いで「盲ろう者への通訳・介助」36.4%となっている。

表 1-2-37c パソコン講義（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：11）

	回答数	割合
講師作成の資料	5	45.5%
受託団体作成の資料	1	9.1%
盲ろう者への通訳・介助	4	36.4%
盲ろう者への移動介助	0	0.0%
知ってください盲ろう者について	0	0.0%
その他の資料	2	18.2%
使用していない	1	9.1%

■ パソコン実習

□ 講師

「盲ろう者」「通訳・介助員」の割合が最も多く、ともに 70.0%

表 1-2-38a パソコン実習（講師）[複数回答]（回答自治体数：10）

	回答数	割合
盲ろう者	7	70.0%
通訳・介助員	7	70.0%
受託団体職員	1	10.0%
その他	1	10.0%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 46.2%

表 1-2-38b パソコン実習（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	6	46.2%
指導内容を決めずに講師に打診	2	15.4%
どちらでもない	2	15.4%
無回答	3	23.1%
合計	13	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」「盲ろう者への通訳・介助」の割合が最も多く、ともに 36.4%

・次いで「その他の資料」27.3%となっている。

表 1-2-38c パソコン実習（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：11）

	回答数	割合
講師作成の資料	4	36.4%
受託団体作成の資料	1	9.1%
盲ろう者への通訳・介助	4	36.4%
盲ろう者への移動介助	0	0.0%
知ってください盲ろうについて	0	0.0%
その他の資料	3	27.3%
使用していない	1	9.1%

■ 点字講義

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 57.6%

・次いで「盲ろう者」42.4%となっている。

表 1-2-39a 点字講義（講師）[複数回答]（回答自治体数：33）

	回答数	割合
盲ろう者	14	42.4%
通訳・介助員	19	57.6%
受託団体職員	5	15.2%
その他	9	27.3%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 47.1%

表 1-2-39b 点字講義（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	16	47.1%
指導内容を決めずに講師に打診	10	29.4%
どちらでもない	3	8.8%
無回答	5	14.7%
合計	34	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 51.7%

・次いで「盲ろう者への通訳・介助」37.9%、「その他の資料」24.1%となっている。

表 1-2-39c 点字講義（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：29）

	回答数	割合
講師作成の資料	15	51.7%
受託団体作成の資料	6	20.7%
盲ろう者への通訳・介助	11	37.9%
盲ろう者の移動介助	1	3.4%
知ってください盲ろうについて	2	6.9%
その他の資料	7	24.1%
使用していない	1	3.4%

■ 点字実習

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 71.0%

・次いで「盲ろう者」51.6%となっている。

表 1-2-40a 点字実習（講師）[複数回答]（回答自治体数：31）

	回答数	割合
盲ろう者	16	51.6%
通訳・介助員	22	71.0%
受託団体職員	3	9.7%
その他	6	19.4%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 46.9%

表 1-2-40b 点字実習（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	15	46.9%
指導内容を決めずに講師に打診	12	37.5%
どちらでもない	4	12.5%
無回答	1	3.1%
合計	32	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 63.0%

・次いで「盲ろう者への通訳・介助」37.0%、「受託団体作成の資料」25.9%となっている。

表 1-2-40c 点字実習（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：27）

	回答数	割合
講師作成の資料	17	63.0%
受託団体作成の資料	7	25.9%
盲ろう者への通訳・介助	10	37.0%
盲ろう者の移動介助	1	3.7%
知ってください盲ろうについて	3	11.1%
その他の資料	6	22.2%
使用していない	0	0.0%

■ 指点字講義

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 64.3%

・次いで「盲ろう者」50.0%となっている。

表 1-2-41a 指点字講義（講師）[複数回答]（回答自治体数：28）

	回答数	割合
盲ろう者	14	50.0%
通訳・介助員	18	64.3%
受託団体職員	5	17.9%
その他	7	25.0%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 48.3%

表 1-2-41b 指点字講義（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	14	48.3%
指導内容を決めずに講師に打診	8	27.6%
どちらでもない	2	6.9%
無回答	5	17.2%
合計	29	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 44.4%

・次いで「盲ろう者への通訳・介助」37.0%、「その他の資料」29.6%となっている。

表 1-2-41c 指点字講義（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：27）

	回答数	割合
講師作成の資料	12	44.4%
受託団体作成の資料	7	25.9%
盲ろう者への通訳・介助	10	37.0%
盲ろう者の移動介助	1	3.7%
知ってください盲ろうについて	2	7.4%
その他の資料	8	29.6%
使用していない	1	3.7%

■ 指点字実習

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 74.1%

・次いで「盲ろう者」63.0%となっている。

表 1-2-42a 指点字実習（講師）[複数回答]（回答自治体数：27）

	回答数	割合
盲ろう者	17	63.0%
通訳・介助員	20	74.1%
受託団体職員	3	11.1%
その他	5	18.5%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 48.1%

表 1-2-42b 指点字実習（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	13	48.1%
指導内容を決めずに講師に打診	9	33.3%
どちらでもない	2	7.4%
無回答	3	11.1%
合計	27	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 50.0%

・次いで「盲ろう者への通訳・介助」「その他の資料」とともに 30.8%となっている。

表 1-2-42c 指点字実習（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：26）

	回答数	割合
講師作成の資料	13	50.0%
受託団体作成の資料	7	26.9%
盲ろう者への通訳・介助	8	30.8%
盲ろう者の移動介助	2	7.7%
知ってください盲ろうについて	2	7.7%
その他の資料	8	30.8%
使用していない	1	3.8%

■ 盲ろう児講義

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 66.7%

・次いで「その他」33.3%、「受託団体職員」22.2%となっている。

表 1-2-43a 盲ろう児講義（講師）[複数回答]（回答自治体数：9）

	回答数	割合
盲ろう者	1	11.1%
通訳・介助員	6	66.7%
受託団体職員	2	22.2%
その他	3	33.3%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めずに講師に打診」が 66.7%

表 1-2-43b 盲ろう児講義（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	1	11.1%
指導内容を決めずに講師に打診	6	66.7%
どちらでもない	1	11.1%
無回答	1	11.1%
合計	9	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 77.8%

・次いで「盲ろう者への通訳・介助」33.3%となっている。

表 1-2-43c 盲ろう児講義（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：9）

	回答数	割合
講師作成の資料	7	77.8%
受託団体作成の資料	0	0.0%
盲ろう者への通訳・介助	3	33.3%
盲ろう者への移動介助	0	0.0%
知ってください盲ろうについて	0	0.0%
その他の資料	1	11.1%
使用していない	1	11.1%

■ 疑似体験

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 76.9%

・次いで「盲ろう者」35.9%、「受託団体職員」23.1%となっている。

表 1-2-44a 疑似体験（講師）[複数回答]（回答自治体数：39）

	回答数	割合
盲ろう者	14	35.9%
通訳・介助員	30	76.9%
受託団体職員	9	23.1%
その他	7	17.9%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 55.0%

表 1-2-44b 疑似体験（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	22	55.0%
指導内容を決めずに講師に打診	9	22.5%
どちらでもない	6	15.0%
無回答	3	7.5%
合計	40	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 35.1%

・次いで「使用していない」29.7%、「盲ろう者への通訳・介助」27.0%となっている。

表 1-2-44c 疑似体験（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：37）

	回答数	割合
講師作成の資料	13	35.1%
受託団体作成の資料	6	16.2%
盲ろう者への通訳・介助	10	27.0%
盲ろう者の移動介助	6	16.2%
知ってください盲ろう者について	1	2.7%
その他の資料	3	8.1%
使用していない	11	29.7%

■ ロールプレイ

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 69.2%

・次いで「盲ろう者」「その他」ともに 30.8%となっている。

表 1-2-45a ロールプレイ（講師）[複数回答]（回答自治体数：13）

	回答数	割合
盲ろう者	4	30.8%
通訳・介助員	9	69.2%
受託団体職員	2	15.4%
その他	4	30.8%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 42.9%

表 1-2-45b ロールプレイ（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	6	42.9%
指導内容を決めずに講師に打診	1	7.1%
どちらでもない	4	28.6%
無回答	3	21.4%
合計	14	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 66.7%

・次いで「盲ろう者への通訳・介助」「使用していない」ともに 16.7%となっている。

表 1-2-45c ロールプレイ（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：12）

	回答数	割合
講師作成の資料	8	66.7%
受託団体作成の資料	0	0.0%
盲ろう者への通訳・介助	2	16.7%
盲ろう者の移動介助	1	8.3%
知ってください盲ろう者について	1	8.3%
その他の資料	1	8.3%
使用していない	2	16.7%

■ 通訳技術講義

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 65.4%

・次いで「盲ろう者」「受託団体職員」ともに 23.1%となっている。

表 1-2-46a 通訳技術講義（講師）[複数回答]（回答自治体数：26）

	回答数	割合
盲ろう者	6	23.1%
通訳・介助員	17	65.4%
受託団体職員	6	23.1%
その他	5	19.2%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 40.0%

表 1-2-46b 通訳技術講義（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	12	40.0%
指導内容を決めずに講師に打診	8	26.7%
どちらでもない	5	16.7%
無回答	5	16.7%
合計	30	100.0%

□ テキスト

「盲ろう者への通訳・介助」の割合が最も多く 44.0%

・次いで「講師作成の資料」40.0%となっている。

表 1-2-46c 通訳技術講義（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：25）

	回答数	割合
講師作成の資料	10	40.0%
受託団体作成の資料	4	16.0%
盲ろう者への通訳・介助	11	44.0%
盲ろう者の移動介助	4	16.0%
知ってください盲ろうについて	4	16.0%
その他の資料	2	8.0%
使用していない	3	12.0%

■ 通訳技術実習

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 79.2%

・次いで「盲ろう者」62.5%、「受託団体職員」25.0%となっている。

表 1-2-47a 通訳技術実習（講師）[複数回答]（回答自治体数：24）

	回答数	割合
盲ろう者	15	62.5%
通訳・介助員	19	79.2%
受託団体職員	6	25.0%
その他	5	20.8%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 39.3%

表 1-2-47b 通訳技術実習（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	11	39.3%
指導内容を決めずに講師に打診	6	21.4%
どちらでもない	5	17.9%
無回答	6	21.4%
合計	28	100.0%

□ テキスト

「盲ろう者への通訳・介助」の割合が最も多く 35.0%

・次いで「講師作成の資料」「使用していない」ともに 30.0%となっている。

表 1-2-47c 通訳技術実習（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：20）

	回答数	割合
講師作成の資料	6	30.0%
受託団体作成の資料	5	25.0%
盲ろう者への通訳・介助	7	35.0%
盲ろう者の移動介助	3	15.0%
知ってください盲ろうについて	2	10.0%
その他の資料	0	0.0%
使用していない	6	30.0%

■ 移動介助講義

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 54.5%

・次いで「その他」39.4%、「盲ろう者」24.2%となっている。

表 1-2-48a 移動介助講義（講師）[複数回答]（回答自治体数：33）

	回答数	割合
盲ろう者	8	24.2%
通訳・介助員	18	54.5%
受託団体職員	7	21.2%
その他	13	39.4%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 45.9%

表 1-2-48b 移動介助講義（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	17	45.9%
指導内容を決めずに講師に打診	7	18.9%
どちらでもない	6	16.2%
無回答	7	18.9%
合計	37	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 60.0%

・次いで「盲ろう者の移動介助」46.7%、「盲ろう者への通訳・介助」33.3%となっている。

表 1-2-48c 移動介助講義（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：30）

	回答数	割合
講師作成の資料	18	60.0%
受託団体作成の資料	5	16.7%
盲ろう者への通訳・介助	10	33.3%
盲ろう者の移動介助	14	46.7%
知ってください盲ろう者について	2	6.7%
その他の資料	3	10.0%
使用していない	2	6.7%

■ 移動介助実習

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 65.7%

・次いで「盲ろう者」42.9%、「その他」34.3%となっている。

表 1-2-49a 移動介助実習（講師）[複数回答]（回答自治体数：35）

	回答数	割合
盲ろう者	15	42.9%
通訳・介助員	23	65.7%
受託団体職員	6	17.1%
その他	12	34.3%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 48.7%

表 1-2-49b 移動介助実習（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	19	48.7%
指導内容を決めずに講師に打診	9	23.1%
どちらでもない	5	12.8%
無回答	6	15.4%
合計	39	100.0%

□ テキスト

「講師作成の資料」の割合が最も多く 46.7%

・次いで「盲ろう者の移動介助」36.7%、「盲ろう者への通訳・介助」30.0%となっている。

表 1-2-49c 移動介助実習（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：30）

	回答数	割合
講師作成の資料	14	46.7%
受託団体作成の資料	5	16.7%
盲ろう者への通訳・介助	9	30.0%
盲ろう者の移動介助	11	36.7%
知ってください盲ろう者について	1	3.3%
その他の資料	2	6.7%
使用していない	8	26.7%

■ 盲ろう者体験談

□ 講師

「盲ろう者」の割合が最も多く 100.0%

表 1-2-50a 盲ろう者体験談（講師）[複数回答]（回答自治体数：38）

	回答数	割合
盲ろう者	38	100.0%
通訳・介助員	1	2.6%
受託団体職員	2	5.3%
その他	1	2.6%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めずに講師に打診」が 38.5%

表 1-2-50b 盲ろう者体験談（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	13	33.3%
指導内容を決めずに講師に打診	15	38.5%
どちらでもない	6	15.4%
無回答	5	12.8%
合計	39	100.0%

□ テキスト

「使用していない」の割合が最も多く 66.7%

・次いで「講師作成の資料」22.2%となっている。

表 1-2-50c 盲ろう者体験談（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：36）

	回答数	割合
講師作成の資料	8	22.2%
受託団体作成の資料	1	2.8%
盲ろう者への通訳・介助	2	5.6%
盲ろう者への移動介助	0	0.0%
知ってください盲ろうについて	1	2.8%
その他の資料	0	0.0%
使用していない	24	66.7%

■ 通訳・介助員体験談

□ 講師

「通訳・介助員」の割合が最も多く 91.3%

表 1-2-51a 通訳・介助員体験談（講師）[複数回答]（回答自治体数：23）

	回答数	割合
盲ろう者	1	4.3%
通訳・介助員	21	91.3%
受託団体職員	2	8.7%
その他	1	4.3%

□ 内容の決め方

「指導内容を決めて講師に打診」が 39.1%

表 1-2-51b 通訳・介助員体験談（内容の決め方）

	回答数	割合
指導内容を決めて講師に打診	9	39.1%
指導内容を決めずに講師に打診	7	30.4%
どちらでもない	4	17.4%
無回答	3	13.0%
合計	23	100.0%

□ テキスト

「使用していない」の割合が多く 71.4%

・次いで「講師作成の資料」28.6%となっている。

表 1-2-51c 通訳・介助員体験談（テキスト）[複数回答]（回答自治体数：21）

	回答数	割合
講師作成の資料	6	28.6%
受託団体作成の資料	0	0.0%
盲ろう者への通訳・介助	0	0.0%
盲ろう者への移動介助	0	0.0%
知ってください盲ろうについて	0	0.0%
その他の資料	0	0.0%
使用していない	15	71.4%

4. 現在の養成における課題

(1) 受講者についての課題

「技能が身につかない」の割合が最も多く 71.4%

・次いで「受講希望者がいない」52.4%、「途中でやめる」28.6%となっている。

表 1-2-52 受講者についての課題 [複数回答] (回答自治体数 : 42)

	回答数	割合
途中でやめる	12	28.6%
技能が身につかない	30	71.4%
登録者が増えない	10	23.8%
受講希望者がいない	22	52.4%
特になし	1	2.4%
その他	8	19.0%

(2) 運営についての課題

「講習時間数」の割合が多く 59.5%

・次いで「盲ろう講師の確保」50.0%、「盲ろう以外の講師の確保」45.2%となっている。

表 1-2-53 運営の課題について [複数回答] (回答自治体数 : 42)

	回答数	割合
開催時間の設定	13	31.0%
会場・機材の確保	16	38.1%
盲ろう講師の確保	21	50.0%
盲ろう以外の講師の確保	19	45.2%
運営スタッフの確保	18	42.9%
講習期間	17	40.5%
講習時間数	25	59.5%
テキストの確保	13	9.5%
特になし	4	9.5%
その他	15	35.7%

(3) カリキュラムについてのニーズ

A. 通訳・介助員の役割と責務

- ・通訳・介助員の役割
- ・通訳・介助員の倫理
- ・マナーの講義時間、内容の拡充
- ・啓発講座ではなく、ボランティアではない意識や倫理観をどう育てるのか。
- ・通訳について（コミュニケーション技術について多くの時間が割かれるが、通訳の意義、責務について理解が足りない）
- ・モラル（守秘義務、人権など）
- ・通訳・介助者の倫理
- ・通訳・介助の在り方
- ・盲ろう者自身が求める通訳・介助の在り方について

B. 個々に応じたコミュニケーション実習

- ・コミュニケーション実習について、時間を増やす必要があると思う。
- ・コミュニケーション方法（音声通訳・指点字）
- ・パソコンを用いたノートテイク・要約筆記（パソコン）
- ・コミュニケーション方法（音声）
- ・コミュニケーション方法（パソコン）
- ・音声、手話、手書き文字以外のコミュニケーション方法の指導
- ・要約の技能（すべてをそのまま通訳できない場合が多い）

C. 盲ろう当事者との交流

- ・先天性盲ろう者とのコミュニケーションの場を設けて、実情を知る機会とすることと、通訳・介助員はどのような方法でコミュニケーションを取れば良いか学ぶ、良いきっかけになる講座があると良い。
- ・通訳・介助員の技術向上を図るため、盲ろう当事者とのコミュニケーションの時間や、介助の実技を増やす必要がある。
- ・会議通訳や外出介助など、盲ろう者との実習時間がさらに必要。
- ・盲ろう者と関われる場。盲ろう者とゆっくり話をする時間がないので、交流したり、おしゃべりしたりする時間が必要。
- ・カリキュラムとは関係ないが、盲ろう者と受講生と一緒に昼食を食べ、交流を図ることにより、見え方や聞こえ方など個人差が理解できて、とても好評である。特に疑似体験や移動介助、盲ろう当事者の体験談など、通訳技術にも、研修会期間だけではなく、年間を通して定期的に学習ができる場を設けることが必要だと思う。

D. 盲ろう者の福祉サービス

- ・盲ろう者に利用できる福祉サービスの紹介
- ・盲ろう者に利用可能な、さまざまな福祉サービスを学ぶ講義。

- ・ 盲ろう者の現状
- ・ 現状、過去もそうだが、盲ろう者が友の会や派遣事業に関わらずに暮らしている。また、関わるできない者や、関わったが、その後、縁遠くなった者など。問題山積みの中で研修会を開催し、マイナス面を明らかにすることも必要かと思う。

E. 対人援助技術

- ・ 倫理面の資質を高めるために、社会福祉援助技術（特に対人関係構築の技術）。
- ・ 援助技術について
- ・ 通訳に当たっている盲ろう者だけでなく、周りの人との良好な関係づくりを学ぶ講義。

F. 視覚障害と聴覚障害

- ・ 聴覚障害、視覚障害を補完する機器などの知識
- ・ 視覚障害および聴覚障害の基礎知識
- ・ ロービジョンについて

G. ロールプレイ

- ・ 現カリキュラムは、盲ろう当事者と通訳・介助員の意見を採り入れた内容となっているため、加えたい内容は少ないが、全体的に時間が足りないと感じている。
- ・ 模擬会議や模擬講習会の通訳。現在の養成講座では、手書き、音声通訳、触手話、指点字など、コミュニケーションを取るだけの内容になっている。実際の会議、講演場面を想定してのカリキュラムになっていない。

H. 現場実習

- ・ 外出訓練
- ・ 移動介助実習のとき、盲ろう者という障がいを理解していただくために、開催地域の商店やバス会社などに利用許可を取り、買い物実習や乗降実習をしている。

I. 移動介助

- ・ 移動介助については、時間を増やす必要があると思う。
- ・ 短期間で移動介助の方法と、コミュニケーション手段の習得が必要であり、受講者の負荷が高い。双方の技術を習得するためのカリキュラムの充実が必要。

J. その他

- ・ ××県では、音声で通訳を受けている盲ろう者が多いので、音声での通訳・介助の時間数を増やす必要があると思う。
- ・ 現在登録している盲ろう者は、ろうベースが多く、カリキュラムの内容も触手話と接近手話がメインになっている。盲ベースの盲ろう者が登録した場合は、点字をカリキュラムに加えていく必要がある。
- ・ ××県では、指点字の指導者が限られている。
- ・ 盲ろう者で指点字の取得を希望する人もいるが、学習の場がない。

- ・受講生にとっては、現在のカリキュラムが精いっぱいであると考えている（これ以上の内容にする
と受講生が集まらない）。
- ・登録後の経験（見習いなど）が、むしろ重要と考えている。
- ・手話を知らない、または学習中の受講生は、終了後派遣場面が少ない（実技の経験が少ないため）。
- ・本県では、基礎講座および専門講座を実施しているが、講座終了後も継続してスキルアップを図る
ための現任研修などの実施が必要と考える。
- ・介護に関する知識、技量
- ・通訳・介助者の体験談を聞くことによって、盲ろう者への接し方や、問題点にぶつかったときの参
考になると思われる。
- ・通訳・介助員が十分にコミュニケーション手段（手話、点字、指点字）を取得する場や時間を設定
した養成講座の実施が望ましいが、予算が厳しい状況である。
- ・通訳・介助員の技術レベルを確保するため、現在よりも、期間・時間数を増加させたカリキュラム
が望ましい。特に、実技の時間を増やし、修了者が自信を持って通訳・介助ができるような状況に
したい。
- ・受講時間数を増やし、カリキュラムの充実を望む。
- ・各項目について十分な時間が必要だと思います。修了証に加え、一定の基準を満たした証となるよ
うなもの、例えば修了試験に合格した者など、全国盲ろう者協会認定証のような物があると、良い
かもしれません。そうしたことで通訳・介助者の質を上げ、盲ろう者が安心して利用できる環境を
提供できればと思います。

(4) 養成に当たっての全体的なニーズ

A. ステップアップのための講習会

- ・現在は予算が限られているため、初心者向けの講習会にとどまっている。しかし、盲ろう者のコミュニケーション方法は多種多様であるので、一通り学んだ後、ステップアップさせるための講習会が必要。
- ・現任研修の充実
- ・受講後のレベル維持のために、通訳・介助員業務に携わることや、盲ろう者との積極的な交流を継続する必要がある。
- ・養成＝登録の考え方からすれば、現任者に対してのレベルアップ講座などの開催や、現任研修会で補うことが大切だと考える。
- ・現任研修に力を入れる必要がある

B. 講師指導力のための研修会

- ・講習を充実させるため、講師自体のレベルアップが必要
- ・各コミュニケーションや、通訳・介助実習などの指導ができる講師が不足しているため、講師を養成するための研修会が必要。
- ・通訳・介助員を養成するに当たり、講師の資質が重要だと考えている。当たり前だが、当たり前だと感じられること、それを自然に行動できる人が講師になることが大事である。
- ・講習の際には、通訳技術だけでなく盲ろう者の人格を尊重し、人として交流できるスキルを受講生に伝えることが重要だと考える。
- ・特別講習などの実技で、盲ろう者の方を招いた際には、講義をする講師とは別に、その方専用で通訳をつけることが必要だと考える。
- ・盲ろう者の中には、自分が盲ろうであるという自覚がない方が多い。日ごろから地域の盲ろう者、ろう者の把握ができ、その方が盲ろう者である場合、盲ろうになりそうな場合に、要介助者として登録を促せるような人を養成できるといい。

C. 養成講習会のガイドライン

- ・簡便な物で良いので、全国統一の教本があると大変参考になる。
- ・各コミュニケーション方法の技術習得において、現行時間数では不十分なため、日数・時間数を増やすことが必要。
- ・養成講習会のガイドライン的な物が必要
- ・地域によって通訳・介助員の実情はさまざまであり、講習を受けることにより、最低これだけは身につけるといふ基準を明確にし、それをクリアできる養成であるといい。
- ・現在の養成講座は、盲ろう者に対する社会啓発の意味合いが大であると考えている。テキストは養成講座運営委員会が独自に作成したが、今後は全国盲ろう者協会が編纂した本以外に、「通訳・介助員養成標準テキスト」のような、全国統一カリキュラム（教則本）を作成されることを希望している。また、そのテキストを使用して、指導者養成講習会が開催されることも、併せて望んでいる。

D. 盲ろう講師の養成

- ・講師の確保。カリキュラム内容によっては、県内で講師が調整できない可能性がある。県外講師を依頼する場合は、予算にも大きく関わるため重大な課題となる。
- ・講師を担える盲ろう者
- ・講師研修会の開催。コミュニケーション技術を持っているから講師ができる、ということではないので、講師としての自覚を持てるような研修会が必要。
- ・県内の当事者講師の事前学習の支援体制

E. 講習会の時間数

- ・養成講座は通訳・介助員への入り口にすぎず、現場で対応できるだけのスキルなどは、講座のみで習得できるものではない。
- ・盲ろう者ごとに必要な支援が異なるため、本講座に参加するだけで通訳・介助員に必要な通訳技術を習得することは困難である。
- ・現在 36 時間のカリキュラムであるが、十分な時間ではない。手話通訳者として活動している人は「通訳」ということがよく分かっているので問題ないが、それ以外の場合、日常会話のレベルの通訳・介助者を育てるには 3 倍の時間が必要である。

F. 情報交換

- ・技術力アップのため、誰でも気軽に参加しやすい雰囲気勉強会を計画すること。
- ・視覚による教材が不足しているので、何か良い教材がないか、他県ではどのようにしているのか知りたい。
- ・通訳・介助員同士の連絡会を開催し、情報交換会を開催する。

G. 実習

- ・盲ろう者との交流は、通訳・介助員に必要な事項であると考えている。
- ・実習内容を充実させること
- ・移動介助技術、通訳技術の集団的共有が必要。

H. 通訳・介助員の健康管理

- ・特に手話通訳者などは、すでに重要と考えられている頸肩腕を含む健康管理の知識は、通訳・介助員が健康で安心して通訳・介助を行うためには、重要な内容であると考ええる。
- ・手話通訳者の中には、盲ろう通訳・介助は負担が大きいと考え、特に頸肩腕の意識から受講を控える方がいるため、人材が育たない。

I. 盲ろう者に係る制度

- ・制度への理解と周知（役割が徹底されておらず、お世話する傾向になる）
- ・重複障害者の支援を考える制度改革が必要

J. その他

- ・福祉機器、日常生活用具などの見本の展示

- ・通訳・介助者の倫理綱領がなく、どんな仕事をするのか明確でないので、きちんとした綱領などを作る必要がある。
- ・養成講習会を修了して、すぐに登録はしないので、派遣事業に関する詳しい説明などは実施していない。登録時に説明している。
- ・本県では、盲ろう児に対しても通訳・介助員派遣事業の利用を認めている。この場合においては、通訳・介助業務に加えて、保護者が通訳・介助員に対して保育および教育業務を求めており、過度の負担となっている。
- ・コース別、レベル別の講座を検討することも必要である。
- ・盲ろう者の掘り出しと、盲ろう者という障がいを理解していただくために、開催場所を変えて開催している。
- ・現在は点字および手話を 1 つのコースで研修しているが、点字コース、手話コースと分けて実施すれば養成しやすいのではないか。
- ・登録後、派遣対象となる盲ろう者にもっと参加してもらい、研修会の中から交流を進めていかねばと考えます。
- ・講座終了後、友の会の活動に参加する人が少なく、長くつなげるための方法に苦慮している。
- ・募集段階での資格の有無を条件付与する（手話通訳者、ホームヘルパーなど）
- ・盲ろう者自身の制度を利用するユーザーとしての自覚と意識の向上（通訳・介助員を育成するくらいの意識）
- ・社会的認知の向上
- ・業務への理解、周知の充実
- ・「介助」の範囲があいまいである。本県としては、コミュニケーション支援に伴う介助のみが通訳・介助義務の範ちゅうであり、身体的な介助業務を通訳・介助員が担うのは、過度の負担となるため、別途サービスの個別給付によるべきと考えるが、委託先に照会したところ、必要に応じて、肢体不自由との重複の場合の車いす利用者に対する介助方法、排泄介助方法、食事介助方法などの介助を実際に行っているため、カリキュラムに必要と考えるとのことであった。国において、盲ろう者通訳・介助業務の明確な定義を望む。
- ・障がい者が重度になるほど、通訳・介助者への依存度が高まり、資質が問われる。障がい者として生きる意味、障がい者とともに生きる意味などを皆で考えたい。
- ・通訳・介助者としての資質を問うためにも、修了試験が必要である。
- ・盲ろう者についての啓発（知ってもらう）
- ・講座運営に当たる事務局の運営体制（人件費）
- ・十分な通訳・介助技術のある通訳・介助員、養成に携わる盲ろう者の通訳・介助報酬予算の増額。
- ・養成講座終了後も、継続して通訳・介助員の技術を維持・向上させるための盲ろう者との交流行事に必要な通訳・介助員派遣事業の予算の増額。
- ・講座を行うにせよ、派遣を行うにせよ、盲ろう者が何かをする、どこかへ行くためには、常に通訳・介助員が必要。その予算が不足していると、盲ろう者の活動も制限される。
- ・入門＋応用講座の形式が望ましいが、予算や時間などの縛りがあり、難しい問題。

5. 盲ろう者の状況

(1) 視覚・聴覚の両方の身体障害者手帳を有する盲ろう者の人数および通訳・介助員派遣事業の登録盲ろう者の人数

- ・各都道府県に在住の盲ろう者は、平均約 266 人となっており、そのうち通訳・介助員派遣事業に登録のある盲ろう者は、平均約 20 人となっている。

表 1-2-54 視覚・聴覚の両方に身体障害者手帳を有する盲ろう者の人数および通訳・介助員派遣事業の登録盲ろう者の人数

	回答数	最小値	最大値	中央値	平均値	標準偏差
都道府県盲ろう者数	32	30	953	181.00	265.53	225.05
登録盲ろう者数	43	1	111	13.00	20.37	22.10

(2) コミュニケーション方法ごとの登録盲ろう者の人数

- ・各都道府県における通訳・介助員派遣事業に登録のある盲ろう者のコミュニケーション方法は、「触手話」が最も多く、平均約 6 人となっている。
- ・次いで、「音声」、「弱視手話」とともに平均約 5 人となっている。

表 1-2-55 コミュニケーション方法ごとの登録盲ろう者の人数

	回答数	最小値	最大値	中央値	平均値	標準偏差
音声の人数	42	0	42	3.50	4.90	6.65
弱視手話の人数	42	0	17	4.00	4.57	3.78
触手話の人数	42	0	37	3.00	6.05	7.54
日本語式指文字の人数	42	0	2	0.00	0.12	0.40
ローマ字式指文字の人数	42	0	5	0.00	0.24	0.82
手書き文字の人数	42	0	37	1.00	2.14	5.75
筆談の人数	42	0	6	0.00	0.76	1.38
パソコンの人数	42	0	1	0.00	0.10	0.30
ブリストの人数	41	0	4	0.00	0.61	1.09
指点字の人数	41	0	8	0.00	0.49	1.40
その他の人数	42	0	8	0.00	0.83	1.51

6. 通訳・介助員の派遣の状況

(1) 登録通訳・介助員の人数および稼働した登録通訳・介助員の人数

- ・各都道府県に登録のある通訳・介助員の人数は、平均約 100 人となっており、稼働した通訳・介助員の人数は、平均約 46 人となっている。

表 1-2-56 登録通訳・介助員の人数および稼働した登録通訳・介助員の人数

	回答数	最小値	最大値	中央値	平均値	標準偏差
登録通訳・介助員数	42	12	349	89.00	100.93	76.84
稼働通訳・介助員数	41	1	220	30.00	46.22	45.33

(2) コミュニケーション方法ごとの通訳・介助員の充足度

■ 「音声」の充足度

「足りている」の割合が最も多く 26.2%

・次いで、「どちらかというと足りていない」、「どちらかというと足りている」は 23.8%となっている。

表 1-2-57 「音声」の充実度

	回答数	割合
足りていない	6	14.3%
どちらかというと足りていない	10	23.8%
どちらとも言えない	5	11.9%
どちらかというと足りている	10	23.8%
足りている	11	26.2%
合計	42	100.0%

■ 「弱視手話」の充足度

「足りていない」の割合が最も多く 38.1%

・次いで、「どちらかというと足りていない」 23.8%となっている。

表 1-2-58 「弱視手話」の充足度

	回答数	割合
足りていない	16	38.1%
どちらかというと足りていない	10	23.8%
どちらとも言えない	3	7.1%
どちらかというと足りている	8	19.0%
足りている	5	11.9%
合計	42	100.0%

■ 「触手話」の充足度

「足りていない」の割合が最も多く 59.5%

・次いで、「どちらかというと足りていない」 19.0%、「どちらとも言えない」 7.1%となっている。

表 1-2-59 「触手話」の充足度

	回答数	割合
足りていない	25	59.5%
どちらかというと足りていない	8	19.0%
どちらとも言えない	3	7.1%
どちらかというと足りている	2	4.8%
足りている	4	9.5%
合計	42	100.0%

■ 「日本語式指文字」の充足度

「どちらとも言えない」の割合が最も多く 50.0%

・次いで、「足りていない」19.4%となっている。

表 1-2-60 「日本語式指文字」の充足度

	回答数	割合
足りていない	7	19.4%
どちらかというと足りていない	4	11.1%
どちらとも言えない	18	50.0%
どちらかというと足りている	4	11.1%
足りている	3	8.3%
合計	36	100.0%

■ 「ローマ字式指文字」の充足度

「どちらとも言えない」の割合が最も多く 43.2%

・次いで、「足りていない」37.8%となっている。

表 1-2-61 「ローマ字式指文字」の充足度

	回答数	割合
足りていない	14	37.8%
どちらかというと足りていない	4	10.8%
どちらとも言えない	16	43.2%
どちらかというと足りている	2	5.4%
足りている	1	2.7%
合計	37	100.0%

■ 「手書き文字」の充足度

「どちらとも言えない」の割合が最も多く 30.0%

・次いで、「どちらかというと足りている」20.0%となっている。

表 1-2-62 「手書き文字」の充足度

	回答数	割合
足りていない	6	15.0%
どちらかというと足りていない	7	17.5%
どちらとも言えない	12	30.0%
どちらかというと足りている	8	20.0%
足りている	7	17.5%
合計	40	100.0%

■ 「筆談」の充足度

「どちらとも言えない」の割合が最も多く 34.3%

・次いで、「足りていない」、「どちらかというと足りていない」、「足りている」は17.1%となっている。

表 1-2-63 「筆談」の充足度

	回答数	割合
足りていない	6	17.1%
どちらかというと足りていない	6	17.1%
どちらとも言えない	12	34.3%
どちらかというと足りている	5	14.3%
足りている	6	17.1%
合計	35	100.0%

■ 「パソコン」の充足度

「足りていない」の割合が最も多く 50.0%

・次いで、「どちらとも言えない」34.2%となっている。

表 1-2-64 「パソコン」の充足度

	回答数	割合
足りていない	19	50.0%
どちらかというと足りていない	3	7.9%
どちらとも言えない	13	34.2%
どちらかというと足りている	2	5.3%
足りている	1	2.6%
合計	38	100.0%

■ 「点字」の充足度

「足りていない」の割合が最も多く 53.7%

・次いで、「どちらとも言えない」19.5%となっている。

表 1-2-65 「点字」の充足度

	回答数	割合
足りていない	22	53.7%
どちらかというと足りていない	7	17.1%
どちらとも言えない	8	19.5%
どちらかというと足りている	4	9.8%
足りている	0	0.0%
合計	41	100.0%

■ 「指点字」の充足度

「足りていない」の割合が最も多く 60.5%

・次いで、「どちらとも言えない」 21.1%となっている。

表 1-2-66 「指点字」の充足度

	回答数	割合
足りていない	23	60.5%
どちらかというと足りていない	5	13.2%
どちらとも言えない	8	21.1%
どちらかというと足りている	1	2.6%
足りている	1	2.6%
合計	38	100.0%

第2部

盲ろう者向け通訳・介助員の状況に関する調査

第1章 調査の概要

1. 調査の目的

通訳・介助に関する学習や活動の状況、通訳・介助に対する意識などを把握することにより、盲ろう者向け通訳・介助員の今後の養成の在り方や、カリキュラムを検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

2. 調査の対象

各都道府県の盲ろう者向け通訳・介助員派遣事業に登録している通訳・介助員

3. 調査の基準日

平成 25 年 1 月 1 日

4. 調査の方法

都道府県障害福祉主管課 47 カ所に「登録通訳・介助員数に関する調査票」を送付し、平成 24 年 10 月末日現在の通訳・介助員派遣事業の登録通訳・介助員の総数および使用文字種の内訳（普通文字、拡大文字、点字）の回答を求めた。

その後、回答のあった都道府県において、通訳・介助員派遣事業を受託している団体に使用文字種別ごとの調査票を送付し、受託団体から通訳・介助員に調査票を再送付した。

回収については、同封した封筒に入れて郵送にて返送してもらった。

受託団体から通訳・介助員への調査票の発送日は平成 25 年 1 月下旬、調査票の回答締切日は平成 25 年 2 月 15 日であった。

5. 回収結果

送付した 4,321 通のうち、1,770 通の回収が得られ（回収率：40.9%）、有効回答は 1,675 通であった（有効回答率：94.6%）。

6. 調査項目

本調査は、本報告書の巻末に掲載した調査票「盲ろう者向け通訳・介助員の状況に関する調査」により実施した。各調査票における設問および調査項目は、表 2-1-1 の通りである。

※ [複] とあるのは、複数回答となっている項目である。

7. 利用上の注意

百分率は、小数点以下第 2 位を四捨五入したため、総数・合計欄が 100 になっていても、内訳の合計が 100%とならない場合がある。

表 2-1-1 調査項目

大項目	設問要約	設問
基本的属性	問1 性別	あなたの性別をお答えください。
	問2 年齢階級	あなたの年齢をお答えください。
	問3 所在地	あなたのお住まいの都道府県を記入してください。
	問4 障害 (ある場合)種別	あなたに障害はありますか。 障害の種別をお答えください。[あてはまるカタカナすべてに○]
	問5 職業 (就いている場合)雇用形態 (就いていない場合)現在状況	あなたは通訳・介助派遣を除いて、職業に就いていますか。 雇用形態をお答えください。[あてはまるカタカナ1つに○] 現在の状況をお答えください。[あてはまるカタカナ1つに○]
	問6 国家資格・公的資格 (持っている場合)資格種類	あなたは福祉関係の国家資格や公的資格を持っていますか。 資格の種類をお答えください。[あてはまるカタカナすべてに○]
	問7 通訳・介助以外の福祉関係業務の登録 (登録している場合)登録種類	あなたは通訳・介助以外の福祉関係の業務について、自治体や事業所などに登録していますか。 登録の種類をお答えください。[あてはまるカタカナすべてに○]
	問8 自治体での通訳・介助員登録 (1つの自治体のみ登録している場合)登録自治体名・登録年	あなたは複数の自治体に通訳・介助員登録をしていますか。 登録している自治体と登録した年(西暦)をお答えください。
	(2つ以上の自治体に登録している場合)登録自治体数・最多活動自治体名・登録年	登録している自治体は何箇所ですか。最も通訳・介助活動をしている自治体と登録した年(西暦)をお答えください。
	問9 全国盲ろう者協会での通訳・介助員登録 (登録している場合)登録年	あなたは社会福祉法人全国盲ろう者協会での通訳・介助員(訪問相談員)登録をしていますか。 登録した年(西暦)をお答えください。
	問10 手話経験 (ある場合)経験年数・点訳技能水準	あなたは手話でのコミュニケーション経験はありますか。 経験年数をお答えください。どの程度、点訳(点字翻訳)が可能ですか。[あてはまるカタカナ1つに○]
問11 点字経験	あなたは点訳(点字翻訳)の経験はありますか。	
通訳・介助に関する学習状況	問12 通訳・介助員養成講習会の受講状況 (受講している場合)受講自治体・受講年・受講時間数	あなたは自治体で実施されている通訳・介助員養成講習会を受講しましたか。(登録者向けの「現任研修」などは含みません) 受講した自治体と受講した年(西暦)、受講時間数をお答えください。
	問13 機関・団体主催の研修会の受講状況 (全国盲ろう者協会主催講習会を受講した場合)受講年	あなたは以下にあげる講習会を受講しましたか。 受講した年(西暦)をお答えください。
	(国立障害者リハビリテーションセンター主催講習会を受講した場合)受講年	受講した年(西暦)をお答えください。
	問14 コミュニケーション方法の習得状況	あなたは盲ろう者のコミュニケーション方法を、どの程度身につけていますか。それぞれの方法について、あてはまる番号1つに○をしてください。
	問15 通訳・介助員養成講習会の受講により習得したコミュニケーション方法[複]	(問12で「受講している」に○を付けた方にお尋ねします)あなたが身につけている(少なくとも1対1の対話ができる)方法のうち、通訳・介助員養成講習会を受講することによって身につけたコミュニケーション方法をお答えください。[あてはまる番号すべてに○]
	問16 通訳・介助員養成講習会の有用度	(問12で「受講している」に○を付けた方にお尋ねします)通訳・介助員養成講習会は、通訳・介助活動をするうえで、役に立ったと思いますか。[あてはまる番号1つに○]
	問17 通訳・介助員養成講習への要望・ニーズ	通訳・介助員養成講習会について、もっと講習が必要だと思う内容やあまり講習が必要でないと思う内容があれば、自由にご記入ください。
通訳・介助に関する活動状況について	問18 通訳・介助活動歴 (活動したことがある場合)活動開始年	あなたはこれまで通訳・介助活動をしたことがありますか。 活動を始めた年(西暦)をお答えください。
	(活動したことがない場合)未活動理由	活動したことがない理由は何ですか。[あてはまるカタカナすべてに○]
	問19 過去1年間の通訳・介助活動状況 (活動した場合)年間活動日数・通訳・介助担当実人数	あなたは過去1年間(2012年1月1日～2012年12月31日)に、登録している自治体で通訳・介助活動をしましたか。 過去1年間の活動日数をお答えください。担当した盲ろう者の実人数をお答えください。
	(活動していない場合)未活動理由	活動していない理由は何ですか。[あてはまるカタカナすべてに○]
	問20 担当盲ろう者の年齢層[複]	過去1年間(2012年1月1日～2012年12月31日)の通訳・介助活動のなかで、あなたが担当したことのある盲ろう者の年齢層をお答えください。[あてはまる番号すべてに○]

大項目		設問要約	設問
通訳・介助に関する活動状況について	問21	最多担当盲ろう者の年齢層	問20でお答えになった年齢層のうち、過去1年間の通訳・介助活動のなかで、あなたが最も担当した日数の多かった盲ろう者の年齢層をお答えください。[あてはまる番号1つに○]
	問22	担当盲ろう者のコミュニケーション方法[複]	過去1年間(2012年1月1日～2012年12月31日)の通訳・介助活動のなかで、あなたが担当したことのある盲ろう者の受信コミュニケーション方法をお答えください。[あてはまる番号すべてに○]
	問23	最多担当盲ろう者のコミュニケーション方法	問22でお答えになったコミュニケーション方法のうち、過去1年間の通訳・介助活動のなかで、あなたが最も担当した日数の多かった盲ろう者の受信コミュニケーション方法をお答えください。[あてはまる番号1つに○]
通訳・介助に関する意識について	問24	盲ろう者との関わり方と通訳・介助活動の考え方	次にあげた文章は、複数の通訳・介助員が「盲ろう者との関わり方」や「通訳・介助活動に対する考え」について述べた言葉です。それぞれについて、あなたの通訳・介助員としての関わり方や考えと近いかどうか、「まったく当てはまらない」を“1”、「非常に当てはまる」を“7”として、7段階でお答えください。深く考えず直感で、それぞれについて番号1つに○をしてください。
	問25	通訳・介助活動での課題・ニーズ	通訳・介助活動にあたるうえで、あなたがお困りになっていることがあれば、自由にご記入ください。

第2章 結果の概要

1. 調査協力者の基本的属性

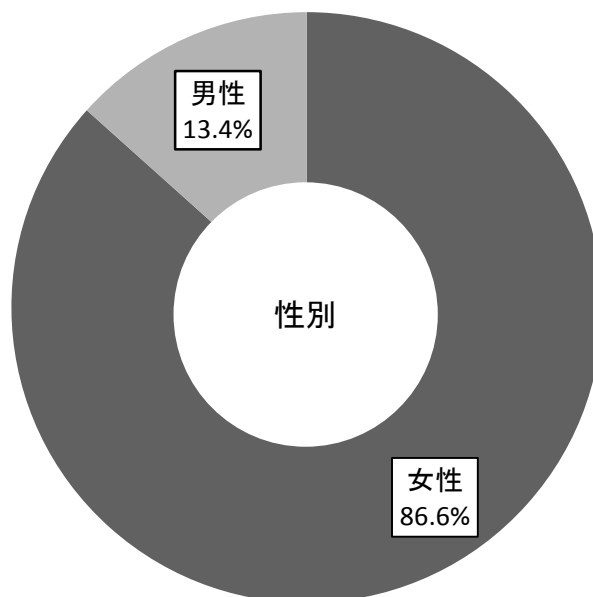
(1) 性別・年齢階級・所在地

■ 性別

「女性」が86.6%

図表 2-2-1 性別

	人数	割合
女性	1451	86.6%
男性	224	13.4%
合計	1675	100.0%



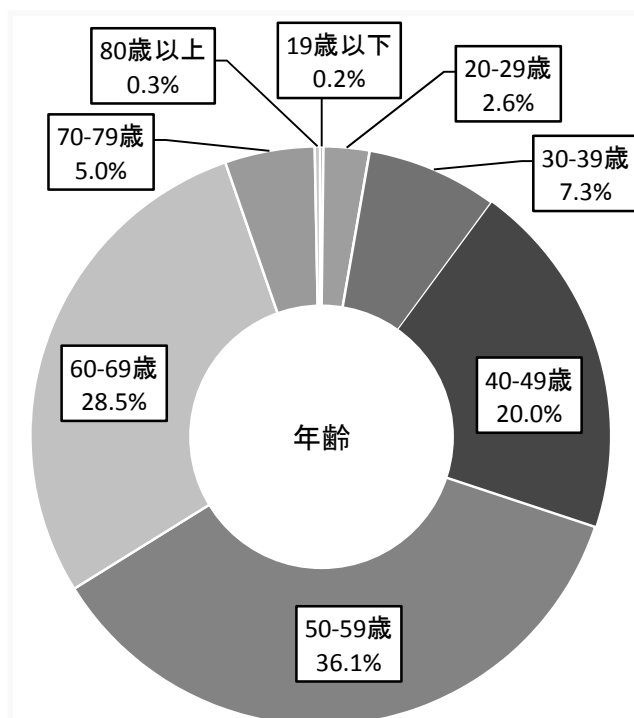
■ 年齢

「50-59歳」が最も多く36.1%

・次いで、「60-69歳」28.5%、「40-49歳」20.0%となっている。

図表 2-2-2 年齢

	人数	割合
19歳以下	3	0.2%
20-29歳	43	2.6%
30-39歳	123	7.3%
40-49歳	335	20.0%
50-59歳	604	36.1%
60-69歳	478	28.5%
70-79歳	84	5.0%
80歳以上	5	0.3%
合計	1675	100.0%



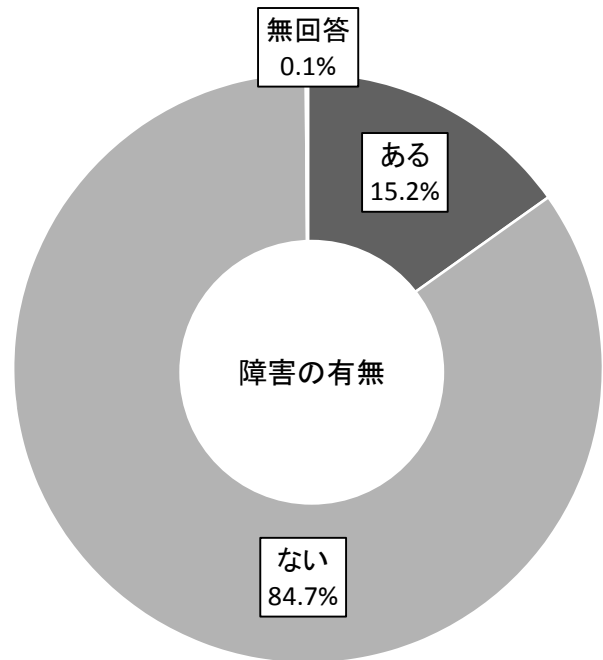
(2) 障害

■ 障害の有無

障害が「ある」が 15.2%

図表 2-2-3 障害の有無

	人数	割合
ある	254	15.2%
ない	1419	84.7%
無回答	2	0.1%
合計	1675	100.0%

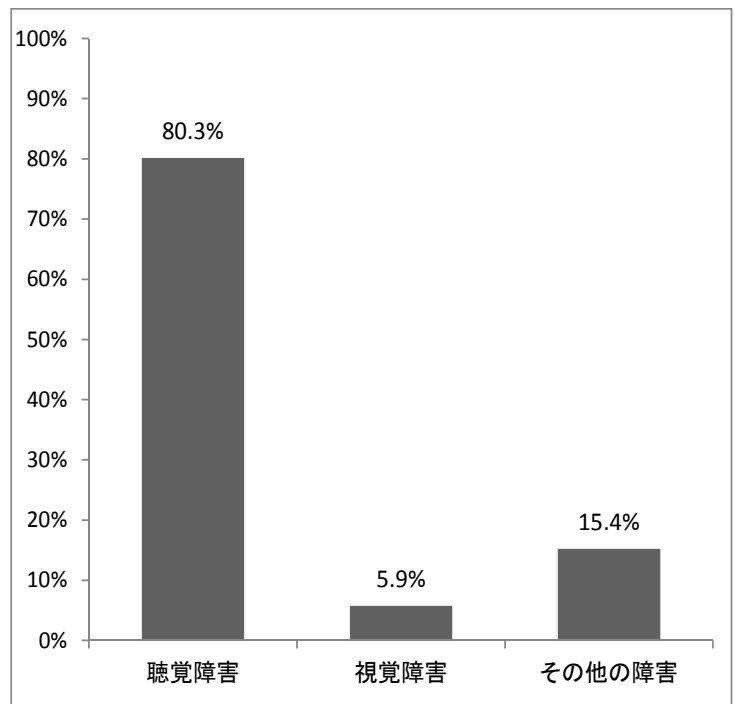


■ 障害の種類

障害があると回答した人のうち、「聴覚障害」が 80.3%

図表 2-2-4 障害の種類 [複数回答]

	人数	割合
聴覚障害	204	80.3%
視覚障害	15	5.9%
その他の障害	39	15.4%



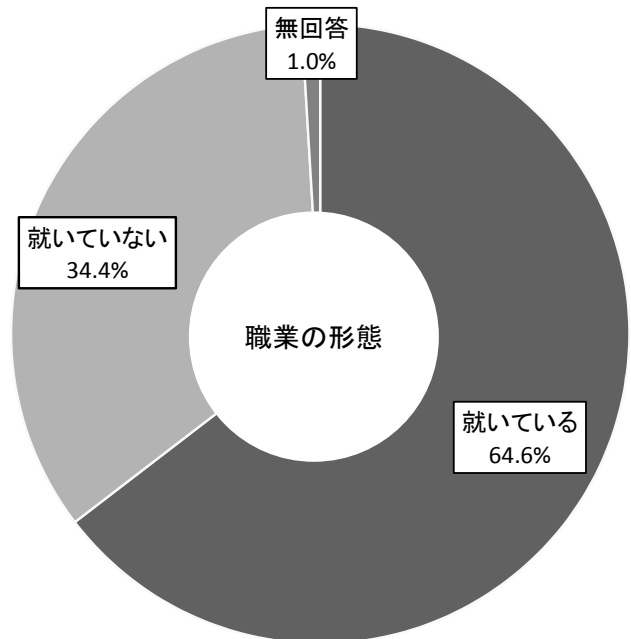
(3) 職業

■ 通訳・介助以外の職業の有無

職業に「就いている」が64.6%

図表 2-2-5 職業の有無

	人数	割合
就いている	1082	64.6%
就いていない	577	34.4%
無回答	16	1.0%
合計	1675	100.0%



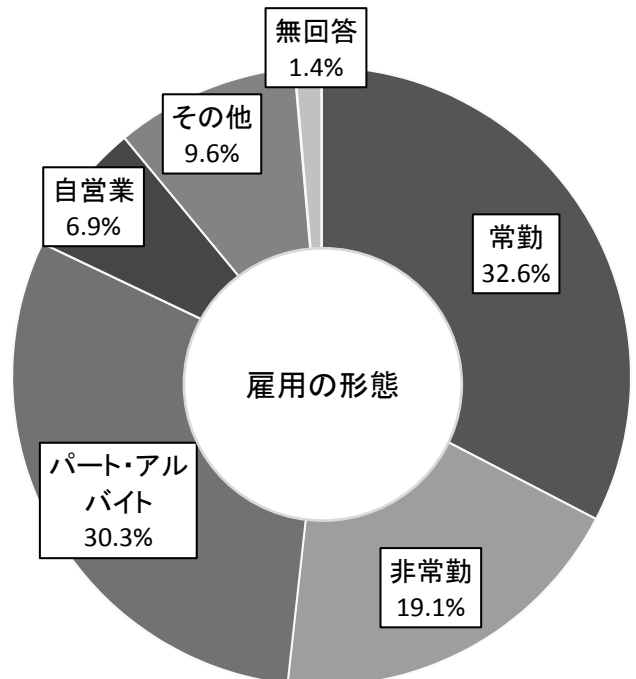
■ 就業している場合の雇用の形態

「常勤」が最も多く32.6%

・次いで、「パート・アルバイト」30.3%、「非常勤」19.1%となっている。

図表 2-2-6 雇用の形態

	人数	割合
常勤	353	32.6%
非常勤	207	19.1%
パート・アルバイト	328	30.3%
自営業	75	6.9%
その他	104	9.6%
無回答	15	1.4%
合計	1082	100.0%

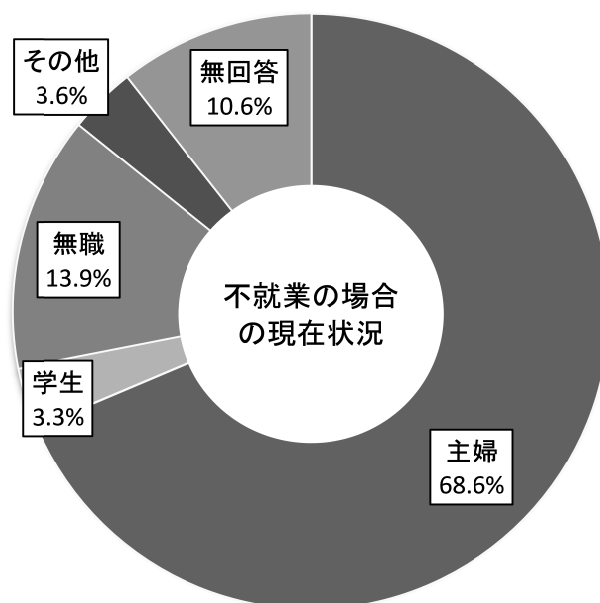


■ 不就業の場合の現在状況

「主婦」が最も多く 68.6%

図表 2-2-7 不就業の場合の現在状況

	人数	割合
主婦	396	68.6%
学生	19	3.3%
無職	80	13.9%
その他	21	3.6%
無回答	61	10.6%
合計	577	100.0%



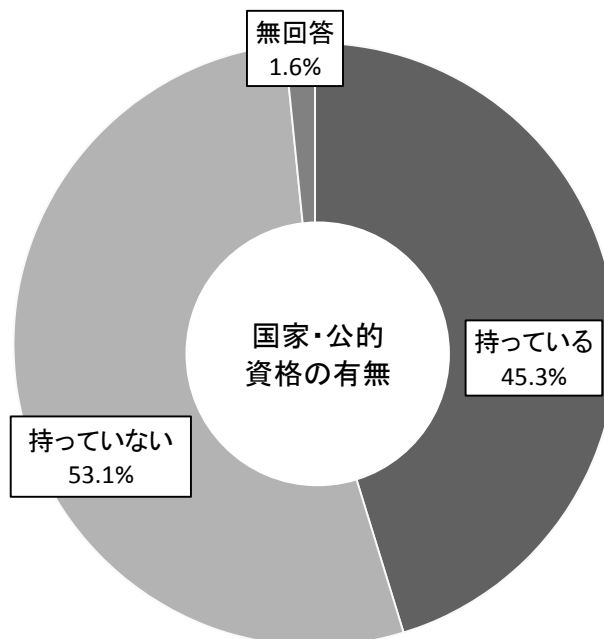
(4) 国家資格・公的資格

■ 福祉関係の国家資格や公的資格の有無

国家資格・公的資格を「持っている」人が 45.3%

図表 2-2-8 国家資格・公的資格の有無

	人数	割合
持っている	758	45.3%
持っていない	890	53.1%
無回答	27	1.6%
合計	1675	100.0%



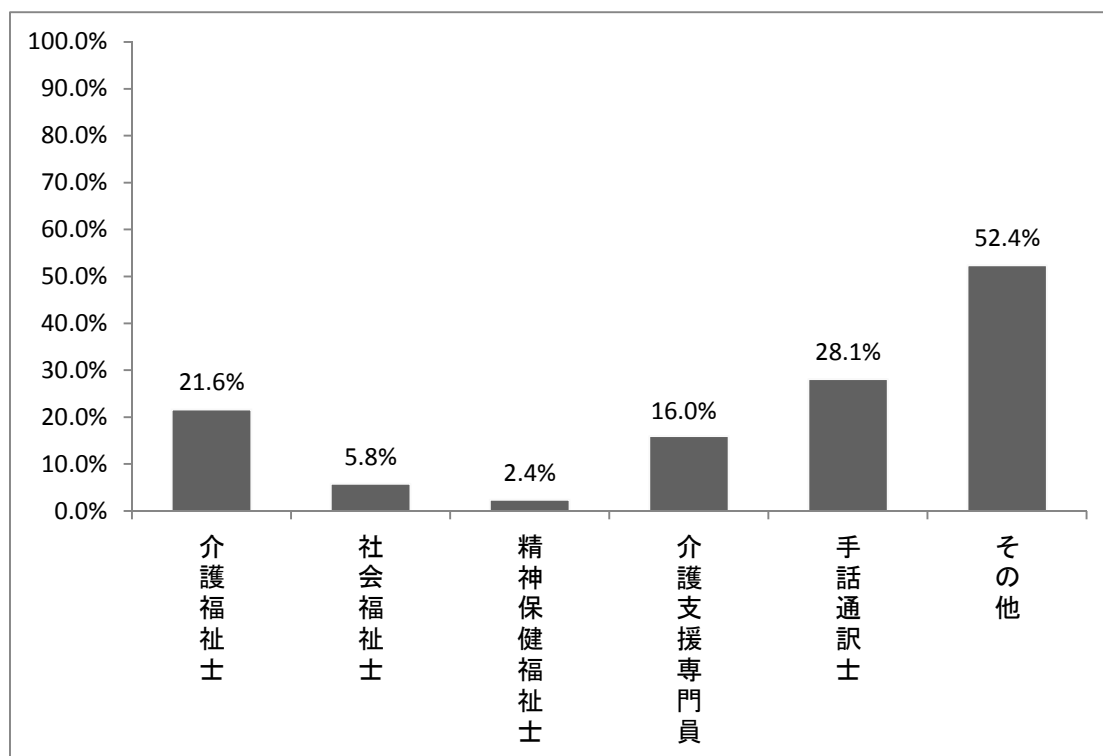
■ 資格の種類

国家資格・公的資格を持っている人のうち「手話通訳士」の割合が最も多く 28.1%

- ・次いで、「介護福祉士」 21.6%、「介護支援専門員」 16.0%となっている。
- ・その他の内訳は、「ホームヘルパー」、「ガイドヘルパー」、「手話通訳者」などであった。

図表 2-2-9 資格の種類 [複数回答]

	人数	割合
介護福祉士	164	21.6%
社会福祉士	44	5.8%
精神保健福祉士	18	2.4%
介護支援専門員	121	16.0%
手話通訳士	213	28.1%
その他	397	52.4%



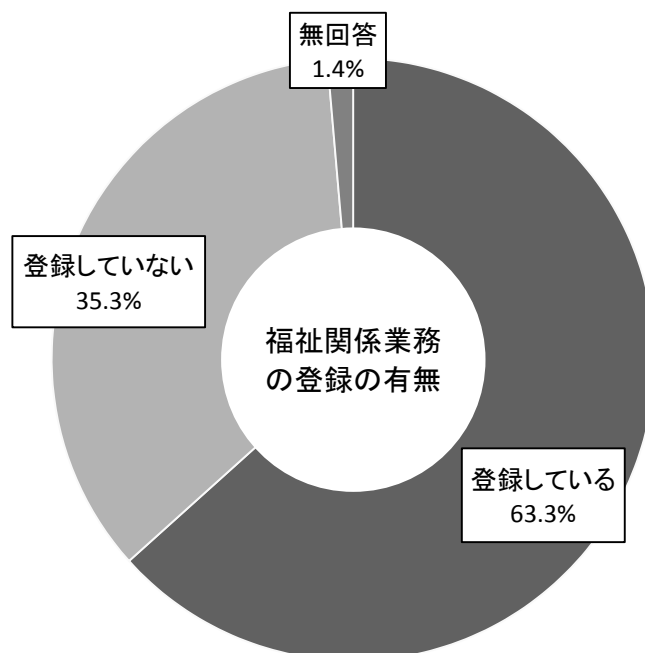
(5) 通訳・介助以外の福祉関係業務の登録

■ 通訳・介助以外の福祉関係業務の登録の有無

通訳・介助以外の福祉関係業務に「登録している」人は63.3%

図表 2-2-10 通訳・介助以外の福祉関係業務の登録の有無

	人数	割合
登録している	1061	63.3%
登録していない	591	35.3%
無回答	23	1.4%
合計	1675	100.0%



■ 登録の種類

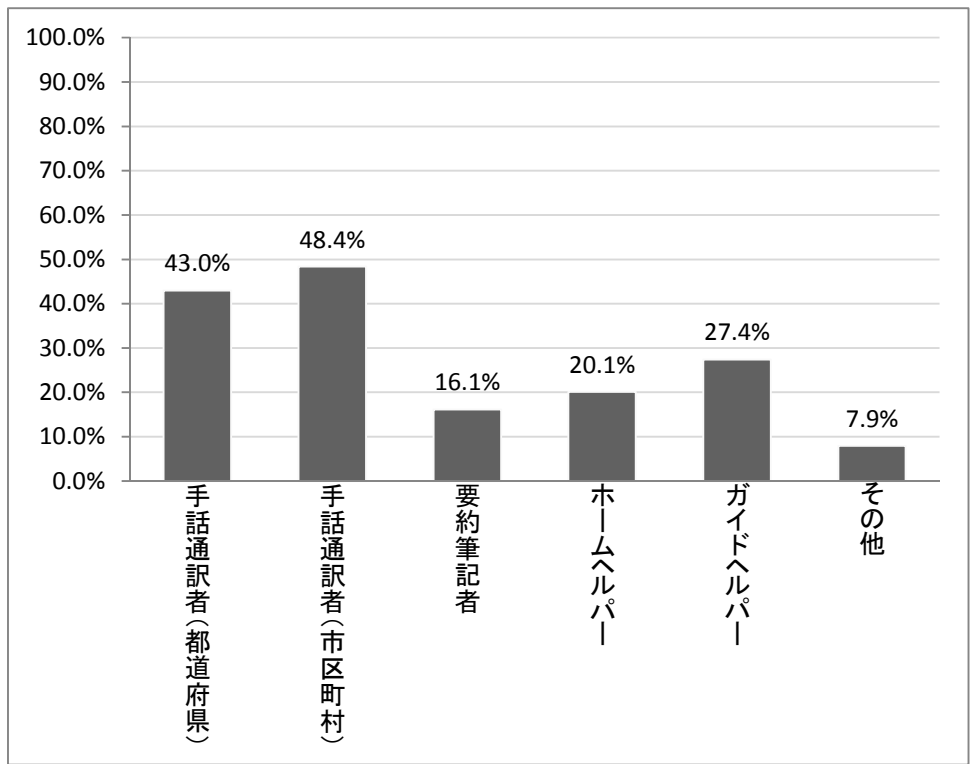
福祉関係業務に登録している人のうち「手話通訳者（市区町村）」が最も多く48.4%

・次いで、「手話通訳者（都道府県）」43.0%、「ガイドヘルパー」27.4%となっている。

表 2-2-11 登録の種類 [複数回答]

	人数	割合
手話通訳者（都道府県）	456	43.0%
手話通訳者（市区町村）	513	48.4%
要約筆記者	171	16.1%
ホームヘルパー	213	20.1%
ガイドヘルパー	291	27.4%
その他	84	7.9%

図 2-2-11 登録の種類



(6) 自治体での通訳・介助員登録

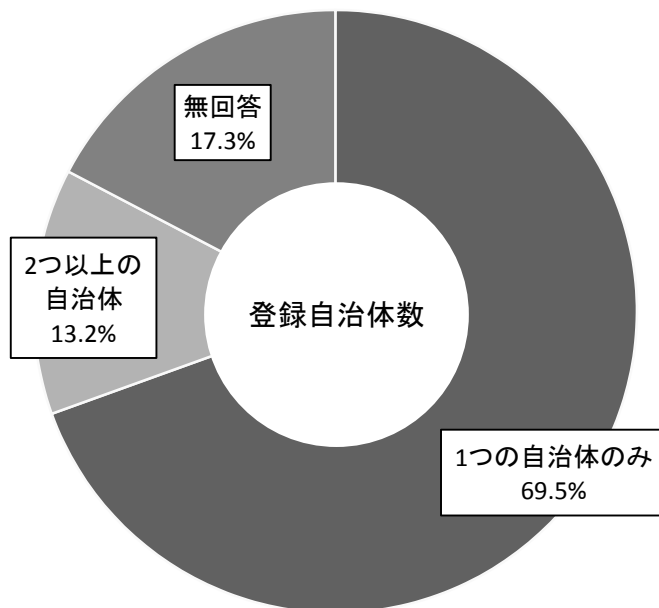
■ 登録自治体数

「1つの自治体のみ」に登録している人が最も多く 69.5%

・「2つ以上の自治体」に登録している人の割合は 13.2%となっている。

図表 2-2-12 登録自治体数

	人数	割合
1つの自治体のみ	1164	69.5%
2つ以上の自治体	221	13.2%
無回答	290	17.3%
合計	1675	100.0%



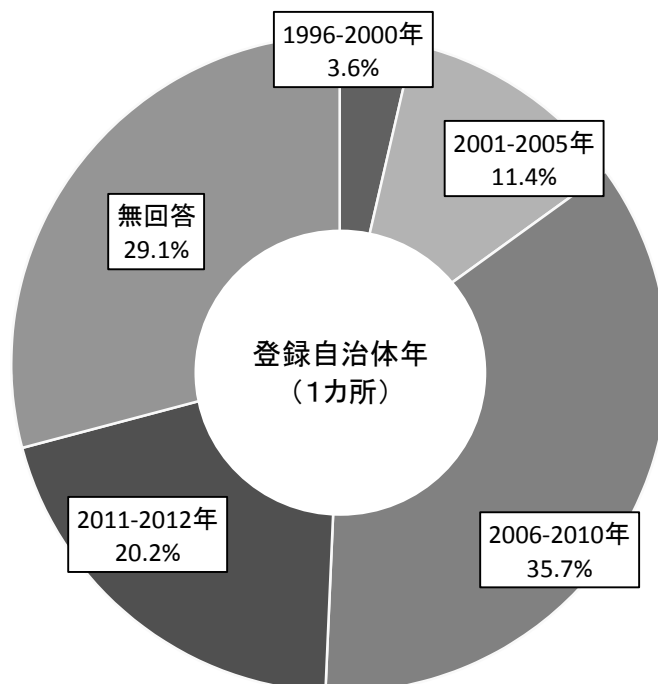
■ 自治体登録年（1カ所に登録）

「2006-2010年」に登録した人が最も多く35.7%

・次いで、「2011-2012年」20.2%となっている。

図表 2-2-13 自治体登録年（1カ所に登録）

	人数	割合
1996-2000年	42	3.6%
2001-2005年	133	11.4%
2006-2010年	415	35.7%
2011-2012年	235	20.2%
無回答	339	29.1%
合計	1164	100.0%

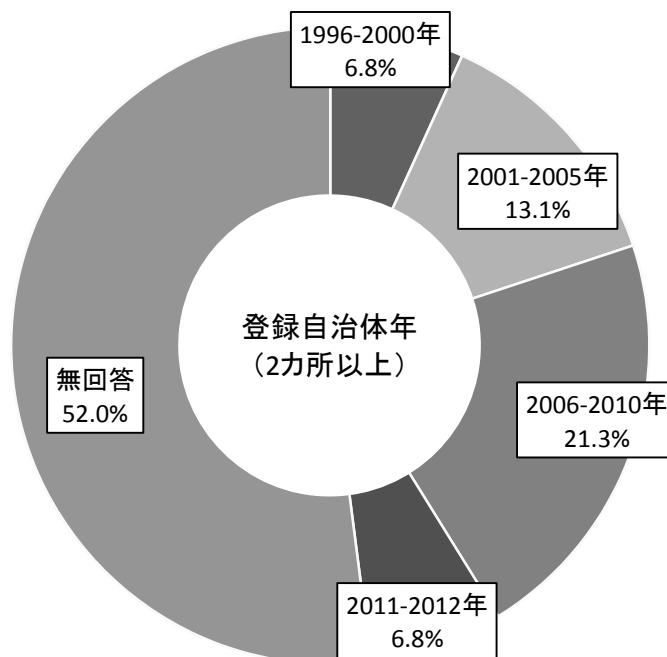


■ 自治体登録年（2カ所以上に登録）

2カ所目の自治体には「2006-2010年」に登録した人が最も多く21.3%

図表 2-2-14 自治体登録年（2カ所以上に登録）

	人数	割合
1996-2000年	15	6.8%
2001-2005年	29	13.1%
2006-2010年	47	21.3%
2011-2012年	15	6.8%
無回答	115	52.0%
合計	221	100.0%



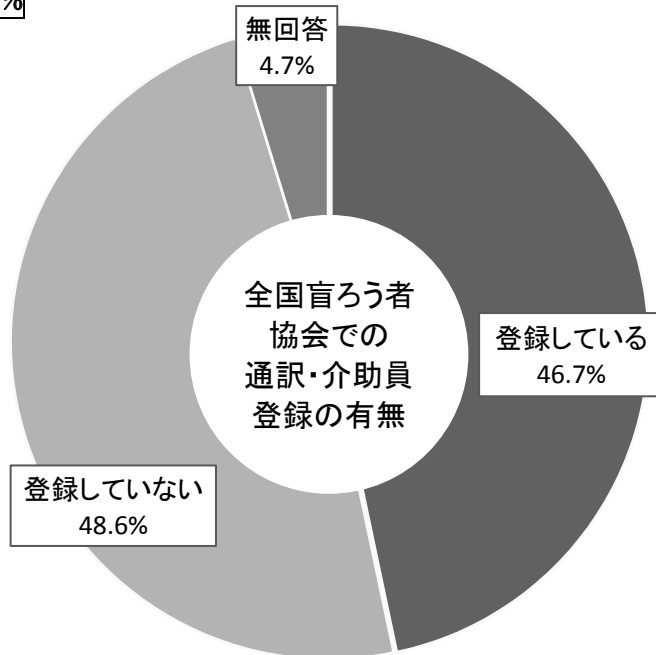
(7) 全国盲ろう者協会での通訳・介助員登録

■ 全国盲ろう者協会での通訳・介助員登録の有無

全国盲ろう者協会に「登録している」人は 46.7%

図表 2-2-15 全国盲ろう者協会での通訳・介助員登録の有無

	人数	割合
登録している	782	46.7%
登録していない	814	48.6%
無回答	79	4.7%
合計	1675	100.0%



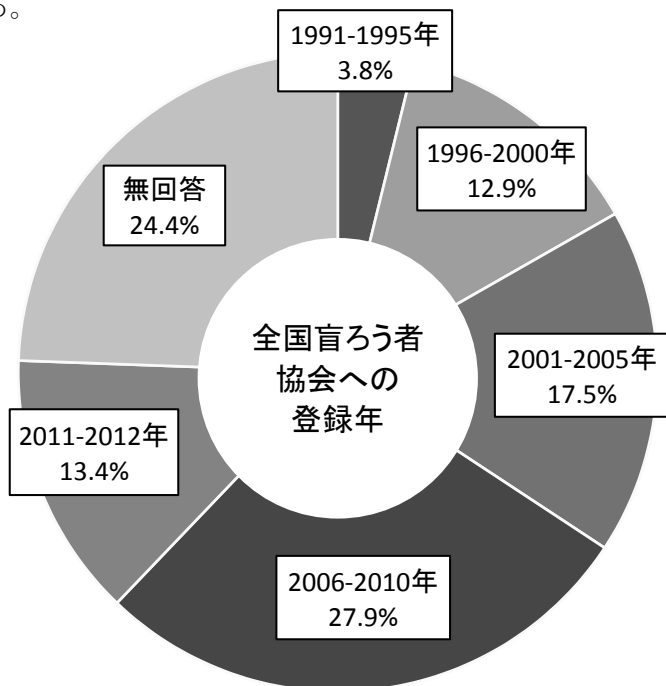
■ 全国盲ろう者協会への登録年

「2006-2010年」に登録した人が最も多く 27.9%

・次いで、「2001-2005年」17.5%となっている。

図表 2-2-16 協会登録年

	人数	割合
1991-1995年	30	3.8%
1996-2000年	101	12.9%
2001-2005年	137	17.5%
2006-2010年	218	27.9%
2011-2012年	105	13.4%
無回答	191	24.4%
合計	782	100.0%



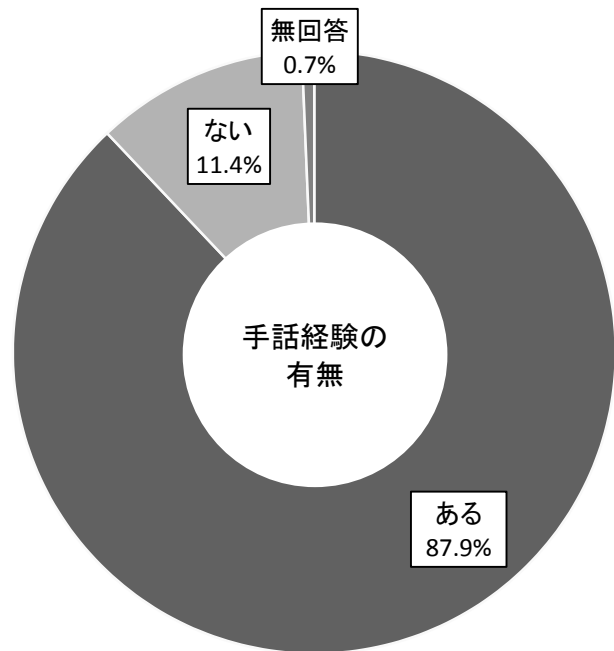
(8) 手話経験

■ 手話経験の有無

手話でのコミュニケーション経験が「ある」人は87.9%

図表 2-2-17 手話経験の有無

	人数	割合
ある	1473	87.9%
ない	191	11.4%
無回答	11	0.7%
合計	1675	100.0%



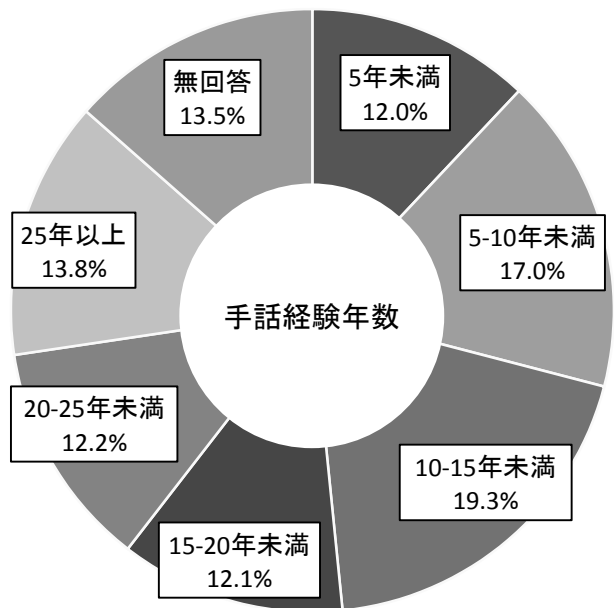
■ 手話経験年数

手話経験がある人のうち「10-15年未満」が最も多く19.3%

・次いで、「5-10年未満」17.0%となっている。

図表 2-2-18 手話経験年数

	人数	割合
5年未満	177	12.0%
5-10年未満	251	17.0%
10-15年未満	285	19.3%
15-20年未満	178	12.1%
20-25年未満	179	12.2%
25年以上	204	13.8%
無回答	199	13.5%
合計	1473	100.0%



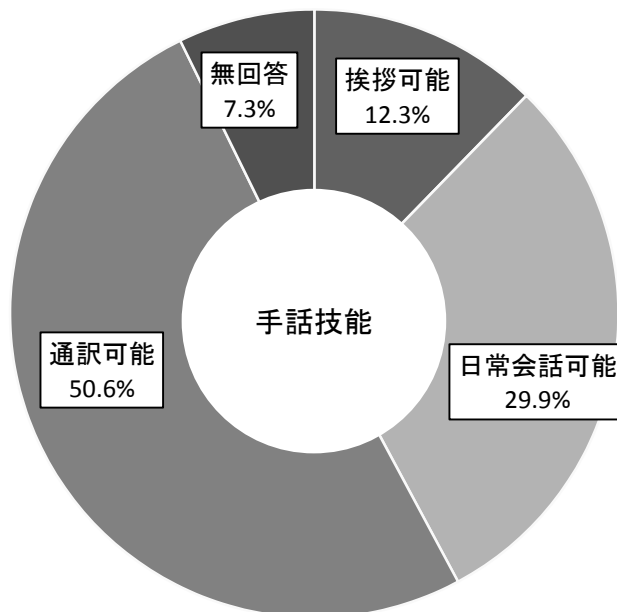
■ 手話技能

手話経験がある人の手話技能は、「通訳可能」とする人が最も多く 50.6%

・次いで、「日常会話可能」 29.9%となっている。

図表 2-2-19 手話技能

	人数	割合
挨拶可能	181	12.3%
日常会話可能	440	29.9%
通訳可能	745	50.6%
無回答	107	7.3%
合計	1473	100.0%



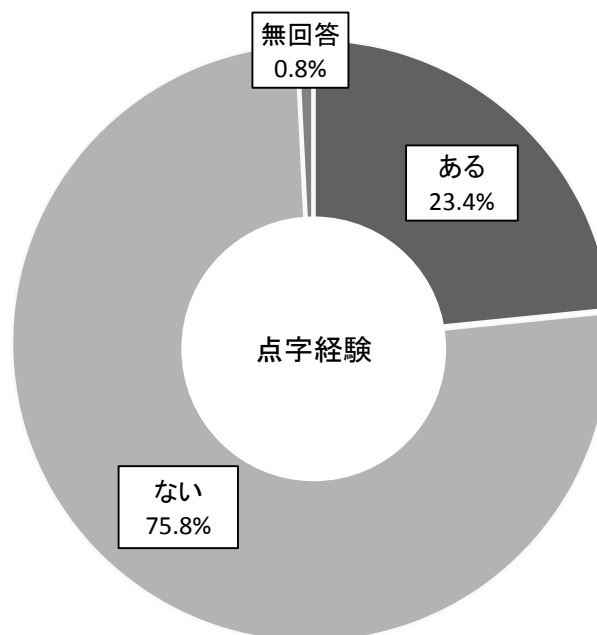
(9) 点字経験

■ 点字経験の有無

点字経験が「ある」人は 23.4%

図表 2-2-20 点字経験の有無

	人数	割合
ある	392	23.4%
ない	1270	75.8%
無回答	13	0.8%
合計	1675	100.0%

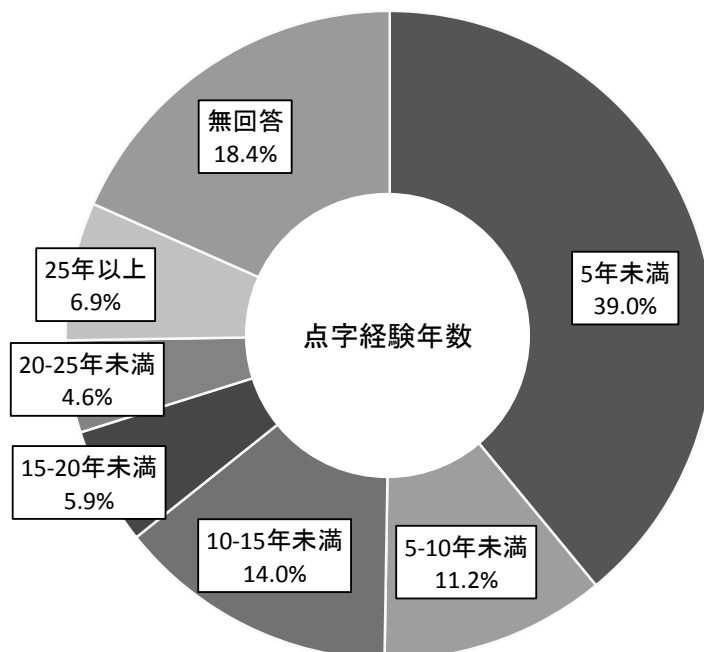


■ 点字経験年数

点字経験がある人のうち「5年未満」の人が最も多く39.0%

図表 2-2-21 点字経験年数

	人数	割合
5年未満	153	39.0%
5-10年未満	44	11.2%
10-15年未満	55	14.0%
15-20年未満	23	5.9%
20-25年未満	18	4.6%
25年以上	27	6.9%
無回答	72	18.4%
合計	392	100.0%



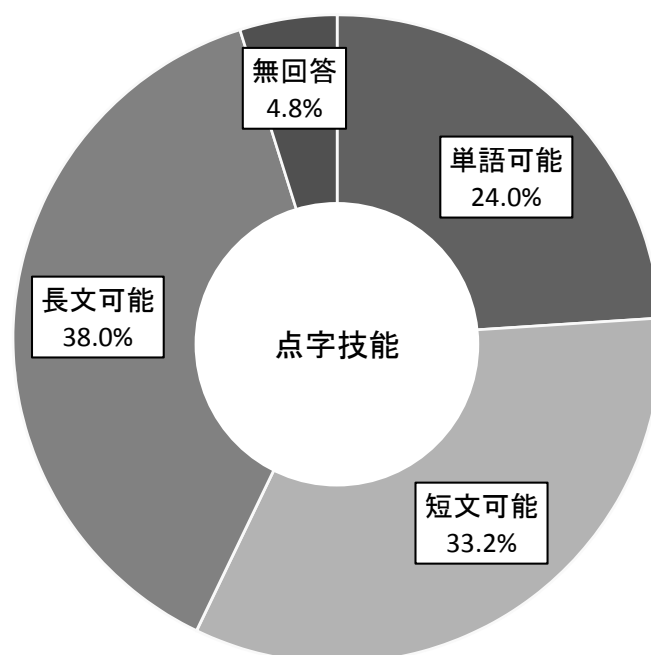
■ 点字技能

点字経験がある人の点字技能は「長文可能」とする人が最も多く38.0%

・次いで、「短文可能」33.2%となっている。

図表 2-2-22 点字技能

	人数	割合
単語可能	94	24.0%
短文可能	130	33.2%
長文可能	149	38.0%
無回答	19	4.8%
合計	392	100.0%



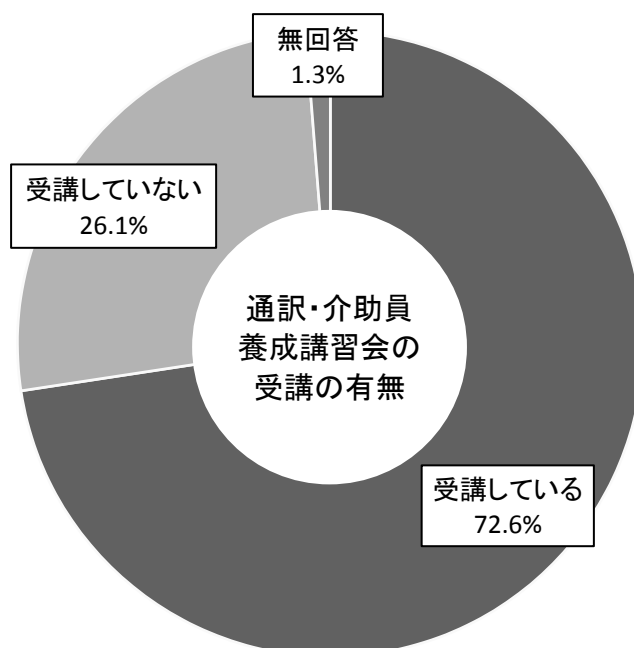
2. 通訳・介助に関する学習状況

(1) 通訳・介助員養成講習会の受講状況

■ 通訳・介助員養成講習会の受講の有無
 養成講習会を「受講している」人は72.6%

図表 2-2-23 通訳・介助員養成講習会の受講の有無

	人数	割合
受講している	1216	72.6%
受講していない	438	26.1%
無回答	21	1.3%
合計	1675	100.0%

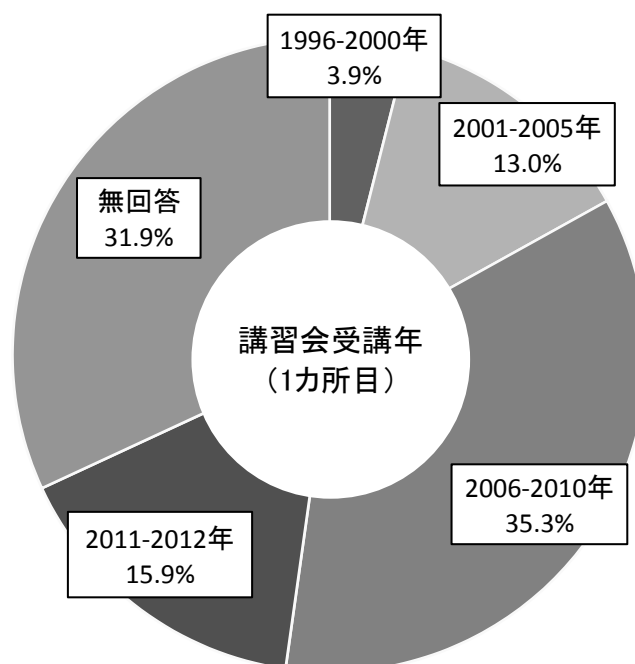


■ 講習会受講年（1カ所目）

講習会を受講した人のうち「2006-2010年」に受講した人が最も多く35.3%

図表 2-2-24 講習会受講年（1カ所目）

	人数	割合
1996-2000年	48	3.9%
2001-2005年	158	13.0%
2006-2010年	429	35.3%
2011-2012年	193	15.9%
無回答	388	31.9%
合計	1216	100.0%

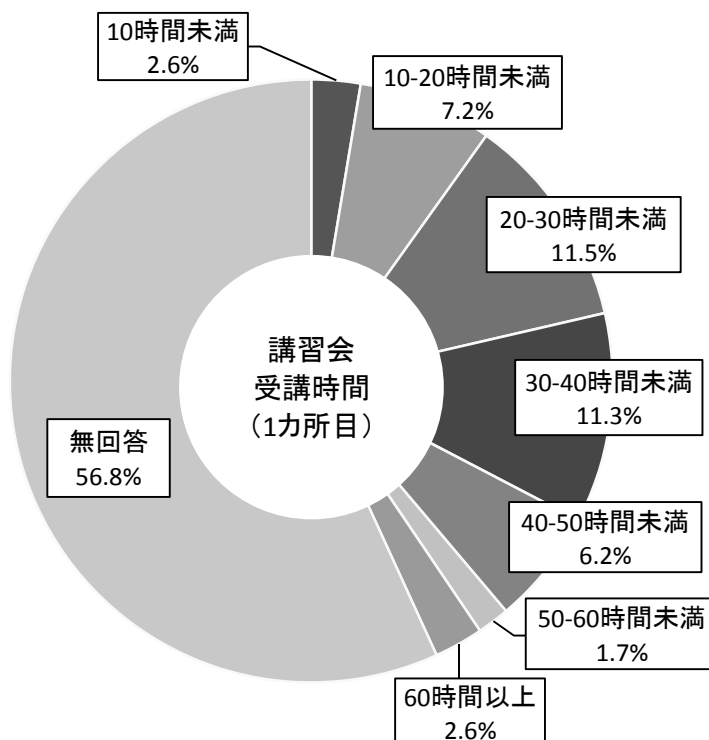


■ 講習会受講時間（1カ所目）

講習会を受講した人の受講時間は「20-30時間未満」が最も多く11.5%

図表 2-2-25 講習会受講時間（1カ所目）

	人数	割合
10時間未満	32	2.6%
10-20時間未満	88	7.2%
20-30時間未満	140	11.5%
30-40時間未満	137	11.3%
40-50時間未満	75	6.2%
50-60時間未満	21	1.7%
60時間以上	32	2.6%
無回答	691	56.8%
合計	1216	100.0%



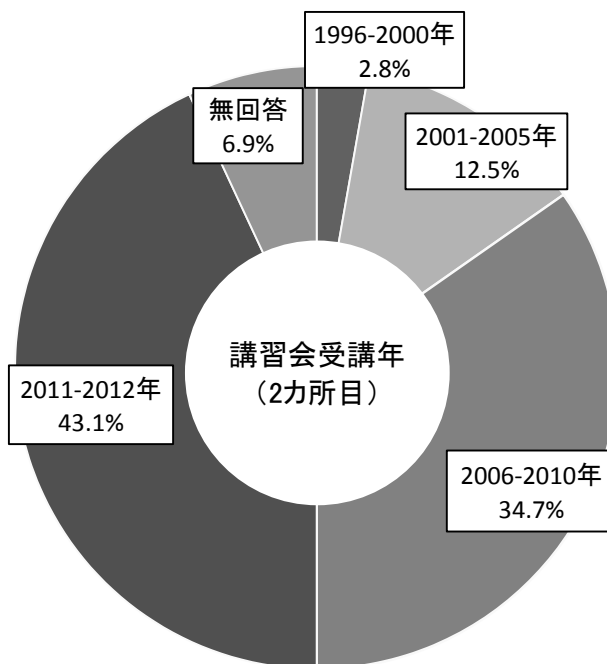
■ 講習会受講年（2カ所目）

複数の養成研修を受講した人のうち2カ所目は「2011-2012年」に受講した人が最も多く43.1%

・次いで、「2006-2010年」34.7%となっている。

図表 2-2-26 講習会受講年（2カ所目）

	人数	割合
1996-2000年	2	2.8%
2001-2005年	9	12.5%
2006-2010年	25	34.7%
2011-2012年	31	43.1%
無回答	5	6.9%
合計	72	100.0%

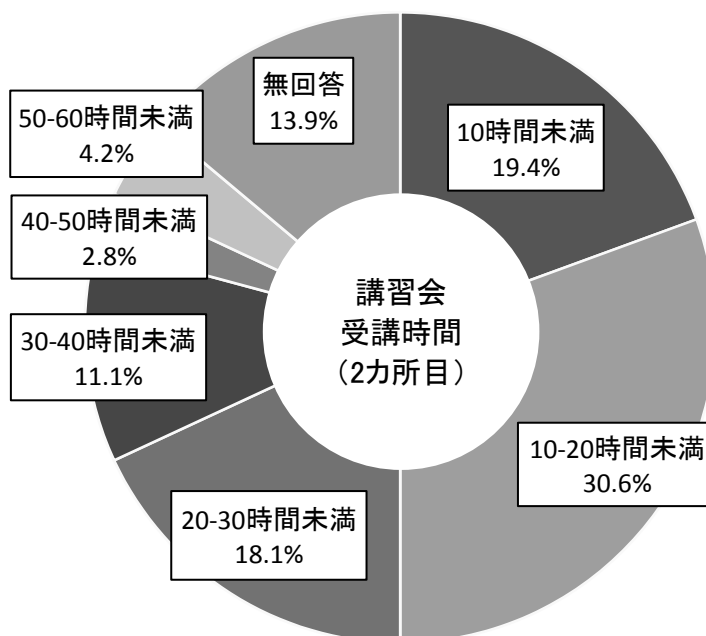


■ 講習会受講時間（2カ所目）

複数の養成研修を受講した人のうち2カ所目の受講時間は「10-20時間未満」が最も多く30.6%

図表 2-2-27 講習会受講時間（2カ所目）

	人数	割合
10時間未満	14	19.4%
10-20時間未満	22	30.6%
20-30時間未満	13	18.1%
30-40時間未満	8	11.1%
40-50時間未満	2	2.8%
50-60時間未満	3	4.2%
60時間以上	0	0.0%
無回答	10	13.9%
合計	72	100.0%



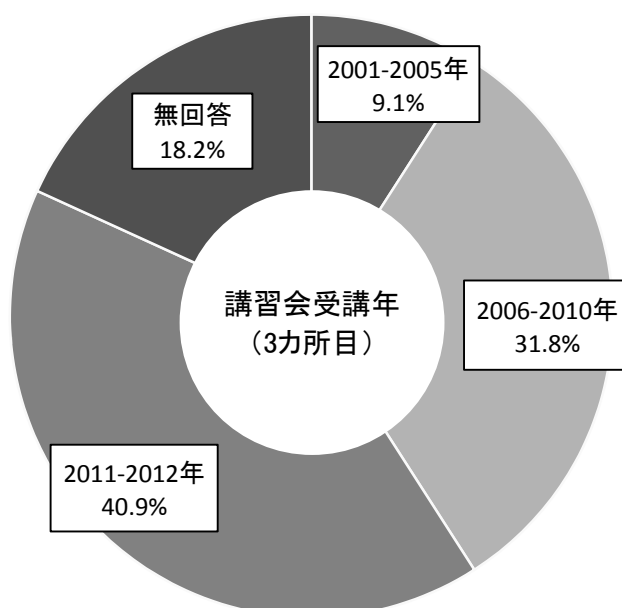
■ 講習会受講年（3カ所目）

複数の養成研修を受講した人のうち3カ所目は「2011-2012年」に受講した人が最も多く40.9%

・次いで、「2006-2010年」31.8%となっている。

図表 2-2-28 講習会受講年（3カ所目）

	人数	割合
1996-2000年	0	0.0%
2001-2005年	2	9.1%
2006-2010年	7	31.8%
2011-2012年	9	40.9%
無回答	4	18.2%
合計	22	100.0%

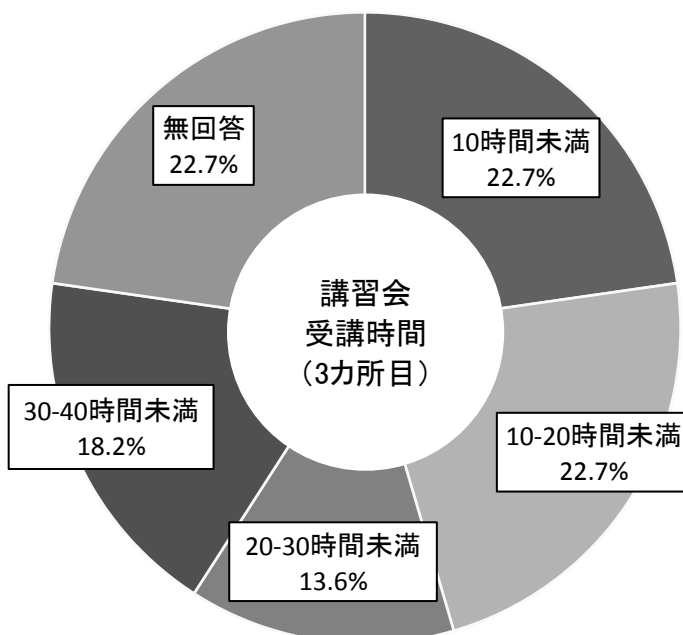


■ 講習会受講時間（3カ所目）

複数の養成研修を受講した人のうち3カ所目の受講時間は「10時間未満」「10-20時間未満」が最も多く22.7%

図表 2-2-29 講習会受講時間（3カ所目）

	人数	割合
10時間未満	5	22.7%
10-20時間未満	5	22.7%
20-30時間未満	3	13.6%
30-40時間未満	4	18.2%
40-50時間未満	0	2.8%
50-60時間未満	0	4.2%
60時間以上	0	0.0%
無回答	5	22.7%
合計	22	100.0%



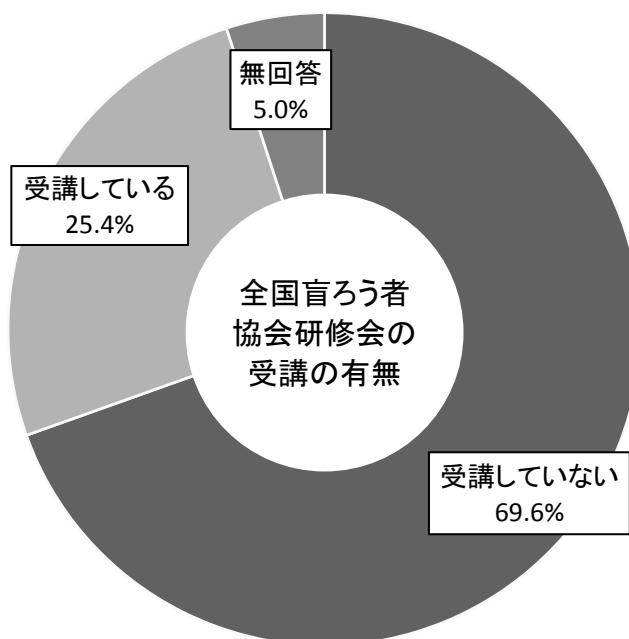
(2) 機関・団体主催の研修会の受講状況

■ 全国盲ろう者協会研修会の受講の有無

全国盲ろう者協会研修会を「受講している」人は25.4%

図表 2-2-30 全国盲ろう者協会研修会の受講の有無

	人数	割合
受講していない	1165	69.6%
受講している	426	25.4%
無回答	84	5.0%
合計	1675	100.0%

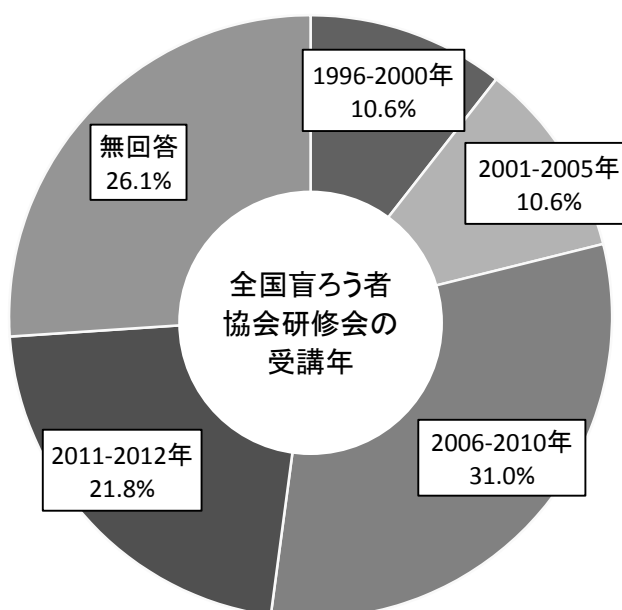


■ 全国盲ろう者協会研修会の受講年

全国盲ろう者協会研修会を受講した人の中では「2006-2010年」が最も多く31.0%

図表 2-2-31 全国盲ろう者協会研修会の受講年

	人数	割合
1996-2000年	45	10.6%
2001-2005年	45	10.6%
2006-2010年	132	31.0%
2011-2012年	93	21.8%
無回答	111	26.1%
合計	426	100.0%

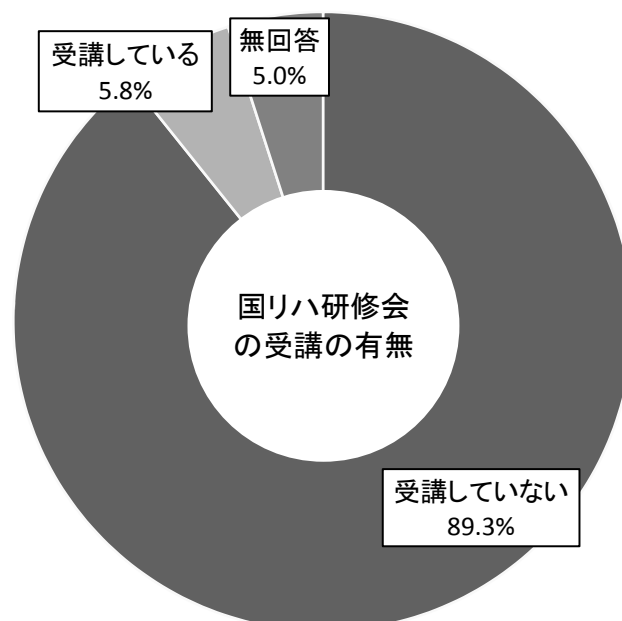


■ 国立障害者リハビリテーションセンター学院研修会の受講の有無

国立障害者リハビリテーションセンター学院研修会を「受講している」人は5.8%

図表 2-2-32 国立障害者リハビリテーションセンター学院研修会の受講の有無

	人数	割合
受講していない	1495	89.3%
受講している	97	5.8%
無回答	83	5.0%
合計	1675	100.0%



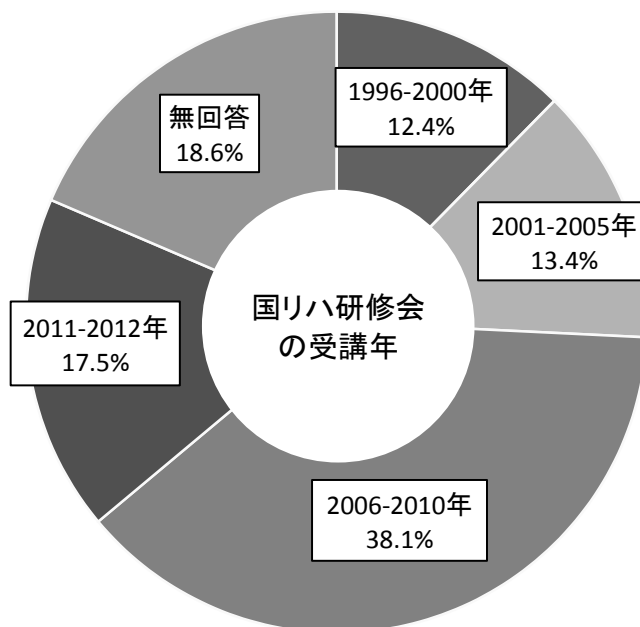
■ 国立障害者リハビリテーションセンター学院研修会の受講年

国立障害者リハビリテーションセンター学院研修会を受講した人のうち「2006-2010年」に受講した人が最も多く 38.1%

・次いで、「2011-2012年」17.5%、「2001-2005年」13.4%となっている。

図表 2-2-33 国立障害者リハビリテーションセンター学院研修会の受講年

	人数	割合
1996-2000	12	12.4%
2001-2005	13	13.4%
2006-2010	37	38.1%
2011-2012	17	17.5%
無回答	18	18.6%
合計	97	100.0%



(3) コミュニケーション方法の習得状況

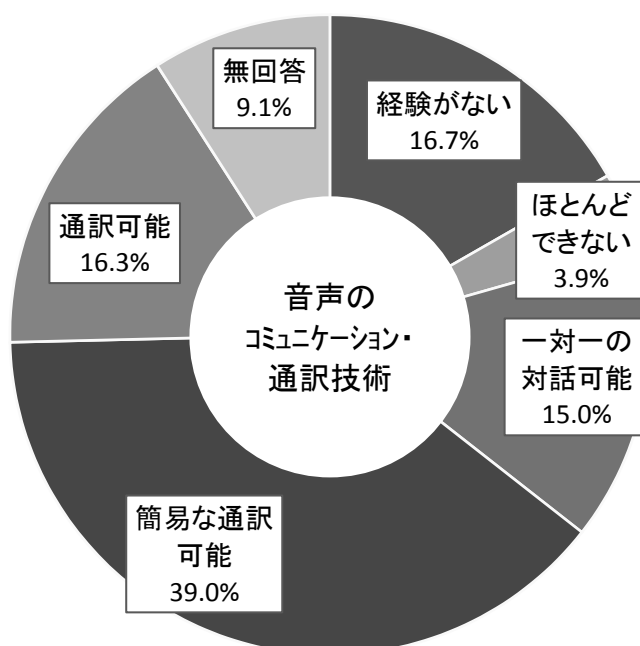
■ 音声（聴覚）のコミュニケーション・通訳技術

「簡易な通訳可能」とする人が最も多く 39.0%

・次いで、「経験がない」16.7%、「通訳可能」16.3%となっている。

図表 2-2-34 音声（聴覚）のコミュニケーション・通訳技術

	人数	割合
経験がない	280	16.7%
ほとんどできない	65	3.9%
一対一の対話可能	251	15.0%
簡易な通訳可能	654	39.0%
通訳可能	273	16.3%
無回答	152	9.1%
合計	1675	100.0%



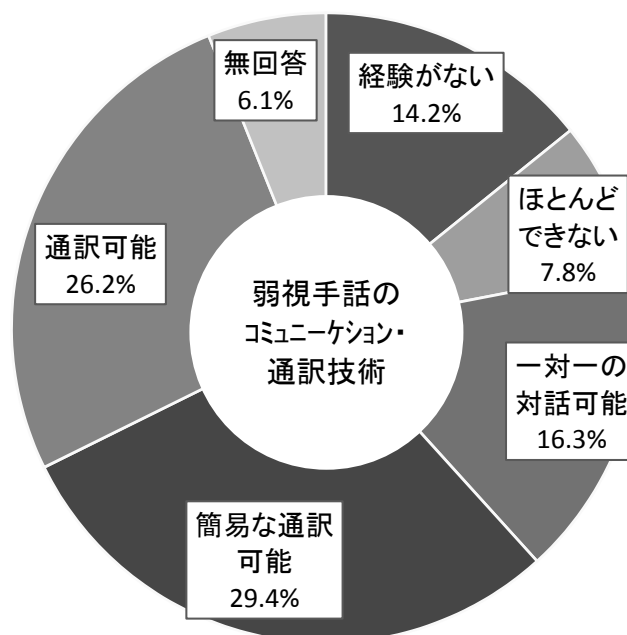
■ 弱視手話（接近手話）のコミュニケーション・通訳技術

「簡易な通訳可能」とする人が最も多く 29.4%

・次いで、「通訳可能」26.2%、「1対1の対話可能」16.3%となっている。

図表 2-2-35 弱視手話（接近手話）の
コミュニケーション・通訳技術

	人数	割合
経験がない	238	14.2%
ほとんどできない	130	7.8%
1対1の対話可能	273	16.3%
簡易な通訳可能	493	29.4%
通訳可能	439	26.2%
無回答	102	6.1%
合計	1675	100.0%



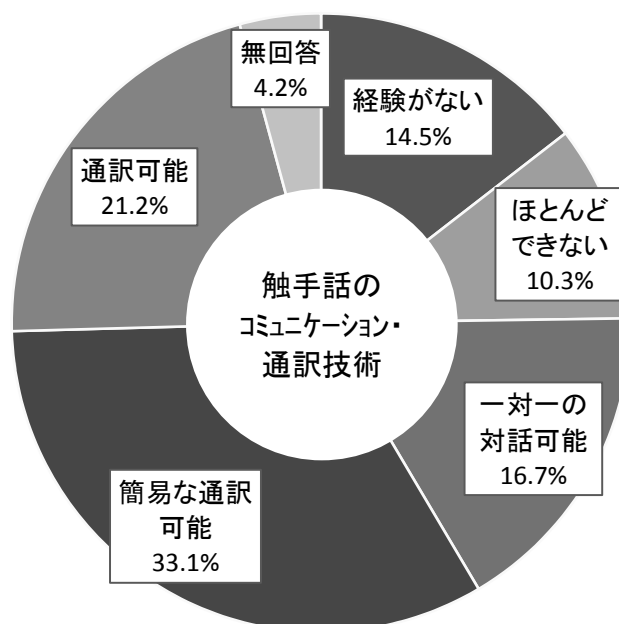
■ 触手話（触読手話）のコミュニケーション・通訳技術

「簡易な通訳可能」とする人が最も多く 33.1%

・次いで、「通訳可能」21.2%、「1対1の対話可能」16.7%となっている。

図表 2-2-36 触手話（触読手話）の
コミュニケーション・通訳技術

	人数	割合
経験がない	243	14.5%
ほとんどできない	172	10.3%
1対1の対話可能	280	16.7%
簡易な通訳可能	554	33.1%
通訳可能	355	21.2%
無回答	71	4.2%
合計	1675	100.0%



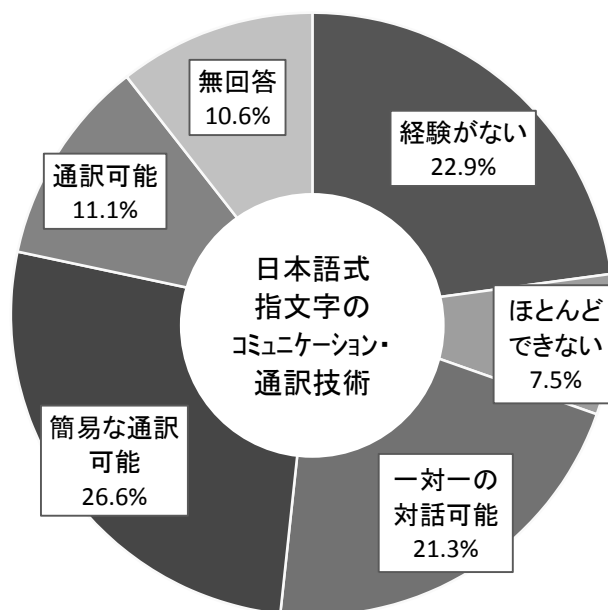
■ 日本語式指文字のコミュニケーション・通訳技術

「簡易な通訳可能」とする人が最も多く 26.6%

・次いで、「経験がない」22.9%、「1対1の対話可能」21.3%となっている。

図表 2-2-37 日本語式指文字の
コミュニケーション・通訳技術

	人数	割合
経験がない	383	22.9%
ほとんどできない	126	7.5%
1対1の対話可能	357	21.3%
簡易な通訳可能	446	26.6%
通訳可能	186	11.1%
無回答	177	10.6%
合計	1675	100.0%



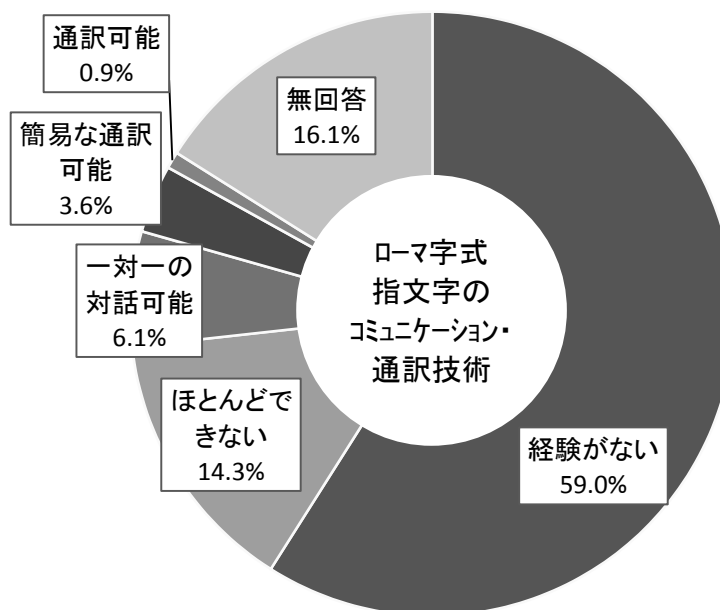
■ ローマ字式指文字のコミュニケーション・通訳技術

「経験がない」とする人が最も多く 59.0%

・次いで、「ほとんどできない」14.3%、「1対1の対話可能」6.1%となっている。

図表 2-2-38 ローマ字式指文字の
コミュニケーション・通訳技術

	人数	割合
経験がない	988	59.0%
ほとんどできない	239	14.3%
1対1の対話可能	103	6.1%
簡易な通訳可能	61	3.6%
通訳可能	15	0.9%
無回答	269	16.1%
合計	1675	100.0%



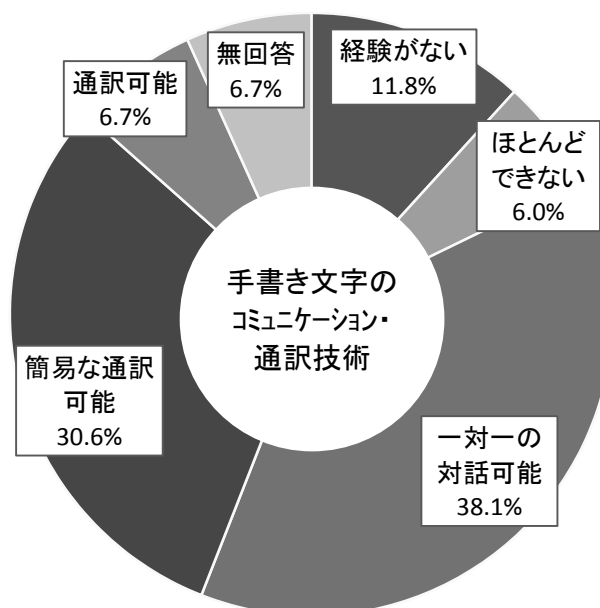
■ 手書き文字（てのひら書き）のコミュニケーション・通訳技術

「1対1の通訳可能」とする人が最も多く 38.1%

・次いで、「簡易な通訳可能」30.6%、「経験がない」11.8%となっている。

図表 2-2-39 手書き文字（てのひら書き）
のコミュニケーション・通訳技術

	人数	割合
経験がない	197	11.8%
ほとんどできない	101	6.0%
一対一の対話可能	639	38.1%
簡易な通訳可能	513	30.6%
通訳可能	112	6.7%
無回答	113	6.7%
合計	1675	100.0%



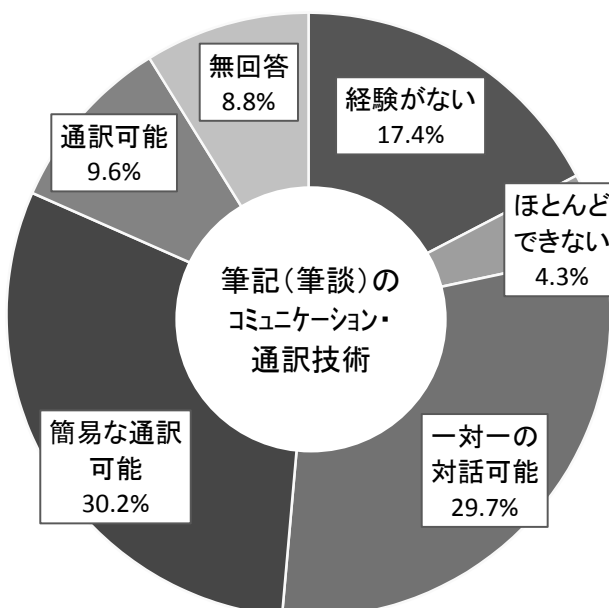
■ 筆記（筆談）のコミュニケーション・通訳技術

「簡易な通訳可能」とする人が最も多く 30.2%

・次いで、「1対1の対話可能」29.7%、「経験がない」17.4%となっている。

図表 2-2-40 筆記（筆談）の
コミュニケーション・通訳技術

	人数	割合
経験がない	291	17.4%
ほとんどできない	72	4.3%
一対一の対話可能	498	29.7%
簡易な通訳可能	506	30.2%
通訳可能	160	9.6%
無回答	148	8.8%
合計	1675	100.0%



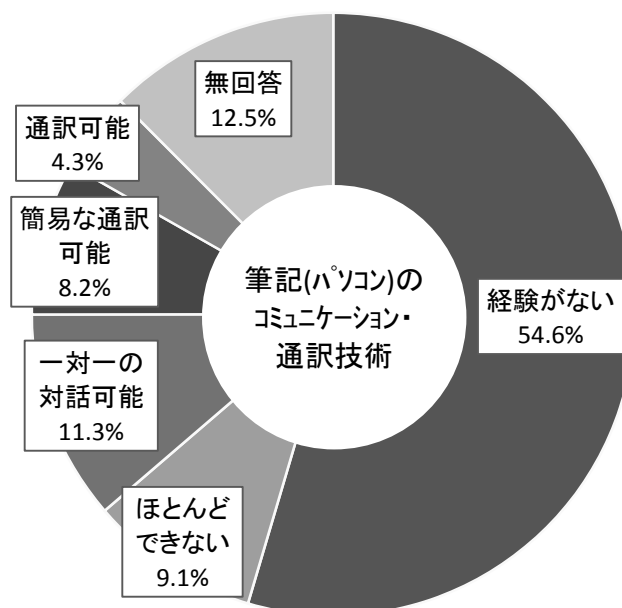
■ 筆記（パソコン）のコミュニケーション・通訳技術

「経験がない」とする人が最も多く 54.6%

・次いで、「1対1の対話可能」11.3%、「ほとんどできない」9.1%となっている。

図表 2-2-41 筆記（パソコン）の
コミュニケーション・通訳技術

	人数	割合
経験がない	914	54.6%
ほとんどできない	153	9.1%
1対1の対話可能	189	11.3%
簡易な通訳可能	138	8.2%
通訳可能	72	4.3%
無回答	209	12.5%
合計	1675	100.0%



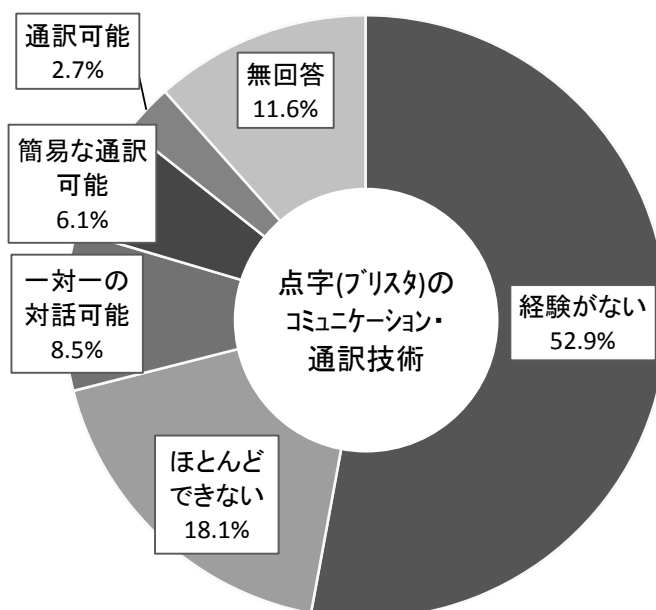
■ 点字（ブリスト）のコミュニケーション・通訳技術

「経験がない」とする人が最も多く 52.9%

・次いで、「ほとんどできない」18.1%、「1対1の対話可能」8.5%となっている。

図表 2-2-42 点字（ブリスト）の
コミュニケーション・通訳技術

	人数	割合
経験がない	886	52.9%
ほとんどできない	304	18.1%
1対1の対話可能	143	8.5%
簡易な通訳可能	102	6.1%
通訳可能	46	2.7%
無回答	194	11.6%
合計	1675	100.0%



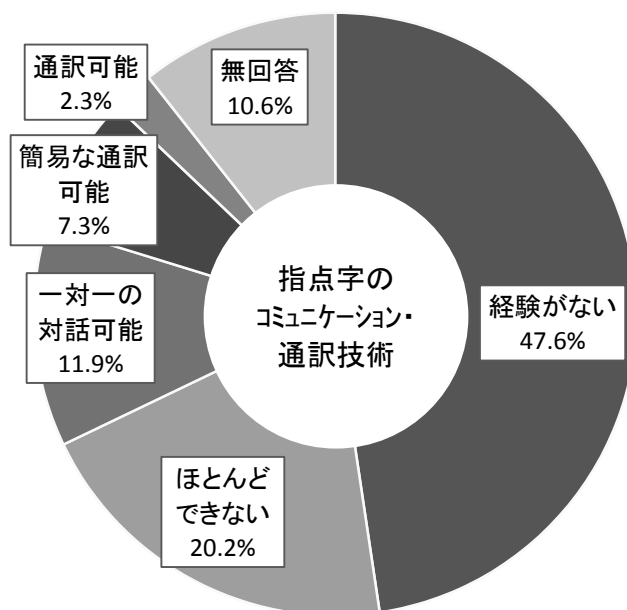
■ 指点字のコミュニケーション・通訳技術

「経験がない」とする人が最も多く 47.6%

・次いで、「ほとんどできない」20.2%、「1対1の対話可能」11.9%となっている。

図表 2-2-43 指点字のコミュニケーション・通訳技術

	人数	割合
経験がない	798	47.6%
ほとんどできない	339	20.2%
1対1の対話可能	199	11.9%
簡易な通訳可能	123	7.3%
通訳可能	38	2.3%
無回答	178	10.6%
合計	1675	100.0%



(4) 通訳・介助員養成講習会の受講により習得したコミュニケーション方法

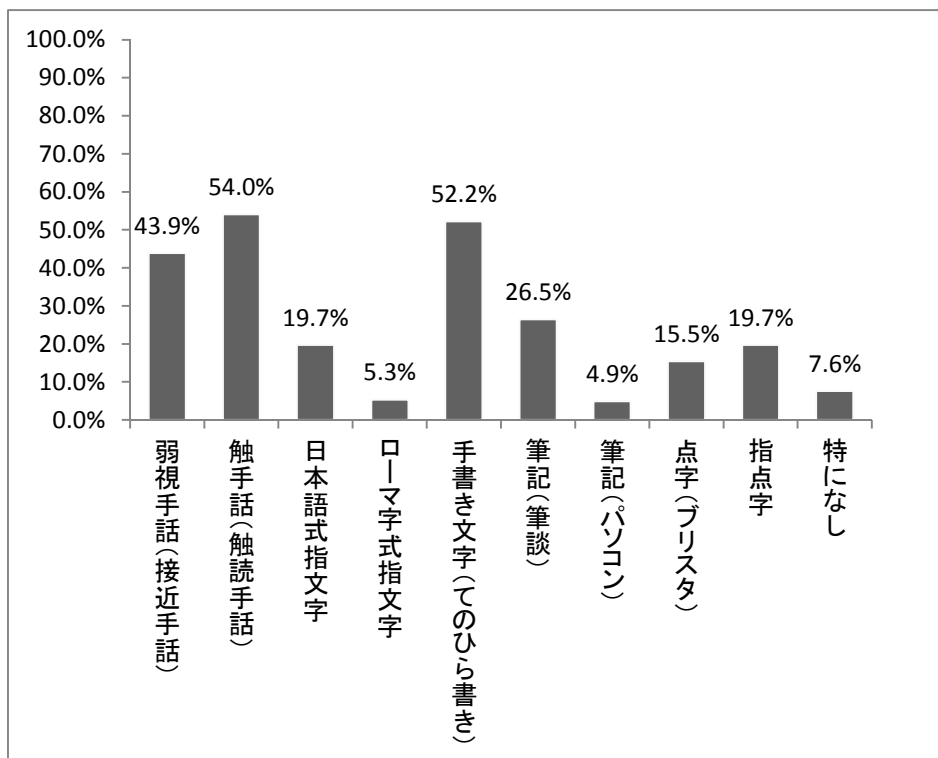
■ 講習会で習得したコミュニケーション方法

「触手話」が最も多く 54.0%

- ・次いで、「手書き文字」52.2%、「弱視手話」43.9%となっている。
- ・「筆記（パソコン）」が最も低く 4.9%となっている。

図表 2-2-44 講習会で習得したコミュニケーション方法 [複数回答]

	人数	割合
弱視手話（接近手話）	534	43.9%
触手話（触読手話）	657	54.0%
日本語式指文字	240	19.7%
ローマ字式指文字	65	5.3%
手書き文字（てのひら書き）	635	52.2%
筆記（筆談）	322	26.5%
筆記（パソコン）	60	4.9%
点字（ブリスト）	188	15.5%
指点字	240	19.7%
特になし	92	7.6%



(5) 通訳・介助員養成講習会の有用度

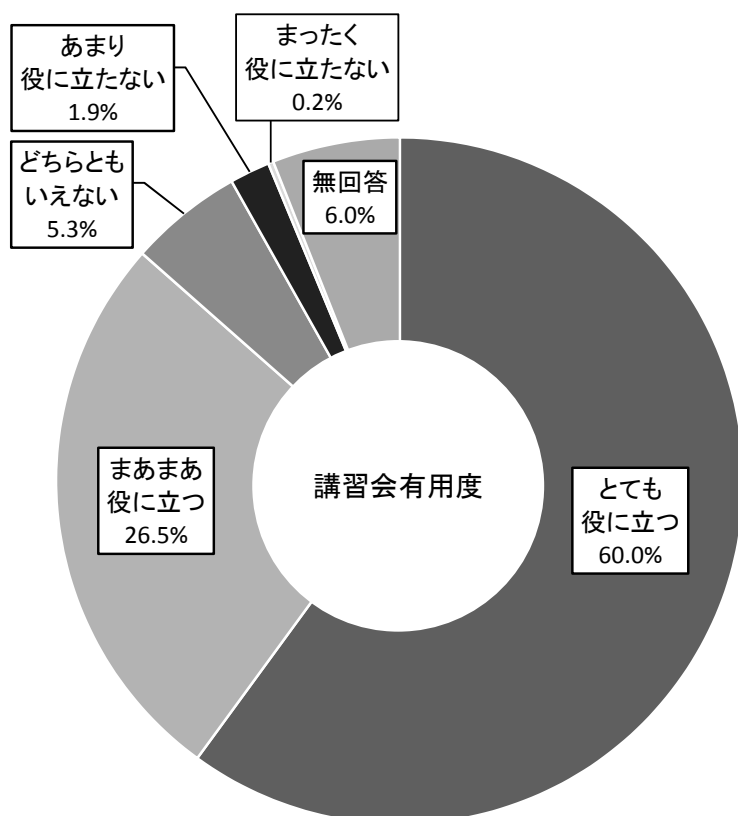
■ 講習会有用度

「とても役に立つ」とする人が最も多く 60.0%

・次いで、「まあまあ役に立つ」26.5%となっている。

図表 2-2-45 講習会有用度

	人数	割合
とても役に立つ	730	60.0%
まあまあ役に立つ	322	26.5%
どちらともいえない	65	5.3%
あまり役に立たない	23	1.9%
まったく役に立たない	3	0.2%
無回答	73	6.0%
合計	1216	100.0%



(6) 通訳・介助員養成講習への要望・ニーズ（自由回答）

①講習内容に対する要望

■ A. コミュニケーション・通訳方法

A1. コミュニケーション技法全般

- ・今までの自分のスキルレベルから、音声通訳の方法を主に学んだが（手話が登録通訳などの資格を持っていないので）、ほかの通訳方法はほとんどさわりで終わってしまった。もう少し時間をかけて、コミュニケーション方法をいろいろ学びたいと思う。
- ・手話も点字も指点字もどれも大切なのに、時間の限られた講習会で身につけるのはとても難しい。講習会で習ったことはきっかけに過ぎない。あとは努力が必要だと思った。私の地域では、毎月学習会があり、PR もなされたので、それがとても良い。
- ・実際に、通訳・介助を必要とする人のコミュニケーション方法についての講習が多いと良いと思いました。
- ・××県では音声、パソコン、筆記について時間数が少ない。
- ・触手話、手のひら書き、指点字など、もっと講習を受けたかった。
- ・手話、指点字といったコミュニケーションに触れる時間を多く作る。
- ・通訳するにはまだまだです。もう少し上達するようコミュニケーション方法全体について講習会をしてほしいです。
- ・音声、手話、点字、移動介助など、すべての時間を増やして、より多く講習するべきだと思います。全体的に時間が足りず体験のみで終わってしまい、実地で習得しなくてはいけないので危険だと思います。
- ・点字、指点字、手話の練習。
- ・具体的に、1つ1つのコミュニケーション方法について研修したい。
- ・指点字や手話の基礎をもっと採り入れてほしいです。
- ・もっとコミュニケーション方法、移動介助の講義が必要だと思います。
- ・障害別のコミュニケーション。多数の広がりのため。対応に苦勞する。
- ・コミュニケーションの講習がほんのさわりだったので、もう少し深めて講習を受けたい。
- ・基本が手話のため、点字はほとんど役に立っていない。時間がもっとあれば覚えられたかも知れないが。
- ・コミュニケーション方法をもっと勉強させてもらいたい。例えば手話も基本だけでなく、盲ろう者とあいさつ程度か対話できるくらいまで、初心者にも教えてもらいたい。
- ・手話や点字の知識があって参加するのと、まったく知らずに参加するのでは、理解するまで時間差があると思う。
- ・いろいろな盲ろう者の個性に応じたコミュニケーション方法を身につけたい。××県以外の盲ろう者と接したい。
- ・指点字や筆記（パソコン）など、盲ベースの盲ろう者にも対応できる講習も必要かと思います。
- ・いろんなコミュニケーション方法の講習が必要だと思いますが、地域によっては全然必要のないコミュニケーション方法もあります。講習の難しさを感じます。

- ・さまざまなコミュニケーション方法についての学習時間が不足していると思う。
- ・コミュニケーション保障。コミについての講義、実習時間が少ない（全部で6時間）。
- ・どれをとっても大切な学習だと思いますが、××県に住んで登録している盲ろう者のニーズに合ったカリキュラムが必要だと思います。盲ろう者がどんなコミュニケーション方法を必要としているのか、そこに時間を取ってほしいと思います。ろうベースの人には手話（接近、触読）、盲ベースの人には点字です。最近、音声の方も増えているように思いますので、音声や手書き文字も、ろうベースの方、また、中途の方には必要かと思えます。通訳・介助方法も大事ですが、介助の仕方の時間も増やしてはどうでしょうか。通訳・介助より介助を長くすることもあります。
- ・触手話、ブリストなど。できることなら、すべてのコミュニケーション方法の講義が必要だと思います。
- ・触手話、点字（ブリスト）、指点字、盲ろう者の望む通訳・介助の在り方について、もっと講習が必要。
- ・触手話は、講習期間内ではとても身につかなかった。時間数が少ない。その後の盲ろう者友の会での交流会で、やっと少し分かった。また、点字も自分で復習が大切なので、期間内ではとても時間が足りなかった。
- ・コミュニケーション方法の実習の時間が、全体的にもっと必要だと思います。
- ・自分が身につけている方法以外のコミュニケーション方法も講習したかった。まったく経験のない方法での講習は受けにくいので、何時間かカリキュラムの中に入っていると、学習に参加しやすい。
- ・コミュニケーション方法は、もともと自分が対応できる方法以外は、数回で覚えるのは難しい。
- ・経験のない人の通訳・介助員としての点字や手話（特に触手話）などの講習を強化することも、大切ではないかと思えます。
- ・1つ1つのコミュニケーション方法を、もう少し時間をかけて説明してほしい。
- ・通訳・介助、歩行の方法などは経験がないので、講習が必要だと思う。点字、指点字、手話などは短時間では無理だと思う。
- ・ろうベースの方を対象にしていることもあり、盲ベースの点字や音声通訳をもう少し学びたかった。
- ・コミュニケーション方法が多いため、経験のない手段については、まずこの講習では身につかないと思います。やはり言語手段にできるまでは時間がかかると思います。
- ・もっと1人1人の盲ろう者に合ったコミュニケーション方法（特に触手話や指点字、指文字）を熟知できるようにした方がいいと思う。
- ・××県の講習会は、指点字、点字に関する講習時間が極めて少ない。

A2. 手話

- ・手話を習得している人を対象に、接近手話や、触手話のこつを教えたらいいと思う。
- ・手話ができないので、手話を覚えたい。
- ・要約して触手話で伝える方法。共通の「省略単語」を作ってほしい。
- ・通訳・介助者の手話のレベルが低いと思います。講習時間も短く、手話だけに取り組むのは難しいと思いますが、個人での学習も必要だと思います。
- ・指文字は毎日使っていないと忘れてしまう。生活の中で使わないとどんどん忘れてしまう。サークルに入っていると良いとは思いますが、時間を見つけて仲間に入れてもらえるように、前向きにいろいろと思っている。

- ・盲ろう者自身も、手話の数を増やすことが大事だと思う。通訳・介助者も同様に、一緒に技を磨く必要があるのでは？と思う。
- ・実地研修（介助）。手話読み取り（自分が手話を話すときは、1対1の対話ではゆっくりで良いが、相手の手話が速いと読み取れない）。手話の読み取りが苦手なので、読み取りに重点を置いた講習があればありがたい。
- ・盲ろう者の介助・通訳には、手話が必要不可欠ではないかと思います。自分は点字しかできないので、それがネックとなって活動を遠慮してしまい残念です。
- ・どちらかというとい介助の方法が重点的になるが、触手話は普通の通訳よりも難しく、しっかりと学習が必要だと思います。
- ・弱視（接近）、触（触読）手話をもっと必要（私にとって）と思っています。
- ・触手話の学習時間を増やしてほしい。手話通訳経験が長くても触手話を経験することはほとんどないので。
- ・指文字の練習をもう少しやりたかった。
- ・私は指文字コースだったが、実際に通訳・介助をしてみると、手話を利用する機会が多いので、現場で戸惑うことがしばしば……。少しの時間でも良いので、手話（指文字だけでも）と触手話の形を学ぶことをカリキュラムに入れてほしい。また、行政との関係も、実際に働いてみると？が多い。もっと実態に合った内容にしてほしい。
- ・途中、失明の方が多く、やっぱり手話の方が早い。点字は通用しない。
- ・手話に関しては、講習会内で取得することは無理があるので手話独自の講習会を希望します。
- ・触手話の講習会をしてほしい。手話通訳とはまったく別の難しさがあるので、正確に伝わっているか不安になるときがある。
- ・手話をもっと行いたいと思う。
- ・もっと触手話の講習時間がほしい。
- ・触手話について、もっと時間をかける必要があると思います。
- ・ろうベースの盲ろう者向け通訳・介助の場合は、手話を使ってコミュニケーションを取れることが求められるが、養成講座の時間数ではマスターできない。
- ・接近手話などのコミュニケーション方法と手引き歩行など。
- ・盲ろう者は、特有の手話表現をされる方が多いので、その辺りを含めて読み取り力アップ、また、話してもらう上での上手な進め方（会話のタイミングの取り方）を学びたい。
- ・手話、触手話を重視すべし。応用範囲が広いし、今は当事者の方もこちらが多い。
- ・手話技術など、コミュニケーションの技術向上。資格が絶対！とは申せないとは思いますが、医療場面に資格（手話）のない方の派遣は不安です。
- ・聴覚障害者には手話が必要不可欠。手話をもっと知りたい。必要でない講習などない。
- ・接近手話の講習会の開催を望みます。（聴覚障害者を対象とした講習会）
- ・講習会では、手話はまったく教えていただかなかったので、その後、手話も勉強することになりました。手話を教えてほしかったと、つくづく思いました。
- ・触手話の学習。
- ・講習中に触手話を実際にやってみる時間が、もっと必要だと感じた。
- ・手話を勉強（独学、講習会など）してきましたが、まだまだ使いこなせるほどの語彙力がありません。手話など学べたらいいと思います（サークルなど紹介してもらいましたが、仕事があり、なか

なか行けません)。

- ・触手話を具体的にして、盲ろう者の方に分かったかどうか、分かりづらいところは何か？を言ってもらい講習がもっと必要だと思う。
- ・手話などは覚えるまでに時間がかかります。やっと挨拶程度ができて、実際に使いこなすまでに、相手に不安を与えてしまうのが心配です。
- ・手話の時間をもっと多く取れるといいと思う。

A3. 指点字

- ・指点字は経験がないが、道具がないときには有効だと思うので、別メニューでの講習会があれば良いと思う。
- ・障がいの程度が1人1人違うので、どれもとても大切な内容です。点字やブリストは、とくに若い人が積極的に勉強するのを感じます。
- ・設立されて4~5年目ですが、聴覚障害者の方は介助員の講習を受けておられますが(手話OK)、盲ろう者の通訳には、そのろう者の方に、また通訳者が付きますので、その方々に点字・指点字の講習を受けてほしいのですが、我が県では指点字勉強会(平日2時間)があるのですが、参加者なし。今、願っていることは、ろう者も指点字を覚えてほしいということです。
- ・指点字を使う盲ろう者がいないため、技術練習ができないが、講座でもっと勉強したい。地域と違う専門性を得るため、全国盲ろう者協会での研修をお願いしたい。
- ・私は手話歴4年ですが、点字の経験がまったくないまま講習を受けました。3日間の講習会に参加したのですが、点字はとても難しく、毎日練習しなければ身につけることはできないと思いました。
- ・指点字の練習をもっとやってみたかった。
- ・点字、指点字についての講習がなく、必要だと思った。
- ・点訳が凹面で学ぶため、点字(ブリスト)を使用するとき、混乱する。
- ・指点字通訳が必要な児童が誕生した。パーキンスブリーダー、ブリスト、ノートパソコン、ブレイルメモなどを使った講習会の開催が必要(点訳サークル員の講習会参加を促すなど)。
- ・ブリスト、指点字などを教えてもらいましたが、使う盲ろう者の方が見えていないし、数時間だけでは覚えきれません。それまでに覚えた手話をベースに、弱視の方や盲ろうの方とコミュニケーションをしています。
- ・県内の盲ろう者の方たちのコミュニケーション方法は、接近手話、筆記、音声がほとんどだと思います。将来まったく見えない、聞こえない、話せないという状況を踏まえて、今から点字盤のいろいろな指点字を習得した方が良いのでは……。
- ・手話についての学習は、サークルなどで第三者との交流もあり、技術を磨くことができると思いますが、点字については勉強の場が少ないので、講習会でもっと時間をとって学習できればと思っています。
- ・点字、指点字の講習時間を増やしてほしい。
- ・点字について学ぶ必要があると思う。手話通訳についても、もう少しレベルアップが必要。
- ・点字(ブリスト)は、家で練習しないと覚えられない。
- ・手話(触手話)を主とした講習会だったので、点字(指点字)などの講習を採り入れてもよかったのではと思った。
- ・簡単な点字講座をしてほしい。指点字も。

- ・時間数を増やせないのであれば、点字 50 音を覚えることは、資料を見て事前に個人学習可能であり、もっと実際の通訳・介助時に必要なルールなどの方に時間を割いてほしい。
- ・時間を少し延長し、点字の基本だけでも勉強したいと思いました。
- ・指点字は難しく、やっていないと忘れてしまいます。現在は移動介助で時間があるとき、指点字を対象者と練習します。しかし、移動介助で終わってしまうときが多いです。やはり勉強の場がほしいと思います。
- ・指点字を勉強したい（覚えたい）。
- ・点字が読める盲ろう者が増えているようですので、ブリストアの学習は必要だと思います。
- ・指点字の学習は盲ろう者と通訳・介助者双方、共に必要だと思います。
- ・指点字はもっと講習を受けたい。しかし××県の中で、盲ろう者は指点字を使ってコミュニケーションをしている人はいないようですが。
- ・ブリストア、指点字など一通りのコミュニケーション手段を実習したが、3日間で身につけるまでにはとても至らない。
- ・通訳の方法、例えばブリストア、指点字などの実技の時間をもっと取ってもらえたら嬉しい。しかし、これは各自で学習して身につけるべきでしょうか。
- ・指点字に関しては、連続した利用者との特訓的な経験がほしい。平成 25 年 3 月に指点字講習会に参加できることとなった。指点字通訳・介助ができる自信がほしいところ。
- ・接近手話は、本来、手話通訳をしていたものが役立っています。触手話も同様です。個人的には点字関係のものを学習したいと思いました。
- ・指点字はブリストアと指づかいが共通なので、講習で採り入れたら良いと思いますが、受け手になってくれる盲ろう者がいないと実現できません。当地では今のところ指点字使用者がいないので。
- ・点字（ブリストア）、指点字が必要である。
- ・指点字の講座も受講したいと思っています。
- ・指点字。家での練習が難しいため。間違っても自分で気づかないことが多いため。
- ・指点字にもう少し時間をかけてほしい。
- ・指点字は必要かと思います。講習時は覚えていましたが、使用しないと忘れてしまいます。
- ・ブリストア系の点字、指点字をもっと身近に覚えられるように普及できるようにしてほしい。パーキンズブレイラーがほしいが、8万円以上するので手に入れられない。開発してほしい。格安で手に入れられるようにしてほしいです。家でも練習したいです。
- ・指点字をじっくり学びたい（6H のみの講習しか受けて無いため）

A4. パソコン通訳

- ・パソコン通訳をやってみたいです。ブリストアで自分の口ぐせ、独り言を点訳して、皆様と一緒にコミュニケーションし、情報交換をしたいと思っています。
- ・要約は長すぎない方が良いが、必要性もよく分かっている。触手話、指点字、移動すべてにおいて、もっとノウハウを教えてほしいと思う。
- ・講習を受けて、学習会では技術を身につけていっても、現場でのパソコン通訳の依頼が、まだ××県では少なく、経験の回数を重ねることができない。公の場でも歴史のある手書きが知られているため、パソコンを知ってもらう機会が少ない。

- ・通訳の際に、パソコンなど情報化 IT 社会のものを利用できる障害者もおりますので、パソコンをコミュニケーションツールとするためにもパソコンの講習も行きつつ、日常の仕事生活においても自分のスキルアップのためにも活用し、障害者への通訳のためにも学び、資格の取得など格安にて行っていただけると良い。パソコンなどは伝達ツールにもなり、共存化社会、ノーマライゼーションを導く手がかりにもなる。
- ・パソコン筆記の講習が必要だと思いました。
- ・筆記（筆談）は、実際に受講生とともに体験したが、盲ろう者の方と交流（実体験）が必要だと思った。

A5. 音声・手書き

- ・手書き、音声については、××県は講習会において深く教えられません。手話、点字のみが盲ろう者のコミュニケーション手段と捉えられているようで、残念です。
- ・音声、指文字。
- ・会議のときの音声通訳、もっと必要です。
- ・音声通訳の講習は、実感として習っていないので、講習会でもカリキュラムに入れてほしい。
- ・音声、手のひら書きなど、比較的通訳・介助を始めやすいコミュニケーション方法について、講習の中で時間を取ってほしい。「誰でもできる」方法だ、という認識で自己流で始めがち。必要がないものはないと思うが、限られた時間の中で、ローマ字式指文字は……と思うこともある。
- ・音声の盲ろう者が増えている現状があり、もっと音声通訳の講習が必要だと思います。
- ・音声通訳は、現場を見ただけのような気がします。体験不足です。
- ・音声通訳は簡単に思えるが、実際にやってみると、話者が誰なのかを伝える方法など、ほかのコミュニケーションに比べて、周りの人にも聞こえるので配慮が必要。丁寧に学びたい。
- ・××県は音声で通訳が可能な方が多いので、その実習を多く採り入れたい。
- ・実際に音声通訳をする時間が短かったので、長く講習したかった。
- ・音声通訳に対する講習がほとんどない。盲ろう者、各々の方について聞こえ方が違うのでマニュアルは作れないと思うが、最低限必要な係り方の学習は大切だと思う。
- ・もっと音声についての講習を詳しくやってほしい。
- ・愛媛ではろうベースから始まった通訳・介助員の方が多く、盲ベースの方は少々物足りないそうです。しゃべって説明、という意味の研修がもっと必要ではないかと思います（目をつむって分かる程度の説明など）。
- ・音声通訳について、もっと実習が必要だと思います。養成講習会は、その通訳方法を身につけるといより、知るきっかけになるものだと思っています。
- ・具体的に、音声通訳のときの声量（個人で違うとは思いますが）。
- ・てのひら書きでは要約が必要なので、講習会の中で要約筆記を採り入れたらいいと思う。
- ・手のひら書き。講習を受けたらできると思う。強さ、大きさ、かな、ひらがな、漢字などを上手に使って通訳ができれば、筆記以外にも通訳活動が広がると思います。

A6. 通訳技術

- ・音声通訳、手書きのときの内容をスムーズに伝える方法。触手話で内容をスムーズに伝える方法。
- ・視覚障害者と盲ろう者の方が一緒にいらした場合は、残存する聴力による音声の通訳をしていると、

「声を出さないで指点字か手書き文字で」と言われ、通訳スピードが間に合いません。視覚障害者と聴覚障害者と盲ろう者の方が一緒にいる席での通訳に関する講習を受けたいです。また、高齢者になると指の感覚もあまりなくなってくると言われているので、盲ろう者の受信能力の差を埋めるための通訳者側の技術も知りたいです。

- ・場面に合わせた通訳のやり方（例：会議、大会、個人的なこと）。
- ・個々の対応の仕方に違いが結構あるので、その辺りをもう少し具体的に学ぶ必要がある。これは、活動の中でおいおい身につけていくことでしょうか？
- ・通訳の在り方や通訳技術の習得に力を入れていただきたいと思います。通訳・介助者の数が足りないで、即戦力になる人の養成が必要だと思います。
- ・盲ろう者の個々に合わせた通訳・介助の技術を、もっと時間をかけて学ぶことが必要だと思う。講習は必要でないものはないと思う。音声通訳の方法をもっと企画してほしい。
- ・介助中の状況説明（触手話通訳時）。
- ・状況説明の実技に力を入れてほしい。
- ・言葉の通訳だけでなく、状況説明をすることの必要性を教えてほしい。周りが今どんな状況かによって、自分の発言も違ってくこともある。
- ・通訳者として注意すること。状況説明。
- ・状況説明についてもっと学びたいと思いました。例えば、映像を流しながら、室内でやってみるなど……。健常者は無意識のうちに周辺の状況をキャッチし、さまざまな情報を選択したり、判断したりしているので、いざ、ほかの人に情報として提供する際には戸惑ってしまうものです。講習時間自体が足りないと感じています。そのため、不要な内容は思い当たりません。
- ・状況説明の時間を増やしてほしい。
- ・状況説明に関する項目。点字通訳では指点字、プリスタが主な講習内容になっていますが、パソコンによる通訳も比較的簡単に入れると思います。
- ・情報保障。状況説明の要領などの講義、自習時間が少ない。
- ・状況説明も十分講習で身につけられると良い。
- ・それまで盲ろう者の方と接した経験もない中での受講でしたので、どれもあまり理解できたとは思えない。「盲ろう」という障害について、具体的な経験、体験もしながら、もっと勉強できていたらよかったと思う。状況説明の大切さは通訳を始めてから思い至ったが、もっとロールプレイなどで経験できていればよかったと思う。
- ・個々の障害に合った通訳・介助で、相づちや状況説明の仕方も大事だと思う
- ・介助や状況通訳がうまくできていないので、もっと学習したい。

■ B. 実技・実習・演習

B1. 実技

- ・もっと実習が必要。
- ・通訳方法、介助方法などの講習会を増やしてほしいです。机の上の勉強だけでは、上達は難しいと思います。
- ・実技の時間をもっと増やした方が良いと思う。経験が少ない通訳・介助者が不安になり、盲ろう者に伝わるような気がする。

- ・体験実習を多くする必要があるのでは？
- ・実技が少なかったように思います。
- ・講義は大変役に立った。もっと実習時間があるといいと思いました。
- ・もう少し実践が必要だと思いました。
- ・具体的実習と検証ができる内容があればいいと思う。
- ・もっと必要なものとしては、通訳方法、技術向上、介助方法、現場実習。必要ないものはないと思う。時間が足りないぐらいだと思う。
- ・もっと実習の時間があっても良いかな？と思いました。また、すべてのコミュニケーション方法を身につけることは不可能なので、方法別に講習があると良いと思いました。××県では初心者と経験者が同一工程の通訳・介助を受けていますが、通訳・介助者からの情報もほしかったと思います。
- ・実技・実習がもう少しほしい。
- ・実技の時間がもっと必要と感じました。
- ・実践的な講習。
- ・座学よりも実技の時間を増やしてほしいです。講習会を受講する以前での通訳技術の差が激しいので、講習会を受けた後、未経験の人間でも何か1つ、通訳・介助方法に自信が持てるような内容にできたらというのが理想です。
- ・友の会主催の勉強会、交流会でさらに勉強を積めたので、講習会が不十分だとは感じなかったが、そういう場がなかったらと考えると、全体的に時間が不十分であったと思う。内容という点では、実地訓練がたくさんあるといい（実際の通訳・介助場面、外出介助、会議通訳など）
- ・触手話や手引きの実技。
- ・講習会では説明が多く、もっと実践的にやらせてもらいたかったのと、現在活動中の通訳・介助者の話やアドバイスを聞きたいです。
- ・実技。できれば1対1。
- ・実技の時間が少ない。実際に関わりを持ってから得る内容も多々ある。
- ・シャドーイングの練習、実践をもっとしたい。
- ・同行体験、コミュニケーション実技。
- ・机上の学習を減らしても良いのでは？その時間をさまざまな場面経験にあてて、自分自身の特性や傾向を認識できれば良いのでは？
- ・実技はどのコミュニケーション方法でも、とても大切だと思います。また、通訳・介助者としての倫理も、もっと必要では？
- ・実技の時間が少ないので増やしてほしい。特に、コミュニケーション方法、手話、点字、指点字、手書き。
- ・実習時間が少ない。
- ・何よりも実践（実習）して、ビデオで撮ったものを見て検証することが大事。
- ・実践の時間が少ないです。コミュニケーション方法にしても、通訳・介助についても、ほとんど講義で、実際に体験する時間が少ないのではないかと思います。
- ・実技体験の実習時間が、もう少しあれば良いと思いました。
- ・全般的に実習を多く。
- ・短期間なので、実践的な講習が少ない。もっとやってほしい。
- ・実習、交流。

- ・実習が一番重要ではないかと思います（社会福祉制度を除いて、点字と手話の講習が必要。不必要な点は、現任研修の実施です）。養成講習会を受講しても、あまり役に立たないと思います。ペーパー講習より、通訳・介助の実習時間を多く取った方が役に立つと思います。登録する前に、通訳・介助員向きか、不向きか体験してみないと分からないものです。
- ・机上の勉強ももちろん大切ですが、実習を増やし、実際にやってみて分かることを経験する機会が増えれば良いと思います（外出介助や会議などでの通訳・介助という設定）。
- ・実技、実習をもっと増やしてほしい。
- ・全体的に養成時間が短いのではないか？ろう者でもなく、盲者でもない、「盲ろう者」という独自の障害を正しく理解し、支援方法を習得するには、手話通訳者養成と同じくらいの養成時間をかけてほしいと思う。
- ・実技がもう少し時間数があればと思う。個々の科目も時間数不足では？実際にやってみて経験を積むことと、日ごろからの学習が大事だと思うが、受講後のフォローも大切だと思う。
- ・乗り物などの移動介助、食事の説明など、実技の時間をたくさん取ってほしかった。
- ・講義ではなく実技で、コミュニケーションを学ぶ方法が良いと思う。実技に時間をとらなければ技術は上達しないと思う。また、移動介助は時間数が少ないが大切。電車なども、××県ではまったくやっていないので必要だと思う。
- ・コミュニケーションについて、その意味と実技の時間をもっと必要だと思う。
- ・移動介助方法の実技もまったく足りない。
- ・実技も時間数を増やしてほしい。たくさんの専門技術を身につけなくてはいけない。もう少し時間数を増やしてほしい。
- ・手話、パソコン、指点字、点字、筆記など、コミュニケーション方法の講義は受けました。実際に盲ろうの人と会話をすることがほとんどなかったので、実技の時間がもう少しほしかったです。
- ・手話、点字など実習を多く入れてほしい。
- ・手話、点字、指文字（日本語、ローマ字）の実技講習は、今以上に多くの時間を確保して学習する必要があると思う。
- ・多様なコミュニケーション方法の実技演習。
- ・実技。コミュニケーション方法について、伝わる方法を習得したい。

B2. 現場実習

- ・現場実習に時間をかけてほしい。
- ・現場での実践に近い通訳練習。
- ・講習後、先輩の通訳・介助員について、実地体験をさせてもらいたかった。
- ・実際の活動現場で講習を受けたい。
- ・現場に出て役立つ内容（実習など）を多くしてほしいです。
- ・実習（現場体験）の時間が少ないと思う。
- ・現場での実践スクリーニングなどの講習を設け、実際に肌で感じてコミュニケーション方法や技術を体得しやすい講習会や、コミュニケーション方法のスキルアップのための定期講習会などの機会を設けたら、より良い人材育成の促進が図られると思う。
- ・いろいろな場での実習。
- ・実践的な内容（電車、買い物など）。

- ・ 社会生活における日常の現場講習。
- ・ いろいろな買い物場面での講習が必要だと思う。
- ・ 状況説明が難しいと感じている。

B3. 通訳・介助実習

- ・ 通訳・介助実習。
- ・ コミュニケーション別、場面別通訳・介助演習。
- ・ 実際の通訳・介助に慣れている通訳・介助者と組んで（複数ではなく、1対2で）やってみるような内容があったらいいのではないかと？ 盲ろう者と通訳・介助者の2つの視点からアドバイスできると良いと思う。
- ・ 通訳・介助している様子を見てもらい、改善点などの意見を言ってもらったり、ベテランの通訳・介助者の通訳・介助の様子を見る場があったら良いのかも。
- ・ 技術の習得はもちろんですが、通訳実習をたくさんできる講習会が望ましい。「体験した」程度のもものでは足りない。
- ・ 状況説明、補助説明、通訳・介助員が複数いる場合のフォローの仕方。具体的な場面で想定される実習ができると良いと思います。
- ・ 通訳方法、移動介助方法。すべてに講習が必要。

B4. 疑似体験・ロールプレイ

- ・ 盲ろう者1人1人、状態が違うので、本人が希望する通訳・介助方法を積極的に出しても良いのでは？と思う。アイマスクや耳栓をしての外出(または室内)疑似体験は、とても参考になると思う。
- ・ 盲ろう者としての体験コーナーは、盲ろう者の立場、不安(気持ち)などを知るためには、とても大切だと思う。しかし、実際の問題としては、一度体験学習をしたら何回も必要ではないと思う。両者の間でコミュニケーションが取れることが大事。
- ・ 受講生自身の障害程度、コミュニケーション技術に差がある限り、不要な講習はない。ただ、××県においては「弱視疑似体験」を採り入れてほしい。
- ・ 疑似体験は絶対必要。盲ろう者の要望を聞く(生活の中で何が困るか、どう接してほしいかなど)。
- ・ 盲ろう者疑似体験で移動が必要か？慣れてからの体験は良いと思うが、コミュニケーションや概論も分からない段階で盲ろう者の体験をするのは、恐怖を与えないといっても、恐怖でしかない。体験する時期の検討が必要かもしれない。
- ・ 盲ろう者体験は大変役立った。
- ・ 盲ろう者1人1人の障害が異なるため、実践しなければ理解できないので、もっと疑似体験が必要だと感じた。
- ・ アイマスクやヘッドホンをつけての通訳・介助される側の体験は、必要だと思います。
- ・ シミュレーション、ロールプレイを増やしてほしい。
- ・ 実技(各コミュニケーション方法)とロールプレイングによる研修時間をもっと増やしてほしい。
- ・ 盲ろう者体験をしたとき、視覚聴覚以外の神経を使い、とても疲れた。盲ろう者のご苦勞が分かった。
- ・ 盲ろう者の疑似体験も必要(見え方、視野など)

B5. 盲ろう者と接する機会

- ・盲ろう者とともに話す講習（時間）を増やす。
- ・講習時に、盲ろうの方と1対1での会話がなかったので、実際に行ったときに不安を感じた。
- ・実際に盲ろう者とコミュニケーションを取る、通訳する、介助する実習の時間がもっとあったら良いと思う。盲ろう者の負担を考えると、無理かもしれないが……。
- ・盲ろう者とコミュニケーションを取る時間を多めに入れてほしい。
- ・いろんな盲ろう者に接する機会を増やすことが必要だと思う。すべてのコミュニケーション方法を習得することは難しいので、各々に合うコミュニケーション方法や、接し方を見つけられるような講習が必要かと思います。
- ・盲ろう者と会話のできる時間が多くあると良い。
- ・地域の盲ろう者と直接ふれあうことは必要だと思う。相手を知れば工夫するから。
- ・盲ろう者は、1人1人見え方も聞こえ方も違うので、いろいろな盲ろう者と接し、交流ができる体験講習がもっと必要だと思います。
- ・私が受講したときは、触手話の実践時間が短く、盲ろう者との触手話の実践はありませんでした。今は盲ろう者との実践もあるようです。
- ・盲ろう者本人と話す時間がもっとほしい。
- ・講習では、さまざまなコミュニケーション手段を持つ、当事者からの話を聞くことができよかった。また、実践もあったが、もっと時間をとってほしい。実践の中で学ぶことが大切と感じた。
- ・盲ろう者や弱視の方と直接ふれあって、話ができる場（時間）が少ない。1人1人ともっと話ができると、いい経験になると思います。
- ・1人の盲ろう者だけでなく、たくさんの盲ろう者に関わる機会がもっとあると良いと思います。
- ・盲ろう者を講師として、通訳・介助の体験をする時間数がもっと多ければ良いと思いました。通訳方法の習得は、講習会の時間内ではできないので、受講後、各々で努力して身につけると思います。講習会では、実際に盲ろう者と出会う機会を多く設け、通訳・介助活動に積極的に取り組んでいこうというモチベーションを高めるようにすれば良いのではないのでしょうか。
- ・盲ろうの人と接する機会が少ないので、講習会するとき、一緒に対応できると、いろいろな人と接することができると思います。
- ・盲ろうといっても、いろいろな方（盲ベース、ろうベース）がおられるので、それぞれの方とじっくり会話をするなど、もっと実践練習をしたかった。
- ・盲ろう者の擬似体験は必要。盲ろう者といろいろな通訳・介助方法でコミュニケーションが取れたときは、とても嬉しかったので、いろいろな通訳・介助方法を、盲ろう者と実際に体験することは大切だと思います。
- ・実際に盲ろう者と接する時間を、もっと作ってもらいたいと思う。
- ・障がい者を含め、実践的な実習。いろいろな場面を想定した実習。
- ・盲ろう者との交流が必要。実際に技術を試したり、いろいろな場面を経験したら良い。
- ・盲ろう者ともっと会話し、ふれあい、交流する時間を作ってほしい。
- ・講習会の中でも、盲ろう者の方々との交流、実技など含まれていましたが、受講生側からすると、盲ろう者への声かけなど、積極的にできにくいので、盲ろう者の方々からの声かけなどが、もっとあれば良いと思った。実技も、もう少し増やしてほしい。
- ・初対面の方との接し方を、もっと詳しく習えたいと思います。どんなことを確認すべきか、自

分の何を伝えるべきか。ケース・バイ・ケースとも思いますが、初めて車いすの方と電車を利用したとき、方法が分からず慌てました。タクシーの乗り方も心配でした。

- ・盲ろう者と交流する時間が多いと良いかも（講義で習った以上に、コミュニケーション方法や難しさを学べるので）。
- ・多くの盲ろう者との出会い。
- ・盲ろう者の方とお会いする時間があると良いと思う。家にいてもなかなか参加される方が少ない(盲ろう者)。
- ・実際に盲ろう者と関わる機会を増やしてほしいです。1人1人違ったコミュニケーション方法を体験したいです。
- ・盲ろう者とのコミュニケーションの取り方は、1人1人違うので、どの方法でコミュニケーションを取るのか、コミュニケーションが取れるようになるまでの、盲ろう者とのふれあいを多くする内容があると良いと思う。実技も多い方が良いと思う。
- ・実践編（体験）、盲ろう者との実践を多くし、ある程度慣れるまで繰り返しては？
- ・盲ろう者との交流の時間、そして先輩の通訳をしている場面をもっと見たかった。どのような情報をどういうタイミングで伝えているのかなど。
- ・実際に盲ろうの方と接して通訳をする機会。
- ・盲ろう者と直接話したり、実際に外に出てガイドすることが必要。
- ・あまりに短時間であった。盲ろう者との交流体験がもっとあると良い。
- ・当事者の私生活をDVDなどで見せていただき、困っていることや自分でできることなどを学びたい。また、当事者の声を聞きたい。
- ・盲ろう者との交流をもっと体験したかったが、受講してよかった。

B6. 移動介助

- ・バスや電車の乗降体験が必要。
- ・移動介助方法の指導時間が、もっとあっても良いのではと思います。
- ・移動介助の時間。実習不足、スキルアップの必要性、現場での実施上のスキルの問題（連携など）、もともと資質的に、通訳・介助員に向いていない人も多くいる。
- ・移動介助の実習や事例検討の時間が、もっとあったら良いと思います。
- ・移動介助の体験時間をもっと多く願った。
- ・ガイドの方法、技術についてもっと時間を取ってほしい。触手話、指点字は、実際の交流で行う方が良い。
- ・移動介助について時間数を増やしてほしい。
- ・講習会では、時間数の少ない誘導介助の実践を増やしていただきたいと思いました。
- ・移動介助の講習は、もっと必要だと感じる。
- ・移動介助の講習（実技）が、もっとあると良いと思う。
- ・移動介助の実技講習の時間がもっと必要だと思う。
- ・移動介助の実習の時間をたくさん取ってほしい。即登録し、依頼を受けるのは難しい。
- ・移動介助の時間は、もっとあった方が良かった。
- ・移動介助の実習時間を増やしてほしい。（例：バス、電車など交通機関の乗り降り、エスカレーターなど）

- ・誘導介助技術について、もっと多くの時間を取るべきと思った。私自身は視覚障害リハビリテーションに関わっているので分かっているが、そうでない人は大変だったと思う。コミュニケーションの習得については時間がかかるので、終了後も勉強を続けられる場があればいいと思った。
- ・盲ろうの方を介助する実技の時間を、もっと増やしていただけたらと思います。講習時間も決まっている中で、講習会を受講する方が多ければ多いほど、指導する方たちも時間に追われてしまい、満足のいく指導が行えないと思うので、余裕を持った講習内容にしていいただければ、養成講習会が充実したものになるのではないかと思います。
- ・誘導方法など、もっと時間があれば良いと思う。日常生活の介助の方法はもっと必要だと思う。
- ・手引きの実技時間が、もっとあれば良いと思いました。
- ・移動方法についての実技時間も増やしてほしい。
- ・ガイド実習の時間が、まだとれると良い。
- ・移動介助の実習時間（車での移動、公共の乗り物などの）を増やし、注意点や気づきを学べたら良いのではないかとと思う。
- ・もっと介助についての実習や学習が必要。
- ・外出時における講習時間が少なかった。また、相手が女性・男性のときの注意点。
- ・カリキュラムの中で、必要でないと思う内容はあります。実習の時間（電車やバスに乗る外出）が、もっとあってもよかったですと思いました。
- ・移動介助。
- ・外出したときの移動の講習。
- ・手引きなど実践してもらい分かりやすかった。ただし、盲ろうの方も実体験をしてもらわないと、スムーズにできない。両方が同時に勉強できる場がほしい。
- ・移動介助の担当講師が盲聴者でした（盲ろう者の知識がない講師でした）。講義内容が、盲ろう者にそぐわない物が多く、不必要だったと思います。
- ・誘導介助、コミュニケーション方法別の支援方法や通訳方法。
- ・手引きなどの実技。障害についても、もっと詳しく知りたい。
- ・もっと移動介助の講習、触手話、指点字の講習が必要。
- ・とっさの危険状態を退避するための実習時間を多くしてほしい。
- ・実践的な行動（電車、バス、エスカレーターの乗り降り）。状況説明。
- ・屋外での実習を増やし、いろいろなコミュニケーション方法の方の通訳・介助方法を学びたい。
- ・盲ベースの人の移動。
- ・屋外での手引き介助。
- ・移動介助の講習（現場で役立つもの）が必要。駅、デパートなど、実際役立つ講習が必要（××県では、ほとんど施設内のみ講習）。
- ・もっと外出の実習が必要。
- ・××県については、視覚障害についてのガイド方法、盲ろうの疑似体験が必要。国立障害者リハビリテーションセンターの講習会では、十分勉強できた。
- ・介助方法については、具体的にもっと教えてほしいかなと思います。正直、初心者でも入りやすい分野だと思うので。××県では、点字は紹介程度だし、パソコン通訳は、学ぶ機会を別に設けてもらいました。今の講習会の内容は「盲ろう者を知ってもらうこと」がメインで、技術習得ではないので、どう捉えていくかが、まず問題かも。

- ・バスや汽車の乗降、歩行時の介助（実技）などの時間を、さらに費やした方が良いのではないかと思います。
- ・道の歩き方、エスカレーター、階段など、講師に細かく指導してもらいたい。また、当事者（盲ろう者）に、通訳・介助者との行動の中でどんなときに不安だったとか、体験談をもっと聞きたい。
- ・介助して実際に食事、街中を歩く、電車、バスに乗るなどの時間がなく、グループ（5～6人）に盲ろう者1人なので、分からないまま終了したように思う。時間不足。
- ・移動介助、特に階段の昇り降りの練習、食事介助の練習がもっと必要だと思います。
- ・乗り物の乗り降りは、もっと経験したかった（バス、電車）。エスカレーターの乗り降りのタイミングは危ないので、繰り返し練習が必要。
- ・バスや電車など乗り物での手引きで、いろいろなケースを想定して講習することが大切です。
- ・介助方法の実技。
- ・講義と実技が半々程度だったが、もっと街中の実技訓練が必要だと思う。また、養成講座が終わると学習する場があまりなく、気軽に学習できる場があれば良いと思う。
- ・介助実習を増やしてほしい。
- ・移動介助、実際の通訳・介助場面での対応の仕方。
- ・屋外での実習、交通機関を使つての実習、雪道での実習が必要。
- ・歩行介助について、いろいろ体験する講習があれば良いと思いました。
- ・移動介助の現場実習。
- ・通訳実習、移動介助実習。
- ・移動介助などの体験学習を増やし、実践に即した内容にする。
- ・移動介助に関しては、同行援護などの研修の方が役に立ったように思います（別途、同行援護のみ研修を受けて、それ以外の研修をするという意味です）。いろいろなコミュニケーションの方法がなんとかできるから「通訳」への研修があれば良いと思います。
- ・街歩き。講義後の実習をより多くしてほしい。
- ・移動介助がやはり不安です。改めて、何度も講習で実技の練習をやりたいです。
- ・講習やエレベーター、エスカレーターのサポートなどは、屋内で、ほとんど一般の人がいないところで行ったが、実際の場所（駅や店など）でのサポートの仕方も体験した方が良いと思う。
- ・介助の場合、駅の状況（バリアフリー整備の有無など）、対象者の性別、年齢、コミュニケーション手段、介助者との身長差、杖の有無など、実際に経験しないと分からないことは多くありますが、事例として具体的に整理して、養成講習会のときに少しでも学習できたら良いと思います。
- ・通訳の仕方も、質の向上のためには必要だと思いますが、利用者との外出での介助は、もっと講習があればと思います（利用者の方々の意見も採り入れて）。
- ・通訳・移動実践（技術）。
- ・公共の交通機関の実習をしてほしかった。
- ・外出しての実習。
- ・盲ろう者は1人1人状況が違うので、危険回避の具体例などをもう少しお聞きしたかった。
- ・講座で実習をします。その際、建物の中が多かったです。なるべくでしたら外での実習の回数を増やしてはどうでしょうか？（危険なものも分かれますが）
- ・階段やエスカレーターなどの昇降は必要。
- ・補助具をつけての研修で、目と耳が不自由であることの不便さがよく分かり、コミュニケーション

を取る難しさも理解できましたので、歩行介助の方法をもっと勉強、練習したいと思いました。

- ・講習会の内容はコミュニケーションの比率が高かったので、手引きについても理論と実習とも、より深く学びたかった。
- ・実際に盲ろう者を介助する実習。
- ・手話通訳者としての活動はしていたが、視覚障害についてはまったく知識がなかったので、電車の乗り降りなどをもっと教えてほしかった。
- ・介助の方法、特に乗り物やエスカレーターなどの移動の講習が、もっと必要だと思った。
- ・移動訓練をさまざまな場面・場所で行ってほしい。
- ・もっとガイド実習が必要。
- ・ガイドヘルプ。
- ・介護実習。特に、現在は電車の乗降、エスカレーターの利用がないので必ず必要。ほかにも階た差、いす、狭いところなどの実習時間不足。
- ・外での移動介助が必要だと思います。
- ・移動介助、簡単な身体介助。
- ・ろうベースかつ弱視または全盲の方に対する介助方法の練習時間の確保。
- ・移動（手引き）の面に関する研修が不十分に感じます。往来の多い場所や通路などでも立ち止まって通訳（話）に夢中になる通訳・介助員が多い。
- ・介助の実践。
- ・実際介助してみると、移動介助が最も難しいと思う。安全に安心して移動介助をするためには、経験（回数をこなす）が必要だと思う。そのため 3 日間の講習の中で、体験はしたが現場では戸惑ってしまうことも多い。
- ・外出時の介助がより必要。
- ・ガイド技術と当事者の話は必要。
- ・手引き実習を通じて、周りの状況を的確に伝える能力の向上につなげてほしい。
- ・介助技術の向上。
- ・当時は歩行の実技がなかったので、実技がほしかった。
- ・ガイドヘルパーの基本的なこと。
- ・ガイド方法をしっかりと教わりたい。
- ・移動介助。外出時の安全は、必ず覚えていなくてはと思う。信用第一です。
- ・介助のマナー、方法について具体的にはじめから講習が必要。
- ・私はコミュニケーションはまあまあと思うのですが、介助の方をもっと学びたいと思っています。
- ・移動介助の方法がもっと必要。音声による通訳・介助は、現在、対象の盲ろう者がいないが、今後のために必要。指点字によるコミュニケーションは、××県には対象の盲ろう者がいないが、今後のために必要。
- ・盲ろう者と接する際のマナー（雨のときの傘、冬の寒い中で触手話をするとき、冷たい手でも良いのか？）

B7. 事例検討

- ・事例検討。実際にたくさんの当事者と会って様子を見たり、コミュニケーションをする。
- ・事例検討の機会がほしい

- ・通訳・介助員が自分1人のことも多いので、事例検討により、対処方法を学びたい。
- ・さまざまな場面を想定した事例検討などがあれば良い、と思いました。現場に入ってから、困ることが少しでも減るかなと思います。
- ・通訳・介助場面での事例検討的なものがあれば良いと思います。さまざまな移動介助の時間が、もっと多くあれば良いと思います。
- ・介助時の対応、対処の仕方の事例をたくさんお聞きしたい。
- ・事例の場面では、モデル例も見せてほしい。
- ・事例検討、通訳・介助を行う上でのマナー、ロールプレイ。
- ・重複障害や年代層、個別な事例に対応する対処方法や事例。

■ C. 盲ろう障害以外の困難さへの対応

C1. 盲ろう児

- ・先天性盲ろう児への言語獲得の方法が必要。
- ・先天性盲ろう児への先進的制度（外国も含む）が必要。
- ・盲ろう児と遊ぶ講習。
- ・盲ろう児のコミュニケーションと、盲ろう教育について、あまり採り上げられていないので、ぜひ充実させていただきたいです。特に、先天性盲ろう児・者のコミュニケーションについては、理解が進んでいないのが現実だと思いますので、ぜひお願いします。
- ・コミュニケーションスキルを持たない盲ろう者へのアプローチ。自分で判断が難しい盲ろう者への通訳の仕方、どう引き出すかなど。
- ・盲ろう児の通訳・介助活動のための講義が足りなかった。

C2. 車いす介助

- ・コミュニケーション方法も重要だが、意外にも車いす使用者の介助ができない通訳・介助者が介助に応じて、危険な思いをした利用者さんがいたので、もっと介助方法についても実技を増やしてほしい。
- ・盲の方（視覚障害者）へのガイド方法や、車いすのガイド方法を実践的にもっと学びたかった。
- ・手話、点字に関しては養成講習だけで通訳できるようになるものではないので、こういうものだと紹介する程度でも良いと思います。一方、移動介助の実習は、もっと時間数を増やしても良いと思います。また、最近車いすの盲ろう者も増えてきていますが、車いすの実習は、なかなか受講する機会がないので、養成講習会でやるのも良いと思います。
- ・車いすの盲ろう者が増えてきています。簡単な（初歩的）車いす介助も、講習に採り入れてほしいと思います。

C3. 盲導犬

- ・××県で、盲ろう者で盲導犬を利用されている方がいますが、通訳・介助者に対しての対応、扱い方などの講習がありません。「盲導犬は杖とってください」とコーディネーターから依頼がありました。犬は生き物です。いくら訓練されているとはいえ、ときにはさまざまな動きもします。改めて講習会などを開いてほしいものです。

- ・盲導犬を連れている盲ろう者に対する対応方法と、盲導犬に対しての基本的な知識を学びたい。

C4. その他

- ・弱視、難聴、知的、そしてほかの病気を併せ持つ盲ろう者の場合、通訳というより介助が多くなります。でも、講習を受けて今まで知らなかったこと（ちょっと違った世界のような）を知ることができてよかったです。
- ・盲ろう者はすべての方が同じ障害ではないため、盲ろう者に合った講習が必要。そのほかにも、盲ろうのほかに精神障害が加わっている方がいた場合の講習も必要と考えます。
- ・高齢の盲ろう者に対する介助の方法を学びたい。

■ D. 盲ろう者の状況の理解

D1. 盲ろう者の心理面

- ・盲ろう者のメンタル面の状況や問題点などを理解した上で、通訳・介助をした方がより良い支援ができると思います。
- ・盲ろう者の心理など。

D2. 盲ろう者の体験談

- ・盲ろう者の体験談は、とても参考になった（困っていること、実際の介助でこうしてほしいということも話していただけると良い）。
- ・盲ろう者の体験談は、短時間でポイントを絞り、いろいろな方に伺いたい。
- ・私が受講したのは初年度だったため、現在とは違っています。今年度の講習会は、当事者（盲ろう者）の話があり、とてもよかったです（内容は、日ごろ思っていること、経験したこと、当事者からのお願いなど、多岐にわたる話でした）。
- ・盲ろう者（本人）の生活、経験などの直接的な講演、また体験を通してコミュニケーションの大切さを重視しての活動教育を行うことが重要と思われる。
- ・当事者の講習。生の話を聞くことで、必要性が分かったり、自分の努力でコミュニケーションが深まるのが楽しくなる。
- ・盲ろう者の体験談や生活の様子などの話が必要。
- ・盲ろう者の立場になり、通訳・介助者にされて嫌だったことを挙げ、仕事をする際に、もっとこうした方が良いなど、盲ろう者からのアドバイスや意見の講習会。以前、受けてためになったので。（例：通訳・介助者は、自分の会話やしたいことを優先せず、あくまでも担当盲ろう者を最優先するなど）

■ E. 通訳・介助業務の理解

E1. 通訳・介助員の倫理・責務

- ・盲ろう者は通訳・介助員の伝えることがすべての世界にいる。私たちの責任は大きいと言える。盲ろう者を連れまわす、意志をしっかり受けとめず、通訳・介助員側の向きへ誘導してしまうことも知らずのうちにあると思う。理念、原理をもっと学びたい。また、通訳・介助員同士が忌憚なく意

見を述べ合い、研さんしていく姿勢も養成中に身につけた方が良い。

- ・通訳倫理。
- ・盲ろう者に対する対人援助技術や、通訳・介助員の倫理を学ぶことも必要だと思う。そもそも現在の養成講座のみで、ゼロから通訳・介助の技術を身につけるのは不可能だと感じる。
- ・実技も必要だが、マナー、ルール、当事者の主体性を尊重できるような考え方を身につける講義も充実させてほしい。ブラインドベース向けの通訳者が少ないので、時間をかけて習得できる場がほしい。
- ・通訳技術とともに通訳者としての倫理、言動を厳しく講習する必要がある。通訳・介助員の質の悪さが目立つ。
- ・お世話型の通訳・介助員が増えている。自立支援に向け、盲ろう者が自己選択できる情報保障が必要とされるので、盲ろう者の心理だけでなく、サポートする側の心構えを講座に盛り込んでほしい。
- ・講習内容の9割が盲者の手引きでした。それは大切なことですが、コミュニケーション手段をもっと採り入れてほしかった。また、通訳者としてあるべき姿、してはいけないこと、しなければいけないこと、現場経験の豊富な講師からの学びや、盲ろう者自身が講師となって、もっと学びたかった。今後も要望していきたいと思います。
- ・すべてにおいて、もっと学習して身につけなければと思っている。援助技術、個別対応に不安を感じる。
- ・通訳者のマナー、通訳の在り方。
- ・技術的なことは、やはり実践を通してより深く学んでいくので、それ以前の盲ろう者が望んでいる通訳・介助者像というか在るべき姿などを、もっと具体的にいろいろな思いなども生かしてもらえると、質（マナーなど）が向上すると思う。
- ・ケースワーク（ソーシャルワーク論）が必要だと思う。盲ろう者をどう見て、どう援助していくかの視点が最も大事である。
- ・守秘義務の基本。
- ・通訳・介助員としての心構え、モラルについて踏まえる必要がある。技術のみに走ってしまう方が多い。盲ろう者に対して理解を深め、興味を持ってもらうことが、長く通訳・介助員を担っていけることにつながると思うので、当事者の方の話は必要。コミュニケーション方法の中で、県内におられる盲ろう者の中で使っていないツールの講習を深める必要はない。
- ・通訳・介助者の在り方を、具体的な例を挙げて検証する必要があると思う。例えば、服装、利用者に対する接し方。あまりにもなれなれしく利用者に接し、言葉づかいも同様になれなれしく話す人がいる。また、守秘義務の線引きは難しいが、利用者、通訳・介助者、両者に共通認識を持つようにしてほしい。
- ・スーパーバイザーをつけての通訳・介助、基礎的な対人援助技術（受容、傾聴、共感など）、自己決定が難しい盲ろう者への支援（介入的な通訳・コミュニケーション支援）の方法。
- ・心のコミュニケーション（接し方）。
- ・通訳者としての心構え、通訳技術がもっと必要。
- ・通訳・介助員の仕事は何か？プライベートと仕事を区別できない。「読み取れない！」と平気で言う手話通訳者がいる。
- ・講習が必要なのは、職業倫理や他業種（手話通訳や要約筆記など）の仕事、調整（場所の確保など）について。現場で学べることも多くあるが、事前に知っていることで、よりスムーズに通訳・介助

が行えると思う。

- ・通訳・介助時にやってはいけないことなど、詳しく教えてもらいたい。どこまで介助をやって良いのか。盲ろう者の方も分かっておられない場合があります。必要以上の介助をやってしまいそうなことがありました。
- ・援助技術、通訳論。
- ・技術面も必要ですが、盲ろう者との付き合い方、心構えのようなことも必要かと思えます。
- ・相手を知り、信頼関係を深めること。
- ・障害のある方の人権、自己決定権の尊重。
- ・自身が「手話」「要約筆記」として通訳・介助活動をしていたことと、知的障害者のボランティアをしていたこともあり、触手話や音声をしている方たちの様子を見て、身につけた部分が多かったと思えます。個人を尊重しつつ、コミュニケーション補助をしていく上では、技術のみならず、障害者への対応の勉強を、もっと増やしていただければと思えます。
- ・登録者としての倫理、個人情報扱いなどの講座が必要だと思う。
- ・通訳・介助者としての自覚、責任、モラルについて。
- ・「盲ろう者の主体性を損ねない通訳・介助」「盲ろう者の主体性とは」などのテーマの講習会。
- ・通訳・介助員は世話をすれば良いというのではなく、まず第一に相手の気持ちを考えることが大事。世話のしすぎは相手に迷惑。状況説明できるよう、日ごろから心掛けることが大事。
- ・通訳者としての心構え（悪い例も説明が必要）。
- ・モラルや盲ろう者への理解も大事。
- ・技術ではない面、意識の持ち方など基本的姿勢、守秘義務など、何より大事なところだと思うが、その点を強調すべきだと感じる。足りない。もっと言えば、足りない人が仕事をしているのではないかと、不安を感じる。
- ・移動支援、通訳・介助支援、そのほか利用者の人権を守る行動、活動、学習、実習が必要。各自治体での研修の充実。当事者からのニーズをきちんと明確にし、支援者側の一方的支援にならないように検証していくことが求められる。
- ・盲ろう者の支援では、その人のプライバシーにとっても近づくので、通訳・介助員向けの守秘義務の講義について、より時間を設けていただき、守秘義務の範囲など、詳しく教えていただくと良いと思えます。
- ・通訳・介助者としての倫理、盲ろう者の心理なども学べると良い。
- ・通訳・介助員の心構え（倫理）はもっと必要。心構えを身につけないで活動している通訳・介助員が多い。身につけている人は、ほかの制度（手話通訳など）で徹底的に学んだ人で、盲ろう養成のみの人は、なかなか難しい。現任研修でもフォローすべき。
- ・すべての通訳・介助員が、盲ろう者の個人情報の保護に努めるようになるためには、守秘義務についての講習が必要だと思った。
- ・モラルの講義。守秘義務に関すること。物品等のやり取りなどについて。（身分保障、謝金、定期検診の実施など、まだまだ立ち遅れている。通訳・介助員とはいえ、ボランティアとは思っていません。お仕事です。金品のやり取りはいかがなものかと考えます）。
- ・盲ろう者の現状についても必要ですが、もうひとつ、盲ろう者に関わる「対人援助」についても必須だと思えます。
- ・通訳者としてのマナー。

- ・通訳・介助員の専門性（お手伝い、ヘルパーとの違い）について、もっと講習が必要。
- ・通訳・介助員の様子を見ていると、自分の判断で行動している面が多く見られる（本人の意思ではなく、通訳・介助員が勝手に決めている）。ろうあ者の場合は視覚で判断できるが、盲ろう者の場合、通訳・介助員の誘導によって成り立ってしまう傾向があり、とても危険な面に遭遇する。ワークショップ的な学習で、通訳・介助員の援助方法の学習があれば良いと思う。通訳者は、常に自己で判断しながら対応しているが、あくまでも自己判断で、それを議論できる場があったら良いと思う。私自身も学びたい。

E2. 通訳・介助員の体験談

- ・通訳・介助員の体験談（よかった点、失敗談など）利用者の希望を聞く。
- ・通訳・介助員の経験者から、活動する上で気をつけることなど、話を聞きたい。
- ・盲ろう者の自立を促すことができるよう、また、本人が持っている力を生かせるような通訳・介助の仕方を教えてほしい（自分のポリシーで介助してしまっているのか悩むことがある）。通訳・介助情報の与え方など、技術面ももっと勉強すべきだと思います。
- ・通訳・介助時の問題、疑問など、経験談を経験者から教えてもらいたい。
- ・通訳・介助者の体験談や、依頼者側の声を聞ける場。
- ・通訳（コミュニケーションの取り方）や、ガイドヘルプ方法についての講習もしていただきましたし、通訳・介助者としての心構え（個人情報保護について）も教えていただきました。できれば、現在活動している通訳・介助者の人と交流を持ち、「実際はこんなことがありますよ」とか、「このような場合はこうしたらいいよ」といった話を伺う機会を持ちたかったです。
- ・通訳・介助経験者からの談話。
- ・技術だけでなく、実際に通訳・介助されている方の経験に基づく、気をつけることや失敗しやすいことを教えてほしい。当事者の講師には講習内容をきちんと伝え、講習できる人に依頼するべきだと思う。
- ・触手話など、必要なコミュニケーション技術を学ぶのも重要ですが、とにかく受講時は活動していない現場にまだ足を運んだことがない（もしくは実習前）状態なので、具体的な活動内容が知りたいと思うので、経験者や現任者の体験談では、一番実感できる情報を収集できました。ベテランによる話だけでなく、いろんな経験値、立場、活動形態の現任者がこういうことをしていて、こういった準備、意識が必要という話は、本当に役立つと思います。盲ろう者との意見交換も大切だと思います。

E3. 健康問題

- ・通訳・介助員の健康管理（頸肩腕予防、ストレスの軽減）に関する講習が必要だと思う。
- ・体の運動のため、ニュースポーツ体験教室が良いと思います。
- ・ケース・バイ・ケースの場合、盲ろう者の性格はすべて違うため、活動では常に反省が必要で、次回へのステップアップを続ける上で、落ち込んでしまった場合の解決の方法や、守秘義務を実行しながらの通訳・介助者の在り方、メンタル的な部分、自分でカウンセリングする良い方法なども知りたい。

②運営に関する要望

■ A. 時間・回数

- ・講習会が、年に数回または1回くらいしかないため、もう少し回数を増やしてほしい。
- ・もっと学習時間が必要。
- ・すべての内容について、さらに深く長時間を費やすべきだと思います。
- ・すべてではないのですが、時間不足。
- ・盲ろう者に出会ったのが講習会でした。盲ろう者のことがまったく分からないとき、広く浅くいろいろ授業していただいたのはよかったです。ただ、通訳と介助、両方学ぶ必要があり、時間内では理解止まりで、実践には難しい点があったように思います。
- ・1～2日間の受講中、例えば触手話は、ほんの30分～1時間程度の実習で、まったく身につけませんでした。講演を聞き、「身障者(盲ろう者)が本当に生活するに当たって困ることばかりだ」というのは、とてもよく分かったのですが、この程度の受講、身のつき方だと「次回も行こう」という気にあまりなりません。もっと現実に活動に生かせるような内容がいいと思います。
- ・××県の場合、3日間ぐらいの講習会を終えると、その後、教わる機会がないので、なかなか先の上へ進めません。独学に近いですね。
- ・お互い意見交換だけで終わったような気がする。時間がないので仕方ないと思うが、地元で受ける方が勉強になった。
- ・講習会ではできるだけ回数があると良い。意見交換をして現場やコミュニケーションに役立てたい。講習することで研さんできる。通訳・介助を受ける人に対して、より良い理解を深められる。
- ・時間数が増えれば、それぞれの学習時間の充実を図ってもらえると思うが、増えないなら現状程度で良い。
- ・20時間という制約の中では、何をしても中途半端になるので、「もっと××したい」と思うものの、逆に紹介にとどまり、無駄のようにも思う(コミュニケーション方法の学習について)。移動介助は、盲ろう者向け通訳・介助の専門家に習いたい(今は、音声で情報保障をしてのガイドになるので、実情に合っていない)。
- ・重度の盲ろう者に関わる時、さまざまな知識、知恵、想像力、体力、柔軟な精神力が要求されます。盲ろう者1人1人の自立とは何か?をじっくり考えて納得できるプログラムで、いつも平常心を保ち続けられる心の鍛錬と、豊かな感受性を育てていく訓練も必要だと思います。今の講習時間では、盲の人、ろうの人、盲ろうの人に、まったく関わったことのない人にとっては、活動の気持ち芽生えさせることさえ非常に難しいように思えます。受講資格から見直して、実際の活動における保障の十分さも確保した上で、養成していただきたいと考えます。座学、実地訓練とも十分な時間の確保をお願いしたいです。
- ・盲ろうの方のためにも通訳・介助員を増員するため、講習会の回数を増やすべきだと思います。
- ・もっと移動やコミュニケーション方法について学ぶ時間があったら良いと思います。
- ・すべて必要でした。もっと時間をとって勉強させていただきたかったぐらいです。
- ・コミュニケーション技術を上げるため、受講時間はもっと多く。
- ・通訳・介助員養成講習会は、もう少し研修の時間を多く取った方が良いと思う。
- ・自信を持って活動するには、受講時間が少なすぎる(講義、実技とも)。
- ・××県は受講時間が短すぎるので、カリキュラム編成から見直しが必要だと感じています。点字や

ブリスタ、指点字も含め、盲ベースの方に向けたコミュニケーション手段を、もっと習得したいと思っています。

- ・講習会の日数が多いと、もっといろいろ学習できると思います。
- ・講習時間が少なすぎて、未経験者には即活動できる内容ではないと感じた。
- ・カリキュラム内容は充実していると思う。ただし、多様で専門的な対応が求められる通訳・介助員を養成するには、講習会の時間数が足りないのでは……。
- ・音声通訳、要約の仕方、盲ろう体験（視力＝見え方、アイマスクをしての食事など）、通訳・介助者の在り方、モラル向上のための講義、歩行訓練（時間数が少なすぎる）。
- ・受講時間が短いと思う。実技の時間を増やす必要がある。また、実技だけでなく、倫理や歴史、福祉制度など、もっと手話通訳者養成講座と同じくらい時間をかけて学ぶべきだと思う。
- ・講習時間が短すぎ。全体的にしっかりと身につけるまでには至らなかった。指点字が講習内容に含まれておらず残念。
- ・基本的なこと（通訳・介助の心構え、点字やローマ字式指文字、触手話などのコミュニケーション方法、通訳上のルール、盲ろう者とその障害について）を学ぶには、講習会はぜひとも必要。けれども50時間程度の講習では、基本を学ぶので目いっぱい。実践の時間はもっとも必要だと思う。
- ・養成講習（講座）は、あまりにも時間が短すぎます。実際の活動での責任の重さを考えたら、もっとももっと時間をかけて養成してほしいです。担当する盲ろう者に対して、毎回申し訳ない気持ちでいっぱいになり、つらいです。（未熟さのため）
- ・活動人数も少なく、講習会も回数が少ない。
- ・もっと講習が必要だと思う。時間が足りない。
- ・通訳面において基礎的知識を知ることができるが、コミュニケーションが取れるには時間が足りない。ほかで手話などを身につけられない人が受講すれば、活動を始められる程度の講習内容だと思う。移動介助面では、実際に移動するときは初心者でも1人で対象者と外出するので、いろんな場面における安全面の確保の方法（車の乗り降り、電車、バス、エスカレーターなど）を、できるだけ多くの場所で、実物を使って実技指導をしていただければ不安が減ると思う。時間も内容も足りない。
- ・いろいろなことを一通り受講したが、全体的に時間が少なく、少々中途半端になった気がする。実際、自分が合うと思うこと（通訳方法などで）に関して、重点的に選択してしっかりと学べるとよかった。
- ・講習時間をもっと増やしてほしい。
- ・予算の関係で全体的に時間が短かったので、もっと長期で講習会を開きたい。
- ・手話のできない聴者（ガイドヘルパー）が多く、手書きがほとんど。36時間は少なすぎる。それで身につくとは思わない。
- ・いずれもとても必要であり、96時間では足りないくらいです。
- ・コミュニケーション方法に特化したものではなく、終了後、自分で学習する必要がありますので、養成講習会はもっと時間をかける必要があると思います。
- ・養成講習会の受講時間が全20時間というのは、とても足りず、十分ではないと感じます。20時間で人の命（オーバーかもしれませんが）を守ることができるのか、盲ろう者を理解できるのか、不安に思いました。

- ・5日間の講習会だけでは、とても通訳・介助員としての内容をまかなえるものではないと思いました（その後の活動をして分かりました）。
- ・受講生が多いためか、指導者が1人だけのためか、とても時間がかかった。グループで指導者が進めてみてはどうか？

■ B. 定期的開催

- ・講習回数を増やしていただきたい。現状を考えると、大変難しい（講師の派遣調整、場所の確保など）というお話も伺ってはいます。手話や点字を主とした具体的なコミュニケーション方法は、繰り返し学ぶこと、日常的に関わっていたりしないと、身につくづらいついて感じています。「手話クラブ」、「点字クラブ」のような形で、定期的に学び続けられるシステムがあると、ありがたいと思います。障がい者のためのコミュニケーション手段に関する最新情報の発信と、その使い方を知る機会が増えると嬉しいです。
- ・点字、手話は定期的に講習、または勉強会が必要だと思う。北国は冬が厳しいと集まりも悪く、月1程度でもやらないと継続することが難しいと考えてしまう。手話は継続して行わないと、せっかく学んでも使える機会がなく、忘れてしまう。
- ・触手話の講習（練習）とガイド（介助）の講習は、定期的に必要だと思う。
- ・手話、点字。月1回の全体講習など。
- ・継続的な講習が必要だと感じている。
- ・一度の研修では確実に習得するのは難しいです。通訳・介助員としての経験を積む機会が少なく、難しいため、定期的に講習会を望みます（すべてのコミュニケーション方法について）。
- ・派遣がなく忘れてしまうので、定期的な講習は必要だと思います。コミュニケーション技術については各自に任されているので、具体的なコミュニケーション技術の講習があると良い。例えば、指点字や手話、要約など。
- ・定期的にしないとできない。
- ・コミュニケーション方法ごとの短時間ではない講習があれば良いと思います。手話なら、ある程度のコミュニケーションが取れるまで勉強ができるなど。
- ・年2～3回、講習をしてほしい。
- ・継続して学習が必要。
- ・××県の講座は、手話に偏っている。点字、音声、筆記など、幅広く学んでほしい。また、触手話も、もっと深く学ぶ必要がある。応用も足りない。全体的に時間が少なすぎる。実際に体験期間も必要と思う。そのためには、講座が終わって勉強は終わりではなく、引き続き勉強できる場を定期的に持つことが必要と思う。
- ・定期的な勉強会があると良いと思う。コミュニケーション方法別で自由参加制。
- ・コミュニケーション方法習得のための自分が希望する継続講座があればと思います。
- ・手話も点字も、すべてのコミュニケーション方法は経験を積むことが一番です。1回の講習で身につくものではないので、継続した講習が必要だと思います。自治体で開いていただければありがたいです。

■ C. コース別

- ・手話のできる人、点字のできる人、両方できる人、両方できない人のようなグループに分けて、経

験していない学習を多く採り入れてくれた方がよかった。

- ・私自身は手話も点字もできないときに受講して、一通りの通訳・介助ツールを見たり教えていただきましたが、60 時間ではとても身につくこともなく、そのときに手話を学ぼうと思い、手話講習会に通い始めました。まだ資格は取れていないので、現在は主に中途失聴の盲ろうの方を通訳・介助しています。講習会を手話専門コースや点字コース、プリスタコースなどに分け、2 年目からスタートするなどして、ずっと講習を続けてもらいたいと思いました。
- ・講習で手話コース、点字コースと分けずに両方すべきであると思います。いろいろなコミュニケーション方法を身につけないと、大概の盲ろう者との会話や手引きは無理だと思います。
- ・さまざまなコミュニケーション手段について、初歩的な部分を学んだだけなので、技術的な面をもっと身につけるためには、手段別の講習があるといいと思います。
- ・コミュニケーション手段の習得は難しいので、「手話」と「点字」を分けて別途講習があるといいと思います。ただ、手話に関しては、通訳レベルまで習得するには地域の手話サークルなどで活動するのがベストだと思います。
- ・触手話、指点字、手引きはもっと必要。あまり必要ないローマ字式指文字、筆記（パソコン）は、回数が限られるので別事業で行い、ろうベース、盲ベースに分けて養成を募集してはどうかと思う（ガイドヘルプや基礎知識のところは両方入れる）。
- ・音声通訳は別として、手話のできる人はもっと手話を、点字（プリスタ）を得意とする人は、もっとプリスタ通訳を正確にと、専門的に技術を高めた方が良いのでは、と思います。
- ・短期でしたので、広く浅くといった感じでした。点字なり手話なり、受講生に専攻させてくださいませんか。
- ・受講生の状況に応じた対応を。受講資格とも関係すると思いますが、すべての受講者が知識、技能関係なく一緒に受講するのは無理があります。総合講座、分野別講座に分けて講習し、通訳・介助の可能範囲をはっきりさせた方が良くと思います（すべての分野の習得を、と言われますが、無理があると思います）。
- ・いつも同じ講師です。講師陣の養成を充実し、ポイントをおさえた的確な指導を。
- ・すべての方法を講習で受けたが、時間が少なかった。その中でも、自分の不得意な方法を選んで受けられたらよかった。
- ・さまざまなコミュニケーションを養成講座で学んだことはよかったが、講習だけで完璧にこなせるようにはならない。各々のコミュニケーション方法の習得には、さらに格別の学習が必要。
- ・実践のケースが多いもの、点字と手話に分け、どちらかを集中的に行ってはいかががかと思います。また、要約筆記もそれに含まれます。
- ・通訳・介助方法ごとに分かれてのステップアップ講座（触手話、指文字、指点字など方法別に）。初めから特化して講座をしても良いかも。
- ・人によってさまざまだと思いますが、音声が得意、手話が得意、パソコンが得意など、向き・不向きが分かってくると思うので、グループに分かれて勉強を進める方法もあったら良いと思います。少しずつ自信をつけていけば、ほかの分野も挑戦する力も湧いてくるのでは？
- ・もっと触手話、指点字の実践が必要。手話通訳ができる人、点訳ができる人、両方できる人と分けた講習があると良いと思います。例えば、手話通訳のみできる人のクラスでは、点字の基本的なものを学習してから指点字に入るとか、点訳ができる人は、指点字の訓練時間を多めにするとか、手話通訳者は触手話を重点的に学ぶなど。不要だと思う講習はありません。

- ・手話を身につけている人と、身につけていない人に分けてカリキュラムを作成して（各々のグループに重点的に教えることを考えることで、深く学べると思うので）、講習を進めると効果があると思った。ただし、盲ろう者についての知識などは、一緒に受講するのが望ましい。
- ・手話、点字、パソコン、指点字、音声など、何か1つ得意分野を身につける方法はどうでしょうか？一般分野をすべて簡単な知識として学び、自分は何ができるか？それぞれ得意分野の力をつけるようにすれば良いかなと思います。
- ・点字、手話どちらかできて受ける方が多いと思います。不得手な方をたくさん受講できるようにしないと、時間ももったいないと思います。
- ・各講座ごとの講習会にしても良いと思います。深く学ぶことができるし、よりプロフェッショナルになれると思います（指点字のみの講習会など）。
- ・手話や指点字などは、講習会だけで技術を獲得するのはとても難しい。サークル活動などで、長い年月が必要。他国の会話を習得するだけの時間が必要です。まったく経験のない人が始めるには、とても大変。点字や手話のできる人を対象に、講習会をする必要があると思う。

■ D. 日時・場所

- ・講習が多いのはありがたい話ですが、なかなか日時が合いません。
- ・自宅に近いところで講習会があれば、都合のつくときは参加したいと思う。
- ・手話、点字の日常的なことは講習会で覚えた。国家試験、就職支援、自分に特になることだったら喜んで参加したい。半日でも、盲ろう者と一緒に生活を体験してみたい。病気になったときのことを考えて、社会が教育してほしい。仕事と重ならない時間でしたら、ぜひ参加したい。
- ・講習をもっと受けたいと思っていますが、県内ではほとんど行われていません。国立障害者リハビリテーションセンターまでは遠くて行けないので、もっと身近なところで開いていただけると良いと思います。
- ・実技を学びたいが、現在登録しているところは遠いので、できれば近く（時間的にでも良いので）で身につけたい。市の北部に住んでいるので、周囲は複数の市に囲まれています。居住の自治体に捉われずに講習、活動ができればと思います。
- ・小人数制かつ近場で、手話などの講習会があったら嬉しいです。
- ・××県は、××市で日ごろ講習会を実施しています。××市から非常に遠いので（往復 5 時間）、参加したくても難しい。
- ・講習会の会場が比較的遠方で行われるため、負担もある。できれば身近なところで開催していただけると助かります。
- ・養成講習会、県内で開催される行事には、できるだけ参加させていただいている。ただ、他府県で開催される講座には、なかなか参加しにくい。長距離の移動だけに長時間の休暇が取れない。できれば、近距離で学習のできる場を考えていただきたい。
- ・私は××在住で、実母介護もあるので、××での講習会や泊まりだとなかなか参加できない。××にもサークルがあるが、夜間などのため介護との折り合いがつかない。時折でいいので、地区ごとに遊びを含めたり、地域での外出（買い物）などを含めて、もっと身近に感じるようにしていただくと、通訳はできなくても日常生活に役立つ。
- ・通訳・介助員養成講習会を受講し、その後、都合でパートに出ることになり、例えば「会」そのものに活動しないでいると、いつのまにか疎遠になってしまいました。全国盲ろう者協会から情報を

いただくのはありがたいです。技術的な面では通じないことがあっても、続けていく気持ちは持たせてほしいです。

- ・講習は必要だと思う。しかし、通訳・介助活動をするのがなく、指点字、手話などを使う場所がないために、必要ではないかなと思うこともある。病院などで役に立つことがあったときには、勉強させてもらい、よかったと思う。しかし、使わないと忘れる。
- ・全国盲ろう者協会から案内をいただくが、いつも遠くて参加できない。近くで講習会を開いてほしい。
- ・講習会の場所を持ち回りにしていただけると嬉しい。
- ・昨年まで身内の不幸があり、受講（参加）機会を失った。

■ E. その他

- ・講師の養成をきちんとしてほしい。
- ・講習会を主催する側、コーディネーターの考え方、姿勢、発言、態度に疑問を感じる場面がとても多いです。通訳・介助員だけでなく、指導員の講習で意識の統一を計る必要があるのではないかと感じます。
- ・各々の盲ろう者に合わせた通訳・介助が大切ですが、聴覚障がい者については分かっていることが、視覚障がい者については本当に知らないことが多く、講習会で学べたことはよかったと思います。でも、歩行・移動時の工夫や日常生活用具、それ以外の普段の生活の中での便利な物や工夫など、一般の話から、さらに具体的に知らせてもらいたいです。通訳者も盲ろう者も、ろう者の世界は分かりますが、それ以外のこととなると、一般的なことは知っているつもりでも知らないことが多々あります。時間の制限もあるかもしれませんが、お願いしたいところです（講習などで無理なときは、ホームページの紹介など）。
- ・東京などでの講習は受けにくい。6ブロックに分けて、細かく指導してほしい。
- ・通訳と介助を分けて講習した方が良い。特に聴覚障害ベースの場合、手話の経験がないと、通訳は難しいと思う。
- ・講師で派遣される方は、実際に活動されている方にしていきたい。東京のような養成講座を開いてほしい。
- ・どちらかという、聴覚障がいについての学習に比重が置かれていた。受講生も、手話サークルや要約筆記サークルの会員が多く参加していた。もっと視覚障がいについて学びたかった。コミュニケーションは最も大切だが、安全に介助する場合、いろいろな場面があるので、講座だけではガイドや見守りに不安があると思う。買い物や旅行などでの情報提供の仕方、状況や状態の説明などの学習もあると良い。
- ・盲ろう者の家族のため（盲ろう者理解）、講習会の1講座を当てたら良い。
- ・総合福祉法など法律が改正されたことを機に、通訳・介助者として必要な新しい知識、情報がほしい。
- ・制度についての講習がなかったので、目的や方向性が分かりづらかった。
- ・講習会（全国統一）のテキストがあればいいと思います。
- ・短期間で行うならば、基本的なことと「福祉施策の中で盲ろう者福祉の位置付け」や「通訳・介助員としての役割」などの講義とディスカッションに時間をかけた方が、将来的には効果があるのではないのでしょうか？短期間で専門技術（点字、手話、パソコン要約など）を習得するのは不可能で

す。『盲ろう者への通訳・介助』の本を熟読すれば分かることは時間をかけず、専門技術の習得方法や技術の向上方法などは、情報提供で良いのではないかと思います。また、講師についても、当事者だからとても理解しやすい面（生活面について）はあると思いますが、当事者だから理論的に、または統計的に講義できるとは限りません。盲ろう者の苦悩や障壁を知ることは、通訳・介助員としてとても大切ですが、それをどの方向で改善していくかの講義やディスカッションが、通訳・介助員の姿勢につながるものと思います。

- ・登録盲ろう者のコミュニケーション方法に合わせた時間配分。盲ろう当事者の参加。アイマスクを使用しての移動。盲ろう者＝全盲ろうとは限らないことの理解。
- ・移動介助の枠の中で、視覚障害者センターでの介助方法の講座は不要では？（聴覚先行の盲ろう者の場合、視覚先行の介助とはまったく違うので、受講内容にこだわると、登録後の介助に先入観が入ってしまう）
- ・重複施設の見学は必要ない。全体の時間が少ないのに、この見学時間はもったいない。ほかの科目を行うべき。
- ・視覚障害についての学び。
- ・募集のときに「手話ができる人（日常会話）」を条件にすれば、移動介助やそのほかのコミュニケーションに時間を使えると思う。
- ・条件として、手話講座の入門と基礎を修了した人が、通訳・介助員養成講習会を受講するのが望ましいと思う。したがって、受講内容は手話（触手話）や点字などを中心にもっと充実させ、受講終了後、盲ろう者が少しでも安心して通訳・介助を受けられたら良いと思います。
- ・当たり前ですが、どうしても頭（知識）が先に出て、利用者1人1人を見る実習がうまくいきません。実習の講習を一緒にではなく、登録後に参加させてもらいたい。
- ・講習は大切ですが、仕事をしている立場では、突然案内が来ても参加できないので、年間計画を年度初めにほしいです。
- ・手話、点字の両方でコミュニケーションができるというのが基本だと思いますが、ろう（手話）と盲（音声）、それぞれのコミュニケーションができるということと、盲ろう者に対してコミュニケーションを取るのはまったく違うので、その点をもっと具体的に指導してもらいたいです。
- ・何が重要というより、手引きに関する研修しか実技としては受けていないため、非常に内容に偏りがある。講習内容、講師に関しても同様のため、幅広い内容の講習がほしいです。全国盲ろう者協会や、国立障害者リハビリテーションセンター主催の研修会で学ぶ機会があり、それにより現在まで活動できているが、それがなければ難しい状況にあったと思う。
- ・講習会は、盲ろう当事者が指導しないかぎり、盲ろう者の立場は理解しにくいと思う。携わっている盲ろう者を学ぶべきと考える。
- ・必要と思う講習は、コミュニケーション方法、誘導（階段、電車、エスカレーター、エレベーターなど）、おむつ交換。あまり必要ではないと思う講習は、講義（ある程度までは必要）。
- ・自治体主催の養成講座。通訳・介助員の数の確保のためにも必要です。

③現任研修についての要望

- ・通訳、介助を経験した後に、研修が必要だと思った。講習だけでは分からなかったこと、具体的にやってみて「もっとここを学びたい」と思うことが多かった。内容のレベルアップということかな？

初めての講習で、オールラウンドを学ぶことも大切だが、その後のフォローアップの必要性を感じた。心理学的な内容も学びたい。

- やっていないと忘れるので、定期的に講習会があれば良い（多くの人が参加可能な）。
- 現任研修への参加により、フォローアップしていくことで技能を補足させたい。
- 手話、音声、日本語式指文字、手書き文字、筆談も、繰り返し勉強（講習）が必要。介助（階段やエレベーター、エスカレーターへの誘導）の体験も必要。点字も覚えたいが、難しいので挫折。普段、健聴者との会話でも手話を使った方が良いと言われるが、つい言葉だけになってしまう。手話を使う習慣をつけないとダメですね。
- 手話、手書き、指点字など、方法を教えてもらうことはできました。でも、その方法を身につけるには、養成講座の時間だけでは無理です。知ってから、自分が使えるようにする努力が必要です。そのためには、盲ろう者との交流が一番だと思います。
- 徐々に通訳・介助に携わろうとしている人向けに、例えばペーパードライバー講習のような、スキル確認講座があると復帰しやすくなると思います。
- 養成講習会修了後、いきなり盲ろう者と1対1での通訳・介助はとても不安でした。私が受講した当時は、修了後先輩に同行したり、講師のアドバイスをいただくなどフォローしていただけて、とてもよかったです。現在はそのようなサポートがないため、修了したばかりの新人さんが盲ろう者主体の通訳・介助をしていない姿が目につくことがあります。修了後、実技のスキルアップ講座などがあればいいと思います。
- 通訳・介助活動は盲ろう者個々への対応となり、複数を担うことは難しい。通訳・介助方法も、講習会で受けた基本から変わっていく。個別化することで、基本から外れてしまうケースが多くなる。登録後、定期的なフォローアップ講習（法知識、実技、在り方など）が必要ではないか。
- 盲ろう者の存在を行政の責任で周知し、通訳・介助員増を図るべき現任研修。一度研修を受けて、すべてを理解できていると思っていても、参加のたびに振り返りができるので、何度でも参加可能な研修があるのは良いと思います。
- 新規に開発、販売された通訳補助機器を、現任研修などでは積極的に講習してほしい。
- 盲ろう者にさまざまなタイプ（見え方、聞こえ方）があるので、理解のためには、現在のカリキュラムでも良いと思います。しかし、実際は通訳活動をするため（コーディネーターとして依頼するときには）登録しておられても、通訳の技術も、移動介助も1日ずつしか習っていないと難しい状況です。県内でも、登録者の現任研修やレベルアップの講習があれば、登録者が活動に結びつくのではないかと思います。
- フォローアップの講習会など受講しました。できれば模範的な通訳などの情報、講習内容がほしいと思いました。ケース・バイ・ケースだと思いますが。
- 講習会後のフォローアップ体制、実際の活動につながりやすい仕組みづくりが大切だと思う。
- 初めて養成講習会を受講したときは、技術を取得するまでには至らず、命を預かるほどの介助をすることに、とても不安になりました。その後の技術取得は必須（現任研修など）。
- 手話経験が浅い方、経験は長いが日常会話をするに至っていない方のさらなる講習が必要と考えます。研修会もしくは行事などに、まったく参加されていない方などは、特に必要と思われます。
- 1つのコミュニケーション方法についてのスキルアップ講習、経験のないコミュニケーション方法についての初心者向けの講習が必要だと思う（つまりコミュニケーション別の講習会）。
- 専門的な内容を深く勉強できる時間、研修があると良いと思います。養成講習のみでは技術習得が

難しいので、経験年数や要望に応じたもの、パソコン通訳スキルアップ、指点字スキルアップ、音声通訳など、それぞれのスキルアップ研修（1回ではなく、5～10回継続制のもの）。

- ・現在は講習会を修了すると、そのまま登録できてしまいます。試験などは特にないので、通訳時の技量にかなり差が出てしまいます。例えば、講習会で数回学んだだけで、実際に講演会やセミナーなどの難しい内容の通訳をしなければなりません。その辺りの基準を決めたり、複雑な内容の際のスキルアップなど時間を取ってほしいです。
- ・たくさんコミュニケーションの方法があるため、1つ1つのコミュニケーションの手段を深められないので、自分に合った物をスキルアップする必要性を感じた。
- ・養成講習は盲ろう者に関わる以上、すべて必要だと思う。単独の障害ではない分、関われば関わるだけレベルアップの学習も必要と思う。
- ・現認研修は必要だと思う。音声、手話、指点字。講習会だけでは時間数が足りないが、受講が終わってからの講習、学習が必要だと思います。
- ・現在は文字による通訳を中心に行っています。盲ろう者との関わりが多くなるにつれ、ほかのコミュニケーション方法取得の必要性を感じます。現在のコミュニケーション方法からいけば、点字の取得が効率的と思いますが、なかなか機会がありません。こういうときに、研修会があればと思います。
- ・経験年数や習得程度に応じた講習をしてほしい。
- ・入り口が広すぎて、いろいろなコミュニケーション方法の紹介程度の講習会だった。そこから専門的に学ぶには、サークルなどで個人的に技術の向上を計るしか術がない。選択によって、技術向上のための講習や研修を自治体で開催していただきたいと思う。
- ・中、上級者向けの技術研修、講習会が必要である。現在の講習会は入門、初級向けであり、各コミュニケーション方法ごとの、通り一遍の技術指導のみであるが、それぞれのコミュニケーション方法に特化した上位クラスの技術指導を、できれば3ランクぐらいに分けて行ってはどうか。理論指導は現任研修があるので、従前のままで良いと思う。

④その他

■ A. 全体的所感

- ・自治体によって違うが、カリキュラムを毎年工夫されているところもあれば、まったく改善されていない研修（講習）もあります。盲ろう者のニーズに合わせてレベルを上げていく可能性あり。
- ・盲ろう者の方も、全盲の方、弱視の方など、それぞれ手の添え方、誘導の方法も1人1人違います。また、接近手話、触手話などの表現方法も個々に違います。そして、手話の中でも、日本語対応手話で表現し、口型をつける人、簡単に内容を要約して触手話で表す人、すべて話者の言葉の通りに触手話で話した方が良い人など、個人個人すべてコミュニケーション方法、情報伝達方法が違います。誘導に関しては、実務経験が不可欠です。また、コミュニケーション方法についても、対象者に合わせた技術習得と講習が不可欠と思います。
- ・もっと視覚障害に関する講習が必要だと思います。養成講習会は浅く広く、盲ろうの通訳・介助について学ぶため、講習を受けただけでは、実際にはまともな通訳や介助はできません。通訳技術についての講習は、すべてのコミュニケーション方法において、まったく足りていません。
- ・視覚障害、聴覚障害の基礎知識、移動（誘導）介助の技能、各コミュニケーション方法の基礎技能

(本来は通訳できるまでの講習が必要)、模擬通訳・介助講習が必要だと思います。私が受講したときにはありませんでしたが、現在のカリキュラムにはあるかもしれません。

- ・視覚（障害）、聴覚（障害）に関することを、もう少し詳しくお願いします。例えば、私は聴覚障害のことをまったく知らず、なぜ先天障害の方が、目が見えるのに言語獲得が困難なのかがどうしてもピンとこなかったりします。理論ばかり積むのはよくないかもしれませんが、障害理解をすることが当事者に寄り添うことにつながるのではないかと思います。
- ・当時は白杖無しでの盲ろう者模擬体験がありました。盲ろう者疑似体験を行うのであれば、白杖は必要だと感じました。
- ・同じことを何度やっても学習になるので、必要でないものはないと思います。人が不足しているので、新しい方向への講習会が必要だと思います。安全面での手引きは、何度やっても緊張します。
- ・私にとっては、通訳は慣れていたが、介助は初めてだったので講習がすぐに役に立った。相手によって違いがあるので、それを全体で受けとめ、話し合うことが必要だと思う。手話も点字もすぐに覚えられるものではないので、ゆっくりと時間をかける。講習だけでは難しいと思う。その点、手書きや音声通訳は、すぐにできる通訳方法。盲ろう者本人に会い、話してみることが、意欲を高めるのに大切だと思います。
- ・同行援護の制度を知る。盲ろう者の福祉を向上するために、役に立つ情報を盛り込む。盲ろう者の心理と支援方法も必要だと思う。
- ・通訳依頼をお引き受けする方が偏っており、その方への専門性も必要だが、ほかの方とのコミュニケーションも体験できる機会がほしいと思う。例えば、セミナーのときに初めて会った盲ろう者に対し、触手話が通じなくて困ったことがあったので。
- ・盲ろう者にとって必要な介助は多岐にわたっているので、一通り学ぶことは必要だと思う。
- ・自治体が養成講座を開始したのが比較的遅かったので、先に全国盲ろう者協会主催の現任研修を受講しました。もう少し、講習会を受ける基準などを明確にしていきたいです。改めて受けた方がいいのか、とても不安なので。
- ・養成講習会は、盲ろう者通訳・介助者養成の入り口に当たる総論で良いと思うが、盲ろう者のコミュニケーション手段に関わる養成は別立てにするか、またはすでに技術を習得済みの人（地域行政主催・都などの講習会修了者、地域登録者など）、指点字なら点字技術習得者などに登録を働きかける動きも必要なのでは。今はまだ数の論理で動いていると思いますが、将来に向けて盲ろう者向け通訳・介助者の活動指針や、登録に向けた整備も必要になると思います。
- ・すべてにおいて、もっと講習が必要だと思う。ガイドヘルパーも手話通訳も、養成に時間をかけているのに、盲ろう者の通訳・介助がこんなに短時間の養成でできるはずがないと思う。
- ・手話はもっともっと時間を必要とすると考えます。また、初心者にとっては段階を設け、しっかりと取得できれば利用者の方々にとっても便利になるかと考えます。・パソコンに至っては、本当にブラインドタッチのできるような方が求められると思います。講座に当たっては、てんこ盛りにするのではなく、その道の（音声、手話、筆記、ガイドヘルパー）プロを育成する目的をもって、開設したらどうかと思いました。
- ・盲ろう者通訳・介助は幅が広く、奥が深いので、時間をかけてじっくり学習することが必要だと思います。指点字や音声通訳も、養成講習会があれば良いと思います。手話のように、入門から基本・応用とレベルアップしてから、通訳・介助員の登録（得意分野）をするのも、ありかと思えます。
- ・さまざまなコミュニケーション手段を、もっと具体的に学ぶ必要があると思う。

- ・「盲ろう者」の特性などを学ぶことは、通訳・介助をする上で、大変役立って現在に至っていると思います。技術そのもの自体は、5時間×4日間の講習会では、特に大きな変化が生じたわけではありません。ただ、その後の養成講習会をお手伝いする機会があり、感じたことがあります。手話をまったく知らない状態で受講される方がおられることに驚きましたが、音声通訳につなげることができました。盲ろう者を理解していただく手段にはなったかなと思っています。障害の程度により、それぞれに関わり方があって、共に育っていききたいものです。
- ・きっかけになればいいと思う。手話や点字の勉強は時間がかかるので、あとは個人の努力次第では？
- ・通訳・介助をするには際限はないと思うから、講習会は必要だと思います。
- ・この地区は、視覚障害者（盲ベース）の講座ばかり行われる。聴覚障害（ろうベース）での養成講座を開いてほしいと思います。昨年の11月に××県での現任研修を受けて、目から鱗がはがれるように、とても勉強になりました。この地区も、もっと当事者と一緒に学習すべきだと思います。
- ・盲ろう者は1人1人状態が違うので、手話を身につけている盲ろう者には手話が有効でも、手話の使えない盲ろう者への対応の講習が、ほとんどなかった。通訳・介助員の講習を受けにくる人に、ろうの方が多く、手話メインになってしまったのかもしれないが。実際に、身内に盲ろう者を抱える身には、あまり実践的に思えなかった。弱視難聴で、一見すると障害があると分かってもらえない立場の人への配慮が、もっとあってほしいと思う。
- ・統一されたテキストがないので、講習を受けていても、全国的なレベルに合ったものなのかどうか疑問に思った。
- ・受講者は、まったく手話や点字経験のない人、ある程度できる人、すぐに通訳のできる人、それぞれです。介助、誘導の技術を重点にした方が良いと思う。
- ・講習会終了から数年が過ぎ、最近の講習会で新たに内容が増えたり変わったりしたところがあります。追加受講を希望したい。
- ・大学生のときに××の指点字サークルに時々行っていて、20歳で訪問相談員の登録をし、その後××県で通訳・介助員をするには、「養成講習会に参加して修了しないと派遣できない」と言われ、県主催の講習会に参加しましたが、すでに何年も通訳・介助をしていたため、知っている内容ばかりだったので、ほぼ聴講していただけています。初心者の方には分かりやすい基本事項だったので、よかったのではないのでしょうか？
- ・特にありません。過不足ないものだったと思っています。
- ・盲ろうの方々と接するに、通訳・介助員の現在を知らない方もおられますが、そのような方々への連絡は、どの機関が中心になっておられるのか知りたいです。いろいろお話してみると、世の中とても暮らしやすくなっていると驚かれておられます。普及が足りないですね！
- ・受講前に活動をしていましたが、理論や盲ろう者の体験などを聞けてよかった。
- ・私は××県の講習会を受講しました。盲ろう者のためと言いつつ、実際は、ろう者中心の内容でした。手話ができることを前提とした授業だったので驚きました。私は、手話できません。まるで手話ができない人間は受け入れない、という雰囲気でした。ろう者向けなら、そう銘打った形でやってください。盲ろう者向けと言っておきながら、内容はその通りではないので、おかしいと思います。
- ・盲ろう者は1人1人がまったく違うので、講習でより多くの経験を積んでおく必要がある。どんなにやってもやりすぎることはない。
- ・盲ろう者の生活を体験し、どのように感じられるかを実感してみたい。盲ろう者のASL通訳をや

ってみたい。

- ・自治体や全国盲ろう者協会、国立障害者リハビリテーションセンターの講習会があるのを知りません。登録は2011年の夏です。案内があれば参加、受講したいです。
- ・通訳・介助活動中に東日本大震災のような災害が起これば、通訳・介助者の判断が生死を分けることとなります。これまでの講習では、介助の技能とコミュニケーション技能の向上が中心でした。このような災害のときの判断能力は、すべての通訳・介助者にあるとは言えません。災害のときの判断能力は、通訳・介助者には必須条件ではないかと思います。
- ・地方にいと情報が少なく、技術面でも向上がないように感じられます。
- ・人によって通訳の方法がちまちま。講習会だけでは、通訳はできない。実際に盲ろう者と接すると、講習会で習ったこととは違う場合が多い。盲ろう者について知るという面ではいいと思う。
- ・盲ろうという障害は、個々にスキルへの要望もまちまちです。また、介助方法も同じく個々に異なります。さまざまな技術を身につける上では、講習会の受講は必須。例え自分が実際には使わないスキルであったとしても、盲ろう者として接する相手のスキルの基本を身につける（または知る）ことも当然のことと思います。知識を身につける場として講習会なくしては考えられませんし、これまで以上の養成講習会の時間を希望いたします。
- ・手話通訳（触手話、接近手話など）の部分のみ受け持つことを経験。介助の部分も大切だと思う。
- ・講習も大事だが、経験を通すことで分かってくることもある。講習を受けても、現場で役立たない人もいる。
- ・手引き、コミュニケーション方法は、繰り返し講習を受け、身につけた方が良いと思う。
- ・今まで通り、幅広く採り上げて行ってもいいと思います。
- ・私が受講したころに比べると、現在の講座は、実技、観察、実習など、現場で即役に立つカリキュラムになっています。現状で十分だと思います。
- ・盲ろう者の通訳・介助にはさまざまな方法がありますが、特に手話については、講習会の中だけでは身につけることは困難なため、もともとの手話奉仕員や手話通訳者の方に受講していただいて、登録し、活動できるようにしています。××県では盲ベース、ろうベース、難聴ベースなど、それぞれに合わせた講座内容を考え、当事者の状況を知ったり、支援者としての在り方などを採り入れて進めています。盲ろうの障害をよく知り、その支援者としての在り方を十分学べる内容になると良いのではないのでしょうか。
- ・1人1人の障害に対するサポートが違うので、なかなか覚えきらないまま講習を終えました。専門性を持つためには、日々の努力が必要なのでしょうね。
- ・病院や役所など、医療現場や公共の場で働く人たちに盲ろう者のことを勉強してもらって、もっと理解していただきたい。
- ・いつも決まった方なので、講習会に参加し、多数の方の通訳・介助経験ができるので良いと思う。
- ・介護職のため、長く手話を休んでいたため、手話の勉強からやり直しが必要だと思います。講習会は必要だと思います。盲ろう者でも、いろんなコミュニケーションがあるため、1人では勉強できません。
- ・今まで、ろう者との交流、通訳はあったが、講習会で初めて盲者について触れることができ、盲ろうについて学ぶことができたため、とても役に立った。
- ・講習会は自分のスキルアップ、または確認のためにも必要だと思っています。
- ・××県における講習会では、受講者が少なく、毎年同じ人間が受講している。手話、点字など途中

で断念する人がいて、最後まで覚える人は少ないと思う。

- ・私は手話通訳・介助員養成講座を受講したので、盲ろうについてはしていない。盲ろう者向け通訳・介助員登録をしていて、年 2 回の講習を受け、とてもよかったと思います（レベル的にはまだまだついていけません）。
- ・あれもこれも一度に教わるので、なかなか習得までいかない。
- ・実は、盲ろう者向け通訳・介助員は、そろそろ辞めようかと思っています。そんなときに、このアンケートが来ました。今までの思いの集大成を聞かれたような気がしました。これからは、手話通訳者として聴覚障害者を、ガイドヘルパーとして視覚障害者を支援していきたいと考えております。
- ・通訳・介助員養成講習会での勉強は大切と思いますが、その後、活動する中で学ぶことがたくさんあると思います。通訳・介助活動をしてこそ、役に立ったなと感じることが多いと思います。活動がない人にとっては、学んだことを生かしていく場所がなく、「勉強しました」ということになってしまうのではないかと思います。
- ・まったくゼロから受講する方もいるので、××県の 10 回か 15 回の講習では、実際の通訳・介助は無理。もちろん、自分で手話、点字、PC など学習するのが大前提ですが、募集時点でも、ある程度「資格」や「技術」について説明したり、制限を設けないと、講習しても実際の現場に出ることはないです。
- ・作業所および研修会で、サポートしながら学ぶ方が身につくような気がしますが……。手話も経験のないところから始めました。講習会では、大半の人は手話経験があるみたいでした。
- ・手話講座（県主催の奉仕員養成）、点訳（点字）は赤十字主催の講座で手ほどきを受けた。その後、盲ろう者向け通訳・介助者養成講座を受講したことで、点字が指点字の使用につながり、手話が触手話につながった。また、要約筆記の方は、2012 年度より県の要約筆記者養成講座が開催となり、各種講座での補習的な部分が重なることで、通訳・介助の中身の充実につながっている。
- ・特に盲ろうの方と接することで、どんな通訳・介助が必要なのか知ることができますので、どの講習会も有意義ですが、自分自身の努力が足りなくて、技術を身につけることができていません。恥ずかしい限りですが、気持ちだけは寄り添いたいと、いつも気づかされています。
- ・あまり身近に感じられない。地域の中で、どの程度の立場でいるべきか、どんな流れで通訳として派遣されるのが良いのかなど。方法論ばかりで実際の動きが不明であり、受講してから今まで一度も活動場面を見たことがない。
- ・理解を深めるためには、全般的な講習が不可欠。次へのステップ講習、ピンポイントな内容を希望します。
- ・受講から日数が経ちすぎていて、覚えていません。
- ・受講がだいぶ前のことで分かりません。
- ・受講した後は、個人の学習が必要と思う。
- ・1999 年に受講したときは、初めての経験でしたが、講師の方が優しく、丁寧に指導していただきました。また講習を受けたいという気持ちになりました。2004 年のときは、盲ろう者（指導者）は優しく、また分かりやすく指導していただいたのですが、その盲ろう者の通訳の方のきつい言い方（人をばかにした言い方）に、受講者は皆、そこまで言わなくてもと抵抗していました。今回は合計 3 回受けましたが、また受けたいという気持ちにはなりません。でも、通訳・介助に必要な知識を身につけたい。そのための講習は必要かと思いますが……。
- ・私自身、年齢的に手話を始めたのも遅く得意ではない。ただ、この地域の盲ろう者を支援したいと

思い、始めました。跡を引き継ぐまで、下手な触手話でと思っています。

- ・手話、点字にしても 1 回の講習では身につかず、盲ろうの方の存在は分かりましたが、同じ方と何回もお会いしていないと、毎回異なる方とお会いするのはコミュニケーションが通りにくいと思います。
- ・地域に沿った内容で実施するのがベストでしょう。
- ・自分の地域にいる当事者が必要としている通訳・介助の講習時間を、多く採り入れた内容。
- ・地元の盲ろう者のコミュニケーション方法に合わせた講習が大切だと思います。
- ・受講者の年齢にもよると思います。
- ・通訳・介助者としての基本（1 対 1 の会話でなく）、通訳技術、通訳者としての倫理。カリキュラムの中で必要でないものはない。手話や点字の基本、ある程度技術を習得している人が受講していれば、手話や点字の講習は外すことができるが、そういう人たちばかりは集まらない。
- ・県の福祉担当者は、通訳・介助員登録者数の目標数値ばかり言う。養成講座の修了者を県に登録させれば、累計数が何百人になっても当たり前のこと。こんな数字は何の意味もない！実際に活動できる人は、その 10 分の 1 に近い。ほかの人は、講習終了とともに無関係になっている。2、3 年ごとに、更新の有無を確認する必要がある。
- ・カリキュラムであがってきた受講内容に時間ばかりかかり、卒業後の活動に結びついていない。どんな通訳・介助者を育てたいのか目的が分からない。時間を消化すれば登録につながり、その後のフォローもない状態（手話に何時間、点字に何時間、移動支援に何時間、という時間の振り分け）。
- ・講習会に参加して気になった点があります。初めて参加した日の昼食の時間のことでした。受講生には昼食持参としながら、盲ろう者の方々と主催者の友の会の方々はテーブルを囲み、自分たちだけ弁当を調達していました。私は疎外感を強く感じ、不愉快になりました。盲ろう者の方とコミュニケーションを図ることもできず、本当に通訳・介助方法だけ学んで終わってしまいました。
- ・初めて知ることが多かったので、必要でない内容はありませんでした。
- ・盲ろうの方々、個人個人の思い、コミュニケーション方法など、1 人 1 人を大切にしたい内容にしてほしい。特に、コミュニケーションが難しい方や、外出に配慮が必要な方など、細やかな気配りの大切さを知らせてほしい。コミュニケーションの技術は、その後でもいいと思う。
- ・講習は必要だと思います。その都度、内容が変わっていたりしますので、自分自身の勉強にもなります。
- ・経験談、福祉課の方の話は不必要だと思います。
- ・密度の高い講習を受けたい。何度でも受講できたら良いと思っている。
- ・マナー、移動介助の実習、ブリストを使った点字の講習を受けたかった。
- ・中身の濃いもの望みます。
- ・個々の盲ろう者本人が「どのように介助を受けたい。どういう通訳・介助方法がよく理解できる」など、実務的な内容もあると良い（今年度はありました）。すべての講座に盲ろう者が出席し、そのペースで進行するのも意義はあるが、健聴者に合った（早い）ペースで進行し、内容を厚くする日もあって良いのでは（今では盲ろう者のペースに慣れているが）。
- ・県内に触手話、点字の通訳を必要としている障害者がいないため、体験する機会が少ない。通常、手っ取り早い音声通訳・手書き通訳が多くなる。しかし、通常使用しない通訳方法の講習は必要と考える。
- ・すべて必要であったと思う。

- ・広域での講習会は必要。行政職の方には特に必要。
- ・全国盲ろう者協会主催の現任研修会には参加しています。盲ろう者にあった通訳方法が必要であれば、講習はすべてすべきですが、盲ろう者の数により、通訳方法も偏りがあると思います。盲ろう者1人1人に、より良い通訳を提供するためには、偏った講習になっても仕方ないと思います。個人的に研修を受けたいのは、指点字。複数の通訳方法を身につける必要があります。
- ・特に必要なコミュニケーション方法を、集中的にやると良いのでは。誘導の方法については、もっと外に出て実習する必要があるのでは。盲ろう者との交流を入れると良い。
- ・コミュニケーション方法を講習会で身につけるといのは違うと思う。方法を知る、というところまでだと思う。盲ろう者と接するマナー、実習による気づきは大切。
- ・最近、講習に関わっていないので分からない。
- ・人と人とのコミュニケーションの場です。どうか心優しく、己に厳しい人を選出してください。通訳がベテランであるとか、手話の経験が豊富であるかは、別問題です。痛切に感じています。
- ・コミュニケーションを取るのがなかなか難しいので、まずはいかにスムーズに、初対面の人でもうまくやり取りできるかといった方法があれば、その講習をしていただきたい。
- ・指点字や手話などのコミュニケーションを学ぶ必要があるから、丁寧に教えた方がいい。
- ・コミュニケーション方法が多く、難しい（年齢のせいかも）。
- ・指点字と手書き文字、手のひら書きは、とても難しくて苦手です。盲ろう者の方は大変だと思うので、負けずに頑張っていきたいと思います。
- ・盲ろう者によってコミュニケーション方法が違うので、すべて学ぶ必要があると思います。特に、手書き文字については、話し言葉を書けないので、要点のつかみ方を学べたらと思っています。すべての通訳方法に当たると思います。
- ・盲ろう当事者に合ったコミュニケーション方法の実際を、実例を交えて学習したい。
- ・コミュニケーション方法が手話と手書きだけだったので、点字や指点字も講習があれば良い。単一の障害と重複障害の違いや制度なども学習したい。
- ・自分自身での確認を含めて、ローマ字式、日本語式指文字の講習を再度受講したいです。
- ・ろうベースの場合は、手話通訳の経験を生かしていけるが、盲ベースの盲ろう者がいないので学習の機会が少ない。盲ろう者と通訳・介助者が、共に学習できる講習が必要だと思う。
- ・全国盲ろう者大会に参加し、いろんなコミュニケーション方法があるという現場を見て、これなら自分にもできる、ということが分かりました。県内の交流会だけでは、コミュニケーション方法が限られています。養成講習会で数時間学んだばかりのときには、自分には通訳・介助は難しいと思っていました。全国盲ろう者大会のときの通訳現場や会議の様子のビデオ、移動介助、車いすの操作などのビデオを見るだけでも、全国盲ろう者大会に参加してみようと思うのではないのでしょうか。
- ・自治体の養成講習会は合っていない。コミュニケーションの講習をお願いしない。
- ・申込書の内容により、スキル別にコミュニケーション方法を割り振られてしまった。私自身は、点字以外の手話、音声、手書き文字を、もっと体験したかった。

■ B. 通訳・介助の依頼がない

- ・登録しても依頼がない。××県では、ある会の会員にならないと通訳・介助の仕事は来ません。
- ・年間を通して講習の依頼がない。
- ・ガイドヘルパーをしているので、昔から習っていた手話を、少しは生かしたいと思い受講しました

が、仕事がありませんでした。仕事なしで登録料のみ払うのでは、と思い、現在は資料ももらっていません。せっかく受講したので、実践できるようにしてもらえればと思います。

- ・全 10 回の講習では無理。年に数回ステップアップ講習が必要。通訳・介助員登録をしても、1 回も連絡なし。何のための登録か、よく分からない。
- ・講習を受けても活動するところなし。地元で盲ろうの方がいないので、活用することがない。忘れてしまいそうです。1年に一度は講習会をしてほしいです。手話で会話することがあっても、通訳・介助員としての活動の場がありません。
- ・全国盲ろう者協会に登録しましたが、依頼はなく、講習会をやっても、あまり意味がないと思います。通訳・介助員の人はいつも同じ人ばかりです。あれでは、ほかの人は育たないと思います。

■ C. 現場への不安

- ・講習会の内容が少なすぎて、現場に出向くのは不安。盲ろう者の心理や実技の部分などをカリキュラム化するくらい、最低ラインの講習会であってほしい。ホームヘルパーの基礎知識など持っているくらいが望ましいと思う。
- ・時間数は忘れたが、3日間講習があった。各内容について、もう少し掘り下げて講習しないと、通訳・介助は恐ろしくてできないと思うのが実状です。
- ・とにかく、どの分野でも（手話、点字、介助方法など）時間が短い。不安を抱えて通訳・介助活動に出なければならないことで、会員になること（登録）をためらう人は多いと思う。
- ・通訳・介助方法の実技時間を、もっと増やしてください。とても難しく、講習会を修了しても、通訳・介助員として動くのに不安です。自信を持って援助できないと感じます。全体的に、時間数を増やしてほしいです。
- ・歩行介助は、時間不足のように思います（通訳・介助を行う場合の不安につながります）。
- ・講習時間だけでは、すぐに通訳・介助をする自信がない。
- ・現場に行って、恐る恐る通訳を学ぶ感じで怖かった。
- ・通訳・介助に関しては、短時間で身につけるのは難しく、大切なポイント、注意点を学ぶ機会と考えます。介助に関しては、実技、実践が館内、室内のみなので、終了後、すぐに実際に通訳・介助というのは大きな不安がありました。時間数も足りませんでした。

■ D. ろうの通訳・介助員

- ・ろう者が通訳・介助員のときの通訳技術。ただ発語のまねをすれば良い、というわけではなく、要約などの技術も必要だと思う。
- ・ろう者への通訳と、盲ろう者への通訳・介助の違いを、もう少し掘り下げた講習を受けたい。
- ・登録者のろう者と年 1 回でも良いので、意見交換ができる場があると良い。ベテランの人からの話が聞けたら良いし、参考にできれば、より向上できるのではないかと思います。
- ・ろう者の場合、ろうベースの盲ろう者への支援をするので、指点字などの学習は、必要ないと思います。

■ E. 全国統一カリキュラム

- ・2013年現在は、全国の都道府県に派遣・養成事業が法律に伴って義務づけられるようになりました。近年は盲ろう者の社会参加も広がり、幅広い分野での派遣が課せられています。情報保障の確

立と、盲ろう者の自立支援ができる講座内容を、全国統一的な水準に持っていけるような講座（講習）の検討が、今後必要と思われます。

- ・地域の盲ろう者のニーズに合ったコミュニケーション対応。講習会のカリキュラムを全国統一に。

■ F. 資格・試験の必要性

- ・終了時点で何らかの確認テストもあれば良い。
- ・盲ろうの通訳・介助員も、手話通訳者や通訳士のように公的な資格ができると良いと思う。

■ G. 通訳・介助員同士の集まり

- ・通訳・介助者同士のフォロー体制。
- ・全国盲ろう者協会の、盲ろう者向け通訳・介助員養成研修会を受けたことがない。指点字は必要ない。手話ができる人の集まりが必要。

3. 通訳・介助に関する活動状況

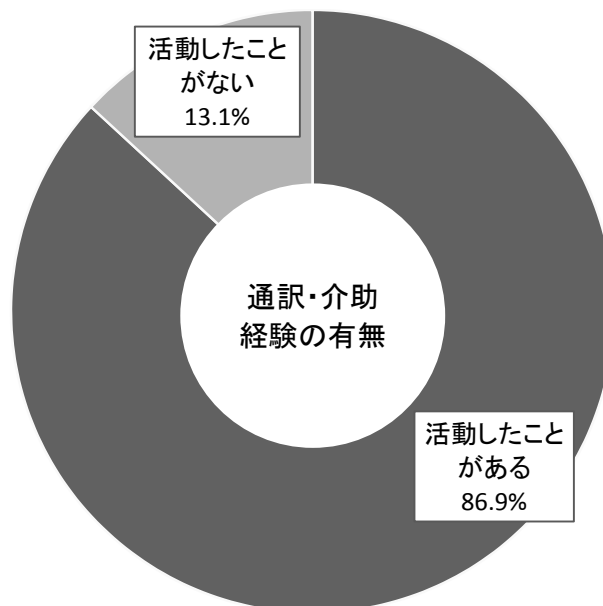
(1) 通訳・介助活動歴

■ 通訳・介助活動経験の有無

「活動したことがある」人は 86.9%

図表 2-3-1 通訳・介助活動経験の有無

	人数	割合
活動したことがある	1455	86.9%
活動したことがない	220	13.1%
合計	1675	100.0%



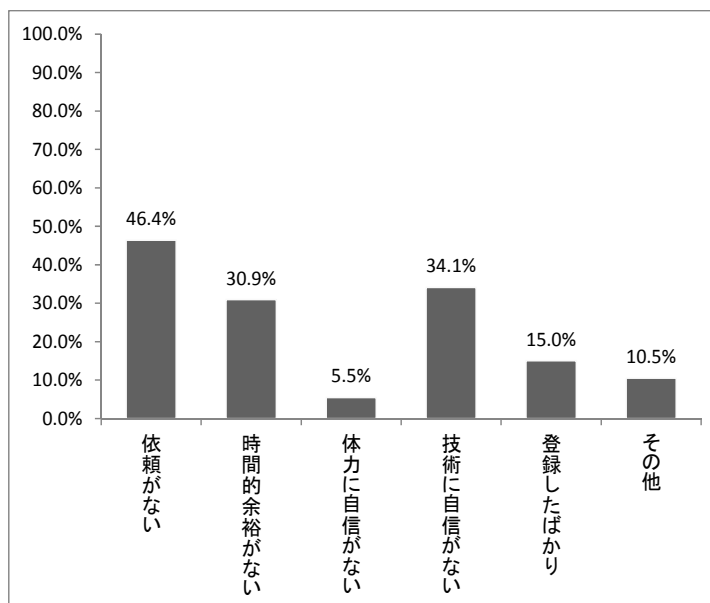
■ 通訳・介助をしたことのない理由

「依頼がない」が最も多く 46.4%

・次いで、「技術に自信がない」34.1%、「時間的余裕がない」30.9%となっている。

図表 2-3-2 通訳・介助をしたことのない理由 [複数回答]

	人数	割合
依頼がない	102	46.4%
時間的余裕がない	68	30.9%
体力に自信がない	12	5.5%
技術に自信がない	75	34.1%
登録したばかり	33	15.0%
その他	23	10.5%



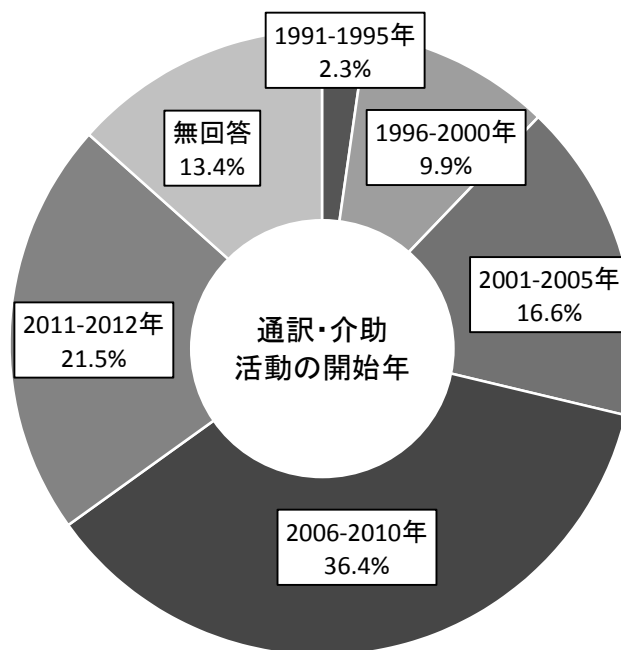
■ 通訳・介助活動の開始年

通訳・介助活動経験のある人のうち「2006-2010年」に活動開始した人が最も多く36.4%

・次いで、「2011-2012年」21.5%、「2001-2005年」16.6%となっている。

図表 2-3-3 通訳・介助活動の開始年

	人数	割合
1991-1995年	33	2.3%
1996-2000年	144	9.9%
2001-2005年	241	16.6%
2006-2010年	529	36.4%
2011-2012年	313	21.5%
無回答	195	13.4%
合計	1455	100.0%



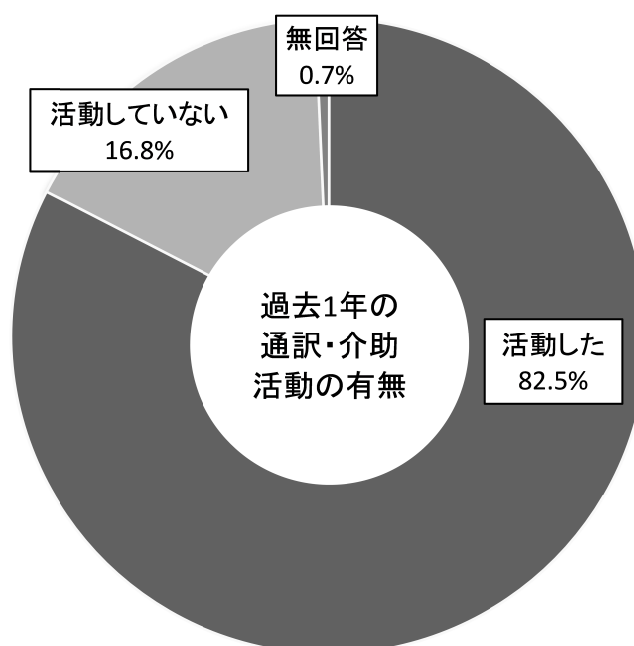
(2) 過去1年間の通訳・介助活動状況

■ 過去1年の通訳・介助活動の有無

通訳・介助活動経験のある人のうち「過去1年に通訳・介助活動した」人の割合は82.5%

図表 2-3-4 過去1年の通訳・介助活動の有無

	人数	割合
活動した	1201	82.5%
活動していない	244	16.8%
無回答	10	0.7%
合計	1455	100.0%



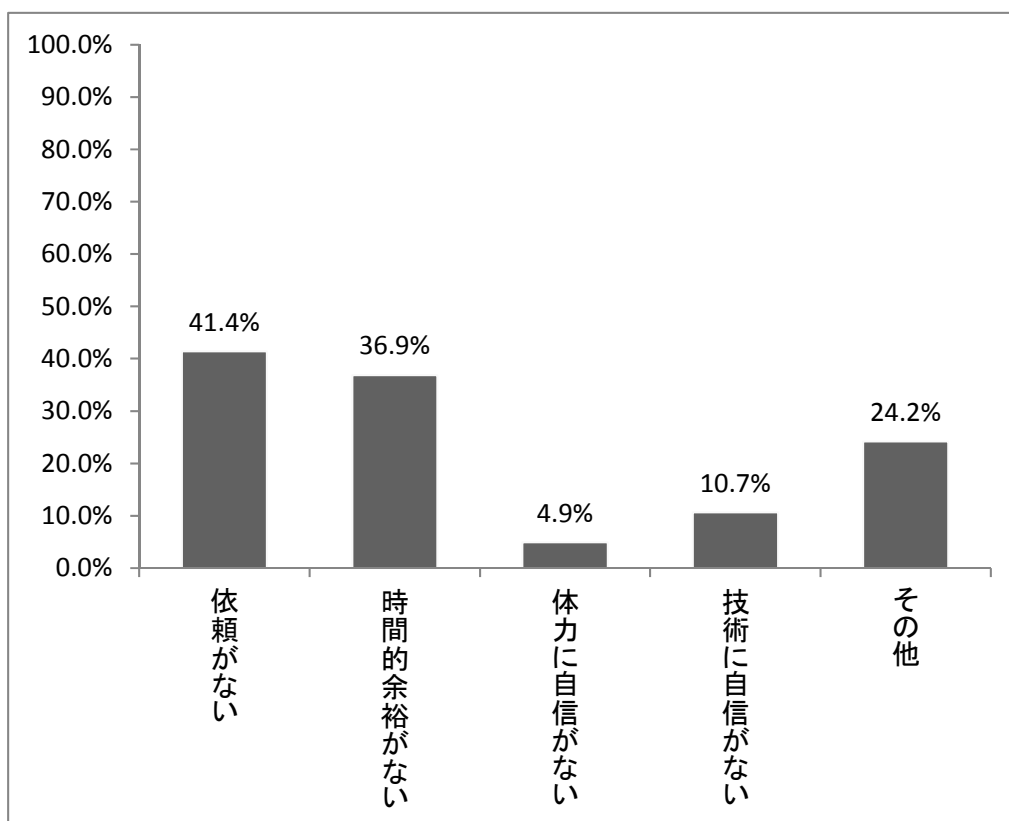
■ 過去1年通訳・介助をしていない理由

「依頼がない」が最も多く41.4%

・次いで、「時間的に余裕がない」36.9%となっている。

図表 2-3-5 過去1年通訳・介助をしていない理由 [複数回答]

	人数	割合
依頼がない	101	41.4%
時間的に余裕がない	90	36.9%
体力に自信がない	12	4.9%
技術に自信がない	26	10.7%
その他	59	24.2%



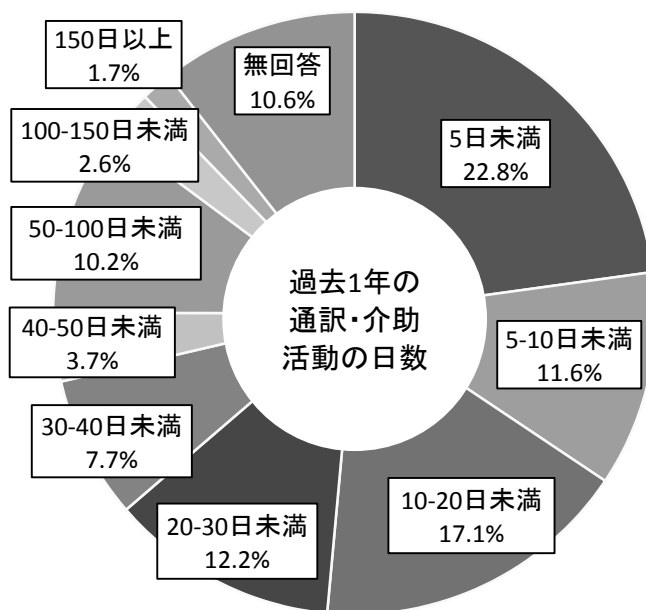
■ 過去1年の通訳・介助活動の日数

過去1年に通訳・介助活動をした人のうち「5日未満」の活動日数の人が最も多く22.8%

・次いで、「10-20日未満」17.1%となっている。

図表 2-3-6 過去1年の通訳・介助活動の日数

	人数	割合
5日未満	274	22.8%
5-10日未満	139	11.6%
10-20日未満	205	17.1%
20-30日未満	147	12.2%
30-40日未満	92	7.7%
40-50日未満	44	3.7%
50-100日未満	122	10.2%
100-150日未満	31	2.6%
150日以上	20	1.7%
無回答	127	10.6%
合計	1201	100.0%



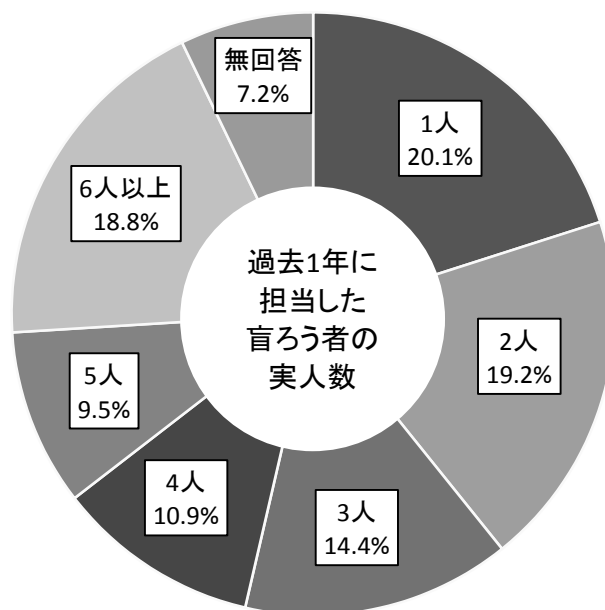
■ 過去1年に担当した盲ろう者実人数

「1人」が最も多く20.1%

・次いで、「2人」19.2%、「6人以上」18.8%となっている。

図表 2-3-7 過去1年に担当した盲ろう者実人数

	人数	割合
1人	241	20.1%
2人	230	19.2%
3人	173	14.4%
4人	131	10.9%
5人	114	9.5%
6人以上	226	18.8%
無回答	86	7.2%
合計	1201	100.0%



(3) 担当盲ろう者の年齢層

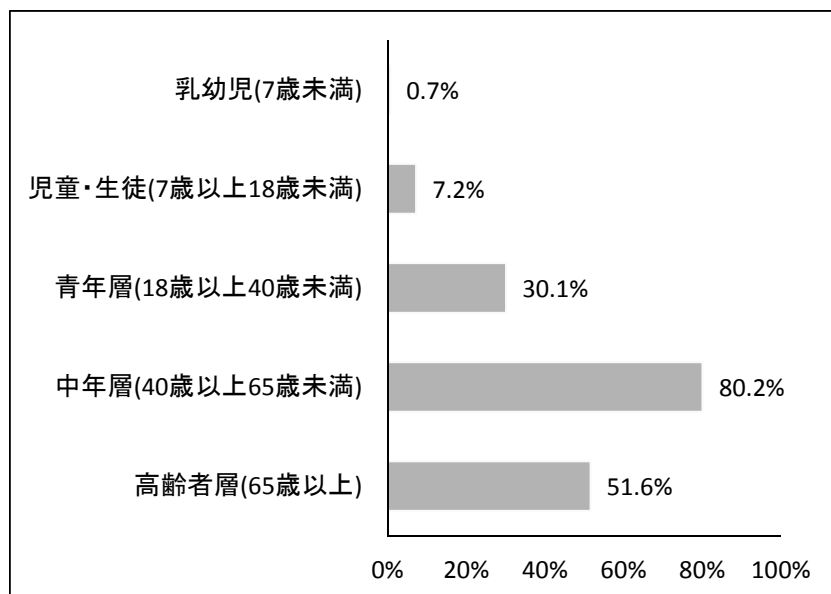
■ 担当したことのある盲ろう者の年齢層

「中年層」が最も多く 80.2%

・次いで、「高齢者層」51.6%、「青年層」30.1%となっている。

図表 2-3-8 担当したことのある盲ろう者の年齢層 [複数回答]

	人数	割合
乳幼児(7歳未満)	8	0.7%
児童・生徒(7歳以上18歳未満)	87	7.2%
青年層(18歳以上40歳未満)	362	30.1%
中年層(40歳以上65歳未満)	963	80.2%
高齢者層(65歳以上)	620	51.6%



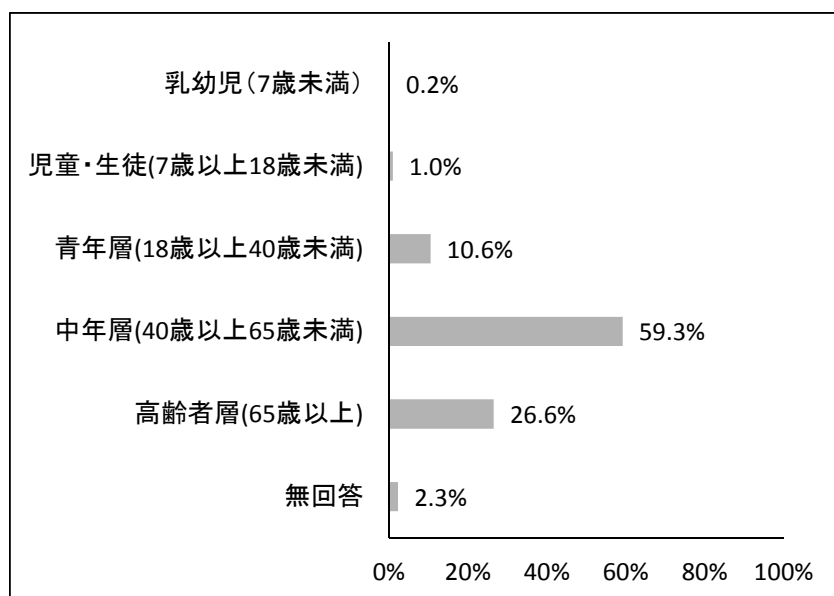
■ 最も通訳・介助を担当した盲ろう者の年齢層

「中年層」が最も多く 59.3%

・次いで、「高齢者層」26.6%、「青年層」10.6%となっている。

図表 2-3-9 最も通訳・介助を担当した盲ろう者の年齢層

	人数	割合
乳幼児（7歳未満）	3	0.2%
児童・生徒（7歳以上18歳未満）	12	1.0%
青年層（18歳以上40歳未満）	127	10.6%
中年層（40歳以上65歳未満）	712	59.3%
高齢者層（65歳以上）	319	26.6%
無回答	28	2.3%
合計	1201	100.0%



(4) 担当盲ろう者のコミュニケーション方法

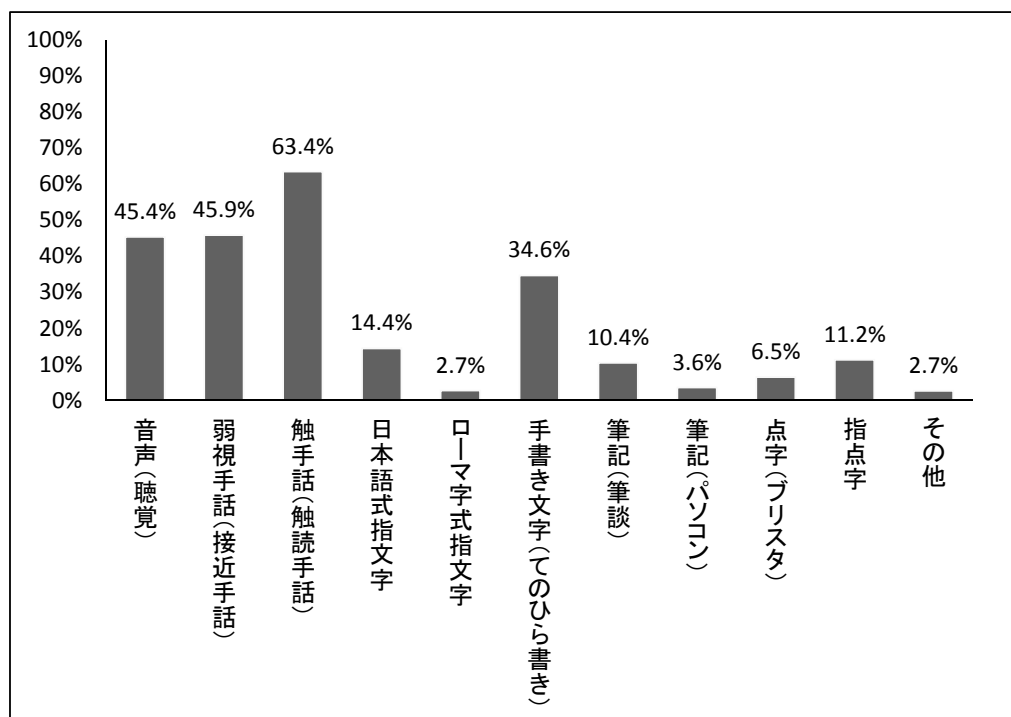
■ 担当したことのある盲ろう者の受信方法

「触手話」が最も多く 63.4%

- ・次いで、「弱視手話」45.9%、「音声」45.4%となっている。
- ・「ローマ字式指文字」が最も低く 2.7%となっている。

図表 2-3-10 担当したことのある盲ろう者の受信方法 [複数回答]

	人数	割合
音声（聴覚）	545	45.4%
弱視手話（接近手話）	551	45.9%
触手話（触読手話）	762	63.4%
日本語式指文字	173	14.4%
ローマ字式指文字	33	2.7%
手書き文字（てのひら書き）	416	34.6%
筆記（筆談）	125	10.4%
筆記（パソコン）	43	3.6%
点字（ブリスト）	78	6.5%
指点字	135	11.2%
その他	32	2.7%



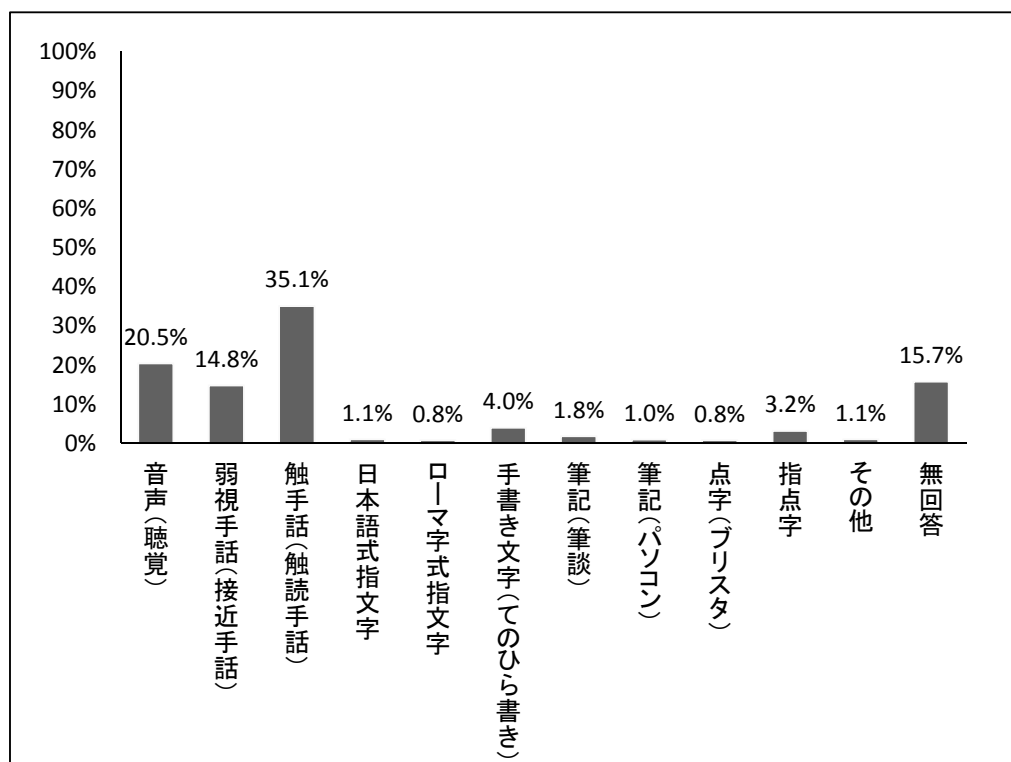
■ 最も通訳・介助を担当した盲ろう者の受信方法

「触手話」が最も多く 35.1%

- ・次いで、「音声」20.5%、「弱視手話」14.8%となっている。
- ・「ローマ字式指文字」、「点字（ブリスト）」が最も低く、いずれも 0.8%となっている。

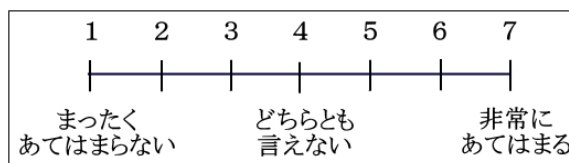
図表 2-3-11 最も通訳・介助を担当した盲ろう者の受信方法

	人数	割合
音声（聴覚）	246	20.5%
弱視手話（接近手話）	178	14.8%
触手話（触読手話）	421	35.1%
日本語式指文字	13	1.1%
ローマ字式指文字	10	0.8%
手書き文字（てのひら書き）	48	4.0%
筆記（筆談）	22	1.8%
筆記（パソコン）	12	1.0%
点字（ブリスト）	10	0.8%
指点字	39	3.2%
その他	13	1.1%
無回答	189	15.7%
合計	1201	100.0%



4. 通訳・介助に関する意識

ここでは、設問に記載したそれぞれの意識項目について、右記の指標を用いて分類した。



(1) 擁護意識

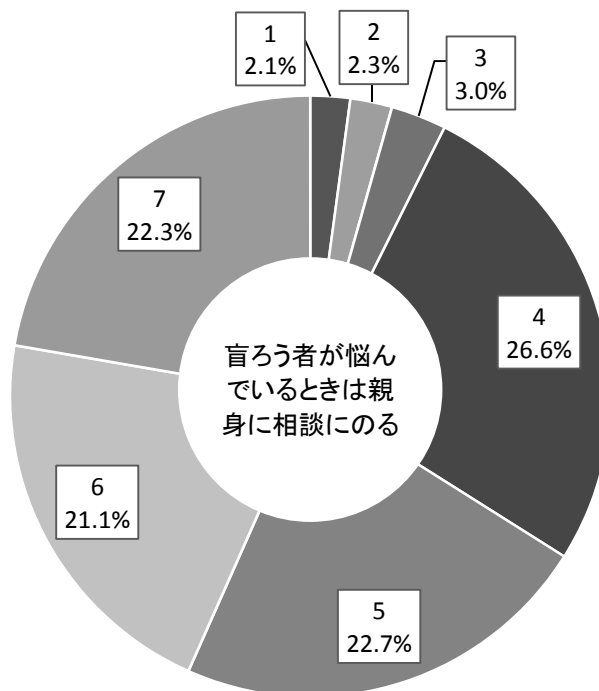
■ 盲ろう者が悩んでいるときは親身に相談にのる

「あてはまる群」が66.1%

・「あてはまらない群」は7.4%となっている。

図表 2-4-1 盲ろう者が悩んでいるときは親身に相談にのる

		人数	割合
あてはまらない群	1	35	2.1%
	2	37	2.3%
	3	49	3.0%
どちらでもない	4	435	26.6%
あてはまる群	5	372	22.7%
	6	345	21.1%
	7	365	22.3%
合計		1638	100.0%



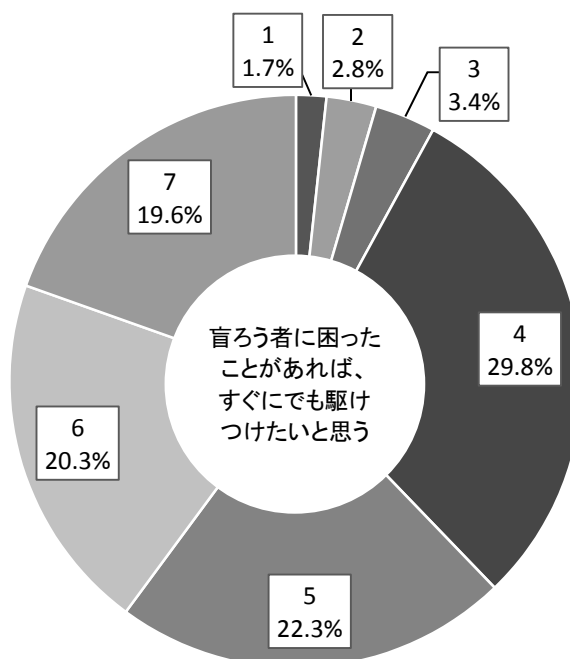
■ 盲ろう者に困ったことがあれば、すぐにでも駆けつけたいと思う

「あてはまる群」が62.2%

・「あてはまらない群」は7.9%となっている。

図表 2-4-2 盲ろう者に困ったことがあれば、すぐにでも駆けつけたいと思う

		人数	割合
あてはまらない群	1	28	1.7%
	2	46	2.8%
	3	56	3.4%
どちらでもない	4	488	29.8%
あてはまる群	5	365	22.3%
	6	332	20.3%
	7	320	19.6%
合計		1635	100.0%



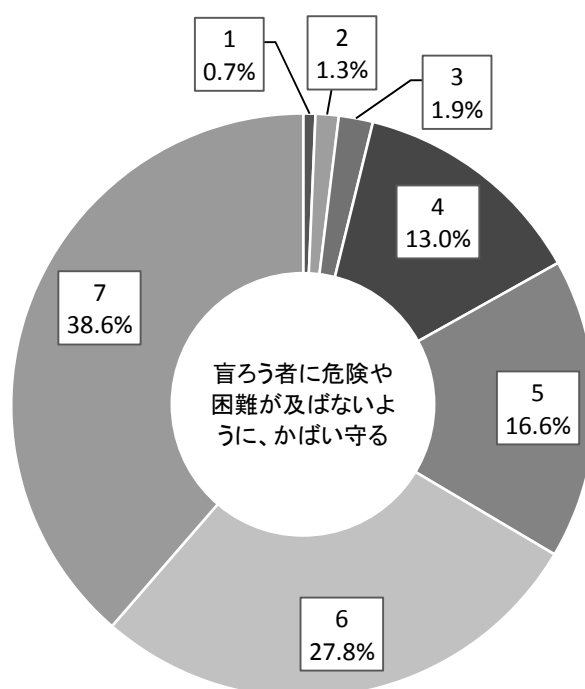
■ 盲ろう者に危険や困難が及ばないように、かばい守る

「あてはまる群」が83.0%

・「あてはまらない群」は3.9%となっている。

図表 2-4-3 盲ろう者に危険や困難が及ばないように、かばい守る

		人数	割合
あてはまらない群	1	11	0.7%
	2	21	1.3%
	3	31	1.9%
どちらでもない	4	214	13.0%
あてはまる群	5	273	16.6%
	6	457	27.8%
	7	634	38.6%
合計		1641	100.0%



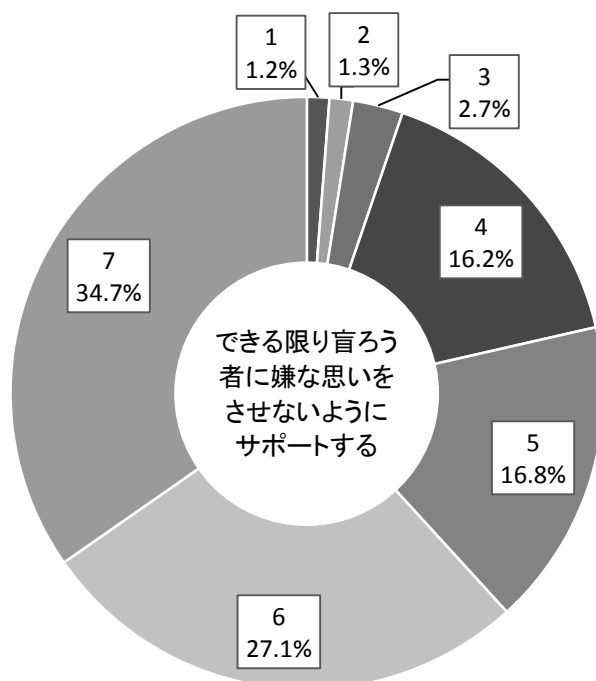
■ できる限り盲ろう者に嫌な思いをさせないようにサポートする

「あてはまる群」が78.6%

・「あてはまらない群」は5.2%となっている。

図表 2-4-4 できる限り盲ろう者に嫌な思いをさせないようにサポートする

		人数	割合
あてはまらない群	1	20	1.2%
	2	21	1.3%
	3	45	2.7%
どちらでもない	4	266	16.2%
あてはまる群	5	276	16.8%
	6	445	27.1%
	7	570	34.7%
合計		1643	100.0%



(2) 仲間意識

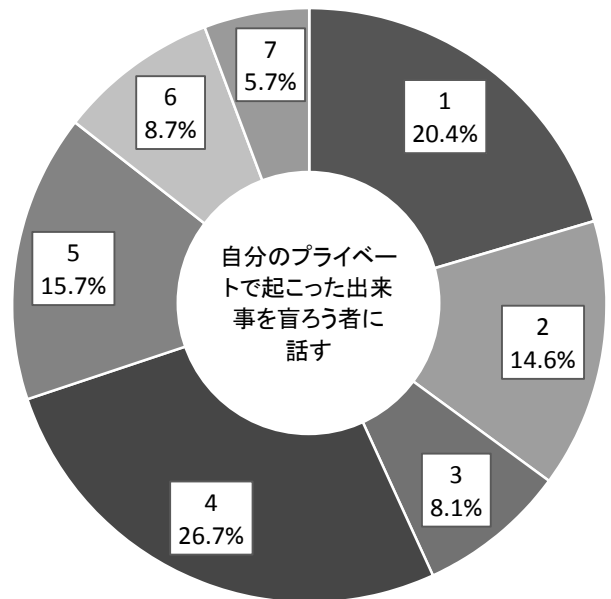
■ 自分のプライベートで起こった出来事を盲ろう者に話す

「あてはまらない群」が 43.1%

・「あてはまる群」は 30.1%となっている。

図表 2-4-5 自分のプライベートで起こった出来事を盲ろう者に話す

		人数	割合
あてはまらない群	1	335	20.4%
	2	240	14.6%
	3	133	8.1%
どちらでもない	4	438	26.7%
あてはまる群	5	257	15.7%
	6	143	8.7%
	7	94	5.7%
合計		1640	100.0%



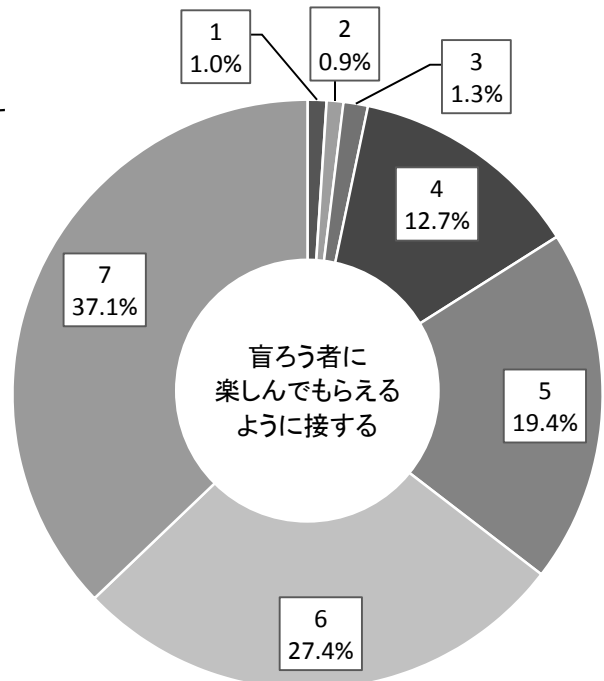
■ 盲ろう者に楽しんでもらえるように接する

「あてはまる群」が 83.9%

・「あてはまらない群」は 3.2%となっている。

図表 2-4-6 盲ろう者に楽しんでもらえるように接する

		人数	割合
あてはまらない群	1	17	1.0%
	2	15	0.9%
	3	22	1.3%
どちらでもない	4	209	12.7%
あてはまる群	5	319	19.4%
	6	450	27.4%
	7	610	37.1%
合計		1642	100.0%



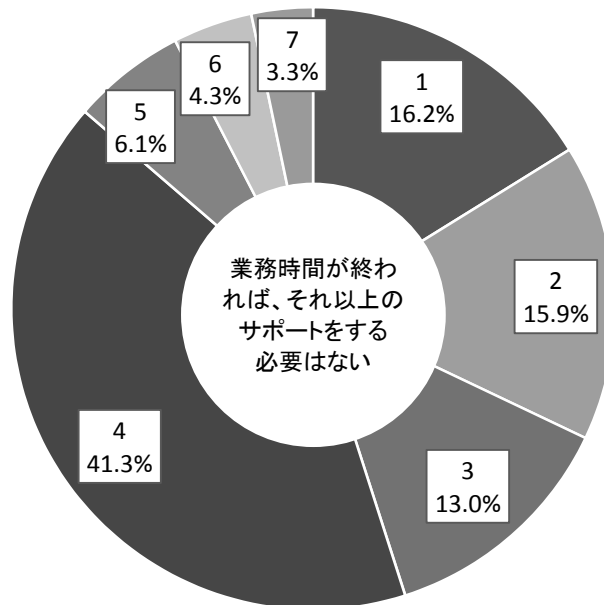
■ 業務時間が終われば、それ以上のサポートをする必要はない

「あてはまらない群」が 45.1%

・「あてはまる群」は 13.7%となっている。

図表 2-4-7 業務時間が終われば、それ以上のサポートをする必要はない

		人数	割合
あてはまらない群	1	265	16.2%
	2	261	15.9%
	3	213	13.0%
どちらでもない	4	677	41.3%
あてはまる群	5	100	6.1%
	6	70	4.3%
	7	54	3.3%
合計		1640	100.0%



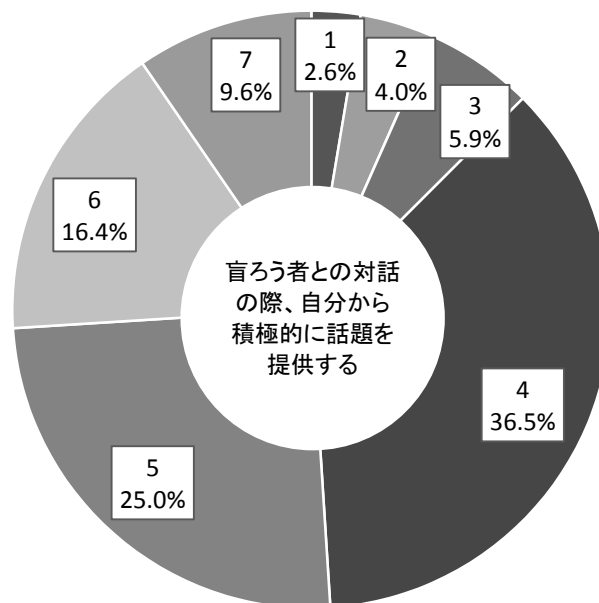
■ 盲ろう者との対話の際、自分から積極的に話題を提供する

「あてはまる群」が 51.0%

・「あてはまらない群」は 12.5%となっている。

図表 2-4-8 盲ろう者との対話の際、自分から積極的に話題を提供する

		人数	割合
あてはまらない群	1	43	2.6%
	2	65	4.0%
	3	96	5.9%
どちらでもない	4	595	36.5%
あてはまる群	5	408	25.0%
	6	268	16.4%
	7	156	9.6%
合計		1631	100.0%



(3) 介入意識

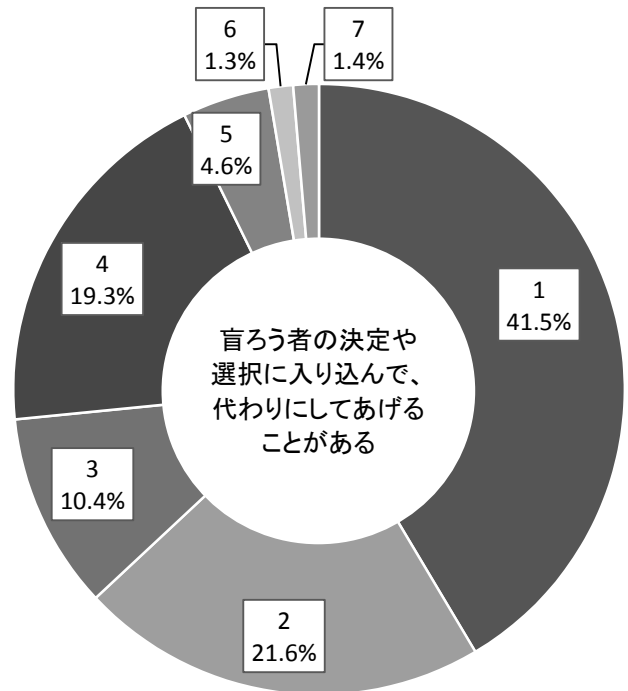
■ 盲ろう者の決定や選択に入り込んで、代わりにしてあげることがある

「あてはまらない群」が73.5%

・「あてはまる群」は7.3%となっている。

図表 2-4-9 盲ろう者の決定や選択に入り込んで、代わりにしてあげることがある

		人数	割合
あてはまらない群	1	674	41.5%
	2	351	21.6%
	3	169	10.4%
どちらでもない	4	314	19.3%
あてはまる群	5	75	4.6%
	6	21	1.3%
	7	22	1.4%
合計		1626	100.0%



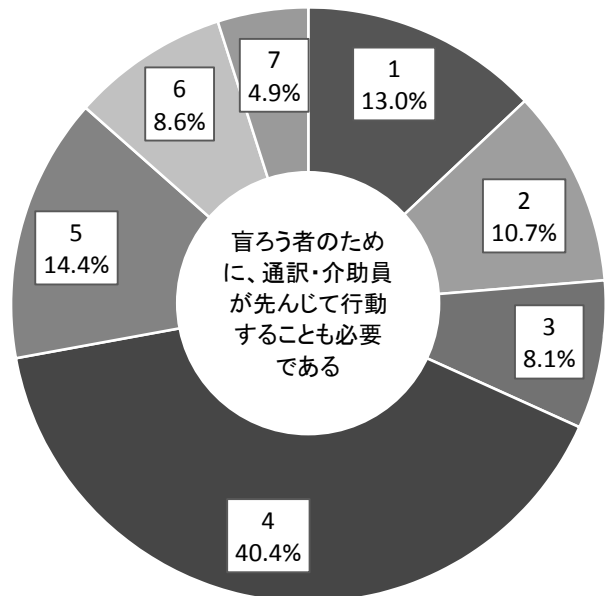
■ 盲ろう者のために、通訳・介助員が先んじて行動することも必要である

「あてはまらない群」が31.8%

・「あてはまる群」は27.9%となっている。

図表 2-4-10 盲ろう者のために、通訳・介助員が先んじて行動することも必要である

		人数	割合
あてはまらない群	1	211	13.0%
	2	174	10.7%
	3	131	8.1%
どちらでもない	4	656	40.4%
あてはまる群	5	234	14.4%
	6	139	8.6%
	7	80	4.9%
合計		1625	100.0%



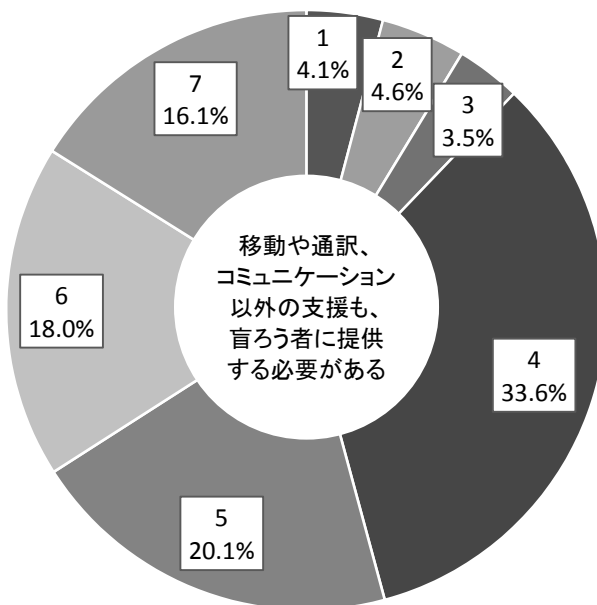
■ 移動や通訳、コミュニケーション以外の支援も、盲ろう者に提供する必要がある

「あてはまる群」が 54.2%

・「あてはまらない群」は 12.2%となっている。

図表 2-4-11 移動や通訳、コミュニケーション以外の支援も、盲ろう者に提供する必要がある

		人数	割合
あてはまらない群	1	66	4.1%
	2	73	4.6%
	3	56	3.5%
どちらでもない	4	539	33.6%
あてはまる群	5	323	20.1%
	6	288	18.0%
	7	258	16.1%
合計		1603	100.0%



(4) 対等性

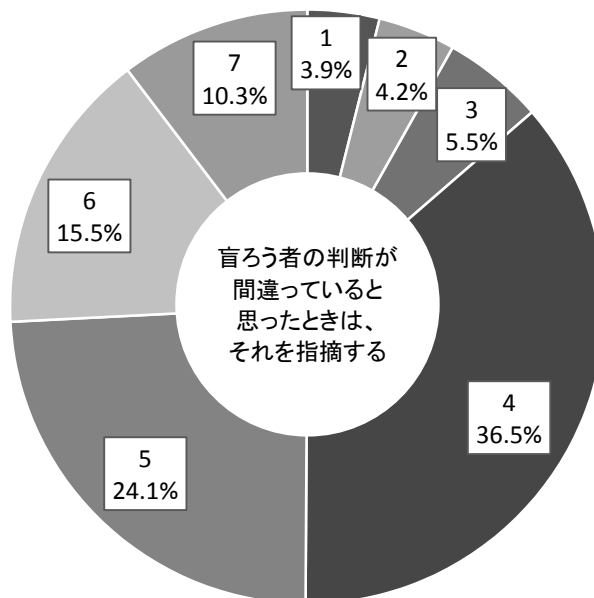
■ 盲ろう者の判断が間違っていると思ったときは、それを指摘する

「あてはまる群」が 49.9%

・「あてはまらない群」は 13.6%となっている。

図表 2-4-12 盲ろう者の判断が間違っていると思ったときは、それを指摘する

		人数	割合
あてはまらない群	1	64	3.9%
	2	69	4.2%
	3	90	5.5%
どちらでもない	4	596	36.5%
あてはまる群	5	394	24.1%
	6	253	15.5%
	7	169	10.3%
合計		1635	100.0%



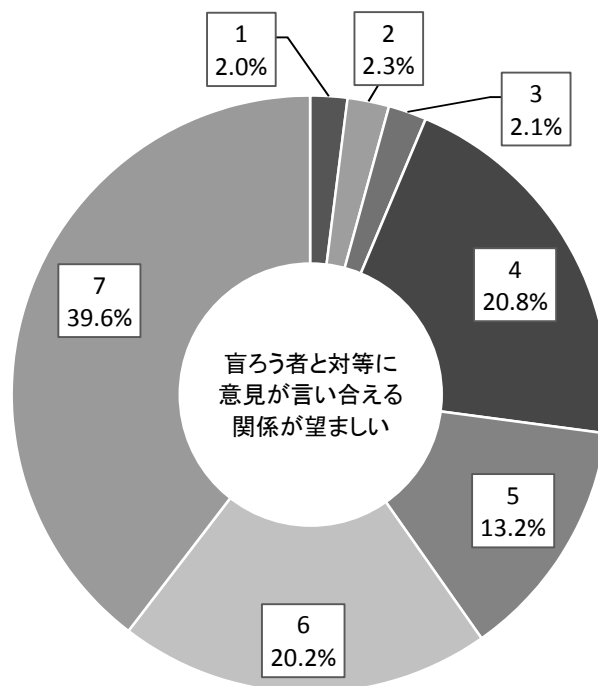
■ 盲ろう者と対等に意見が言い合える関係が望ましい

「あてはまる群」が73.0%

・「あてはまらない群」は6.4%となっている。

図表 2-4-13 盲ろう者と対等に意見が言い合える関係が望ましい

		人数	割合
あてはまらない群	1	33	2.0%
	2	37	2.3%
	3	34	2.1%
どちらでもない	4	341	20.8%
あてはまる群	5	216	13.2%
	6	331	20.2%
	7	650	39.6%
合計		1642	100.0%



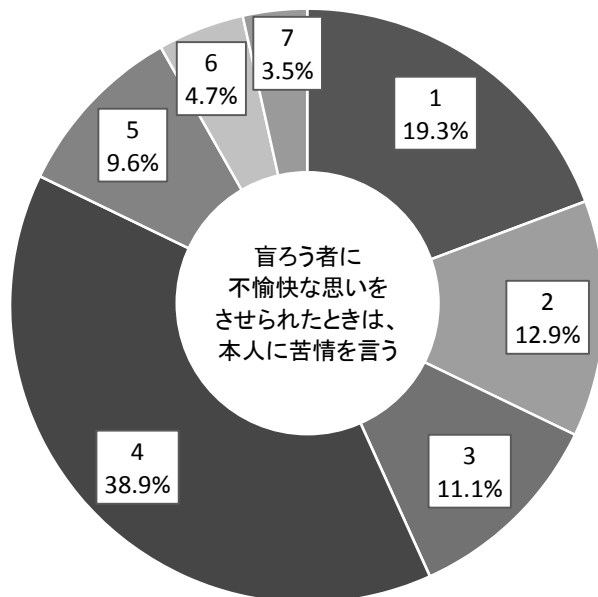
■ 盲ろう者に不愉快な思いをさせられたときは、本人に苦情を言う

「あてはまらない群」が43.3%

・あてはまる群は17.8%となっている。

図表 2-4-14 盲ろう者に不愉快な思いをさせられたときは、本人に苦情を言う

		人数	割合
あてはまらない群	1	315	19.3%
	2	210	12.9%
	3	181	11.1%
どちらでもない	4	636	38.9%
あてはまる群	5	157	9.6%
	6	77	4.7%
	7	57	3.5%
合計		1633	100.0%



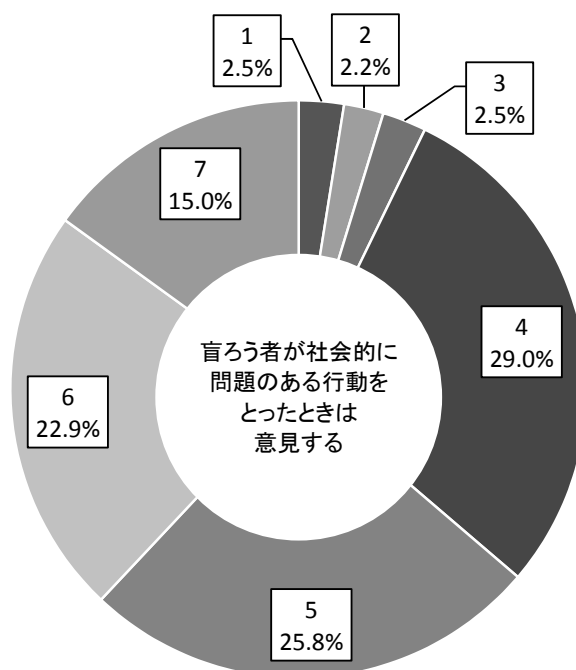
■ 盲ろう者が社会的に問題のある行動をとったときは意見する

「あてはまる群」が63.7%

・「あてはまらない群」は7.2%となっている。

図表 2-4-15 盲ろう者が社会的に問題のある行動をとったときは意見する

		人数	割合
あてはまらない群	1	41	2.5%
	2	36	2.2%
	3	40	2.5%
どちらでもない	4	471	29.0%
あてはまる群	5	418	25.8%
	6	372	22.9%
	7	244	15.0%
合計		1622	100.0%



(5) 情緒性

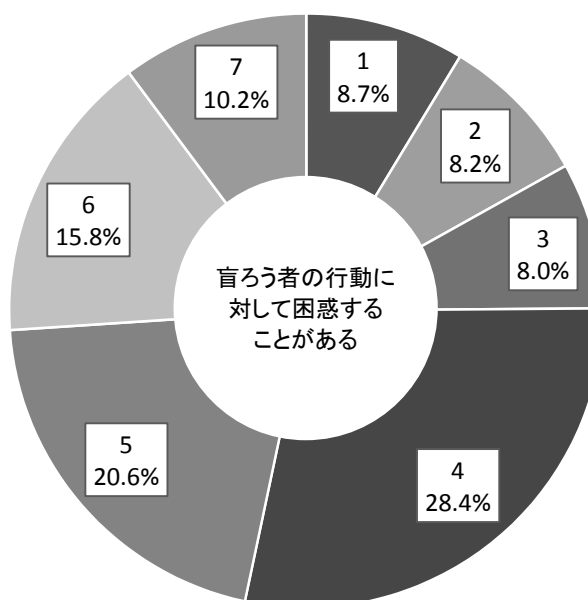
■ 盲ろう者の行動に対して困惑することがある

「あてはまる群」が46.6%

・「あてはまらない群」は24.9%となっている。

図表 2-4-16 盲ろう者の行動に対して困惑することがある

		人数	割合
あてはまらない群	1	141	8.7%
	2	134	8.2%
	3	130	8.0%
どちらでもない	4	463	28.4%
あてはまる群	5	336	20.6%
	6	258	15.8%
	7	166	10.2%
合計		1628	100.0%



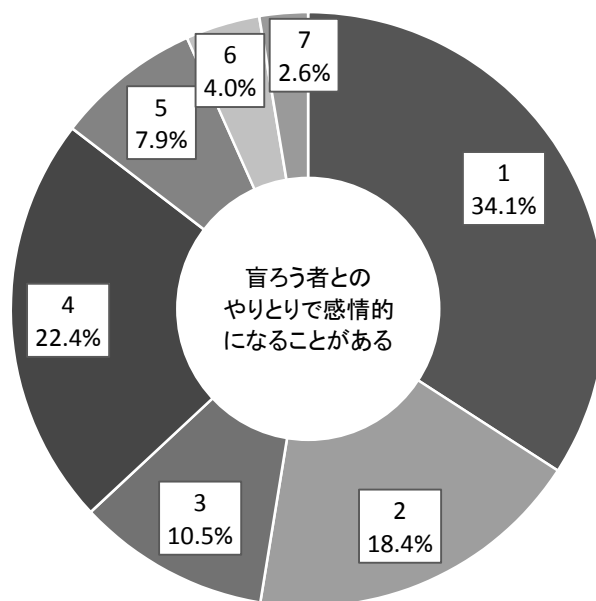
■ 盲ろう者とのやりとりで感情的になることがある

「あてはまらない群」が63.0%

・「あてはまる群」は14.5%となっている。

図表 2-4-17 盲ろう者とのやりとりで感情的になることがある

		人数	割合
あてはまらない群	1	557	34.1%
	2	301	18.4%
	3	171	10.5%
どちらでもない	4	365	22.4%
あてはまる群	5	129	7.9%
	6	66	4.0%
	7	43	2.6%
合計		1632	100.0%



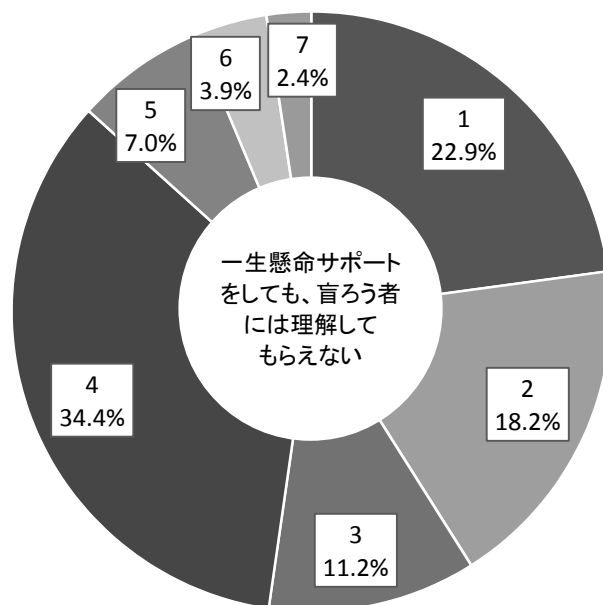
■ 一生懸命サポートをしても、盲ろう者には理解してもらえない

「あてはまらない群」が52.3%

・「あてはまる群」は13.3%となっている。

図表 2-4-18 一生懸命サポートをしても、盲ろう者には理解してもらえない

		人数	割合
あてはまらない群	1	372	22.9%
	2	296	18.2%
	3	183	11.2%
どちらでもない	4	560	34.4%
あてはまる群	5	114	7.0%
	6	64	3.9%
	7	39	2.4%
合計		1628	100.0%



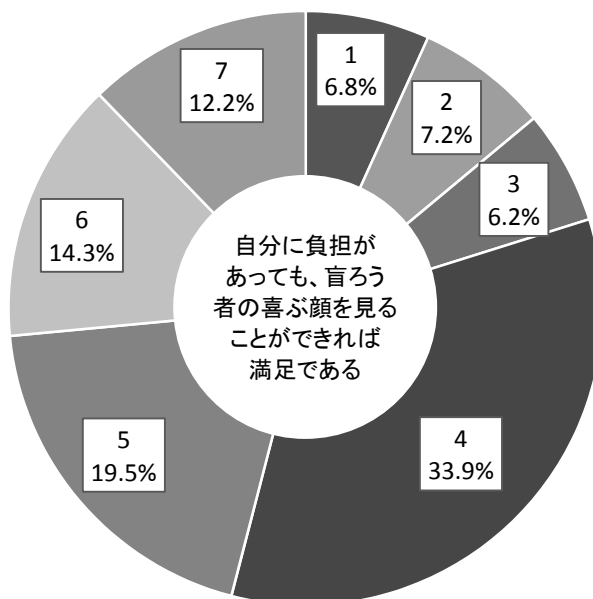
■ 自分に負担があっても、盲ろう者の喜ぶ顔を見ることができれば満足である

「あてはまる群」が46.0%

・「あてはまらない群」は20.2%となっている。

図表 2-4-19 自分に負担があっても、盲ろう者の喜ぶ顔を見ることができれば満足である

		人数	割合
あてはまらない群	1	110	6.8%
	2	117	7.2%
	3	101	6.2%
どちらでもない	4	551	33.9%
あてはまる群	5	317	19.5%
	6	232	14.3%
	7	199	12.2%
合計		1627	100.0%



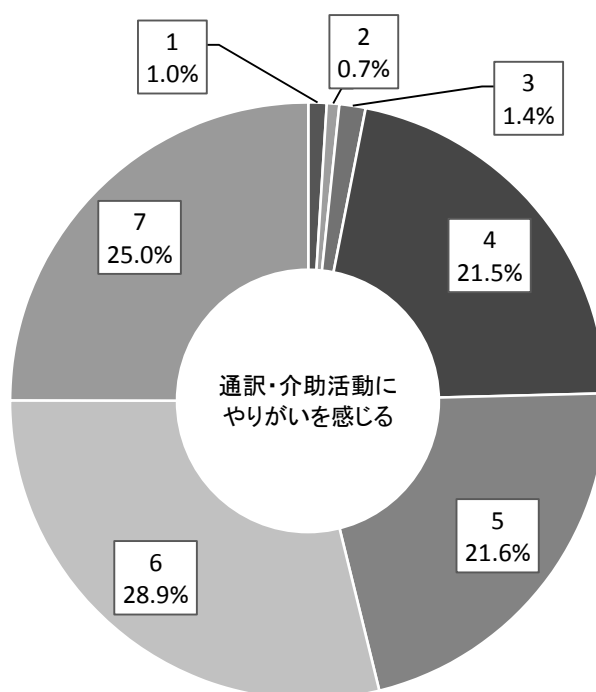
■ 通訳・介助活動にやりがいを感じる

「あてはまる群」が75.5%

・「あてはまらない群」は3.1%となっている。

図表 2-4-20 通訳・介助活動にやりがいを感じる

		人数	割合
あてはまらない群	1	16	1.0%
	2	11	0.7%
	3	23	1.4%
どちらでもない	4	348	21.5%
あてはまる群	5	349	21.6%
	6	467	28.9%
	7	404	25.0%
合計		1618	100.0%



(6) 尊重性

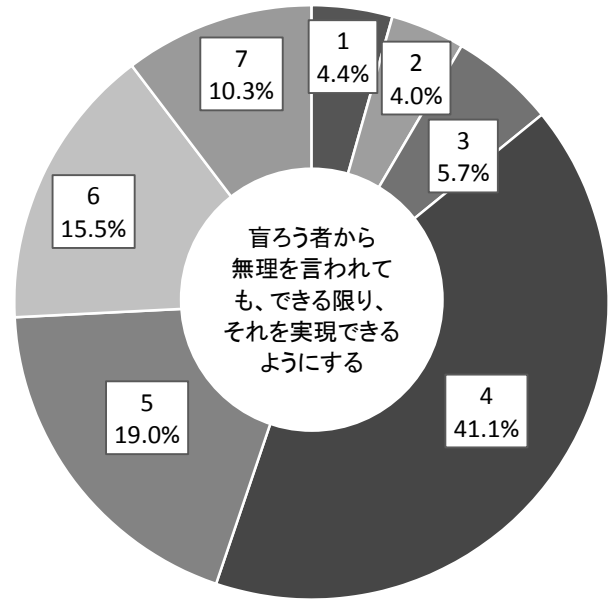
■ 盲ろう者から無理を言われても、できる限り、それを実現できるようにする

「あてはまる群」が 44.8%

・「あてはまらない群」は 14.1%となっている。

図表 2-4-21 盲ろう者から無理を言われても、
できる限り、それを実現できるようにする

		人数	割合
あてはまらない群	1	72	4.4%
	2	66	4.0%
	3	93	5.7%
どちらでもない	4	672	41.1%
あてはまる群	5	311	19.0%
	6	253	15.5%
	7	169	10.3%
合計		1636	100.0%



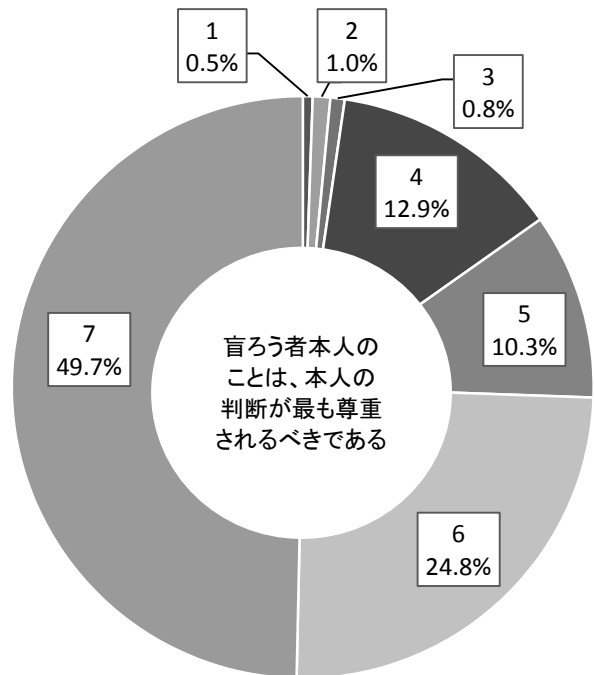
■ 盲ろう者本人のことは、本人の判断が最も尊重されるべきである

「あてはまる群」が 84.8%

・「あてはまらない群」は 2.3%となっている。

図表 2-4-22 盲ろう者本人のことは、本人の
判断が最も尊重されるべきである

		人数	割合
あてはまらない群	1	9	0.5%
	2	16	1.0%
	3	13	0.8%
どちらでもない	4	212	12.9%
あてはまる群	5	170	10.3%
	6	407	24.8%
	7	816	49.7%
合計		1643	100.0%



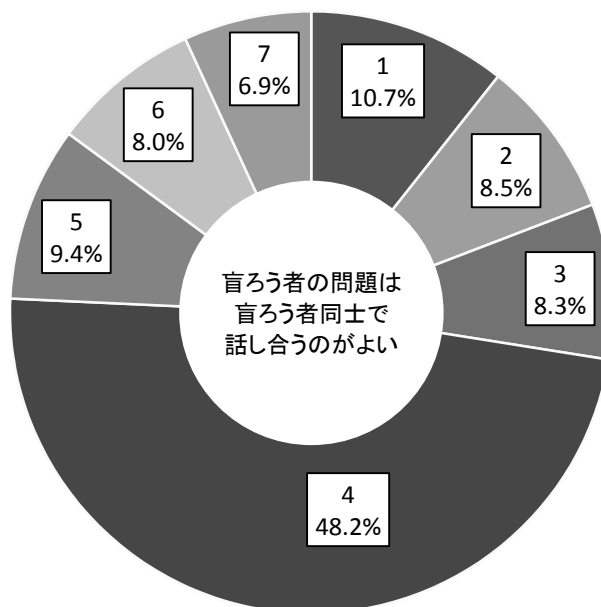
■ 盲ろう者の問題は盲ろう者同士で話し合うのがよい

「あてはまらない群」が27.5%

・「あてはまる群」は24.3%となっている。

図表 2-4-23 盲ろう者の問題は盲ろう者同士で話し合うのがよい

		人数	割合
あてはまらない群	1	174	10.7%
	2	139	8.5%
	3	136	8.3%
どちらでもない	4	787	48.2%
あてはまる群	5	153	9.4%
	6	131	8.0%
	7	112	6.9%
合計		1632	100.0%



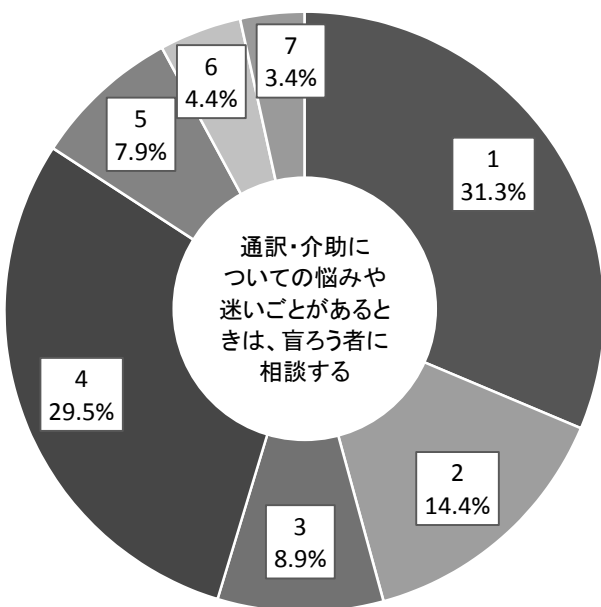
■ 通訳・介助についての悩みや迷いごとがあるときは、盲ろう者に相談する

「あてはまらない群」が54.6%

・「あてはまる群」は15.7%となっている。

図表 2-4-24 通訳・介助についての悩みや迷いごとがあるときは、盲ろう者に相談する

		人数	割合
あてはまらない群	1	509	31.3%
	2	234	14.4%
	3	145	8.9%
どちらでもない	4	479	29.5%
あてはまる群	5	129	7.9%
	6	72	4.4%
	7	56	3.4%
合計		1624	100.0%



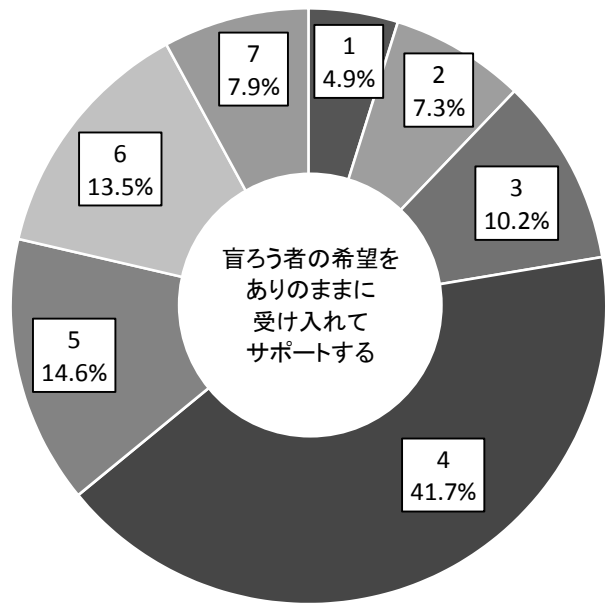
■ 盲ろう者の希望をありのままに受け入れてサポートする

「あてはまる群」が 36.0%

・「あてはまらない群」は 22.4%となっている。

図表 2-4-25 盲ろう者の希望をありのままに受け入れてサポートする

		人数	割合
あてはまらない群	1	79	4.9%
	2	119	7.3%
	3	166	10.2%
どちらでもない	4	679	41.7%
あてはまる群	5	237	14.6%
	6	219	13.5%
	7	129	7.9%
合計		1628	100.0%



5. 通訳・介助における困難・ニーズ（自由回答）

（1）盲ろう者

①盲ろう者とのコミュニケーションの難しさ

- ・相互に情報伝達不足が生じ、いき違いなどに遭遇したりするケースがある。コミュニケーションを取ることに難しさを感じる。日ごろの接触が欠かせないと思います。
- ・盲ろう者 1 人 1 人の生活環境をきちんと理解した上で、盲ろう者と接しなければいけないと思いますが、私自身、まだそれができていないので、話をする内容が浅くなってしまいます。
- ・言葉の数が少ない方がいらして、理解してもらうために、通訳するときに単語の言い換えをする。本人が分かったふりをしているときがある。また、本人が自分の症状、病名を医師に聞いたが、医師は「両親に聞きなさい」と言い、両親は本当のことを本人に言わない。そのことを私に質問してきた。私は「どうしてだろうね？」としか答えられなかった。
- ・天気の状態説明が難しい。台風のように、これから風雨が激しくなるので、外出は早めに済ませた方が良くと話しても、なかなか理解してもらえなかった。店内で、いくつかの商品を説明（音声）していると、ほかのお客さんで混んできたときがあった。
- ・盲ろう者の方の手話が速いので、1 回では読み取れず、ゆっくりお願いすると読み取れた。
- ・私が担当する盲ろう者は、すぐに自分の世界に入り込み、1 人で喜んだり怒ったりしておられ、私たち（担当者 3～4 人）の情報や対話を、ほとんど拒否されます。近くの公園に、お散歩や昼食を食べに行きますが、途中で自分の世界で独り言を言われて、通訳、会話がほとんど成り立たないので困っています。
- ・手話が盲ろう者の理解できるレベルに達しない通訳・介助者ばかりで、友の会から離れてしまうので、盲ろう者自身のレベルが育っていかない。
- ・情報を提供するとき時間がかかる。盲ろう者とコミュニケーションを取れないときは通じず困る。
- ・点字、手書き文字、指点字、触手話など、勉強の入口までいったのですが、どれも難しく続きませんでした。手話を少し勉強しているのですが、盲ろうの方には通じず、残念に思いました。手書き、指点字など、少しでも通じると、とても嬉しく思いました。
- ・盲ろう者 1 人 1 人通訳方法も違うし、伝わり方（伝え方）も違うので、伝えることが本当に難しい。
- ・盲ろう者同士で差があり（情報収集できる人、できない人、意思疎通方法や情報処理力）、みんな同じように知ってほしいことでも、伝わりにくいことが多い。個々のレベルに合わせることが重要と感じる。
- ・「できない」ことが伝わらないときは、非常に困る。特に、聴覚障害の方が盲になり、読み取りがまだ困難な方。
- ・盲ろう者に伝える、伝わらないかは、通訳者の技量によるところが大きいと感じます。盲ろう者それぞれに伝える通訳をすることが、私の課題です。きちんと伝われば、偏った考え方にもならず済むと思うのですが、なかなか難しいと感じています。
- ・盲ろう者が取った行動が、周辺にいる一般の方に不快な思いをさせていると感じたため、そのことを伝えたが、それが十分に伝わらず、通訳・介助者が、その一般の方に謝らざるを得なかった。
- ・間違った情報が入った場合、訂正できないのが困る。影響力のある人の情報で、操作されやすい。

- ・抽象的なことをどう伝えるか、経験していないであろうことをどう伝えるか。難しく、考えることがある。
- ・コミュニケーション方法で、いろいろあります。通じ合えないときは、自分の手話表現にこだわらず、通訳者の方にも歩み寄ってほしいときが、多々あります。
- ・盲ろう者とのコミュニケーション不足（自分の技術不足）を補う方法が分からないとき、手書き文字などを繰り返し使っても、今一つ伝え合えないとき、盲ろう者の認識が、普通とかけ離れているのかなと思う。とても間違っていると感じたとき、何がそうさせているのかを問うが、答えを引き出せない場合、誰に相談したらいいのかな、と思う。個人情報漏らすことになると思うし、また、自分の判断が（捉え方が）間違っているかも……とも思い、ジレンマ。
- ・通訳・介助の経験が少ないこともありますが、盲ろう者1人1人に合った通訳・介助が必要で、お互いにコミュニケーションがうまく取れないため、悩みます。少しずつ、あきらめずに続けていきたいと思います。
- ・連絡方法がパソコンメールに限られており、盲ろうの方のパソコンも調子が悪くなることが多く、お互いに困ることがある。
- ・障害のために、同じことを何度も繰り返し伝えなくてはならない。定期的に同じ問題が起こる。
- ・伝えたい内容が、なかなか伝わらない。
- ・会話のスピード、言語の取得などにおいて、視覚障害ベースの人は、聴覚障害ベースの人に対する理解が足りないように思われる。
- ・一生懸命、触手話で通訳するが、通じないときは、強い口調と表情で怒るのでショックを受ける。
- ・事務所に通う盲ろうの方と、なかなかコミュニケーションがうまく取れません。知的と聴覚の重複障害者の方は語彙が少なく、話される内容も単純ですが、その方は盲ろうの方と仲良くしたいという気持ちは持っておられます。盲ろう者が「話がつまらない」と言って、拒否することが多々あります。仲間意識を持ってもらうには、どのような声かけや体験が必要なのか、考えることが多いです。ご本人の困りごとの大きさを考えると、なかなか他者の困りごとや障害の理解を促すことは難しいかもしれませんが、その辺りをもっと考えていかないと、と思っています。
- ・話下手なので、話題づくりは苦勞する。必要な話を優先しながらも、話が途切れると、そばにいるだけのときがあり、近くにいる人に話題を振ってもらうこともある。
- ・ろうベースの人とは、歩行誘導以外、ほとんど対応できない。
- ・盲ろう者の方との通訳・介助の経験はあまりなく、たまにお会いしたときにお話しする程度です。触手話でコミュニケーションを取っていますが、きちんと通じているのか分かりません。触手話をどう練習すれば良いのか分かりません。
- ・全国盲ろう者大会で、各県の盲ろう者と触手話で接するとき、前もって手話表現が違う場合もあることを伝えますが、講演で私が表した手話が、盲ろう者には違う意味で受けとられたら、話の内容が違ったものになってしまう場合もあるので、その辺をどのようにクリアしたら良いのか、悩むことがあります。
- ・盲ろう者の話を聞いてあげることが多く、なかなか意見など言えません。手話や指文字を勉強中です。なかなか上手になれません。
- ・依頼されたことが第三者に受け入れてもらえなかったり、反応がないとき、こちらの意図したことが相手に伝わりにくいとき。
- ・登録通訳・介助とは別に、活動団体として聴覚障害者デイサービス、聴覚障害者コミュニケーション

ン相談支援事業で、盲ろう者の支援、訪問をしている。聴覚+中途盲で、コミュニケーションは手のひら書きのみ。伝えたいことの半分も伝えられないし、もどかしさを感じる。情報を欲してはいるが、なかなか難しい。てんかん発作時は伝えられない。

- ・「通訳・介助」がどういうことかを、まだ理解できていない。盲ろう者の場合、第三者の発言を通訳しても理解してもらえず、会話が成立しないとき。盲ろう者の手話が読み取れないとき。また、逆にうまく伝えられないとき。
- ・盲ろう者は困ったときに自ら help、save me、SOS のシグナルを出すことができません。田舎では、無視、陰口、仲間外れ、デマ、追い出すことをする人がいます。解決案として、役所、専門家、団体、身近へつなぐとき、表現技法、理解、サポート方法などを知らせることが鍵となります。

②盲ろう者との関わり

- ・盲ろう者が第三者に対してとても感情的になり、怒り出すときがある。そんなときは、通訳している自分にとっても精神的に苦痛であるが、なるべく平常心を保とうと努力する。しかし、「限界かな」と思うときもあり、どう対応したら良いか悩んでいる。盲ろう者が自分のニーズをきちんと伝えてくれないときがあり、聞き返そうとしたりしても受け入れてくれず、ニーズから外れたことを伝えてしまうと怒り出すことがあり、その対応も困っている。ご本人は伝わっていると思っているようだが、言葉足らずのため、ニーズを把握するのが難しい。盲ろう者が、加齢とともにできていたことができなくなっていって、ご自分では自覚されていないため、私や周囲の人、環境にできない理由を押しつけることが多くなり、今は見守るしかないが、今後ますますそういったことが多くなるだろうと思うと、負担である。
- ・自立支援という名称で盲ろう者を支援するのは、誤りあり。当事者に対して、私たちは同じ目線で会話をすることが大切です。全国の盲ろう者や視聴覚障害者が、各都道府県内に何人住んでいるか明確にして、その状況に応じた支援を考えて行うのが良い。私たちと同じ目線で同行支援する方が良いと思う。
- ・盲ろうの方だけでなく、すべての障害者が通訳・介助員より上なのか考えどころ。今後も盲ろうなどの勉強はしていこうと考えていますが、登録しても話がないし、盲ろうの方も通訳・介助される側として、毎回同じ方の希望が多いと思うし、登録だけで終わってしまわないようにしたい。
- ・ご家族から、対象者の状況（病気のことや、本人の思いなど）の説明がなく、家から出てどこかへ行って、という感じです。もっと楽しむことをしてほしい（楽しませてあげてほしい）と思いますが、行くところはいつも一緒。バスや電車にも乗せてあげたい！事務所で計画されるお楽しみ会などにも参加させてあげたいと思います。
- ・例えば、ろう者とは通訳でもプライベートでも付き合うが、盲ろう者の場合、プライベートで出かける場合と、介助で出かける場合の区別が難しい。友人として付き合いたい気持ちもあるが、一緒に買い物へ行くのは（たまにプライベートでも行く）、通訳・介助と内容がほとんど同じで、気を遣って疲れる。しかし、気持ちとしては友人付き合いもしたいと思っている。
- ・ふうわ（註：盲ろうの子とその家族の会 ふうわ）にも関係していますが、盲ろう者に「ふうわ」を理解してもらうことが難しい。一緒に行動もできないし……。盲ろう者の情報の不足、提供したいができない。ゆっくり寄り添うしかないと思いながらも、もどかしさを感じる。
- ・自分も手話通訳者でなければ、手話通訳の業務負担や疲労感の強さは分からなかったと思うので、仕方ないと思うが、通訳・介助の業務の大変さ、精神的、肉体的な疲労感が大きい業務であること

を、盲ろう者に理解してほしい。

- ・長年関わっていた盲ろう者が、いつの間にか自分の専属と勘違いして、ほかの盲ろう者の通訳・介助をしたら、すごく不満なようで、びっくりするようなことを言われた。
- ・発見が遅れた方でも、良い方向へ向かうでしょうか？盲ろう者に「こうあってほしい。こうなってほしい」と思う気持ちがあり、強く言ってしまったりするので、「ありのままを受け入れよう」と思ったり、そうする自分に対し、いつも自問自答しています。
- ・嫌だなと思うことを、たまに言われたとき（例えば荷物を持つ）、信頼関係が壊れるのではないかと断れないときがある。
- ・盲ろう者は、障害者であるとともに、一人間、一社会人である。また、未成年であっても必ず社会人と成り得る可能性大。故に、一社会人としての認識不足の場合は、極力お話して分かっているようにサポートすることもあります。あくまでもサポーターとしての域を超えないようには自覚、自重しています。本当に難しい問題が山積みです。
- ・盲ろう者の受けとめ方が間違っていて、訂正してもなかなか受け入れられない。ほかの手引き者の間違っただけの情報をうのみにして、トラブルにつながったりする。新しい情報がなかなか入りにくい。
- ・1985年に盲ろう者との交流があり、手のひら書きをしたり、点字でやり取りをしていた時期があった。その女性は僕をかわいがってくれた。しかし、ほかの入所者との交流は少なく、思い込みをしてしまいがちの面があった。情報不足からくる不安、対人関係の希薄さなどを感じている。2011年から、盲ろう者へ接近手話をするようになり、盲ろう者通訳の難しさを常に感じている。スキルの問題もだが、どのように盲ろう者が自分を受け入れながら自己実現できるよう援助するか、考えてしまう。
- ・盲ろう者の家庭内の話を聞かされるのは嫌（内容が悪口）。盲ろう者同士のうわさ話も困る。また、通訳・介助員の悪口。私もどこかで言われていると思う。お天気の話とか食べ物、趣味の話で楽しく会話したいと思っている。悩みを打ち明けられたときは、聞き役に徹する。
- ・通訳として利用者の方に接しているときは、友達としてではないことを伝えても、よく理解してもらえない。一緒に楽しむことも大切だと思うが、お茶をする仲間ではなく、利用者の方と、その友人がいる場合は、通訳に徹する仕事と考えていることも理解していただきたい。
- ・ほかの通訳・介助員の悪口を言われること。移動時、満員の乗り物の中で、席を譲られても嫌そうな顔で断るとき（機嫌の悪いとき）があり、困る。通訳が通じているのか反応がなくて困る。
- ・社会常識から外れたとき、どんなふうに話せば良いのか？指摘するのは簡単だけど、返答に困るような家庭内のプライベートな話をされると、嫌になるときがある。信頼されているのか？ただ単にはけ口になっているのか？
- ・外出時に白杖を使用してほしいのですが、なかなか受け入れていただけません。何年も言い続けてきましたが、最近では使用していただけるようになり、嬉しく思います。きっかけに功を奏したのは、同じ障害の方の白杖使用者からの説得と情報提供でした。
- ・会員同士の陰口を聞かされることに閉口いたします。
- ・盲ろう者の中に、私がよく通訳を担当する盲ろう者 B さんにライバル意識を持っている方がいます。私のことがよく分からないときには、普通に受け入れてくれたのですが、B さんを担当することが多いと分かってからは、「B さんの通訳をしている人だから嫌」と言われたりして困りました。
- ・盲ろう者の通訳・介助者に対する不平、不満が分からず、聞くチャンスもない。いつも、これでいいのかと迷いながら通訳・介助をしている。

- ・盲ろう者の中には、通訳・介助者のプライバシーについて質問することを、当然のように考えている人がいる。信頼関係ができていないうちから、また仮にできたとしても、お互いのプライバシーに深く立ち入らないように配慮するという「常識感覚」がほしい。情報が少ない分、常識感覚が薄れてしまうのかもしれない。通訳・介助者を依頼する際の、盲ろう者側の心構え的なものを、コーディネーター事務局から盲ろう者へ伝えておいてほしい。
- ・情報の中から自分で選択し、自分で考え、行動できる盲ろう者は少数しかいないのではないかと私は思ったことがない。トップで活躍している盲ろう者と、地方で今まで機会を与えられることもなく、自分で考えたり、行動してこなかった盲ろう者の差の大きさ、深刻さを、全国盲ろう者協会の方々にご存知でしょうか？
- ・社会的マナーを知らない？知っていても、平気でマナー違反をしている。
- ・通訳したことを納得した様子なので、こちらでも理解したかと思っていると、後で（忘れていたこともある？）「聞いていない」と言って立腹する。いちいち言い訳や伝え済みであることを、もう一度通訳するのも嫌なので、謝るのみ。
- ・近くに聴覚障害かつ視野狭窄の方がおられ、盲ろう者として登録すれば活動範囲が広がると思い、派遣事業について説明したが、ご本人が視野狭窄であることを受け入れられず、拒まれてしまう。
- ・通訳・介助の業務終了時、盲ろう者から利用券を受けとるが、盲ろう者が金額の計算をされ、嫌味のようなことを言われる。
- ・指示や、命令と似たような行動をされると、不愉快な思いをすることがあります。このことについて、盲ろう者にチケットを渡す際に注意喚起が必要と思われまます。
- ・通訳・介助活動をするとき、その時々でいろいろな場面に出くわします。それを利用者の方と向き合うこと、共に考えることが、私にとっては楽しいです。できるだけ強制せず、本人の気持ちを優先し、気持ちよく過ごせる時間を持ちたいと心掛けています。ただ、もっと経験する場がほしいです。××市の方で数回しました。利用者の方々に「あなたといると安心する」と言われたいです。
- ・適当な間隔で、盲ろう者と関わることの難しさを感じます。
- ・当事者とは、できるだけ対等な関係で、不便なところだけをサポートしようと考えているが、被害者（？）意識に捉われている人も多く、逆に我々の方が、人間として扱われていないのではないかと感じることもあり、戸惑いも多い。盲ろう者の不自由さは十分に理解しているつもりなので、できることはしたいと考えているのだが。
- ・他人の悪口をお話ししているとき、どのようにお答えするのが良いのか。難しいです。
- ・盲ろう者と過ごす時間が、とても楽しいときもあり、また苦痛を感じることもある。近すぎてもよくないのかなと、最近感じるようになっております。友人であるべきなのか？アドバイザー的に接するべきなのか？悩んでいます。長い人生の中で経験された試練、こだわり、見えていたころの学習、考え方は、巨大な壁のように思います。まだまだ学習不足、私自身の成長も必要です。
- ・解読のレベルの違いが、かなりあるときには、当事者の方にも自覚をしてほしい。すべてが通訳・介助者の落ち度ではないと思うことが、しばしばある。養成時には優しく育てると言われるが、そのときだけでマスターできるものではない。もう少し、幅を持った見方をしてほしいと思うこともある。手当を受ける以上、当然だが、それを口に出されるのはどうかと思う。お互いの人間性を信じて活動ができることを望んでいます。
- ・まだまだ経験が浅いので、せめてお互いにいい関係、「ここは、次回はこんなふうに」と盲ろう者の方が言えるように、何かあったら通訳後、すぐに確認し合えるようにしています（それぞれにコ

- コミュニケーション方法が違う。じっくりくるタイミングになるまで)。盲ろう者の方が、私たちに気を遣わないでプチ反省会みたいところで。自分も次回の折には注意していくようにしています。
- ・中途の障害を持つ方、また、社会参加の経験が少ない人に対して、メンタルケアやエンパワメント力が必要と考えています。本人の尊重を十分大切にし、必要なときは必要な支援ができるように心掛けていきたいと思います。
 - ・ある盲ろう者は、親の年代の通訳・介助者の意見が、ときとして「介入」と感じることもあるらしく、自分はその言いなりになっていると思うこともあるらしい。そんなことは絶対なく、盲ろう者本人の意志を尊重しているので、もっと大人になってリーダーシップを発揮してもらいたい。
 - ・盲ろう者が、特定の通訳・介助員に頼りすぎていると思う。
 - ・ほかの通訳・介助者の悪口を言われる。自分のことも、ほかの通訳・介助者に言われているのでは？と思うと、嫌になる。
 - ・一度でも手話を間違えると、ものすごく怒られる（長い目で見てほしい）
 - ・ほかの通訳・介助者と比べられる（Aさんはできるのに、あなたはできないと責められる）。通訳・介助を辞めたくなる。腹が立つときは、ばかばかしくなる。通訳者も1人の人間です。
 - ・講演の通訳・介助中に、私語をしゃべり始める癖のある盲ろう者を介助したとき、どのように注意すれば良いか？
 - ・通訳・介助員という役割を徹底しにくい。第三者とのコミュニケーションを通訳するときには、私情を挟まず通訳し、1対1で話すときには、私情を入れた会話になる。また、友の会で活動するときは友人になる。その辺りの、お互いの気持ちの切り替えが難しく感じる。でも、それがほかの関係とは違って、魅力に感じる部分でもある。
 - ・盲ろう者の意見を聞いても「どちらでもいい。任せる」と言われるのは、非常に困る。
 - ・行事などの進め方のアドバイスをして、情報を提供しているつもりだが、そこから前に進まず困ることがある。
 - ・ある盲ろう者は、「“盲ろう者のルール、マナー”と“健聴者のルール、マナー”とは違う。だから、お前の言うことはおかしい！」と、一般的なルール、マナーを守らない。いくら話しても聞いてくれない。また、その方に通訳・介助者や事務所が遠慮して、そのままにしている（自分の思う通りにならないとすぐ怒るので）。「自分の情報が正確だ！」と、ほかの人の話を聞かない。
 - ・依頼を断ると理由を聞かれ、納得いただけないことが多く、プライベートな部分も詳細に説明しないといけない。
 - ・活動費の不足。
 - ・盲ろう者の方の指示に従い、通訳・介助をしています。盲ろう者の方が、ある契約書を記入するときに代筆を頼まれ、代筆のところに捺印するように言われました。私は指示に従いました。盲ろう者の方は、通訳・介助員を信頼しているからだと思いますが、このことが気になっていました。
 - ・盲ろう者は、自分のことを考えるのに精いっぱいの方が多く、団体活動や盲ろう者全般に関わること（例えば制度改革のこと、会の活動全般のことなど）についての関心が極めて薄い。これらについての情報を与えても、理解できない場合があり、盲ろう者の自立と社会参加の道は遠い。
 - ・自分の思い通りにしたい盲ろう者がいる。盲ろう者同士で意見が合わなくて、何かを決めるとき、時間がかかることもある。相手の気持ちを尊重していけばいいな、と思えます。
 - ・どこまで関わるのか、関わり方に悩むときがある。
 - ・利用者本意ということ。

- ・ほかの盲ろう者を担当したのか、気になる方がいます。「守秘義務があるから」と答えないと、怒ってしまったり、通訳・介助者への理解がない方がいるので、困るときがあります。
- ・積極的に通訳・介助に関わろうとしています。ある出来事をきっかけに距離を置くようになりました。ガイドヘルパーとして視覚障害者の介助を行うときも、自分の友人と出かけるときも、行先の情報や交通について事前に下調べをし、当日迷わないように準備をするので、同様に、ある盲ろう者のガイドのときも準備し、盲ろう者にもそのことを伝えたところ、「余計なことをした」と言われたので、「確かに自分で調べたかった方に対し、出すぎたことをした」と反省し謝り、以後気をつけることを伝えたのですが、その後、その方の態度は都合のいいように使うだけ使い、理不尽なことを言われました。私は通訳・介助員歴が浅く、勉強段階で至らないところが多かったと思いますが、理不尽な対応にがっかりしました。ほかの盲ろう者の方は、そうではないと分かっていますが、利用者を選べないと思いますので、活動をためらってしまいます。
- ・障害故なのか性格なのか分からないが、人間性を受け入れられないところがある。
- ・明らかに無理と思われるようなときでも、自分の考えを通そうとするとき、どう対処すべきか困ることがあります。性格なのでしょうね。
- ・一線を置くことの難しさ。1人の人との介助年数が長くなると、依頼をした時点で承諾が当たり前のように思われ、断ることにとても悪いことをしたと思います（罪悪感）。なかなか仕事として割り切れないでいます。
- ・盲ろう者の方が希望するような説明ができないときが多々あります。通訳が困難なとき（個人的な意見を求められるが、思ったことを素直に話していいのかどうか判断に迷う）。本人が望んでいることが、どのようなことなのか理解できず聞き返すが、答えてもらえないか、または気分を害されることがある。そのようなときの対応が分かりません。盲ろうであることを甘えている場合があるのでは……。
- ・一般常識を理解していない。
- ・全国盲ろう者大会や総会でよく眠る。そのまま寝ていていいのか判断に困る。トントン肩はたたくけど……。ほかの介助の方は、そのままにしていると聞きましたが？
- ・盲ろう者の自発的な参加（友の会、そのほかの活動）をしてもらうには、どのような手立てが大切なのか、毎回悩む。手話での発言を求めても、通訳者に発言を求めたりして、自分を出されない。移動（乗り物の乗り降り）の介助で怒られたり、突き飛ばしたりされ、介助の方法に問題があることを痛感した。
- ・一般的な社会ルールや盲ろう者同士の理解など、助言することがあります。しかし、1人の通訳・介助員に依存している盲ろう者の場合、理解してもらうのが難しい場合があります。また、盲ろう者は通訳（読み取り、状況説明など）内容が正しいのか確認することができないので、登録後の通訳能力の研さんが、とても重要だと思います。通訳者側の問題（倫理、技術）に、もっと盲ろう者も気づいてほしいです。
- ・通訳・介助活動において、盲ろう者と対等ではなくて、上下関係と感ずることが多い（もちろん通訳・介助員が下、盲ろう者が上）。それで良いのかと疑問に思う。
- ・通訳・介助員が養成講習会で学ぶ内容を理解していない盲ろう者の方もおり、おしゃべり相手として関わられるときがよくある。「通訳とは何か？」は、その盲ろう者が「何を望んでいるのか？」に置き換える方が大切で、「盲ろう者にとって良い通訳・介助者とは？」を考えることが多い。
- ・車に乗車するとき、シートベルトを締めてあげなかった。自分でやってもらうことが、本人を尊重

することになると考える。でも、やってあげるべきなのか迷います。

- ・階段を降りるとき、横に転がっている缶が盲ろう者の目の前にあり、危険なので止めて、状況を通訳し、私が缶を取ろうとしたのですが、その盲ろうの方は「大丈夫だ！平気だ！」と怒っていました。歩いてみたら分かると言い張っていましたが、踏んでからでは滑ってしまうし、明らかに転げ落ちてしまうという状況だったので、内緒にして缶を取り除きました。通訳としては矛盾していますが、命を守るためには仕方がないことだと思いつつ、難しいと思いました。
- ・制度の中での派遣ということが分かってもらえない。個人的なわがままを通す。自分の思うようにならないと個人攻撃をするなど、社会通念上のルールが身につけていない面で、通訳・介助者との関係を作りにくい人がいる。
- ・盲ろう者が必ず眠ってしまう。どんなに助言しても「眠ってない」と言う。通訳・介助がいらないときは「眠ってしまうかもしれませんが、そのときは通訳休んでもいいですよ」、「眠っていても通訳は続けてください」などと言ってくださいと言っても、「通訳者が下手だから眠るんだ」と主張。盲ろう者への通訳のエチケット本があれば。
- ・盲ろう者が飲酒するのは自由ですが、酔っぱらうまで飲むので、介助、コミュニケーションも大変です。自覚した上でしていただきたいと願っています。
- ・こちらはまだ勉強中で、「手話が下手だから交代しろ」と言われ、手話通訳士の資格を持っていれば良い、という考え方が盲ろう者の中にあり、自信がなくなり通訳をやれないことがあった。
- ・情報が足りないというが、盲ろう者自身からどんな情報がほしいか出してもらえず、いつも必要最小限になっていることが気になる。
- ・障害当事者の自己主張が強すぎる。割に努力が足りない。
- ・いつもは相手が弱視で、接近手話で伝えています。そのほかの人は、もう見えないぐらいのレベルで、どう接したらいいのか迷います。本人は見えなくて、じーっとしているのは申し訳ないので、気を遣って話してあげたりしています。
- ・個人的なつながりや関わりが濃くなるほど大きな要望や期待が寄せられ、かなりしんどかった。盲ろう者の個性がかなり強く、支援者が定着せず減る一方で、特定の人への負担が増えてしまった。
- ・個別性を考慮したサポートは難しいです。
- ・数年前までは、友の会などに出席して活動していた盲ろう者が、今は自分の殻に閉じこもって、なかなか出ていかない。頑張って2年前くらいで点字を習得したのですが、今はやりたくない様子です。気長に付き合うしかないと思っています。
- ・対人関係が希薄。それなのに、遊びや買い物の依頼が多い。人と人とのつながりを築くための通訳・介助だと思うが、あまりにも個人的に楽しむことばかりで、支援する気持ちが薄らぐ。それがとても嫌な気分になり、テンションが下がる。かといって、本人には言えず、不満がたまる一方だ。
- ・手塩をかけて通訳・介助者を育てようとする気持ちが伝わらない。
- ・通訳・介助者の悪口ばかり聞かされ、うんざりする。
- ・少しでも否定すると、爆発したように怒鳴る、手に負えない盲ろう者もいる。
- ・慣れすぎて、逆にコミュニケーションを省きすぎて通じなかつたり、互いに誤解することがある。・盲ろう者に生きがいがなくなると、非盲ろう者として強い参考意見が述べられない。
- ・通訳がうまく伝わっていないため、勘違い、または思い込みをされているときの修正に困ることがある。
- ・その場で、本人（盲ろう者）から了解をもらっていても、後で支援者の口からまったく違う本人の

気持ちを聞かされることがある。このようなとき、本人に確認をしないといけない内容のときは、変に言葉を選んでしまう。

- ・通訳・介助者を厳しく比較する言葉。資格を取った当初、よくサポートさせていただいていた、ある盲ろう者からの言葉。その人には何年もサポートし、一緒に活動している介助者（Aさん）がいる。長時間の通訳・介助のときは、Aさんと私の2人で担当することが多かった。そのとき、Aさんと私を比較し、その言い方が私にはつらく、傷ついた（通訳技術が未熟で、ご希望に沿えなかったのも分かるが）。盲ろう者と通訳・介助者も「相性」というのがあるかも。
- ・電車の中や待ち時間に、人のうわさ話ばかり話してこられるのは困ります。
- ・講演会などで話を最後まで聞かず、話している人に関するほかのことに興味を持って質問にくる。特に個人的なことを聞きたがる。終わってから本人に直接聞いてみるように話しますが、それができないようです。
- ・今まで困ったことはないが、その人の分かる範囲、分かる言葉（ぴったりくる言葉）、楽しいと思うこと、嫌だと思えることを早くつかみたいと思うので、その人の情報がほしい。また、家族が関わっているときは、その人たちのことも理解する必要を強く感じています。
- ・盲ろう者から言われ、または態度で傷ついたり、してほしくないことなど、人にはなかなか話せず「つらいな」と思うことはあります。
- ・盲ろう者が約束の時間より10分、20分遅れてくる。何かあったのか不安になる。
- ・通訳・介助者のときと、それ以外のときで、盲ろう者に接する態度（接し方）が異なる（友人と通訳・介助者）と思うので、それを理解してもらっているか不安です。
- ・通訳・介助活動を始めたばかりだが、始めたころはやりがいを感じていた。回数を重ねるうちに、接し方の難しさに触れ、今では「業務（通訳・介助）が無事に終われば……」と考えるようになった。私は経験がないが、ある盲ろう者がとても怒って、感情的になっている様子を見たとき、怖くなってしまった。
- ・相手によって対応すべき内容が違うので、初めての人の通訳・介助をするとき、戸惑う。事前にどれだけ聞いておけば良いのか、聞き過ぎるのも失礼なのか、難しい。
- ・どこまでサポートすべきなのか、迷うときがある。考え方が食い違うとき、自分の考えを言うべきか、聞いているだけか迷う。いつも迷いながらサポートしている。みんな同じだと思う。
- ・中年層（30代～40代）の盲ろう者にも、社会的常識を身につけていない人がいる。その人たちに分かるように説明することに、困難を感じる。
- ・社会的に問題のある行動を指摘したときに、盲ろう者の受け入れてくれない態度。あまりにも盲ろう者の代弁をしすぎる通訳・介助者とのギャップ。
- ・障害の進行度と、本人の認識の状況。
- ・トラブル防止のため、不良、やくざの弱視ろう者を追放してほしい。
- ・時間を守ってもらえない。「ボランティアでしてくれる人もいるのに」と言われたりする。
- ・盲ろう者との関わり方が、自分のやり方で良いのか確信が持てない。ほかの通訳・介助者の関わり方の様子を見て学ばせてもらっているが、自分には受け入れられない関わり方をされている人もいる。盲ろう者の望む通訳・介助とは？と考えることが多い。
- ・「ほかの盲ろう者は常識がない」と言われても、何と答えて良いか、同意することもできず困った。
- ・対人間として1人1人の状況を把握し、情報提供しながら、良い関係を保つように心掛けている。
- ・盲ろう者の生活の質を上げるために、通訳・介助者ができることは何なのだろうか、と考えてしま

う。おせっかいはダメだと思っているが、情報提供の在り方は、どうしたらいいのだろうと思っている。

- ・指点字の練習中、疲れるのは分かるが、いねむりをされるとがっかりする。盲ろう者と通訳・介助員が、ほぼいつも決まった人だが、育てる気持ちを盲ろう者も持ってほしい。

③盲ろう者主体

- ・年に数回しか活動していないのですが、定例会など、通訳・介助者が主導しがちに感じられる場面がある。「盲ろう者の主体性を尊重するとは」ということについて、学んでいきたい。
- ・主体はあくまでも盲ろう者本人で、私たちは情報保障をすることが大切だと思います。なかなか、すべてそういかないことは悩むところです。保護者ではなく、あくまでも通訳・介助であることを基本に考えたいと思います。距離の取り方が難しいと思うことがあります。
- ・盲ろう者の中には「盲ろう者主体」を「盲ろう者の思うまま」と勘違いされている方もいます。おそらく、この派遣事業の趣旨が、盲ろう者と通訳・介助員の双方に共通理解されないまま、スタートしたからではないかと思われます。勘違いは、支援者側から言っても受け入れられません。自分のお気に入りの通訳・介助員からの意見のみを信じる傾向にあり、広く意見を求めたりせずに信じてしまう場面を、よく目にします。自分たちの意に沿わないと悪口を言って排除し、それをすべて「盲ろう者に対して理解がない人間」として正当化してしまうため、通訳・介助員は、ますます何も言えない状態になってしまっています。通訳・介助員として守秘義務もあり、それを悩んでも解決の道も見つからず、辞めてしまう方もいるのです。通訳・介助員としてどのような支援が必要なのか十分議論されず、理想的な支援も示されず現場に行き、すべてがケース・バイ・ケースで行われるため、犠牲的精神の通訳・介助員が頑張る状況になっています。盲ろう者の情報障害は重く、その支援には専門技術が必要なのです。通訳技術だけでは、限界ではないでしょうか。支援者として、きちんと理論を学ぶ場がほしいと願っています。
- ・手話通訳者としての活動から入ったので、「通訳」の部分は理解できるが、「介助者」の活動の仕方、養成講座では「盲ろう者の主体性」について触れられ、また特殊なコミュニケーション手段、介助の仕方などについて述べられているが、介助者の担う責務、あるいは介助の中身が、個々の盲ろう者に対応してほしいという説明で、それも当然のことだと理解しているが、「介助」についての説明がない。ご本人の主体性を尊重するのはもちろんのことだが、本当にそのやり方が、ご本人にとってプラスなのか迷うことがある。宿泊事業では、個別支援計画を作成して行っていたが、実際の派遣場所では同様に行っているのか、行っているとしたら何らかの支援の必要な方がいるとしたら、計画全体はオープンにはできないまでも、方向性を示していただけると、介助に結びつけられると思うことはあります。
- ・盲ろう者によって持っている障害、家庭環境、考え方、通訳・介助者に望んでいることが違うので難しい。まず、盲ろう者自身がどうしたいのか、何を望んでいるかを通訳・介助者に伝えてほしい。
- ・どこまで個人的なことに踏み込んで良いのか、戸惑うことがあります。盲ろう者の主体性を尊重したいけれど、積極性に欠ける傾向にあるような気がします。
- ・盲ろう者自身が判断、決断してほしいことまで相談されて、困惑するときがありました。
- ・相手の感情、言いにくいことを、どこまで当事者に伝えても良いのか？「空気を読む」周りの雰囲気。目が見えて聞こえて判断できる部分を、どこまで話しても良いのか？悩みました。

- ・盲ろう者本人のことは優先で尊重されるので、通訳・介助員が先んじて行動する必要はないと思います。盲ろう者の希望をありのままに受けて、サポートした方が良いと思います。何かあったら（講演会、コミュニケーションほか）盲ろう者に話題を報告する必要があります。
- ・盲ろう者自身も学習し、制度を理解することが大切だと思う。
- ・移動時の方法についても、両者が共に学び、共通認識を持つことが大切。

④盲ろう+他の障害がある場合

- ・通訳も大変ですが、身体が不自由な方で通訳と介助の両方がある場合、身体もサポートが必要なので、移動のときなど、通訳する以上に支援が必要な場合がある。
- ・排泄介助も必要な盲ろう児を担当することが多く、てんかん発作があったりするので支えることが多いため、こちらの体力を考えると、年齢的にいつまでやれるものか。
- ・知的障害もある盲ろう者について、事前にはっきりとした通知もなく、接し方が分からず困惑する。知的障害について知識のない者に通訳・介助は難しいと思う。
- ・盲ろうのほかに妄想も多い方の通訳・介助の仕事は、いろいろな場面での判断が難しい。
- ・家族が障がいに対して理解がない。
- ・盲ろうになってから、ずっと家に閉じこもっていた方なので、社会経験がなく、語彙も少なくコミュニケーションが難しい。

⑤盲ろう者の高齢化

- ・盲ろう者が高齢になってきているので、思い込みや認知の問題が多々増えてきています。聞こえない、見えない、コミュニケーションが取れないときがあります。そんなときに、アドバイザーがいてくださるとありがたいと思います。
- ・高齢になり忘れることが多く、前に通訳したことが分からなくて、話を元に戻して理解してもらったり、混乱するので必要でないところは省いたりしています。
- ・対象者が高齢になり、通訳・介助→介護になってきている。大変な方もいるので、こちらも年を取り、なかなか思う通りにできないときもあり、「リタイアを考える」時期を考えることが大切かな、と思う。手引きのとき、腕にぶら下がる方や、体を密着させる方もいる。なかなか「やめて！」とは言いづらい。
- ・対象者が高齢になってきて、1人で支えるのが不安なときがあるので、人によっては2人対応ということも考えていただければと思った場面があった。
- ・高齢の盲ろう者は、障害だけでなく、認知やほかの身体症状もあり、通訳や介助をする上で、専門知識や技術が、より必要である。個別対応する上で、盲ろう者の場合、相性など特定の人に限定される。手話通訳なら不特定多数の人と対応できる。
- ・盲ろうという障害+80歳近い年齢の方の通訳・介助は、車いすでの介助になり、しかも泊まりのとき、1人ではあまりにも大変です。食事の介助をして先に食べさせてから、「少し待ってください」と急いで自分の食事をしようとしても、本人から「もう部屋で休みたい」と言われ、ご飯も食べられません。一晩中、1時間ごとにトイレへ連れて行って、寝ることもできない。転倒事故が起きては大変だし……。通訳・介助者を2人にしてもらおうなど、考えていただきたい。
- ・高齢になると認知症状が出ますが、気の済むまで話を聞いてあげたい。時間の制約が恨めしい。

⑥盲ろう児（者）・家族との関わり

- ・先天性盲ろう児と、その家族への支援が必要である。行動や交流が限られているため、地域での居場所が必要である。行政も含め、先天性盲ろう児・者への知識を啓発することが必要である。
- ・通訳・介助者同士で食事会をするな。指字と音声通訳は、資格者に対して平常的、平均に仕事が来るように希望する。会計上、支出を明確にすること。私は、ふうわで活動したい。盲ろう児に、光と音の素晴らしさを伝えたい。盲ろう児のために尽くしたいと思う。遊び相手として。
- ・ご家族の問題をご家族に伝えられない。でも、繰り返し聞くのはつらい。
- ・盲ろう者への支援は、どうしても本人だけでなく、家族などの影響も受けやすい。本人にとって、良い支援を行おうと思っても、家族に反対されたりすることがある。以前、ある盲ろう者のお母さんと話すことがあって、今の話をすると、まだ友の会がなかったころの苦労話をされました。それを聞いていて、盲ろう者支援は「家族会」的支配が、まだ抜けていない部分があるんだな、と感じることがあります（特に地方の友の会では）。手話でも要約筆記でも、通訳者の会がありますが、盲ろう者向け通訳・介助員には、そういった会がありません。どうしても家族会的な圧力を感じてしまいます。
- ・家族から虐待を受けている盲ろう者がいます。法律改正に伴い、救ってあげたいのですが、ご本人が仕方がないとあきらめているのが悲しい。残念です。
- ・用事で盲ろうの方の家に伺ったところ、盲ろうの方よりも奥様から言われることが多く、また、あまりにも個人的な内容で、返事に困りました。通訳・介助の立場で、知りたくない部分まで踏み込むことになってしまうことがあるのが困ります。
- ・盲ろう児の通訳・介助の際、足けりをされ痛い思いをしたが、子どもなので必要以上に言っても分からず（理解不可）、とてもつらい思いをした。
- ・重複障害の方の通訳・介助活動の中に、点字の勉強を入れて活動しておりますが、家族の応援がなく、最近では手書き文字に切り替えての対応しております。また、音声での情報を伝えております。今後のことを考えると、どうしたら良いかと悩んでしまいます。1人での行動が無理なために、通訳・介助の中では、本人の希望を聞いて、少しでも楽しい時間になるように無理なく進めております。
- ・お子さんの通訳・介助のとき、事前に親からの注意点など、細かく連絡をいただけるとありがたいです。
- ・家族が通訳・介助をしている盲ろう者の場合、ほかの盲ろう者と違い、とても気を遣うし、コミュニケーション方法が違うときがあり、入り込めないので依頼されたくない。家族が口出しするときがある。
- ・日常の通訳・介助のほかにも、親子関係、夫婦関係のような悩みをお持ちで、介入困難な場面が多々ありますが、話を聞くことがたびたび繰り返されると、どのように対応してあげたら良いのだろうと思います。
- ・盲ろうの方と家族の方は、どのような意識を持ってほしいと感じるのか知りたいと思いました。
- ・盲ろう者になった段階で、盲ろう者自身の判断すべき環境は、違ってくると思います。情報の入手の少ない盲ろう者にとって、家族が適正な判断をし、盲ろう者に伝えなければならないと思います。個人個人、1人1人違うのが、盲ろう者の難しさだと思います。

⑦セクシャルハラスメント

- ・仕事でもプライベートでも、もし盲ろう者から性的アピールをされたらどうしたらいいでしょう。か（例：結婚しているか尋ねられる、手をつなぐなど身体的接触を求められる）
- ・セクシャルハラスメント発言を大声でされたりした。
- ・本人（盲ろう者）は、特に問題にしていらないようですが、体を触ったり、手を両手で握ってきたりする場合がある。悪気がないのは理解できるが、対処法に困るときがあります。
- ・通訳・介助中（特に移動中）、体に触れる盲ろう者がいる。その場ですぐ言うべきか、報告に挙げるべきか迷う。盲ろう者も研修を積んでほしい。侮辱されているような感じを受け、その人の通訳・介助をしたくなくなる。
- ・過去にメールアドレスを教えたために、1日中メールが来たり、家へも来てしつこい。
- ・触手話のとき、セクシャルハラスメントを受けた経験あり。派遣センターに伝え、以後、その方の担当は外していただいている。
- ・派遣以外の「友人として」の依頼が、派遣の5倍はある。もちろん内容的に派遣できないものか、お金がかかるため、盲ろう者が2人分負担できないから、などの理由もあると思う。しかし、「派遣」で行政にも報告されているのは「氷山の一角」でしかないことを、国にも自治体にも理解してほしい。また、盲ろう者のパワーハラスメントやセクシャルハラスメントも、残念ながら続いています。
- ・異性の介助時に、常識外れ（と言いたくなる）な性的な話をされるのは、はっきり言って困惑するし、通訳・介助員が離れていく原因と思われるが、表に出せないし、出てきていないと思われる。
- ・セクシャルハラスメントに近いことをされたり、チケットを時間通りもらえなかったり（多かかったり少なかったり）といった問題があっても、解決するのに精神的な負担が少なくないので、もうその人の通訳を辞めてしまおうかな、と思うこともあった。
- ・私自身が60歳を過ぎているせいか、異性の盲ろう者との移動介助のときに手をつないだり、腕を組んだりされることに抵抗がないのですが、盲ろう者のためによくないのか……と思うようになってきました。
- ・初級、中級の講座を受け、盲ろう者向け通訳・介助員の登録をしていますが、活動はしていない状態です。講座での短い実習時間の中で、音声による通訳をしている間、男性盲ろう者にずっと太ももを触られていたことが、とてもショックでした。初めは、自分の体が近づきすぎているのかと思い、体を少し離しましたが、それでもなお、相手の手が伸びてきました。（通訳を男性の方に交代したときは、ご自分の足の位置に移動しました）。女性の知人の話ですが、男性盲ろう者に、どんな体型の通訳者か知るために、胸とお尻を触られたと聞き、驚きました。触って相手を確認したい気持ちは分かるところもありますが、困りました。
- ・男性の年配の方を通訳・介助するに当たって、肌の接触などの度合いが「介助」の枠から超えているのではないかと感じたことがある。少々不快感を覚え、エスカレートした際には、男性の通訳・介助員に担当を代わってもらったが……。その後は、女性の通訳・介助を希望したいと思った。
- ・個別の通訳・介助活動の経験はないが、交流会などで通訳に入ることがある。男性の盲ろう者の中には、やたら触ってくる人がいるので困ることがある。確認のためのようだが、必要以上に触られるのは好きではない。まだ、通訳をすることに不安を感じることもある。
- ・一度だけ男性に手をすごく触られ、ちょっと嫌でした。

⑧盲ろう者の学ぶ場

- ・通訳・介助活動をしてもらう盲ろう者の立場から、意見を聞きたい。また、盲ろう者も通訳・介助活動の内容を学ぶべきだと思います。
- ・派遣制度の充実とともに、盲ろう当事者としてのマナー学習の場が必要と感じています。
- ・登録者に対して、盲ろうという立場で講師を担当できる人材が少なすぎることに。
- ・盲ろう者も社会的なマナーや、一般常識的な道徳の勉強などの場を作って差し上げる必要があると考えています。皆が皆ではないが、知識を持っていない人もおられますので、講習会など開いていただけると助かります。

(2) 移動介助

①移動介助

- ・外出時に、たまに白杖使用の盲ろう者と会いますが、そのとき、つい手を貸してあげる（1人で歩いているので）。このように、安易に手を貸してあげても良いものだろうか？本人はとても感謝していますが。
- ・歩行時は右手で介助し、通訳時は右手で触手話をする人が多いので、右手の負担がかなりある。通訳をするときの手の負担は仕方ないと思うが、介助するときは、盲ろう者が通訳・介助者の肩や腕をつかむ方法で行い、通訳・介助員が盲ろう者の手を引いて、ひじを力を入れて曲げながら引いて誘導する介助の方法を、少なくしてほしい。
- ・移動中、経路の把握の前準備に時間がかかる。
- ・介助については、盲ろう者の身体の安全を第一に守るべきなので、スキルがないと不安である。
- ・ポストへ行く近道などで、横断歩道を渡らない。
- ・一応、自力で移動できる弱視の方が、白杖を忘れることがたびたびあります。通訳・介助のときには、私の腕につかまってもらい移動するので、やはり白杖は持ってきてほしいと思いますが、私からこの希望を伝えたことはありません。
- ・まだ経験が浅いので、盲ろう者の自宅から移動する際に、介助方法が身についていない。盲ろう者に希望を聞いても「問題ない」と回答。しかし、自分では自信がないどころか、ハラハラする場面もあり、盲ろう者が気づいていないわけではない。どんな介助をすべきか。盲ろう者の要望を聞けるには、どのようにすべきか困っている。
- ・方向音痴なので、相手の家に行き、そこから目的地に行けるのか不安があるので、依頼があってもお断りすることが多いです。
- ・移動のとき、転倒などしないか心配です（高齢者、足の弱い方）。自分の不注意になると考えます。
- ・室内での触手話通訳はいいけれど、ガイドとなると自分も聴覚障害なので、車などの音に気づかないこともあり、ガイドをすることは自分も不安である。
- ・中山間部への送迎があり、雪も少なくない地域なので、冬場の依頼は不安である（男性に代わってもらう）。
- ・外出時の移動。エレベーターなどないときの階段、乗り物などが不安（移動に不慣れな人や、高齢の盲ろう者）。
- ・移動に車使用が認められていないこと（1時間1本の交通手段を使用すると、1日8時間では時間

超過となる)。

- ・移動介助の方法を当事者が知らない (一緒に勉強していけると良い)。
- ・場所的に移動手段が少ないので、「自分の車に乗せてくれ」と頼まれることがあります。私は自分の運転に自信がないので、「もし事故にでもあったら」と思うと不安です。現地集合であるべきと考えます。
- ・私たちの地域では交通が不便で、公共交通機関の利用だけでは、移動は不可能です。そのため、通訳・介助に自家用車の利用が欠かせないのですが、事故などの保障が不鮮明で不安であり、私自身は車で同乗移動はしていません。今後、通訳・介助者が万が一のときに、安心できるサポートが必要と考えます。また、盲ろう者に関わり通訳・介助をする時間より、ボランティアで、無償で動くことの方が多く、1日数時間、交代もなく通訳をすることも多く、過酷な状況です。
- ・車での移動(配車)は危険が伴う。保障はしっかり付けてほしい(物損なども含む)。
- ・介助の部分で、自車に盲ろう者を乗せることになるが、家族がほかの人を乗せることを嫌がることや、もし事故を起こしたらなど考えると、面倒とってしまう。移動手段、交通手段が限られる人の場合は、通訳・介助者も考えてしまい、積極的に引き受けない要因になっている。
- ・移動に関する負担が大きい。自家用車に同乗させるときの責任について、特に負担を感じる。
- ・車での移動支援が多い地域なので、どうしても自家用車で、介助の責任を負っての運転を強いられる。保障もほとんどない中で、かなりのリスクがある。サポートの範囲を超えるリクエストがあり、なかなか断りきれないことがあった(例:昼を挟んでの通訳・介助で、行きたい店の指定があり、時給を超えるランチ料金、買い物依頼、予想以上の大荷物、店回り、身体への負担あり)。事例検討する場がなく、相談できない。
- ・交通が不便な地なので、冬期の運転が心配。
- ・通訳・介助のときは、自動車を利用することになるので、安全面で不安がある。

(3) 通訳・介助員

①通訳・介助員の質

- ・派遣事業に基づいて通訳・介助員が動くが、質の保障が各通訳・介助員によってバラバラ。質の均一化と、盲ろう者の成長を見守れるだけの力量が要ると思う。それが、手話通訳者みたいな資格を生み出すことになるのでは。
- ・盲ろう者自身が得られる情報の少なさ、また、不便の多さにより生まれる通訳・介助員への信頼。この複合的問題の中、情報操作とも思える通訳活動を行った通訳・介助者とともに、団体を去っていく盲ろう者がいます。私たち通訳・介助員が持つべきモラル、1人で盲ろう者を抱え込むのではなく、みんなで支え合う意識、そういうものも技術とともに伝えていけたらと思います。
- ・複数の盲ろう者や通訳・介助者が集まる場で、目にあまる通訳・介助者が、最近増えているように感じる。同じ通訳・介助者の立場として注意することもあるが、もっと派遣担当や友の会の方が、そういう場でよく確認(観察)して、注意するなり、教育するなりしてほしい。同じくらいの経験の人からも、同様の意見をよく聞く。盲ろう者の不利益につながるので、養成しっぱなし、派遣しっぱなしにならないようお願いしたい。
- ・特定の通訳・介助員が「この盲ろう者は私のもの」的な態度を取る。私が、その盲ろう者に話しかけようとする、手を持っていってしまう。あくまで、どうするか判断は盲ろう者本人がすべき

ことであり、通訳・介助員が盲ろう者の意見を聞かずに行動するのは、いかがなものかと思う。

- ・ろう者なら、即登録可能の時期があったと思う。その人たちは、全国盲ろう者協会主催の養成研修会を受けてほしい。本当にモラル、プライバシー、移動介助など、なっていない方が多く、盲ろう者は我慢している。もっと厳しくしてほしい。
- ・情報障害者と訴えているように、誰かが知らせない限り（点字情報もあるが）、情報を得られずに過ごされているので知識不足で、通訳・介助者が、ときに上から目線で伝えている場面を見たりすると、自身はどうなのか？見えない上に聞こえないという、他者のイメージした、考えた、思った、ときには私情が入った情報で、盲ろう者はイメージを作ることになり、そのことで誤解などが生じる、説明するほど膨らんでしまいます。人が人のことを思いやることは、人それぞれ違いがあるので正解は難しいです。ただ、盲ろう者の支援者が増えることを望んでいます。

②通訳技術

- ・音声通訳の際、相手が怒っている場合や、盲ろう者に対して失言を言った場合など、そのまま言葉や感情を相手の前でストレートに音声通訳するのが難しい、と感じることがあります。通訳をしている盲ろう者の方の性格を考慮し、ストレートに伝えた方が良い方や、その場で失言を言われることで、嫌な思いをしたくないと考える方など、盲ろう者本人に合わせて通訳を考える必要があると思います。
- ・ろう者の手話通訳が身に染み込んでいて、盲ろう者通訳に切り替えが難しいことがあります。まだ自分自身、理解できていないことが原因だと思いますが、講習などではいろんな方がいるため、深い話までは持っていけない現状です。
- ・指文字と手話を使うときに、相手に尋ねて使った方がいいのか戸惑うときがある。子どもが目を酷使するので、将来、眼の病気が心配。親も難聴なので、一緒に子どもも体験させたいと思うけど、皆がやらないと1人では参加しにくいので、やりやすい環境を望む。手話を使わないので、すぐ忘れる。話したいと思っても、手話で話せないから、コミュニケーションが取れません。
- ・聴覚障害者への手話通訳活動や、平素の交流が長く続いているので、手話通訳のとき、手話範囲が広くなりすぎたり、表情が大きくなりすぎて、先輩から注意を受けることが多く、努力しているところですが、なかなか身につけにくく困っています。
- ・手話が覚えられず困っています。毎日の練習、努力が必要と思っていますが、自分から逃げています。
- ・通訳は本当に難しいです。自分の仕事の片手間に行うようなことではないと思っています。
- ・技術、経験不足が原因と思いますが、読み取り間違いをすることがよくあります。
- ・音声通訳のとき、静かなところで、ご本人の声が大きいとき、なかなか注意できない。
- ・通訳のレベルが低いため、うまく伝えられないので、いつも申し訳なく思っている。
- ・通訳技術が足りていない。
- ・盲ろう者同士でけんか状態になり、相手の意見を伝えると、さらに激しくなることが分かっているのに、伝えるべきか悩むことがある。
- ・日常にあふれる音声情報や通訳場面での情報を、聞こえたものすべて通訳しても（すべてはなかなかできませんが）、盲ろう者はあまりの情報の多さに混乱するばかりだと思います。伝わりません。取捨選択する技術（ポイントを伝える）は、非常に難しいです。対象者にとって、ほしい情報、必要な情報を正確に伝えられたのかと悩みます。

- ・通訳でも、会議などで盲ろう者同士が感情的になって過熱状態になったときの通訳のスピード、話の内容、相手の様子、声の強弱などの状況説明を正確に伝えていかないと、内容が伝わらないことにより、さらに話がこじれたりする場合があります。通訳・介助者の技量や、司会者にルールを持った発言をしてもらいたいときがよくありますが、通訳者がスピードや発言のルールについて、なかなか口を出せない雰囲気有的时候きに苦労します。
- ・あまり触手話を使う機会がないので、だんだんできなくなってきてしまいました。使う機会が減ると忘れてしまうので、心配です。
- ・移動介助のときは、手書き文字でのコミュニケーションだが、私の手書き文字は分かりにくいようだ。「盲ろう者に負担をかけないように」と思うが、一生懸命に読もうとしてくださっているので、本当に申し訳なく思う。
- ・音声通訳のとき、多少聞こえる盲ろう者の場合、どの程度まで通訳すれば良いのか。また、マイクの声が聞こえる場合、盲ろう者から「今は聞こえている」とか、声を出して言ってもらえると良い。男の人の通訳・介助につく場合、男性トイレに入りにくいときがある。
- ・日常的に使っている言葉、例えば四字熟語や、時間（日にち）が経てばとか、軽く使っている言葉をどう説明するか。まだまだ未熟なため、手話をどの意味に使っていいか（同じ手話で手の動きをどう表すのか）判断がつきにくい。例えば「これ好き？」、「よかった？」、「幸せ？」など、会話のときにすぐ手が動かない。後で「あっ、こうすればよかったかな？」と反省。
- ・自分自身の技術不足。
- ・通訳中の状況説明のタイミングが、うまくつかめない。
- ・触手話や点字、手のひら書きなども通用しない盲ろう者と、コミュニケーションをスムーズにするための方法を身につけたい。時間をかけて、表情や癖を読み取るしかないのか。「どんなことを考えているのか話せたら、もっと楽しく生活できるのに」と思う。
- ・ほかの団体との会合にて、他団体の方は話す口調が早くなり、情報を伝えづらくなる。
- ・盲ろう者のニーズは個々に違うが、個々が要望するニーズを知ることが難しい。例えば、研修会では見えるもの、聞こえること、すべてを状況提供するように学んだが、「状況説明が多すぎても疲れる」との声も聞く。個々に合う通訳・介助ができていないか？いつも迷う。盲ろう者にも遠慮があるのか、通訳・介助者に対する要望、要求があまり出てこない。
- ・専門的（医学など）な用語のとき、手話通訳ができないことがあるので、そのときはどのように対応したらいいのか考えるときがあります。
- ・まだ初心者で深く関わっていませんが、可能なら手話、点字、プリスタ、PCなど、技を磨きたいです。
- ・講演に参加したとき、盲ろう者が講師への質問を全体に向けて話すことがある。そのときの盲ろう者の手話表現を、誰が読み取るのがベストか今でも分からない。現場にいる全体向けの手話通訳者がそのまま読み取り、もし盲ろう者の表現が早すぎるときなどは、盲ろう者の通訳・介助者が、盲ろう者へ伝えるのが自然かと思っています。
- ・一度、病院の診察に家族の方と一緒に同行したが、家族の方に「ここは通訳しないでください」と言われたことがある。家族の方は「本当のところ余命はどれくらいですか？」と医師に聞いていた。通訳の立場としては、目と耳の代わりなので、すべて通訳しなくてはいけないが、ご家族の気持ちも分かる。とても複雑でした。
- ・手話や点字の取得が不十分なため、コミュニケーションをうまく計れない。

- ・会議・講習会などは、話す側が通訳しやすいように司会が進行します。順番に指名してくれるので助かります。大変と思うのは、交流会のような懇親会で、皆口々に好きなことを言いだし、1つの話題に集中したかと思うと、すぐ違う話へ変わっていきます。通訳している間に別の話に移り、いったい何の話だったのか分からなくなりますね。「ゆっくり話して、順番に」と言っても、会話が弾んでしまうこともあって、「こういうときの通訳は難しいなと」思ったときがありました。
- ・現状の様子、状態を伝えるとき、本人自身が情報不足のため、現状のまま通訳しても本人に意味が伝わらないことが起きる。通訳・介助者自身が、意味を深く考え、理解して伝えることが非常に大切になってくる。
- ・手話通訳活動を行っているため、「手話、音声、手書き」であれば、何とかコミュニケーションが計れる。しかし、点字がまったくできないため、もどかしい思いをする。そのため、盲ベース（点字、指字）の方の通訳ができない。自分の学びで乗り越えられることと分かっていますが、手話通訳活動で時間が取れない状況。
- ・ブリストや音声通訳しかやっていない。会議などで発言が激しくなったとき、どのように早く簡潔に通訳して良いか困ってしまう。
- ・情報量に個人差があるので、通訳・介助中にどの程度の情報を提供すれば良いのか、戸惑うことがある。
- ・通訳の際、周りが分からない。周りの情報を伝えたくても、私が状況を判断しにくいことがある。健聴の人に尋ねても、あいまいな答え。うまく教えてくれなかったり、周りがざわざわして状況がつかみにくい。通訳の際、周りの情報を伝えてもらえるボランティアが必要だと思う。

③通訳・介助時の負担・不安

- ・長時間の交代がないときの疲れが大きい。
- ・記念パーティーの参加費や宿泊費は、盲ろう者が通訳・介助員の分も2倍払い、2倍の負担になっている。または、通訳・介助員がボランティアで参加費や宿泊費を出費するときがある。行政はそういう問題にも目を向けて解決してほしい。
- ・私自身が60歳を過ぎているせいか、話し言葉の聞きだめが大変になってきて、限界を感じる日々です。
- ・自宅からの移動（迎え、送り）を含めると、通訳・介助の時間が長く、体力に自信がないため、依頼を断ることがあります。行きのみ、帰りのみなど、分担できると引き受けやすくなると思います。
- ・耳が遠くなり、講演通訳がうまくできないことが増えてきた。
- ・会議の通訳で、珍しい名字の方など聞き取れないことがある。
- ・手話など、ほかの通訳の業務と比べて事前情報が少ないように思う。盲ろう者側の負担（事前情報を提供する手間など）が少ないのはメリットだと思うが、初対面の人、慣れない場に行くのは、精神的にストレスに感じることもある。
- ・活動内容のほかに、次々にあっちの用事、こっちの用事とお構いなしに頼まれる。できる範囲で手助けはするが、こちらの都合が合わないときは、次回に回してもらおうように言うことにしている。
- ・慣れてきて要求が増え、行動量は増えるのに、時給は年々減るのでやる気がなくなる。だから、少し時間延長しても、と思うよりも打ち切る。
- ・利用者さんから直接依頼を受ける際、なるべく事前情報（行き先など）を得るようにするが、通訳・介助の準備が十分にできないことがある。地域でガイドヘルパー業務をしているが、こちらは

事前のスケジュールで自ら下調べ（経路、行き先の様子、トイレ、食事の場など）をして臨んでいる。盲ろう者の通訳・介助の場合は、地域が広いので、当日初めて言われた場所へ行くことが多く、スタート地点すら迷うことがある。また、そこへ行くまで 2 時間近くかかるなど、気持ちだけでは続けられないような状況も実在している。

- ・盲ろう者は、本当にさまざまです。相手の方により、（同じ方でも体調によっては）対応は 180 度変わることがあります。柔軟に自分の形を変えて、個人個人の盲ろう者に沿ってゆくのが、私たちの仕事だと（その人用の目と耳になる）思っています。ただ、とても力が必要です。体力も経済力も、考えていた以上に必要でした（この仕事で生活はできない）。ドタキャン、変更もあるし、時給もいくらになるか分かりません。
- ・体力的に追いつかない。頸肩腕に悩む（心配度数：B1）。接する時間を少しずつ減らし中。苦痛があるので距離を置いている。
- ・ほとんど交流したことがない盲ろう者の通訳のとき、現場で 1 人だと緊張する。特に長時間のときや、移動も含むときは、初回は先輩通訳・介助者に同行してもらいたい。
- ・盲ろう者が男性の場合、公衆トイレなどの場所で、中に入って状況説明するときに周りの目が気になる。できれば男性の協力を仰ぎたいが、いつも協力してもらえとは限らず、困るときがある。
- ・パートナーの都合がつかず、通訳・介助を 1 人で担う場合があり、どこまで通訳するべきか迷うときがある（1 時間以上の手話通訳など）。
- ・腰や腕に負担がかかるため、痛みが起こらないような予防法を知りたい。
- ・経験はほとんどありませんが、移動の際、盲ろう者が電車で座らないので、2 人で立って帰りました。腕を上げ続け（背の高い方でしたので）大変でした。
- ・男性の盲ろう者を通訳・介助したとき、トイレの介助の際、ほかに一緒に行動してくれる男の通訳・介助員がいれば頼むのですが、2 人でしたので、私が一緒に男子トイレに入らなければならないときがあった。
- ・技術面の自信がありません。かえって迷惑をかけたり、権利を損ねているのではと常に不安です。交流会などでは先輩の様子を観察して、まねしてみたりフォローしていただけますが、1 対 1 で初対面の方だととても心配です。
- ・十分にコミュニケーションが取れない盲ろう者に通訳・介助することに不安を感じる。
- ・盲ろう者からメールで個人依頼を受けているが、「誰々に電話をして、何々と伝えてください」などと言われる。短いメールだけでは前後の関係や流れが分からず、確認のメールをすると「もういいです」などと言われる。
- ・音声通訳のとき、場所によっては（電車の中、レストランなど）周囲の理解を得られず、嫌な顔をされることもある。また、それを解消する方法を盲ろう者と話し合ったことがあるが、結論に至らない。
- ・買い物での通訳・介助。自分がほとんど行かない店での買い物の場合、どこに何があるか分からないので時間がかかる。自分が使わない物の買い物のときは、品物のことがよく分からない場合もある。
- ・中途盲ろう者の場合、特に精神的に不安定な方が多く、通訳・介助者への当たりがきつい場合があります。また、「死にたい」などと口にされたとき、どのようにお答えすれば良いのか困ります。
- ・私は女性のため、外出中、男性のトイレに付き添っている必要がある場合、周りの目がとても気になります。通訳・介助中などの、一目で分かる札などがあればと思います。また、糖尿病の方のイ

ンスリン注射を外出中にされる方がいて、それを手助けするときは、周りの目に困ります。

- ・サークル活動の送迎など、拘束時間が長いのに実労働時間は短いという場合。納得して受けている仕事だが、体力面、精神面での疲労と報酬面とのバランスが、あまりにも悪いと感じてしまう。自分の年齢を考えると、どのくらい続けられるのか分からない。
- ・手話通訳がないところへの通訳・介助の場合、筆談で言うことを伝えたりするのがとても大変だ。
- ・盲ろう者より、直接チケットを受けとる際に、本人が忘れていたので、通訳・介助者から「チケットをください」と請求しなければならず、それがかなり負担です。その請求をすることにより「お金にがめつい」という印象を与えかねません。人間関係を構築する際に、やはり直接的なお金のやり取りに結びつく費用の発生の仕方は、工夫いただきたいです。手話通訳のように、コーディネーターがお金のやり取りなどを管理する形が望ましいと思います。
- ・一泊の研修、旅行、さらに全国大会といった長時間の通訳・介助は、非常に疲労感が残ります。健康なときは動けますが、年々きつくなっています。
- ・心身の負担が大きい。特に移動介助や、買い物などで予想のつかないリクエストが次々に出てくると、精神的にもとても疲れる。年齢的なことを考えると、60歳を超えると無理かな、と思う。そろそろ辞めて、手話通訳に専念しようかと考えている。
- ・盲ろう者が通訳・介助員を評価するとき、限られた情報で判断するので、失敗が怖い。また、一度評価が下されると、なかなか覆せない。
- ・盲ろう者が、通訳・介助員の仕事を仕事として見てくれない（謝金が高すぎると言われたときは、失望した）。
- ・盲ろう者から信頼されてはいるが、問題行動の多い通訳・介助員の存在（主観を交えた情報を提供するので、ほかの通訳・介助員が誤解されている。しかし、なかなか訂正できない）。
- ・最初に依頼された予定が、当日になって急に変更になり、追加でたくさんのところに行かなくてはならないことがある。こちらも時間の都合があるが、頼まれると、その場では断りにくいので困ることがある。
- ・通訳・介助活動を複数（2名以上）で行うとき。例えば、盲の方がブリスト通訳、私が音声通訳をするとき、盲ろう者の移動、トイレ介助などを私が行い、また、ブリスト通訳者の移動介助も同時に行わなければならないときは、大変負担に感じる。
- ・友の会活動（役員会など）の通訳・介助活動は、電車、バスなどの移動があるとき、毎回、盲の会員数名が同じ地域から参加されるが（ガイドヘルパーを使わず）、必然的に盲ろう者の通訳・介助者が数名を介助することになる。安全に移動したいが、1人で数名を同時に介助することは、負担が重すぎる。
- ・年齢的に、夜の外出は不安。街灯が暗かったり、電車での混雑の際、非常に緊張する。
- ・通訳・介助活動を、これからも続けていきたいと感じているが、盲ろう者の通訳時間数が少なくなり、その負担が通訳・介助者に来ってしまうのが毎年続いてしまうのであれば、活動を継続するのは難しいと感じている。
- ・他県からの依頼時の情報不足（コーディネーターからの情報量が違う）。
- ・通訳・介助時間とボランティアの境目がなく、5時間（交代はあるけどトイレ休憩だけ）以上担当するときは、時間配分が難しい。
- ・研修を受けて思うことは、通訳・介助者の疲労度がかなり大きいのではないかということです。介助（移動）と通訳を兼ねるのではなく、移動介助と、現地での通訳を別々に考えて派遣する方法は

できないでしょうか。

- ・体力の限界を感じます。私より体重が重い盲ろう者の介助がづらいです。友達のように腕を組む盲ろう者がいますが、手引きをお願いするときは腕を組むのではなく、通訳・介助員の腕に手を置くとか、軽く腕を持つとか、盲ろう者の方々に全国盲ろう者協会の方からお願いできないでしょうか。
- ・ろうの通訳・介助員は通訳をするとき、知識がないと、きちんと伝えられていないようです。
- ・本人の当日のメンタル状態により、突然、激高される方がいらした場合は、意見の修正が難しく、結果、依頼元へ報告し、解決した案件があったときは、本当に疲れました。
- ・自分の都合で電話してこられるので、対応に困ります。精神的に疲れました。
- ・買い物でいつも約束の時間が過ぎるのが困ります。
- ・ガソリン代を請求したいです。
- ・近くのお店に希望の商品があるにも関わらず、「遠いところの店の方が安心」などと言われて、行かれます。
- ・時間感覚がないので、長引いてしまいます。支援する方も言えたらいいのですが……。
- ・時間数をオーバーしてしまうことが、よくある。
- ・派遣が決定した段階で、本人からメールがあったり、終了後メールがあったりするが、必要最低限にとどめてほしいと思います。
- ・値段が高いお店での、食事の自己負担がきつい。ご本人の希望でしたが、お断りできなかった。
- ・通訳・介助依頼時間や移動場所を、突然変更されると困る。前もって「この時間まで」と本人に伝えても、時間を守ってもらえなかったりする。ボランティアで通訳・介助の依頼があり、断ってもしつこくメールが来る。
- ・肩に手を添えるときに、強く持たれすぎて、頸肩腕症になったことがある。
- ・現在、通訳・介助活動以外に、パートで仕事をしています。2年前までは、パートをしながら活動していましたが、精神的にも体力的にも活動するのが大変なので、現在は活動を休止しています。特に介助の場合、仕事の調整、家庭の都合をつけて対象者と自分、2人の命を守りながら、というのが負担になっていました。盲ろう者の通訳・介助活動というのは、自分にとっては空いた時間に片手間にできるようなことではなく、精神面や体調を整えてやらなければいけないことだと思っています。
- ・自分が行くことが、その人の役に立っているのかどうか分からない。移動のときの命を預かっていることが、自分が未熟なため、とても怖いし、自信がない。

④通訳・介助業務の範囲

- ・盲ろう者から通訳・介助以外に、冷蔵庫や暖房器具の具合を見てほしいなどの依頼をされる。
- ・移動介助をするとき、盲ろう者自身の買い物を、手に余るほど買ってしまうので、通訳・介助者がそれを持って歩くことを平気で受けてしまうのをよく見かける。その盲ろう者は、「久しぶりの買い物だから」と、持ってもらうことは当然のように言う。安全に通訳・介助することが一番なので、通訳・介助者の心得としても断ることも大事だと思うが、なかなか断れない。そのため、ほかの通訳・介助者にも持ってくれることを期待されることがあり、困る。
- ・インターネットを通してメールをする盲ろう者は大丈夫ですが、点字が読めない盲ろう者との連絡では、Eメールが使えない（代理にメール）。メールを頼まれるのはいいけれど、通信代を支払っていない人もいます。

- ・通訳の交代中（休憩中）に、講義のノートテイクを依頼されたが、これは対象外ではないか？盲ろう者にも認識をきちんとしてほしい。
- ・派遣された現場でベストを尽くすのは当たり前ですが、現場以外で盲ろう者からメールが来たとき、対応に困ります。「誰々さんがこんな話をしていた」とか言われても、返信せずに見捨てているのが現状です。
- ・盲ろう者本人の要望と、制度として対応できることに差がある。突然の通訳・介助の依頼やキャンセルの対応、通訳・介助者の車での同行など、個人的に言われて困惑することがある（また、ほかの通訳・介助員から聞くこともある）。
- ・盲ろう者同士のコミュニケーションは、通訳・介助者が見てもいいか迷うことがあります。
- ・支援者がバタナリズムに陥っていると思われることがあります。支援者は教育者ではなく、サリバン先生ではないと思うのですが、長年、熱心な支援者であればあるほど、その傾向があるかもしれません（先生が支援者として入っているのだから仕方ないかもしれません。当事者の元気が以前よりも少なくなっていると感じるのはこのためかもしれません。支援者が頑張りすぎて支配的になっているかも）。
- ・障害者の自己決定やエンパワメントなど、社会福祉的な考えを勉強することが、通訳・介助を学ぶよりも必要な気がします。
- ・盲ろう者向け通訳・介助員を1つのジャンルとすることで、困惑している。通常は、業務として手話通訳を行っているが、専門性もあり分かりやすくなっている。しかし盲ろう者の場合、手話のほか、点字や触手話、筆記、身体介護、生活援助と幅が広すぎる。障害当事者が困っていることは分かるが、通訳・介助員の行うべき範囲はまるで家族だったり、彼氏、彼女のようなことを行っている。ビジネスライクに活動できない。介護保険の制度に位置付け、保険業務として活動する方が公正に行えると思われる。
- ・通訳・介助者をしている人が、盲ろう者に対して個人的な交際をどこまでして良いのか。そのために、その盲ろう者の方が1人の通訳・介助者の意見しか聞かない。いくらおかしいと言っても耳を貸すことがない。その壁に当たり、今悩んでおります。
- ・本人は歩行困難者であるが、いつも手土産を持っていく。一応、自分で持つように言うが、長時間になると見かねて持ってしまふ。
- ・通訳に行ったとき、先輩の通訳者を見て、戸惑いを感じる場合があります。確かに、ろう者通訳と違い、盲ろう者通訳は常に側にいますので、必要以上に世話を焼いてしまうかも知れませんが、その線引きをどの辺りでしたら良いのか。時と場合で違うと思いますが、私の課題として考えたいと思っています。
- ・通訳時、おせっかいにならないよう情報を提供するものの、急いでいるときなどや、周りの状況によっては、つい待つことができずに手を貸してしまう。

⑤通訳・介助員の守秘義務

- ・厳密主義であるのに、口軽くおしゃべりする通訳・介助員の方がいらっしゃいます。特に、聴覚障害者の通訳・介助員が何人かいます。ルールを守るためには、方法などで解決してほしい。
- ・家族から依頼を受けたときの対応。
- ・守秘義務の範囲。通訳・介助員が情報を交換できるようにすれば良いと思う。守秘義務で、身動きが取れないと思う。

⑥通訳・介助員同士の関わり

- ・通訳・介助員が特定の盲ろう者を抱え込み、当事者の派遣依頼まで口出しする。極まれに、その盲ろう者の通訳をほかの人が担うと、後から通訳・介助員が、通訳内容を詳細に聞いてくる。そのときの対処に困る。
- ・通訳・介助員からの情報をそのまま受けて、もめる事がある。通訳・介助員の中に、自分を指名してほしくて、正しくない情報を入れる人がいる。盲ろう者が自分で考え、判断できるためには、いろいろな通訳・介助員がついた方が良いと思う。同じ人がつくと、その人の考えになっていく。
- ・パソコン要約筆記の方法や特性への理解不足により、利用者、そのほかの盲ろう者、手話通訳者、盲ろう者に関わる方々から、「正確に伝えていないのでは」と不信感を持たれること。
- ・通訳・介助者の中にも、意見の違う人がいて困っています。同じ現場で話し声が聞こえたので通訳したら、話をしていた通訳・介助者たちが、「発言したわけでもないのに、通訳されてしまった。これでは何もしゃべれない」と盲ろう者に伝え、以後、通訳・介助者同士、メモを回して会話をする始末。その間、盲ろう者はほったらかし状態。大変驚きました。
- ・通訳・介助員が2人派遣のとき、相手の行動が対象者（盲ろう者）のためになるのか、疑問に思った。荷物を持ったり、お世話しすぎると思ったが、長く経験されている様子だったので言えなかった。
- ・ベテランの通訳・介助員が「私が若いから」と言って注意を受け入れない。盲ろう者に意見を求めるため通訳者に声をかけると、「今忙しいから」と、盲ろう者に話しかけられたことを伝えずに通訳者が返事をしたため、「話しかけられたことも通訳すべきでは？」と言うと、にらまれた。また、盲ろう者が乗る車いすを、段差の際に前向きに降ろそうとしていたため、「危ないので手を貸しましょうか？」と声をかけると、「今日は私が通訳者ですから結構です！」とのこと。本人のプライドより、盲ろう者の安全が危ぶまれるのに聞き入れないのはいかがでしょうかと思います。コミュニケーション技術だけでなく、そのほかの障害（肢体不自由など）の知識もないと、通訳はできても介助はできないと思います。私はたまたま福祉職で、技術もあります。通訳のプロの方は、プライドばかりなので。
- ・外部から「通訳資格もない難聴者が（盲ろう者に対し）通訳・介助するのは生意気！」「通訳は私たち、手話通訳者に任せればいいのに」、そんな言葉を嫌というほど聞いてきました。
- ・盲ろう者の立場、持っている理解力に合わせて通訳・介助をしてほしいと思う。2人通訳のときに感じます。
- ・筆記通訳では、漢字力が劣る私は苦勞しております。学歴の高い利用者の方には、なるべく漢字でとか、ベテランの通訳・介助の方々の中には、慣れない私たちにきつく指導される方もおり、最近では月に一度の交流会も、足が遠のいている状況です。もう少し温かく見守りつつ、ご指導いただければ幸いです。
- ・通訳・介助員同士の関わりが難しいように感じている。私は聴覚障害者だが、「情報の保障」について健常の通訳・介助員と考えが合わない。聴者の通訳・介助員は、集まりで盲ろう者を1人にしてはいけない。それは、ろう者と手話通訳者にも言えることだと思う。「聞こえない」ことを十分理解して、通訳・介助をしているようには見えない。
- ・通訳・介助員間での通訳・介助に対する考え方が、ばらばら（主体性の尊重など）。

⑦通訳・介助員の団体・情報交換の場

- ・県より派遣要綱改正案を提示され、説明会が開催された。県職員は現場を知らず、予算削減のための案を、半ば強制的に打ち出していると感じる。利用者である盲ろう者にも相談せずの行動。通訳・介助員の組織がないことも、県の言いたい放題を助長させているのか？と思っている。組織が必要。
- ・通訳・介助員の団体もないため、日ごろの活動を振り返り、検証し、認識を共有していく手段がない。高い通訳技術や、対人援助技術が求められる仕事であるのに、現在は通訳・介助員の認識の違いがありすぎる。養成、指導する側の知識や技術を磨く場が、もっと必要だと思う。
- ・困ったときに相談できる相手が、コーディネーターだけです。地域に通訳・介助者の集団がないので、事例検討などの時間が限られています。また、手話以外のコミュニケーション方法を身につける場が限られていて、地理的に恵まれていないと、指字などを学べない状況です。
- ・通訳・介助員同士の交流や、ガイドの方法で改善できることなどを話し合える場がほしい。1年間に一度の更新時の会議はあるが、本音のところの話や、具体的な話はできない。
- ・通訳・介助者同士で情報交換や悩みを相談できる場所がない。
- ・通訳・介助者同士の交流、意見交換の場が少ない。例えば、盲ろう者 A さんに接している人たちの意見交換、話し合いがあれば「あっ、こうすればいいんだ」とか「こんな工夫をしているんだ」といったことを聞くこともできると思う。
- ・体験講座の通訳・介助（例えば絵を描く、陶芸など）のとき、どのくらい手を出していいのか判断できない。ほかの通訳・介助者との情報交換が必要。
- ・通訳・介助員同士の情報交換。
- ・通訳・介助員同士の交流の場があると良いと思います。日ごろの通訳上での悩み、相談、経験談が気軽に話し合えると、気づきがあると思います。
- ・ほかの通訳者の経験談を聞いたり、相談できる機会があるといいと思います。盲ろう者を排除するというのではなく、通訳・介助者同士でないと分からない経験というものも、あるのではないかと思います。
- ・通訳・介助者の検証学習、意見交換の場があると良いと思う。
- ・ほかの通訳・介助者の様子を見て、自分のことを振り返り、互いに意見を交換できる場があれば、通訳・介助者としてステップアップできるのではないかと感じる。
- ・通訳・介助員同士の意見交換できる場がない。

(4) 講習会や相談の場

①スキルアップの場がない

- ・通訳技術を高めるための勉強の場がとても少ないこと。通訳・介助員の団体がないので、スキルアップのための情報交換の場がない。
- ・手話、点字の勉強をしたい。
- ・通訳・介助活動を行えていませんが、もっと勉強会を増やしていただきたいと思います。
- ・技術に自信がないが、スキルアップ講座などを受講できないことがあったり（時間的な問題や、希望者が多いためなど）、継続して勉強できる場が少ない。仕事をしながら通訳・介助を行うことは、

時間的に厳しい面もある。

- 先輩たちの体験談を聞きたいと思っています。机上の勉強も大事ですが、場数（体験する）で学ぶことも多いと思います（トラブル時の解決策など）。
- 全国的な講習会に参加して、通訳・介助についてもっと学びたいが、遠方であることと、日時が合わず残念です。参考文献なども少ないのが悩みです。
- 講座を受けてから、スキルアップの時間や実習など、もっとあっても良いかと思いました。日々、ふれあい話すことにより、より一層、質の良い通訳者になれるかとも思います。人間対人間なので、心の通った時間共有が持てたらと、理想ばかりは大きいです。
- 現任研修の内容を充実してほしい。
- 触手話講座があれば嬉しい。
- 自分自身の通訳・介助技術の向上が必要（指点字をもっと練習したい）。
- 県外での活動を希望しているが、なかなか思うようにいかない。
- 技術向上して、もっと活動したいと思うが、なかなか思うように活動ができない。派遣元との話し合いと雰囲気づくりを。
- 通訳・介助者に対する現任研修および情報交換の場が少なすぎる。レベルアップ、スキルアップのためにも、県は計画してほしい。
- ブリスタ系の点字を覚えたい。また、文通をしているが、ブリスタ系、パーキンスプレーヤーを手に入りやすくしてほしい。今の点字では、役に立つことが難しい。指点字をマスターしたいので、中古でもいいから紹介してほしい。普及させてほしい。
- ××県は視覚の方が多く、指点字や点字の勉強は多いが、手話の勉強時間が少ない。そのようなサークルもあるが、あれもこれもと参加できない。友の会で、もっと時間があると良いと思うが、視覚障害の方が多いので、なかなか受け入れてもらえないように思うし、一生懸命お世話している役員の方々の苦勞も分かるので、あまり強くは言えない。県外の方との交流のときに、手話ができない自分がとても歯がゆくて仕方がない状況で 2 日間終わってしまったこともあり、今、通訳・介助に迷っているところです。本やパソコンを利用して、自分で勉強したりしようと思い視聴してはみるが、何度も倒れてしまい、続かないのが現状です。
- 近くに通訳・介助研修会がないため、独学をしています。限度があるので、技術に自信が持てない。
- 手話を使う機会が少なくなり、だんだん忘れてしまうのではないかと不安です。自己研修で手話を学ばなければならないのでしょうか？ 1人で学ぶには限界があるので、講習会があれば参加したいです。
- 登録している友の会でのサークル活動に参加して、経験者や盲ろう者ご本人からいろいろ教えていただきながらの活動という現状ですので、盲ろう者自身の慣れや相性というのでしょうか、人によって反応がなかなか返ってこない、自分の伝え方に問題があるのかもと不安になります。触手話 1 つとっても、相手の年齢によって使う手話が違ったり（それは普通の手話でも同様ですが）、手話の時に何げなくしていた行動（表情、うなずき）が使えなかったり、そういったことをカバーする方法も相手によって異なるので、こういうものだと教わりにくい難しさがあります。触手話に重きを置いたサークルや講座、学習会を地域、全国レベルで実施してほしいと思います。
- サポートの仕方がこれで良いのかどうか、検証する場がない。例えば通訳・介助員同士で、個人名は伏せたとしても、事例を挙げて話し合う場がなく、漠然とした形でとらえたままで改善できない

ことが多々あります。「個人情報」が技術向上の壁となり、本当に当事者にとってプラスになっているのか疑問に思います。

- ・ 現任研修の数が少なく、参加できない。
- ・ 通常の通訳（手話）であれば、通訳者の表情、口話を読み取ってもらえますが、触手話の場合、手の動きだけのため、より難しいと思います。しかし、まだ試験制ではありません。コミュニケーション方法ごとに、試験を実施することは難しいと思いますが、せめて通訳・介助員とは何が必要なのか？盲ろう者の自立とは何か？自己決定とは？など、学ぶ機会を増やしてほしいです。また、通訳・介助員同士、話し合える場がほしいです。
- ・ 研修会がまったくない。課題・問題点を報告し、検討する場がない。
- ・ 活動する上で、手話や点字を教えてもらえる場所とかが少なく、平日の 17 時までだったりして、仕事をしている人はつらい。
- ・ 盲ろう者や障害者と接していくのに、介助に当たる資格も重要。災害の知識と、人命を守るためにも公的格安に介護職員研修、防災士、福祉用具専門相談員、ガイドヘルパーなどの資格取得講習会もプラスし、スキルアップを計る。介護、介助専門家として活躍するには、国が激安で職業訓練化して、実施してほしい。介助、相談のこつを学びたい。
- ・ スキルアップできる場が身近にない（専門的に相談できる人も）。年に数回、研修の場がほしい。派遣業務実施報告書とチケットを郵送するのが大変。チケット方式を、ほかの方法に変えてほしい。報告書は FAX で送れるようにしてほしい。
- ・ 経験が少ないので、経験を積むための機会を与えてくれる場、講習会を増やしていただきたい。通訳・介助活動で失敗や疑問、悩みを相談できる人、場所を作ってほしい。第三者が（自分の）良い点、悪い点を指摘していただくことも、成長につながるので、そういう窓口を作っていただきたい。
- ・ 登録後のフォローアップが必要なので、研修があれば良いと思っています。2年後の今年、初めての現任研修のお知らせがきましたが、研修日まで1か月ぐらいと短く、仕事の予定も入ってしまっているのもう少し早く連絡がほしかったと思いました。年に1度だけだと、そのとき欠席になったら受けられないままなので、せめてあと1回だけでも増やしてほしいと思います。仕事柄、ろう者、盲者にお会いしますが、頑張っ！といつも声をかけていただき、嬉しく思います。そんな方々のために、少しでも力になればと思っていますが、実力をつけられない（場もない）のが悲しいです。
- ・ 勤めており、年齢もまだ年金受給にならないので、ボランティアができる年齢になったら、もっと講習会などで通訳・介助員になれるように学ばなければと思っていますが、現在は勉強不足です。
- ・ 高齢化に伴い、従来の通訳・介助だけでなく、介護を含む場面があるとき、登録者として、その研修の場がないこと（本来、通訳・介助と介護は別のものですが）。
- ・ 活動に関して、振り返り学習や研修会に参加したいと思うが、個人的な都合もあり、なかなかできずにいる。全国的な研修会は都市部中心なので、なかなか泊まりを兼ねて参加することができず、悔しいやらもったいないやら。
- ・ 技術不足であることから、研修の充実、自己研さんの必要性を思う。
- ・ 日程などが合わず活動できていません。その間に講習の内容も薄れてきてしまいました。定期的に自由に参加できる学習会や、情報交換会などがあると、つながりも持てていいなと思います。また、実状や体験談なども聞いてみたいと思います。
- ・ 年に2回の研修が必要ではないかと思っています。習得した年数によって、レベルに合った講義、実

技をもう一度学びたいと思います。

- ・触手話のレベルアップをしたいと思っています。
- ・経験が少ないので、スキルアップしなければならないと思いつつできずに、たまの依頼を受けているので不安です。依頼する方は、忙しいからと気を遣って依頼を控えてくださっているのですが、せめて月1回くらいは現場を踏みたいのです。
- ・通訳・介助活動で疑問に思ったこと、課題だと感じたことを報告書に書く以外に研修の機会がない（コーディネーターからの返答はまれ）。活動に対する報酬が下がり続けている。派遣時間が増えて予算を圧迫したときの派遣元の対応が「単価減」「中抜き（会議中は通訳・介助員ではない）」になりがちで、将来好転するように思えない。予算獲得のために、事業計画などの方針を打ち出せないか。
- ・通訳・介助員の支援の方法が個々に違う。盲ろう者が通訳・介助員から受ける支援が違うため、対応に困るときがある。例えば、通訳・介助員が何でも先回りしてしまうなど、盲ろう者ができないこと（自立）や社会性、コミュニケーションが狭い範囲になってしまう。やはり、通訳・介助員の盲ろう者に対する「在り方」などの研修時間がほしいと思う。
- ・学習会で話し合うことが大事と考える。通訳・介助員が1人で抱え込んで辞めるケースもある。
- ・通訳・介助は聴覚障害だけの研修会を開いてほしい。運営委員会の活動の講習会。倫理委員会の設立は必要ではないか。
- ・的確な指導が受けられる研修があまりない。
- ・通訳・介助員の状況がバラバラすぎる（分野別の資格？）。通訳・介助員はボランティアではない（資質の向上を）。
- ・養成講座だけでは、点字や手話を覚えるのは不可能である。

②相談の場

- ・スーパーバイザーの不在。通訳・介助者相互の検証などの場がない。自身の取った行動について、事務所に報告しても適切な回答を得られない。また、提言などに対しても、その後の行方がつかめない。
- ・対応や判断に困る事態や、不安な事柄が起きたとき、また、制度や情勢、紹介先などを相談されたとき、アドバイスをいただける機関がない。情報提供機関リストなど、心構えや基本的な対応なども含めて「通訳・介助員手帳」として、手元に持てる物があるとありがたい。
- ・通訳についていけなくなること。困ったことがあっても、相談する場がない。自分の障害を話したらいいか、言わない方がいいか分からなくなる。
- ・現在、派遣事務所がなく、個人依頼や各種センターなど、さまざまな機関が関わってコーディネートしている。本来は、それを特定してあれば、訳・介助員も盲ろう者も苦情を言える場所があるのにとと思う（問題が起きたとき、特に個人依頼したときなど、解決するきちんとした機関がない）。
- ・コーディネーターとの意思疎通がうまくとれない（一方的な面）。
- ・派遣事業の要綱に関わる（活動に関わる）説明や、疑問に答えてくれる機会が少ない。
- ・通訳・介助で判断に迷ったときなどの、いろいろな問題点を、通訳・介助者同士や盲ろう者も交えて話し合いをする場がほとんどない。Q&Aみたいなものがあれば、と思うことも。
- ・相談できる人がいない。盲ろう者と接したことで自分が成長できたかなと思う。積極的に行事なども参加してみたいが、性格的に無理だと思うことがよくある。

- ・相談できる通訳・介助者がいない。情報センターもあるが、地域の分かる通訳・介助者に相談したい。しかし、他言してはならないと思うと、迷って結局言わないことが多い。
- ・ほかの通訳・介助をしている人を見て、盲ろう者に対する態度や通訳・介助方法を、まだ理解していないと感じる行動があっても、それを言うところがない（コーディネーターにも悪口みたいで言いつらい）。
- ・視覚障害者へのガイドヘルパーでもありますが、盲ろう者の場合、特にガイドの方法のコミュニケーション方法も十人十色です。知的障害を併せ持つ方もいらして、介助者は現場でさまざまな判断を迫られます。そう言うと、「判断するのはあくまでも盲ろう者です」と上から言われますが、そうも言ってはいられない場面にも多く遭遇します。養成研修を終えたばかりで現場に放り出される身としては、通訳・介助者の悩みを聞いてくれる相談機関や、通訳・介助者同士の情報交換の場がほしいです。結果、より良い通訳・介助の実践につながっていくと思います。
- ・通訳・介助に関することは、派遣コーディネーターに相談しているが、コーディネーターの身分保障がなく、その上、多忙を極めており、何とかしなければならない状態です。委託事業として実施していますが、県のコーディネーター手当は微々たるものかと思われます。自分が困っていることをコーディネーターに持っていくということは、コーディネーターをもっと忙しくさせることであり、申し訳ないです。
- ・相談できるところがない。
- ・盲ろうの方との距離の取り方。親しくなりすぎても、事務的でもよくないと思う。
- ・盲ろうの方から誤解され、暴力的行為を受けても相談できる窓口がない（1人で耐え、時がたつのを待つしかない）
- ・困ったこと、悩んだことを相談・解決する場がない。

（５）コーディネーターへの要望

①コーディネーターに望むこと

- ・コーディネーターの判断で、ときには1人であったり3人であったりして、盲ろう者も困っています。3人依頼されたら、それに答えるのがコーディネーターの仕事ではないのでしょうか？大きな大会などでは、1人では通訳・介助できません。通行時だけなら大丈夫かもしれませんが、慣れない場所などは、複数で対処してほしいものです。市内だけの通訳・介助員が不足の場合は、周辺の地区にも通訳・介助員はいます。配慮願いたいものです。
- ・コーディネーターからの依頼が、日が迫ってからのことがほとんどで、すでに予定が入っていて受けられないケースが多い。盲ろう者に対して理解が遅く、感情的になりやすいコーディネーターにも研修を義務づけてほしい。派遣事業を聴覚障害者協会に委託しているため、手話通訳の派遣と兼務しているので、盲ろう者向け通訳・介助員派遣を専門とするコーディネーターがいた方が、盲ろう者にとって満足のゆく派遣となるし、通訳・介助員のストレスも軽減するのではないかと。
- ・事務所の方が盲ろう者のため、緊急時に、事務所の方と連絡が取れず、指示を仰ぎづらい体制である。自治体の方針があいまいで（例えば、利用者を通訳・介助者の車に乗せることなど）、通訳・介助によってやり方が違うので、利用者も戸惑うことがある。事務所の方が、利用者の病状や障害の程度などを把握していないので、困ります。
- ・盲ろう者が希望する通訳・介助者が、必ずしもコーディネートされず、盲ろう者が困っている、つ

らい思いをしている現状があります。コーディネーターが公平な立場でなく、また、予算がないことなどを理由に依頼を断られることもあり、問題を感じています。解決への糸口も見つけられず、何か起きたら、という不安を抱えながら、個人的な関わりの中で通訳・介助しています。

- ・初めて担当する盲ろう者に対する情報が少なすぎる。

(6) 派遣事業や制度

①派遣事業

- ・盲ろう者の方に「通訳・介助を依頼したが、予算が足りないので、と行政から言われた」と聞かされ、とてもショックで驚きました。こんな状況のままでいいのだろうか？と考えめぐねています。
- ・××県の場合、派遣を委託されている団体が、盲ろう者支援に熱心ではありません。盲ろう者に対する思いが担当者にないため、良い支援がなされていません。盲ろう者はあきらめています。派遣委託団体の選定を再考していただきたいです。ここ数年の養成、現任研修も毎年同じです。現任研修のレジュメを見ていただくと一目瞭然です。盲ろう者に甘えています。失礼です。
- ・要綱の内容と現状が違うこと。例えば交通費、入場料など。通訳時にかかった通訳分の支払いが、通訳者の自己負担となっている。県外通訳・介助者の際、謝金が割に合わない。当事者からのねぎらいもなく、報われない感じを感じるときがある。負担が身体的に、金銭的に、日程的に重い。最近、家庭にも迷惑をかけて出かけており、非常に疲れてしまう。いつまで続けられるか分からない（本当は続けたい。続けないといけないが、地元活動のみにせざるを得ないかも）。
- ・活動について、派遣費が全額支給されないこと。盲老人ホームに対する不満など話されることがありますが、どこまで立ち入っていいのかわかりません。また、連絡などが大活字で渡されるので、その点訳を頼まれますが、「通訳・介助には含まれないので派遣費は出ません」と言われました。でも、実際問題として施設とのコミュニケーションを取る上では、必要なことに感じています（本人はこのことをご存じありませんので、依頼されたときは無償でしています）。県に予算が下りないという理由で、情報提供の制限があってはならないと思いますが、ほかの視覚障害者の方には「ボランティアでしなくては、しょうがないでしょう」と言われ、辞めたくなくなっています。また、私が自分からプライベートなことを話すことはありませんが、根掘り葉掘り盲ろうの方から聞かれます。話しているうちに、非難されるようなことも言われました。最近はやりがいを感じなくて、心が折れることばかりです。ほかに代わり的人也いないので、辞められません。
- ・県外に行くときなど、交通費が半額とはいえ結構かかるので、大変なときがある（本来なら通訳・介助される側が支払う？）。
- ・交通費を請求することが難しい（例えば、タクシーやJRでの同行のとき）
- ・盲ろう者と同行時における旅費、交通費負担について、収入がほとんどない盲ろう者に「出してください」とは言いにくい。全国大会などの旅費は、自己負担で参加している。何らかの補助がほしい（県に対しての要望）。
- ・私は主に接近手話および触手話通訳をやっています。その謝金の問題ですが、ある盲ろう者会議の時、2人通訳がつきます。1人は市の派遣で来た通訳者、もう1人は盲ろう派遣での通訳者です。仕事の内容はまったく同等ですが、謝金の額が違います。また、市の派遣の人は、介助ができないということで、盲ろう派遣の人が休憩中もトイレ介助などを行います。私はこの現状に、少々違和感を持つのですが。盲ろう者向け通訳・介助者を増やしたいと、養成事業で手話サークルなどに呼

びかけても、手話関係の人数が集まらなると聞きますが、今のままでは仕方がないのではないかと
思っています。

- ・依頼者の自宅（現場）まで行くのに時間がかかる。その保証がないのはどうなのかと疑問に思う。
- ・自宅まで迎えに行くが、急に休む場合（キャンセル）があります。事前に連絡を取り合える方法はないかと思案しています。
- ・たまにですが、ドタキャンをされることもあり、そういうときは非常に困る。
- ・以前、音声で活動した際にキャンセルが多く、月の依頼の半分がキャンセルのときもありました。キャンセルについて、「障害者なのだから仕方がないでしょう」と聞かされ、がっかりしたことがあり、私の心持が狭いのか、自問したものです。結果、その方との活動はやめました。このところ依頼はありませんが、街や駅で白杖の方をお見かけすると、声をかけさせていただき、必要であれば一緒に歩かせてもらうことが自然にできるようになりました。
- ・報告書には、細かい内容までは書けない（字数の問題）。
- ・活動報告書を郵送するのが手間。
- ・県外から来られる盲ろう者への通訳・介助は、初めてお会いする方であり、コミュニケーション手段の細かい点が分からない上、介助にも不安があつて、依頼を受けることができません。もし、2人での（同行通訳・介助員がいる場合）通訳・介助であれば、アドバイスやフォローも可能なので安心できるのですが、予算の都合などもあつて、1人のときもあります。この点をもう少し考慮して、複数派遣の制度にできればと考えています。
- ・盲ろう者向け通訳・介助派遣について、行政の手話相談員との連携がある方が、本人を包括的に支援できるのでは？盲ろうのみ単独ではなく、ほかの支援機関との連携体制を取るべきでは？
- ・派遣数は、年に2～3回ですが、サークルや個人の交流があります。交通費や食事の負担が、依頼者であることに大変疑問を感じます。「積極的に社会参加したい行動に、自己負担が重いのであれば、参加する回数をどうしても減らすことになる」と本人が言っていました。
- ・技術に自信がないから、最初は慣れた人と2人で、というわけにはいきませんか？
- ・地元では、通訳・介助員の制度が浸透していない。講習受講後、地元の私が手話通訳登録している団体に、利用者申込書やパンフレットなどを持参したが、その後PRしてくれた気配はない。ろうベースの盲ろう者しか知らないが、地元の手話通訳制度を利用している。接近手話の対象者はそれでも対応できるが、触手話の対象者は、地元の行事に参加する際、触手話のできる手話通訳者が行ったりしているらしい。もっと市町村への制度の周知をしてほしい。盲ろう者本人、家族にも周知してもらおうよう促してほしい。また、××県はとても広いので、エリア別に講習を実施してほしい。私の住む地域には、触手話の対象者に対応可能な手話通訳者が数人おりますので、近場で講習があれば、受講、登録できると思う。
- ・盲ろう者から直接、通訳・介助の依頼を受けたとき、公的派遣の場合、コーディネーターが派遣調整するのが筋だと思うが、それが盲ろう者に十分認識されていない現状がある。
- ・高齢者の多い地域で、交通手段も限られているので、盲ろう者にとって支援が必要なことは分かりますし、できることは十分行いたいと思っています。しかし、事前の連絡もなく、休日でも当日依頼が入ったり、あくまでも通訳だと思うのですが（どこまでが範ちゅうか迷うのですが）ヘルパーのように、通訳者に何でもしてもらえるとと思っている盲ろう者の家族もおられます。直接依頼できるのも、良い面、悪い面があると感じます。直接依頼されると断りにくいと感ずることもあり、手話通訳のように、派遣のコーディネートを通じてもらった方がいいかと思うときもあります。

- ・派遣日時の終了時刻がない（事前に分からない）ときが多々ある。一度の依頼で、あれもこれもとその場で言われることがある。派遣元は「常識的に」と言われるが、その場で断るのは難しい。
- ・利用する方の時間数が足りなくて、時々ボランティアを依頼されることがある。動けるときは動くが、事故のとき困る。
- ・××県の通訳・介助活動を実施する上での問題点です。現在盲ろう者向け通訳・介助のコーディネートをやる場所が確定していません。ろうベースの場合は、手話通訳派遣コーディネートの関わりから、情報センターでコーディネートをしていますが、個人交渉でも依頼を受けることもできるため、担当者が活動の全体像を把握しにくい状況にあります。盲ベースの場合は、もともとコーディネート制というものはないため、すべて個人交渉となり、1人の人に依頼が集中して負担が大きくなるという例もあります。チケット制度のため、盲ろう者1人当たり年間240枚という制限があり、使用が多い人（役員など）と、あまり使わない人との差があり、使用が多い人は枚数を気にしながら生活上の制限をされてしまうという、不公平な状況となっています。チケットは、通訳・介助者が盲ろう者個人から受けとるため、受けとる枚数などでトラブルになることもあります。コーディネート制になれば、チケットの個々のやり取りがなくなったり、盲ろう者がチケットの残枚数を気にすることもなくなるのではないかと思います。
- ・登録地域の方が、関東に来たときの通訳をするために登録をしています。このような個人の遠隔地登録ではなく、広域派遣なり（派遣窓口同士で連携）、全国盲ろう者協会からの派遣という形が採れるといいのではないかと考えます。
- ・派遣依頼の上限がある自治体が、多くあるようです。通院などで多く使うと、研修会やイベントの参加を控えてしまう実態があるようです。きちんとした制度として、保障できるようにしてほしい。交代通訳が少なく、長時間で肉体的にハードなのに報酬が少ない。活動ではなく、専門職としての制度確立を希望します。
- ・通訳・介助業務に関して、損害保険の加入。自家用車使用について、料金（実費）の負担をしてももらえない。各盲ろう者に対する派遣制度の利用方法などが知らされていない。各盲ろう者が利用できる時間など判断基準が何か分からない。
- ・派遣事務所の開所日、時間が限られているため、緊急時の連絡先がないので、仕事に穴をあける不安を常に持っている。
- ・地元で盲ろう者がいないので遠方まで行くため、交通費の助成限度額をオーバーする依頼は、断らざるを得ない。せめて会うまでの交通費は、全額助成してほしい。
- ・通訳・介助者を育てる、増やすといった、指導者的存在の盲ろう者の育成をしてほしい。ご本人のコミュニケーション手段が手話だとしても、指文字や手のひら書きでも受け入れて、通訳・介助者に実戦、経験の機会を与えていただきたい。
- ・公開できる情報は可能な限り、全国盲ろう者協会のホームページで閲覧できるようにアップしてほしい。どうしても「詳細は友の会事務局にあるので問い合わせ」となると、二の足を踏んでしまう。
- ・友の会の会員は登録通訳・介助者だけではないのに、友の会の行事にチケット（謝金）が発生する行事と、発生しない行事があるなど、複雑に感じる。
- ・終了時間の予測がつかないときがあり、依頼を受けられないことがある。例えば、会合終了後、食事に行くなど。もし予定があるなら、前もって教えていただかないと自分にも家庭があるので。また、送迎があるのは当然ですが、あまり帰りが遅くなると、自分が帰る手段がなくなってしまう

す。私たちも普通に帰りが遅くなったり、突然食事に行ったりということがあるので、盲ろう者だけに前もって予定を、とお願いするのは理不尽だと分かっておりますが。

- ・チケットが足りなくなると、2人体制を1人体制でも良いか、ということがある。
- ・盲ろう者の利用時のチケットは、生活を制限してしまうので自由に利用できるようにしてほしい。
- ・制度が進まないうちに高齢になり、後に続く人がいないことで続けてきましたが、責任の重さ、体力、気力を考えると、辞めざるを得ないと思う。
- ・車の利用が認められないので、お互いに困ることが多い。
- ・盲ろう者に会うまで、また、活動を終えて自宅に帰るまでの交通手段として、車が認められていないので認めてほしい。乗り換えや不便な場所だと、徒歩で移動したりすると時間がかかってしまう。
- ・派遣時間数が不足し、盲ろう者の外出がままならない状態です。県からは資金不足にて増やせないとのこと。ボランティアで活動するしかないとも。
- ・移動での通訳（往復）の派遣のとき、依頼者が目的地で活動する間は派遣に含まれないが、時間を持て余すときもある。例えば、往復2時間としても活動は1日ばかりになってしまう。個人登録なので、養成講座を受けなければいけないのですが、他の活動と時間が重なったり、講座開催地が遠かったりして受けられません。盲ろう者はコミュニケーション方法が1人1人違うので、ほかの盲ろう者と会話ができてなくて困ります。
- ・支援活動の時間数が少なすぎて、自由に行動できない。制限の中で、いかに幸せな人生を送ってもらえるのか、自分の勉強不足のせいで助言するのが難しい。盲ろうの本質を世間の人に説明するのが下手で、いつも悩んでいます。集まる場所（ホーム、デイケア、デイサービス）、もちろん仕事もなく、苦しい思いをしている人に希望を与えられない。
- ・制度そのものが利用しにくいとの当事者の声がある。利用時間が決まっているし、公共交通機関の利用と限定されているが、不便な地域では使いにくい。また、通訳・介助時の通訳と、講演会や研修会などの通訳保障を分けて考えられないものか。手話通訳の派遣と同様に、盲ろう者への通訳派遣を考えてほしい。理由は、主催者との事前打合せなどが必要であり、介助と兼ねていては、できない場面がある。介助通訳と、催しの通訳は、分けるべきと感じている。
- ・全国盲ろう者協会の通訳・介助員（訪問相談員）に登録すると、どのような活動があるのか、よく分からない。
- ・現任研修は必要でしょうが、受けないと登録取り消しになると毎回苦痛になります。

②派遣時のトラブル

- ・一般常識に欠けた手引き者が目立つ。通訳・介助の予約を横取りする人が居る。チケットの枚数が、盲ろう者には理解していないのかバラバラで、枚数をケチる人が居て困る。
- ・金銭がなくなると伝えられると（私はまったく財布には触れないようにしている）本当の事が分からないので、答える方法がなく、本人に注意するように伝えるのみになってしまう。

③人材不足

- ・通訳・介助者がまだ少ない。チーム力が弱い（1人ではできないこと）。
- ・人材が少ないため、通訳・介助活動について、仕事を休んで行くしかない。
- ・盲ろう者友の会の企画担当をしていますが、通訳・介助員の行事などへの参加が少なく、毎回とても困っている。

- ・今の制度で在宅の盲ろう者をサポートするのでは、まだまだ足りない。もっともっとサポートできる人を増やしたり、謝金の単価を上げたりしてほしい。
- ・男性の通訳・介助員をどうやったら増やしていけるか？
- ・登録者がまだ少ないため、長時間の依頼が多く、体力的に厳しい。
- ・通訳・介助者と盲ろう者が固定されていて、新しい通訳者が育っていない。
- ・自分自身は技術が未熟で、自分自身の業務および団体活動が忙しく、十分なフォローができていない。通訳・介助員で活動される方が限定されてしまい、負担が大きいのではないかと危惧している。なかなか通訳・介助員が増えないが、やはり支援を継続するためには、人員を増やす必要がある。また、在宅の盲ろう者が社会参加できるような工夫が必要と考える。
- ・通訳・介助をする男性が足りない。
- ・新しい講習会修了者の登録が少ない。修了者もコミュニケーション方法の上達を目指し、盲ろう者も修了者が参加、活動ができやすい状況を作れるように。

④制度の充実

- ・介護保険認定調査（75項目）、障害者程度区分認定調査（106項目）、いずれにしてもコミュニケーションに関する調査項目がないに等しい。特別事項の欄も設けてはあるが、調査担当者（市の福祉課の職員）が盲ろう者についての知識がなければ、特別事項の書き方もあいまいになってしまうことがある。また、各市で判定会議も行われるが、これも、判定に関わる方々に盲ろう者の知識、認識がない方ばかりの状態、何を判定基準にされるのか？出された結果は、非常に疑問が残る。
- ・歩行訓練など受けていない盲ろう者に対するフォローに苦勞することがある（途中でなった人）。いつでもどこでも受けられる訓練体制づくりを望む。
- ・盲ろう者に対して、24時間体制でサポートできるのが理想であると思うが、自分の家族に障害者、病人がいるために、時間的に通訳・介助するのが難しい時間が多すぎる。サポーター（通訳・介助員）をサポートできる仕組みを社会・行政が一丸となって作ってほしい。
- ・仲間として接する場合と通訳・介助者として接する場合、関わり方を明確にしているつもりだが、盲ろう者の受けとり方は、あいまいではないかと思える。送迎が認められていないため、公共交通機関のない不便な地域の盲ろう者を自車で送迎するには、通訳・介助者（会員）と盲ろう者の2人の問題、責任とし、友の会も派遣も関わり知らないという状況。制度の中で確立してほしい。
- ・盲ろう者の通訳・介助者としての倫理要領が早くできると良いと思います。レベルアップをして、いろんな盲ろう者のコミュニケーションに対応できるようになってほしいです。盲ろう者自身が、通訳・介助者の仕事をもっと理解してほしいです。
- ・盲ろう者1人1人によって求められているものが異なるので、できるだけ多くの盲ろう者と接していかなければと思う。
- ・これだけ多様性のある盲ろう者の通訳・介助なのに、手話通訳などと比べても謝金単価が低い。通訳とガイドヘルパーの両方を併せ持っているような内容なので、それらより低いのは問題だと思う。
- ・聴者主催の行事で、聴者のペースで進行し、会場の工夫ができない場面で、精神的、肉体的に苦痛になる。一過性なので、あまりよくならないように感じる。手話言語法や情報コミュニケーション法など、1日でも早く法制化したら良いのではと思う。

⑤啓発の必要性

- ・県内で確認されている盲ろう者の人数に比べ、友の会などで活動している盲ろう者は、ほんの一握りの方々です。外出できない方々、ふれあう場があることを知らない方々に伝える方法を、いつも考えています。
- ・××県での登録盲ろう者が5名以下であり、盲ろう者の掘り起こしが必要である。
- ・××県では通訳・介助者はたくさんいるが、利用する盲ろう者の登録が少ない。せっかくある制度なのに、利用者が少ないと制度そのものが危ぶまれる。
- ・通訳・介助を必要としている方の登録が少ない。何とかたくさんの方々に登録して、社会に出てほしいところです。
- ・社会的認知不足のため、女性の盲ろう者の介助で白杖をしまつて移動する場合も、男性の盲ろう者の介助で白杖をしまつている場合も、男性通訳者は誤解を受けて活動しづらい。

(7) 活動に関して

①派遣依頼がない

- ・せっかく登録しても活動依頼がないために、ほとんどの人が活動していないのは、自分も含めもつたいたいと思う。
- ・登録しても1件も依頼がない。経験を求められても勉強の機会がなく、次年度は県の登録を辞める。
- ・あまり依頼がこないで、登録している実感がない。受講直後は、指点字なども覚えたいと思ったが、使う人も身近にはいないようで、覚える意味がないと思った。友の会で交流会などをされているが、遠いのでほとんど参加していません。経済状態もよくないようで、いつの間にか通訳料も減額(期日付き)されました。テンションは下がる一方です。
- ・もっと多くの盲ろうの方に接し、通訳・介助してあげたいと思っていますが、依頼がないので仕方ありません。聞くところによれば、ほとんど毎日通訳なさっている方もおられる由、特定の方だけのようですが、どのような配慮がなされているのか、ときに疑問に思うことがあります。
- ・登録してから1回依頼があっただけで、まったく依頼がないのに、現任研修は参加しないと登録がなくなってしまうというシステムが、よく分からない。
- ・コンスタントに依頼が来ないので、だんだん技術が劣る。
- ・通訳・介助登録をしたのに、依頼がなさすぎ！全通訳・介助者に、平等に依頼が来るようにすべきだと思う。いくら研修をやっても、実際に通訳・介助をしなければ、何の意味もないと思う。派遣担当の方のセンスを疑わずにはいられない。
- ・まだ一度も活動依頼がないので何とも言えませんが、せっかく以前受講したにも関わらず、実際その受講で身についたものはなく、現在、全国盲ろう者協会の方で、どんな活動を行っているのかもまったく分からない状態なので、活動内容など分かる物があれば教えてほしいです。そして、1～2日間の受講でも、何かずっと使える通訳・介助法を学ばせてほしかったと思っています。
- ・家族の病気などで4～5年活動していないが、活動予定表を提出しても、半年以上1件の依頼もなく、派遣事務担当の私的感情(自分の地域の通訳・介助員)が入っているようなことを聞く。初めのころ、うっかり通訳をせず、途中から慌てて通訳し、後で盲ろう者にわびたが、その後私の名前を聞くと露骨に嫌な顔をする。その後、通訳をやりたくなくなった。

- ・資格取得後、1年以上実践するチャンスが無いので、ほとんど忘れてしまっている。同行支援の機会を多く設けてほしい。
- ・私の住む地域に、通訳・介助が必要な盲ろう者が少ないので、通訳・介助の依頼も非常に少ないです。常に接することができる状況ではないので、個々の方との関わり方を深められません。もっと活動できる機会を得て、盲ろう者との信頼関係を築きたいです。
- ・時間が可能な限り対応したいが、依頼が少ない。
- ・時間がなくて何度かお断りしていたら、依頼が来なくなったので、申し訳ない気持ちです。
- ・登録してから1年以上経ちますが、1度も活動の機会がありません。周りには、盲ろう者がいないため、せっかく勉強した知識を使えることがなく、1年もたつと、ほぼ初心者状態です。活動したいと思っても、どうしたら良いか分からないのが現実です。派遣要請が今後あったとしても（喜んでお受けしたいところですが）問題なく業務をできるか不安でいっぱいです。登録済みの方々の多くは、同じ気持ちであるのではないかと思います。
- ・この3年間まったく依頼がありません。もっと活動をしたいと思っているのに、依頼がないので残念です。
- ・依頼も少なく活動の場が少ない。人によってコミュニケーション手段に違いがあり、手話や点字が主流のように感じる。要約筆記では限界を感じる。
- ・ここ2~3年、まったく依頼が無いのはどうしてなのか？と思います。長いブランクは忘れてしまいます。
- ・一度しか受講しておらず、依頼もないので、やってないです。

②活動できず

- ・もっと支援を提供、活動したいと思っていますが、仕事を持っているとなかなか活動日時が合いません。
- ・以前は盲ろう者のそばで活動できましたが、手話通訳士の資格もないので、なかなか活動できません。勉強会もなかなかないし、あったとしても知らないでいることがあります。1人暮らしで収入も少なく、生活していただくだけで精いっぱいですが、役に立つことがあれば参加したいです。市でも勉強会を開いてもらいたいです。サークルだとなかなか参加できません。サークルだと参加しにくいです。
- ・盲ろう者向け通訳・介助の依頼を多々いただくのですが、私自身、地元で知的障害者の支援をしており、土日の行事となれば知的の方を優先してしまいます。時間が合わず、心苦しく思いながらお断りしてしまいます。また、私は手話ができません。習おうと思いますが、時間が……。手話ができないことも、通訳をお断りする要因になっているかもしれません。
- ・講習は受けたものの、終了後パソコンの要約筆記のスキルアップ講座を1日受講しただけです。コミュニケーション方法が多岐に渡り、それを概論のみ習っただけで、何もできない状態です。役に立ちたいという気持ちはあるものの、空回りです。
- ・母の介護のため、昨年からお休みしています。
- ・仕事をしていると、関わることでできる時間が限られてしまい、さみしい。
- ・現在は活動を休止しています。在職中は仕事の関係上、自分の時間に余裕あるときしか参加できませんでした。定年後は、求職活動や再就職訓練において、ボランティア活動などしていると「就職した」と見放されるため、現在はすべての活動を休んでいます。一銭の金銭も授受しないのに、

不合理だと思います。

- 本格的に活動したいと思っっていますが、育児もあり、また自分自身が白内障と黄斑上膜除去手術をしたばかりで、なかなか思うように動けません。
- 昨年よりパーキンソン病治療中で、身体、体力的に通訳を引き受けるのは難しい状況です。交流には、たまに参加しています。
- 現在は、個人的にほかの用事が多く、盲ろう者の方には中途半端な関わり方しかできない。
- 盲ろう者の会に登録してはいますが、震災以来、精神福祉、身体支援を××市でやらせていただいているので、盲ろう者の移動には、まったく参加していません。こんな状態で、参加（登録）資格があるのかと悩んでいます。
- 依頼は月 1 回と回数が少ないので、本人とのコミュニケーションが少ない（時間外で、何人かで食事などコミュニケーションの時間を取っている）。ほかに仕事をしているので、時間を合わせにくい（通院介助なので、月曜に休みが取れるよう努力したい）。
- お知り合い同士で、特に手話で話していることが多く、疎外感を覚え、活動を遠慮しています。本当に指字を必要とされている方はいらっしゃるのか疑問です。
- 通訳・介助の依頼が時々来ますが、現在自分の仕事で手いっぱい、なかなか時間が合わず、活動に参加したことがありません。手話は多少できるのですが、点字がまったくできないので、自分には盲ろう者通訳・介助は無理なのではないかと自信がないのも、一歩踏み込めずにいる理由の 1 つです。
- 手話通訳しかしたことがなく、やはり技術面に不安があり、仕事をしていることもあり、一度あった依頼も、結局は断らざるを得ませんでした。
- 指字や手話を覚えて活動したいと思っっているが、家庭のことをやりながらのため、なかなかできない。
- 仕事を持っていると行事に参加しづらい、または出られない。遠出があると苦手である。通訳に自信がない。
- 習得した技術を使い、盲ろう者の役に立ちたいと思っっているのですが、地域に通訳・介助を必要とする盲ろう者が非常に少なく、遠くまで出かけて行って活動しなくてははいけない。
- 現職との両立が難しい。
- 私は教育公務員です。通訳・介助料の受けとりができません。通訳・介助料を受けとれるものを優先的に派遣してもらうため、ほかの通訳・介助員に負担をかけています。ほかの通訳・介助員の都合がつかない場合、通訳・介助料を辞退して私が派遣されますが、教育公務員も通訳・介助料を受けとって積極的に活動できるように、全国盲ろう者協会から厚生労働省、文部科学省に働きかけていただきたくお願いします。
- 2009 年に盲ろう者向け通訳・介助員養成研修会を受講させていただき大変勉強になり、また、難しいことだと思ったのも事実でした。受講後に活動したいと思っっていたのですが、自分の体調不良のため参加できなくなり、大変心苦しく思っっております。
- まだ踏み出すことができない。
- 登録していて依頼をいただいても、仕事の都合や家庭の都合で引き受けできないことが多く、とても申し訳なく思っっています。
- 通訳・介助の派遣を頼まれても、別の仕事（不規則勤務）を持っているので、断ることが多々あります（仕事優先）。盲ろう者の方がいつでも気兼ねなく、通訳・介助を受けられるような体制が必

要と思います（ホームヘルパーが、触手話や指点字の技術を身につけるなど）。

- ・本業があるとなかなか協力もできず、また、現在は療養のため活動を休ませてもらっています。
- ・仕事を毎日しているため、なかなか依頼を受けられない。このまま登録していて良いのか迷います。
- ・技術と経験がまだまだ足りない。活動機会に自分の都合をなかなか合わせられない。できる範囲で続けたいと思うのみ。
- ・ここ 2 年間ほど、手引き盲ろう通訳は受けておりません。個人的に忙しくなったことも要因の 1 つです。やはり自分の体力低下が大きいです。サークルに盲ろうの方が参加してくれます。その程度内での会話通訳はしております。
- ・学業とバランスを取りながら、通訳・介助活動をさせていただきたいと思い、登録の手続きを取っていただきましたが、親が高齢で、急に手助けが必要になり、思うように時間が取れなくなったことで、ほとんど活動できていません。
- ・通訳・介助活動が、通常の仕事以外の土日祝日に限られているので、盲ろう者からの依頼を断ることが多く、心苦しく思うことがある。
- ・本当はもっと通訳・介助活動をしたいのに断ってしまう状況が多くて、とても申し訳ないと思う。学生だから仕方がないと言えば、そうなのですが。
- ・最近では、ほかの行事と重なることもあり、通訳・介助活動、盲ろう者行事、交流に参加できず、関わりを持てずにいます。盲ろう者行事（友の会の活動など）に関わっていない自分が、通訳・介助活動をすることに、申し訳なさりと抵抗を感じてしまいます。
- ・本職の仕事が負担になっている今ですが、通訳・介助活動中に、危険なことがあってはいけませんので、活動を中止しています。そのことが大変申し訳なく思っています。また、講習会で覚えたことを使わないため忘れていたので、本当は登録を辞めた方が良いのかとも考えてしまいます。しかし、何かあったときには、お手伝いできるようにしていきたいとも思い悩んでいます。
- ・平日は仕事のため活動できず、土日のみとなります。家の都合もあり、活動日数が少ないので、依頼があっても断ることがあります。
- ・私は聴覚障害者で、相手の話しかける声は分かるが、言葉としての聞き取りが困難なため、一度、接近手話を依頼されたが、まったく役に立てず落ち込んでしまった。それ以来、盲ろう者の中に入って行けず、集いに参加する気持ちが遠のいてしまい、気分的におっくうになった。集いの連絡があるたびに、申し訳ない気持ちになっている。手話通訳を読み取り、それを接近手話にて伝えることは難しいと思いました。
- ・仕事の関係上、一度も通訳・介助をしたことがありません。技術の上でも不安がいっぱいあります。たくさん交流できれば良いのですが、まったくしていないので、どんどん忘れていきます。
- ・あまり通訳・介助をお受けできないのが、心苦しくもあります。毎日、盲ガイド依頼があるので。
- ・盲ろう者の会議で指点字通訳を何回かしたが、同時通訳が難しい。会話ならできますが、同時通訳だと、通訳している間に、話をしている人たちの内容（特に数字関係など）忘れてしまいます。それで、自分には同時通訳が向かないと思い、ここ 2 年間まったく活動していません。会議の通訳の際、話の内容を忘れてしまう自分が嫌になっています。
- ・現在は時間的に余裕がほとんどなく、通訳、ガイドヘルパー登録はしているものの、活動はまったくできておりません。時間ができれば現任者研修などを受けて、少しでも活動できればと思っています。
- ・講習を受講後、やる気とは逆に生活環境が変わり、活動ストップしてしまいました。今は子どもに

全力投球しております。そのうち一から再スタートしたいと思っております。

- ・活動・研修はほとんど参加できていません。友の会発足のときぐらいに通訳・介助員になって、その後、仕事が忙しくなり活動できないのが現状です。退職後、少しずつ復活したいと思っております。

③活動のやりがい

- ・ガイドヘルパーをしています。とてもやりがいを感じています。盲ろう者とのコミュニケーションの場があればやってみたいと思います。
- ・指点字を学んでいるが通訳・介助の場面で使ったことがなく、モチベーションが下がっているが、今後も続けたい。
- ・盲ろうの方自身、大変常識を持ち合わせておられ、接して下さいます。よって、私の方が学ばせていただいているという思いが強く、やりがいを感じて通訳・介助に励むことができていると思います。年齢的にも健康に留意して頑張りたいです。

(8) その他

①所感

- ・盲ろう者向け通訳・介助員養成講座を1年間に2~3回やっておられるのですが、無駄だと思いません。それは、その会に登録しても依頼がない人が多いからです。盲ろうの人もその点、考えられたら良いのではないのでしょうか？介助にしても、同じ人ばかりです。それなら、1年に1回ぐらい講座をされても、良いのではないのでしょうか？
- ・これからも続けたい気持ちは強いのですが、自分自身の年齢、体力を考えると、盲ろう者に満足いく介助ができないと判断したとき、登録を下りたいと思います。
- ・仕事をしているので、盲ろう者通訳・介助の経験が少なく、年齢的、能力的にも新しいことが身につきません。今できる範囲で、経験を少しでも増やしていきたいです。
- ・通訳・介助活動などが近くにあるときには、行けるかどうか分かりませんが、連絡してほしい。
- ・専門的な技術が身につかないと分かっている通訳を引き受けるのは、お互いにとってよくないと思う。養成では、手話ができるだけで「即戦力」と言われたが、それは違うと思う。大変危険な発想では？
- ・通訳・介助から時間があまりにたってしまうと、技術的な面で若干消極的になってしまう、というのが自分の中で一番強く感じられます。
- ・通訳・介助の依頼は、県庁所在地のある市の団体から来る。活動する場所もその市ばかりである。通うのが大変だから文句を言うのではなく、地方都市にも盲ろう者はいるはずだが、多分まったくサポートされていないのではないのでしょうか。交流会の案内ばかり来て、通訳・介助依頼が非常に少ない。気を遣っているのでしょうか？予算がないのでしょうか？積極的に話しかけるのは苦手ですが、夜中だろうが無償だろうが、犬のように使ってくれて構わないと思っております。
- ・まだ経験が少ないので何ともいえない。研修には参加している。気づかなかった面などの話、気づいたことなど、とても参考になる。駅、乗り物などプライベートな面での通訳・介助活動はない。団体活動内における範囲でやっています。
- ・養成講習会を修了後、これまでに3回、2名の方の音声通訳を担当させていただきました。講習会での学びは大変有意義で、講義、演習ともに分かりやすく、また深い内容でした。基本的なことを

教えていただきましたが、やはりそれだけでは「身につく」までには至りません。自分なりに書物を購入したりしています（手話辞典、手話うた中心）。「実際に盲ろう者とかかわることが唯一の学びであり、身につく早道」という励ましの言葉に支えられて、通訳・介助活動に取り組もうと思いました。たった2名の方の、たった3回の音声通訳でしたが、やはり「その方」を多少なりとも知らない点がある、というのが実感でした。声の大きさ、トーン、スピードなどは、その方に「これで良いでしょうか？」と確認すれば良いことですが、それ以外のことも非常に関わってくることを知りました。また、通訳・介助活動の際、その内容についてある程度知らない、こちらが通訳に間に合わないこともあります（役員会での正式名称、専門用語など）。

- 皆さん毎日、一生懸命頑張っておられます。自分の経験上、良いと感じたことはそれとなく会話の中に入れたりしますが、あくまでも主は依頼主であります。納得のいくアドバイスをいたしたいと思います。依頼者とはいつも楽しく任務を遂行しております。
- 養成講習を終えて自ら現場に行くには、気持ち的にハードルがある。半年～1年くらい、現場に交流に行ける（気軽に）仕掛けがあればと思う。街で通訳・介助をしていると「いいなあ！」と思いながら見ている。手話の技術も、ろう者としっかり伝わった、通じたという思いがなく、自信がないという思いが、二の足を踏んでしまっている。盲ろう者に対してはハードルが高い感があり、開かれた場、手話が未熟でも構わない、まず行こうと思う自分にしなくては！ちょっと、誰かが引っ張ってくれたら行けるのかな？
- 研修後、登録をして2回ほどお仕事の依頼がありました。簡単な手話や指文字程度で自信がありませんでしたが、気持ちはありました。近くでお仕事があれば、頑張りたいと思います。
- ボランティアで始めたのですが、盲ろう者支援活動は2年ぐらいやりました。年間費の支払い、一緒に活動するとき、参加費、出費が多く、ボランティアとしては、お金なくては活動できない会の在り方に寄り添えないので退会しました。ほかの方法で支援できるのであれば、協力したい。
- ほとんど通訳・介助の経験がなく、盲ろう者と深いつながりを持った経験がありません。
- 昨年初めて仕事をさせていただき、嬉しく思っています。できるなら、杉並、武蔵野の方のお手伝いを、と考えています。
- 以前、病院での通訳・介助をした際に、時間が予定より早く終わり、盲ろう者から「娯楽施設と一緒に同行してくれ」と言われ、しょうがなく付き添ったが、最初の予定にはない通訳・介助だったので、すごく困惑した。60歳を過ぎているので、いつ通訳・介助を辞めようかとよく思う。集中力・注意力がなくなってきているので、迷惑をかけないうちに。それはいつなのか。登録した方が良いのか。パート勤めと本の点訳ばかりしている現状。月一度の指点字に参加しているだけ。
- 聴覚障害がある通訳・介助員だと、どうしても活動制限ができてしまう。歯がゆさが残ります。ほかの仕事を持っていることもあり、ろう協会の活動もあり、活動日が限られてしまうので、このままの状態が続けていいのか悩むことがあります。
- 手話通訳の経験がありますが、盲ろう者の通訳経験はありません。盲ろう者の知り合いがおりますが、会ったときはコミュニケーション方法を教えてくれるので、個々に合った方法で話していました。いろいろと生活する上での工夫を教えてください、関心しています。以前、盲ろう者への通訳をしている場を見たことがあり、気になったことは、通訳・介助員側の服装でした（薄過ぎ）。
- 下見、事前準備、自己研さんなどの出費がかさみ、新たな通訳・介助員の呼びかけに、二の足を踏んでいる。盲ろう児が、盲ろう者へと成長したあと、県内の通訳が育つか不安。
- 高齢なので、いろいろな面で気をつけています。

- ・よく言えば「臨機応変」で、そのときの状況に応じて対応や考え方も変わります。絶対のマニュアルがないので、それが臨機応変であり、また、その都度判断が求められて困ることです。「あの人はこうしたのに、この人は違う」などと言われることも多いので、自分が何かの前例になってしまいうような行動を取らないように気を遣うので、それが盲ろう者との深い付き合い（理解）につながらないような気がしています。また、自分としては手話通訳を目指していることもあり、「二兎追うものは一兎をも得ず」で、どちらも身につかないジレンマを感じています。
- ・聴覚障害なので、講師が健聴者のとき、舞台通訳の手話がどのような通訳か気になります。前に、地元の手話通訳者で、聞きだめて表現が遅くなる例があり、ほかの盲ろう者は通訳（健聴者）が始まっているのに、ろう通訳は舞台の通訳者のリズムに合わせねばならない（逆に言えば、ろう者の講師のとき、読み取り通訳がスムーズでないと健聴通訳もやりにくいのは同様）。
- ・研修会などに参加する時間が足りない（家庭の事情）。
- ・力不足なので通訳にも自信がなく、積極的になれない。
- ・通訳・介助に当たり、閉鎖的なる日本の法律や制度を早く欧米諸国に達するレベルにして、通訳・介助者が障害者とともに、自分たちのお互いの「想い」をぶつけ合う関係でありたいものです。
- ・自分の技術の未熟さで、盲ろう者に不自由や不利益、不快な思いをさせてしまっていないか、常に気がかりです。通訳・介助の経験が少ないこともあり、毎回新たな発見があり、盲ろう者の豊かで奥深い世界に強い魅力を感じます。通訳・介助だけでなく、友の会の交流などを通して、さらに盲ろう者について知りたいと願います。
- ・しばらく手話から離れていたため、忘れた手話、新しい手話に戸惑い、自信をなくし、年齢的にも通訳活動はしていきたいけれども……と悩んでいます。若い人の通訳の素晴らしさに、ますます自信をなくしている状態です。また、仕事を辞めているので時間もあるし、サークルに通っていますが、やはり指導者によるのか、ろう者より指導者が前に出てしまっています。現在、私の通っているサークルで、覚えようにも覚えられない悩みもあり、何についても消極的になってしまい、今すぐくしんどいです。また、肩、ひざの痛みがあり、リハビリに通っているため、登録はしたいけれども……。
- ・私は、手の甲に汗をかく性質なので困る。触手話は向いていないと思う。
- ・手話の勉強会で、盲ろう者の方が必ずおられるとは限りません。日常生活でも出会えたら、コミュニケーションできるのに、と思います。勉強不足で積極的に通訳をする自信もなく、これからもう少し頑張ろうと思っています。
- ・自宅から1時間ぐらいで通える方でしたら通訳・介助可能ですが……。
- ・現在パートをしており、××県には登録していません。全国盲ろう者協会からの定期的な情報はありがたいです。私は宗教家ですが、団体の中に持ち込まないようにしています。県、市の方で、いつか活動しなくなってしまうのかと思っています。当事者の方を尊重しながらも、通訳・介助員のことをよく知るためとはいえ、根掘り葉掘り聞かれると困ることはあります。いつも一般的を尊重しています。
- ・活動するには、まず自分が心身共に健康でないとできないが、私自身も身体障害があるので、障害自体のことでつまずく（足の調子が悪くなる）と活動ができなくなる（現場での通訳はできても、移動などの介助がまったくできない）。まさに今その状態で残念！（両松葉の使用を強いられている。普段は義足で普通に歩けるのだが）というか、歯がゆい思いをしています。早く普通に活動したい。

- ・視覚障害があるので、ほとんどボランティアです。ガイドを依頼されるのは無理としても、実際に活動なんてあり得るのでしょうか？疑問を感じます。
- ・2月に入ってから、本格的に通訳・介助の実践（依頼を受ける）ことになりましたが、県内での該当者が少数のため（障害状態の固定？例えば、指点字での通訳該当者がいない）、常に自分のできる介助・通訳スキルの上達に努めていき、いざという時のために磨きをかけたいと思っています。これから実践で問題点、改善点を見つけたいと思います。
- ・知力、体力ともに劣ってききましたので、今までも音声などの楽な通訳・介助のみさせてもらっており、やりがいなどはほど遠いことしかできていません。引退すべきか。
- ・まだ経験が浅いので、接する機会を増やしていく必要を感じています。手話、点字の技術の向上に努力します。
- ・講習会で習ったことと違うときに、対象者は「盲学校ではこうであったから」と言われ、戸惑いました。言われた通りにしますが、危険を感じる時があり、困ってしまいます。冬は雪が多く、移動介助は危険を感じるので休んでおります。交通手当が少なく、ほかはいくらぐらい出るのでしょうか？全国の皆さんの手当が知りたいと思っています。
- ・盲ろう者の通訳・介助者として講習会を受け、登録して10年が過ぎました。いろいろな盲ろう者の方々に、また通訳・介助者の方に育てていただき今日があります。通訳・介助を担当したとき、戸惑うことが多々あり、自分の通訳技術不足に頭を抱えてしまいました。仲間に支えられて、1つ1つをクリアしていったように思います。盲ろうのほかに知的、身体にも障害を持っていて、会話が難しい人がいます。盲ろう者の主体性とよく言われますが、伝えても戻ってこない会話に、食事もちょうろで決める、行きたいところも家族の人と相談する。盲ろう者の表情と身ぶり（トイレ、嫌、怒）での判断で対応していますが、それでいいのか。どうしたら会話ができ、自立へ少しでも向かっていくのか日々悩んでいます。
- ・通訳・介助者の服装について。目が見えない、聞こえないので、どんな服装でもいいということではないと思います。盲ろう者にも失礼になるような人もいます。講習会の中で、そんなマナーも一言入れていただければと思います。
- ・70歳に近づいていますので、体力的な面で迷惑をかけないか心配です。特に、県外への同行など大丈夫かなと悩んでしまいます。
- ・買い物の通訳・介助のときに、「安い物があれば」と依頼されたが、知識がないため、そのことを伝え、事実を伝えたが、事前に分かっていたらいい物になったかと思った。
- ・通訳の後、大変疲れて（神経を使うためと思う）がっくりするときが辛い。私が高齢のためかも、と思うけれど、いろいろな面で「ストレスがたまらない」ということは、言えないと思う。
- ・コミュニケーションが同じ盲ろう者が多く、違ったコミュニケーションの盲ろう者が来ても、なかなか合わせるができない。その場の雰囲気が悪くなる。
- ・実際に通訳・介助の経験がないので、現任研修のときに通訳・介助をしますと、不安になります。
- ・今後いろいろと活動を広げていく上で、通訳・介助員側、盲ろう者側、お互いが尊重し合える仲であるといいな、と思います。
- ・困ったことや疑問などがあれば、派遣元、講師、担当（派遣）者に相談し、アドバイスなどもらっている。
- ・過去に盲（弱視）で、かつ中途失聴の方の筆談通訳を、全国盲ろう者協会から依頼されたことがあります。私は聴覚障害者ですので、触手話です。自分に適さない依頼で断ったら、なぜか次から依

頼がこなくなりました。

- ・服装について。弱視の方の「黒色」を希望というのは除き、視覚的にどんな服の色でも問題ない場合、自分の好きな服装（ミニスカートや、周りに不愉快さを与えない程度の範囲）で良いと思っています。でも、周りから「工作中」と分かるような服装が良いのか。外出時には、その雰囲気合った私服で良いか迷います。
- ・盲ろう者との関わりに地域差もあり、通訳・介助の経験にも差がある。いつもの慣れた通訳・介助員への依頼が定着し、新規で登録した通訳・介助員の実践の場が確保できていない。実践するにも、講座での時間数が短く、カリキュラム内容の充実も足りていないので、自信もついてない。盲ろう通訳・介助への課題は、たくさんあると日々感じている。
- ・受講はしたが活動することはなく、継続して学習することもないので、点字など忘れてきている。
- ・相手に対して援助したいという気持ちはあっても、技術が伴っていないようで、現場で体験を積んでいくしかないのか、と思っています。
- ・自分の技術（手話）と体力に自信がないので、自分より上手な通訳者の方が、盲ろう者にとって良いのではないか、と考えてしまう。
- ・私は手話ができないので、盲ろう者とのコミュニケーションが通りにくく、ガイドヘルパーの活動はしていますが、口で言えば分かってもらえるので、どう伝えるかが難しいです。手話も教えてもらいましたが、短時間で覚えられるものでもなく、コミュニケーションが取れるほどになるには、相当な時間がかかります。養成講座を受けて、すぐにクリスマス会や調理実習にボランティアで行ったりしましたが、最近足が遠のいています。もっと、盲ろう者と交流できる場があれば良いと思います。
- ・健康であるが故に、相手（利用者）の気持ちを傷つけているのでは、と思いつつ、通訳・介助活動に参加しました。今も通訳・介助をしたい気持ちと、一方で傷つけているのではないかと考えてしまいます。
- ・自分の身長が低すぎて困っています。
- ・講習時間が短く、技術が未熟のまま派遣依頼されても、自信がなく断ってしまう通訳・介助員もいるようだ。私は、友の会の交流会にできるだけ参加して、実際にどのようなコミュニケーション方法なのか、また、自分でもできる方法で盲ろう者と交流するよう努めている。友の会に障害者関連の資料を持参した際、盲ろう者の障害の程度によって点訳、拡大文字変換が必要となるなど、今まで気がつかなかったことが多い。正しい情報保障ができるよう努めていきたい。
- ・お互いに気持ちを通じ合えるように、コミュニケーション手段の技術を磨きたいと思うのみです。
- ・派遣によって依頼されているので、派遣元の指導の下に動く通訳者であるため、問題などが生じた場合は自己判断ではなく、派遣元へ連絡して判断を仰ぐことになっている。
- ・人対人としての通訳・介助であるので、その間は自分の能力を精いっぱい使って努めたいと思っている。盲ろう者の方が楽しく過ごしていただけるよう努める。
- ・愚痴を言いたい盲ろう者もいらっしゃるので、その場合は、聞き役に徹する。尋ねられればお答えをする場合もあるが。
- ・××県の場合、手話も点字も分からない中途盲ろう者の方々が大半です。当然ながら、音声通訳も聞きづらいです。途方に暮れています。また、高齢者が多いため、車いすや介護の範ちゅうに入るような知識、情報も必要ですが、行政や盲ろう関係の事業を受託している機関との関係も含め、学習会、情報提供、予算など、ただただ途方に暮れています。

- ・登録してまだ日が浅いので、戸惑うことばかりです。
- ・移動介助の際、危険もたくさんあるのでとても緊張します。コミュニケーション手段も十分に身につけられているとは言えず、盲ろう者に申し訳ないです。
- ・高齢者層の人は目が痛いので、10～15分くらいゆっくり寝た後、パッチリになってから触手話をしました。無理になると、怒る顔が見えます。難しいと思います。
- ・養成講習会を受講後、登録して短期間なのと、年齢を重ねてから受講したので、覚えが悪く、例会、勉強会などに参加するようにはしているのですが、行くことができないこともあり、自分に自信が持たなくて日々戸惑っています。盲ろうの方々との接点が少ないので、分からないことが多いです。
- ・コーディネーターからの依頼を基に、通訳・介助活動をしているので、担当する盲ろう者の性格などを知ることから始めているが、お互い理解し合えば、楽しく交流できるようになる。
- ・自分の体が悪いので、通訳・介助が難しいときがある。
- ・通訳・介助員が、たくさんいたら良い。
- ・乗り物の中などでは、比較的配慮されているのですが、道路上においては、盲ろう者を危険から守ることが大変です（特に自転車から）。一般によく言われている「障害者に優しい街づくり」を、もっと進めて行ってほしいと思います。
- ・私自身、十分通訳できる力がないので、その力をつけたいと思います。
- ・手話や点字など、子どものころより学習する機会もあれば、通訳・介助者のすそ野が広がると思います。
- ・通訳・介助員の技術、知識をもっともっと身につけたいのですが、時間が足りません。地域社会での役割もあり、バランスが取れる動きができれば良いのですが……。また、盲ろう者1人1人と、もっとゆっくり関わると良いのですが。伝えるのがやっとなで、相手の思いをゆっくり聞いてあげたいが、時間が取れない。チャンスがない。指点字、パソコン、プリスタなどを使いこなせるようになってみたいと思っはいます。まだまだ始まったばかりだと思うので、少しずつ歩んでいきたいと思っはいます。
- ・友人の1人として付き合いができていますので、付き合い方も普段通りです。
- ・主となる仕事は手話通訳であるため、回数の少ない盲ろう者向け通訳・介助活動において、困っていることはありません。
- ・身内に対する感謝の気持ちを持ってほしい。
- ・盲ろう者友の会からのお付き合いなので、通訳・介助とはいえ、気持ちの部分。「入り込んでしまふ」という一面がある。例えば、ガイドヘルパーの仕事をしているときと、盲ろう者の通訳・介助をしているときに、同じような場面があったとき、家族的な気持ちになって考え、行動すると思ふ。ただ「仕事だから」と、簡単に処理できない気持ちがある。今は仕事で時間がない状態ですが、時間を作って活動したいと思っはいます。
- ・今後も通訳・介助員として、心温まるサポートと自己研さんを重ねて頑張っていきたい。
- ・「下手だし、通訳替われ」と言われる。他者と比べられる。
- ・障害者用トイレが使いにくい（広すぎ、使い方がまちまち）。
- ・急な派遣の依頼がある。
- ・障害者用の駐車場が少ない。駐車場が狭いため危険。
- ・まだ経験が浅く、通訳・介助者の補佐的にしか活動していない。ボランティアとしては通訳・介助しています（仲間として）。

- ・講習会は受けていますが、まだ実践活動がありませんので、盲ろう者へのサポートについてはよく分からないというのが本音です。1人1人盲ろう者となられた経過や心情が違ふと思いますので、盲ろう者とはこのようなもの、という先入観は禁物だと思います。
- ・課題があまりに多すぎて書けません。
- ・日々の活動において、公的な派遣もあれば、ボランティアの介助や通訳もあります。通訳・介助員の中には、ほかの仕事を持っていたり、生活資金に余裕がある人ばかりとは限りません。都合が悪くて来られないと伝えた通訳・介助員に対して、「仕事を休んで来い」と強制するような発言や、横柄な態度をされることもあります。多くの通訳・介助員を必要としているときに、こういうことで仲間が減っていくのは残念です。どう対応していくか悩むところです。
- ・自治体で養成講習会が行われ始める前に、全国盲ろう者協会主催の現任研修を受けてきました。養成研修を受講した記憶は、覚えていません。ただ、全国盲ろう者協会の賛助会員になったのと同時に、通訳・介助員（訪問相談員）の登録をしました（手話通訳の資格があった関係で）。改めて受講した方が良いでしょうか？
- ・お金がほしい。
- ・自分自身、耳が聞こえにくくなり、腰痛もあって、送迎介助をしていたけれど、やめようかなと思っています。
- ・県の友の会は、聴覚障害者協会の、ある年齢層との仲がよくないので、数年前から他の会に入会しました。
- ・盲ろう者同士の仲が悪い。ろうベースの場合、寄宿舎時代のことを根に持っていたりして、話し合いにならないこともある。そのため、通訳・介助員の会員数が減ったり、魅力を感じない。
- ・通訳・介助をするだけで、盲ろう者だけで、会の運営、交渉が成り立っているのか？一部の人のみではないのか。自分の会では日々の生活だけで、ほかには目が向かない人が多い。
- ・立場の強い手話通訳者が、全体を動かしているように見える。以前は、盲ベースの方も数人いらっしやったが、今では全員がろうベース。利用チケットがなくなった後の支援先がないのも、問題だと思う。
- ・盲ろう者の会以外の集まりで音声通訳をする場合、一般の人たちに理解していただけるように、盲ろう者に対する世間の風当たりがよくなってほしい。
- ・公務員になってしまったため、活動できない現状です。副業となってしまうためです。通訳・介助員の希望があれば、賃金を受けとらなくても、移動介助などができるようにしてもらいたいです（賃金は寄付するとか）。盲ろう者の方からは「通訳がほしい」という声が聞かれますが、活動できず、もどかしく思います。
- ・私の家は公共の駅が遠いので、待ち合わせのときには、車で行って待ち合わせるしかない。バスも走っていないので！
- ・盲ろう者の数が少ないので、支援体制が十分ではないと思うが、今の現状からみると、友の会が細くても安定した形で位置付いているので、少人数団体としてはうまくいっていると思う。盲ろう者1人1人のニーズを掘り起こすためには、体制も作らないと生半可にはできない面もある。全国の動きがあまり届かない。
- ・1対1の通訳・介助活動の場合、急に通訳・介助員に何かあったとき、盲ろう者の方は分からず、一般の人とコミュニケーションが取れないから、困るだろうなと思います。その場合の対処法を考えてほしいです。例えば、盲ろう者の方に名札を付けてもらい、何かあったときの連絡先を記入す

るとか、通訳・介助員が名札を付けて「盲ろう者の通訳・介助をしているから、私に何かあったときは、ここに連絡してください」と書くとか。

- ・通訳・介助はボランティアであるという社会的通念。通訳・介助が仕事として認知されることが、盲ろうの方々の社会の中での地位向上へもつながると存じます。
- ・緊急ボタンがほしいです（盲ろう者向け）。
- ・通訳・介助活動を主な収入としたくても、収入が不安定で業務時間が不規則なため、ほかの仕事に就かなければならないな、と思う。
- ・地域ごとの防災マップ（避難場所、盲ろう者の連絡先、メモ式の派遣センターの連絡先と、広域地図が冊子になっているもの）などの配布があれば、とても助かると思います。
- ・通訳・介助の依頼者が、依頼申し込みをした盲ろう者に対し、派遣可能と連絡することを忘れていた。私が伺うと、盲ろう者に「依頼していない」と言われ、盲ろう者に暴力や罵声を浴びた。通訳・介助の依頼者は自覚がなく、軽く謝って済ませた。その上司は県からの「天下り」で、自分の立場だけを守ろうとし、謝らず、高飛車な態度で傲慢と同時に人間性に欠け、自分の手柄だけを重視し、それに手助けしない（関係ない）人たちには高圧的な言動で、反省はまったく見られなかった。それで私は、通訳・介助を辞めました。
- ・息子が盲ろう者です。同居しています。
- ・現在、勤務先でアッシャー症候群による弱視難聴の盲ろう者のサポート（実質的な通訳・介助）をしながら仕事をしています。本人との関係は良好で、互いに助け合いながら働いていますが、職場の同僚や上司、勤務先の利用者などに、その人の持つ障害を理解してもらうのは容易ではありません。聞こえ方にムラがあり、聞き取りやすい声の相手とはスムーズに会話ができますが、どんなに大きな声で話しかけても聞き取れない声の人には反応しないといったことが、人を選んでいるとか、わがままでというように受けとられてしまうのです。視覚障害とか聴覚障害については、世間的にも割と理解されやすいように思いますが、盲ろうという状態は、あまりにも種類が多いので、ただ縁あって一緒に仕事をしているだけの人たちに正しく理解してもらうのは、容易なことではないのだと痛感させられています。やはり私たちは、一般の方々にもっともっと盲ろう者の存在を知ってもらえるよう啓発活動をすべきだと思います。たまたま一緒に仕事をするようになった障害者を仲間として受け入れ、協力し合いながら生きていきたいという気持ちをみんなが持ってくれたら、真のバリアフリーが実現するのではないのでしょうか。
- ・通訳・介助員としては、2001年に活動していた記憶はあるのだが、開始が何年か覚えていない。また、昨年1年間でどれだけ活動したのかも、自分で記録を取っているわけではないので、はっきりとは分からない。利用券を受け取る活動と、受けとらない活動があるし、役員をしていると、派遣としての活動はできないことの方が多い。ボランティアなのか、仕事なのか区別のつかないことの方が多いし、友だちとしてのお付き合いなのか、クライアントとして対応すべきなのか、分からないことも多い。私としては、普通のボランティアの方が、気が楽で良いと思うことの方が多い（決して手抜きをしているわけではない）。
- ・視覚、ろう者、盲ろう者、各団体の横のつながりが薄いように感じます。まだ知らないことかもしれませんが、みんな手をつなぎあっては……と思うことがあります。

第3部

通訳・介助についてのニーズ調査

第1章 調査の概要

1. 調査の目的

盲ろう者の生活の状況や通訳・介助派遣の利用状況や要望などを把握するにより、盲ろう者向け通訳・介助員の今後の養成の在り方やカリキュラムを検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

2. 調査の対象

通訳・介助員派遣事業に登録している盲ろう者 16 名

3. 調査の時期

平成 24 年 12 月～平成 25 年 1 月

4. 調査の方法

(1) 調査対象者の選定

在住地域、障害の状態・程度、コミュニケーション方法、盲ろう者団体との関わりの程度などに偏りが生じないように、盲ろう者向け通訳・介助員派遣事業の受託団体 8 カ所の協力を得て、「通訳・介助員派遣事業に登録し、頻繁（週 1 日以上）に利用している盲ろう者」で、かつ「盲ろう者団体でリーダー的な立場にある盲ろう者とそうでない盲ろう者」をそれぞれ 1 名ずつ、計 2 名の紹介を受けた。

(2) 調査対象者の通訳・介助支援

盲ろう者向け通訳・介助員派遣事業の受託団体に、調査の通訳を担当する通訳・介助員 2 名を紹介するよう依頼した。通訳・介助員の選定に当たっては、①調査員の質問内容を適切に調査協力盲ろう者に伝えられる、②調査協力盲ろう者の発信が音声以外（手話など）の場合は、その表現を適切に読み取ることができる、③調査協力盲ろう者との関係が良好ということ留意するよう依頼をした。調査対象者が地元以外の通訳・介助員を希望する場合は、別途、全国盲ろう者協会が通訳・介助員の手配を行った。

(3) 調査方法

事前に作成したインタビューガイドを元に半構造化面接を行った。触手話や指点字、手書き文字といった盲ろう者特有のコミュニケーション手段を用いる盲ろう者には通訳・介助員の通訳を通して、音声によるコミュニケーションが可能な盲ろう者には、面接者自身の音声で聞き取りを行った。

調査時間は約 90 分～240 分程度であった。

なお、インタビューについては、本人の許可を得た上で、IC レコーダー、デジタルビデオカメラに録音、録画した。

(4) 調査者

インタビューにおいては、通訳・介助員として 15 年以上の経験がある者、盲ろう者支援団体職員として日常的に盲ろう者と接している者など 3 名が調査者になって面接調査を実施した。

(5) 調査場所

原則として調査協力者の自宅で行ったが、利用者の希望により、プライバシーが確保できる静かな場所（公共施設など）でも実施した。

5. 調査項目

(1) 生育歴・障害歴

①視覚や聴覚の障害を受障したのはいつごろですか。

- ・視覚障害の発症の経緯
- ・聴覚障害の発症の経緯
- ・そのときの生活の状況（仕事・家庭など）

②現在までどのように生活してきましたか。

- ・受障後の生活の様子
- ・コミュニケーション方法の変化
- ・福祉サービスの利用の経緯（種類・時期）
- ・盲ろう者団体を知った経緯
- ・通訳・介助者派遣事業の利用に至る経緯（時期）

(2) 現在の生活と要望

①現在はどのように暮らしていますか。

- ・1週間の活動の状況
- ・福祉サービスの利用状況（利用場面、利用時間、回数）

②現在の暮らしの中で、お困りのことはありますか。

(3) 通訳・介助者について

①通訳・介助者派遣事業をどのように利用していますか。

- ・主な利用内容
- ・利用している通訳・介助者の人数
- ・通訳・介助者の依頼方法（直接依頼・事務所依頼、指名の有無）
- ・利用時間、回数（週、あるいは月単位）
- ・通訳・介助派遣の使いやすさ・使いにくさ

②通訳・介助者について、どのような思いを持っていますか。

- ・良かったと思うこと（喜び・楽しみ）
- ・悪かったと思うこと（不愉快・不満）

③通訳・介助者に求めることは何ですか。

- ・機能・役割
- ・関わり方・資質

④通訳・介助派遣を利用しはじめたときと、いまとでは通訳・介助者に求めることは変わりましたか。

- ・機能・役割
- ・関わり方・資質

(4) その他

①福祉制度やサービスについて、要望したいことはありますか？

②通訳・介助者の養成について、思うことがあれば、ご自由にお話してください。

第2章 結果の概要

1. 調査協力者の基本的属性

調査協力者の基本的属性は以下の通りである。

表 3-2-1 調査協力者の基本属性

ID	性別	年齢	障害種別	コミュニケーション方法		盲ろう者団体での役職
				発信	受信	
A	女	70代	全盲難聴	手話	触手話	無
B	女	60代	弱視難聴	音声	音声、筆談	有
C	男	60代	全盲ろう	手話	触手話、手書き、指文字	有
D	女	50代	弱視ろう	手話、筆談	手書き、触手話	無
E	男	40代	全盲ろう	音声	指点字、手書き	有
F	女	60代	弱視難聴	音声	音声	無
G	女	60代	全盲難聴	音声	音声、指点字	有
H	女	60代	全盲ろう	音声	手書き、点字	無
I	女	30代	弱視ろう	接近手話、筆談	接近手話、筆談	有
J	男	70代	全盲難聴	音声	音声	無
K	女	50代	弱視ろう	手話	触手話	無
L	女	50代	弱視ろう	音声、手話	接近手話、指点字、筆談、手書き	有
M	男	50代	弱視難聴	音声	音声	有
N	女	30代	全盲難聴	音声	音声、指点字	無
O	女	40代	弱視ろう	手話	触手話	無
P	女	40代	弱視ろう	手話	触手話	有

2. 調査結果についての分類結果

録音、録画したデータを基に、逐語録を作成した。そのうち、通訳・介助員の利用における困難やニーズについての発言を切片化したところ、80の発言が得られた。その発言を同種の意味合いを持つと判断されたものを集め、概念化したところ25の概念が得られた。さらに25の概念を分類したところ、①通訳技術、②移動介助技術、③対人援助技術、④職業倫理、⑤心理的サポート、⑥近い関係、⑦熱意・意欲、⑧既存の制度ではカバーできない支援、といった8の上位概念が得られた。分析結果の詳細は、次の通りである。

(1) 通訳技術

①ことばの伝達

- ・講演を聞けるとか、そういうのもいいです。ちゃんと内容が聞ける、あと様子がよく分かる、その話しも聞けて、楽しいですね。いろいろ、いい。通訳してくれるし、介助してくれて、安心できる。手話通訳を聞いてくれて、とてもいいです。(A)
- ・話が基本なんです、触手話は要するにまた手話と違うんですよね。例えば、その赤、白とかそういう、花にしても、菊、桜とかいろいろありますよね、そういうところが分からないので、触手話としてちょっと難しいので、手書きにするとか、そういう工夫。手書き文字だけできる人もいますけれども、花といってもバラ、桜、ユリとかいろいろありますね。手話だと花、花で同じなんで分からない、私、読み取りできないので、そういうところの注意ですね。触手話の表し方ですね。(A)
- ・通訳・介助さんもうまい下手があつて、通じる通じないっていうのがありますよね。そういういろんな状況があるので、やっぱり通じないと困るっていう面がありますね。だから、通じないときは、もう二度とその方はお願いしていません。(C)
- ・通訳・介助員ってやっぱりね、通じるっていうことが大事。通じないときはもう遠慮しないで言ってますけれども、通じないっていうのが一番困りますね。(C)
- ・話が通じないことかな。手話で話が通じればいいのだけど、なかなか通じないところがある。私を手話で表わしてもそれを通訳者が読み取れないときがあつて、そういうときは困ります。例えば、買い物に行ったときに、私が欲しいものの名前を言うのだけれども、それを通訳者が分かっていると思うんだけど、それを読み取れない。(D)
- ・友の会の方については、さっきも言ったように、小さくて聞こえないことも教えていただけて、本当にあの、助かっています。やっぱり聞こえないと、何ていうのかな、消極的になっちゃうっていうか、会議そのものも、だんだんこう、気が乗らなくなってしまうので。(F)
- ・特に金額とか、細かい金額、数字ね、を言うときに、あの、料金表とか見て、私の方じゃない反対側を見ておっしゃった時に、聞き取れない、駅とか雑音もありますしね。数字を言われるときに、やはり、補聴器の方を、入るように言っただけだと確実に聞こえる、聞き返すことが多くなっちゃう、よく聞こえなかった。え？いくらだった？って、もう一度私の方から聞くこともあるし、周りに雑音があるところとかでは、やっぱり補聴器に入れるのはなかなか難しいですね。(F)
- ・補聴器に入れることに対して、こんなに技術があるって思わなかった、知らない方、区のガイドヘルパーさんの場合はどうしても大きい声になってしまいますよね、そうすると、どうしてもほかの方とか周りの雑音とかにも影響されてしまうから、補聴器にうまく入れてくださることの技術はす

ごく大事かなって思う。

- ・盲ろう通訳者には厳しく、そういう通じないとか、そういうようなことがないように厳しくしていただきたいと思います。通じないような通訳は困ります。(K)
- ・通訳に関しては、自分は音声通訳がほとんどだから、ちゃんと聞こえるように自分に入れてほしい。(M)
- ・相手がしゃべり終わってから通訳されたんじゃないかとちょっと反応鈍すぎる。(M)
- ・ガイドヘルパーがあまり通訳しないですよ、細かく。だから、通訳・介助者はやっぱり通訳してくれる、店員さんが言ったこととか、誰かが声かけてるよとか、そういう点はやっぱり通訳・介助者の方がよかったかなと思いますね。(N)
- ・以前は1人で行っていた、あるいは父と一緒に通院していたので、検査を受けている間は父と先生が話すだけで、私には情報が入ってこなかった。家に帰った後、父がメモを書いて見せてくれるだけだったんです。だから、情報が少なかったんです。初めて通訳・介助をお願いして、通訳・介助者と一緒に行くとビックリしたのは、先生が通訳・介助者に向かって話している。それを全部、通訳・介助者が私に対して手話で伝えてくれた。それで、初めて、先生に聞きたいことをすぐひらめいて「先生に聞きたいことがあります」って通訳者に伝えて、で、通訳者に伝えてもらって、で、その内容を手話で通訳してもらって、お医者さんに答えてもらう。で、いろいろ質問をすることができた。情報をたくさん得ることができました。それがすーごいよかった。そのときから、派遣を利用しようと思ったんです。(O)
- ・例えば、講演を聞く。説明会に行って説明を受ける、そういうときは、まず、通訳の技術のいい人がいいと思います。通訳の内容が分かれば講演の内容がよく分かるので、上手に通訳をしてもらえたい人を選びたいと思います。気持ち的にはまあちょっと嫌でも、通訳がうまければ、その人たちにお願いをしようと思います。(O)
- ・いつも会っていないから、ぼちぼち触手話も覚えているようなので、初めて会うと、手話が通じなかったり、いろいろ教えても時間がかかったりしてなかなかコミュニケーションが取れにくいからです。(P)

②状況説明

- ・とにかく、コミュニケーションが通じないということが、状況説明がないことが一番困りますね。ほかにはないです。(C)
- ・いろんな状況説明をいろいろしてもらってあるので歩くときはいいですね。(C)
- ・周りの様子について、花が咲いてても、お店がいっぱいあるとか何屋さんがあるとか、情報があると覚えているのにこう都合がいいと言いますか、あのただ歩くよりはいろいろ回りの様子が分かる楽しいし……。 (F)
- ・私が迷ってるんやったら、決めるための情報を与えてくれるんやったらまだいいねんけど、通訳の人はね。ただその情報が足りない人。(L)
- ・私は強いて言えばさっき言ったように周りの様子とか、あとやっぱり人の顔、なんかこれは行くっていうか一緒にその場所へ、仲間のいるところへ行って覚えていただくしかないことですし。後は、そんなにはないかな。やっぱり声が聞こえないから誰が私に話しかけてるのが分からない、そうですね。(F)
- ・通訳もれがあって、結局誰が言ったんだか分からなくて、結局状況がまったく分かんなかったりす

る。(M)

- ・いろいろなことの情報収集がもらえるってことが一番よかったかなと思うんですけど……例えば、お店に行ったときに、こんなお店が新しくなって、こういう品があるよとかそういう情報がもらえたりというのもよかったかなと思いますけど……。 (N)
- ・買物に行くとき、通訳・介助者と一緒に、服は何がいいとか、かわいいのはどれとか、いろいろ買い物して、おいしいもの何食べようとか、料理はどうしようとか、そういうの教えてもらいながら買い物するのとても楽しいです。(P)

(2) 移動介助技術

①個々に応じた介助

- ・例えば、歩行とか、階段とか、動きが分からない。私は本当は自分のやり方が、あるのですが、あつても、ちょっと危ない。要するに慣れない人だと、危ない。要するに慣れている人だと安心して出かけられて、それがいいと思う。(A)
- ・初めて会った人は、ちょっと分からないものもあるので、ぶつかったりもするし、経験が浅いと、ぶつかったりします。慣れた人が、2人いるんですけども、なかなか慣れていないと、ちょっとぶつかってしまったとか、そういう経験もあります。(A)

②状況変化に応じた介助

- ・そういうの何にも言わないで、エレベーターとかエスカレーターとかというのをはっきりと教えていただきたいですね。エスカレーターのところ、そこを触れないで乗ったり、そういう合図がないというのが一番困りますね。(C)
- ・交通、階段とか、あと、地下鉄とか、降りるときの、乗り降り、バスの乗り降り、あと、幅の広さとかいろいろ、違いますよね。いろいろ違うので危ないので、そういうところを十分に注意してほしいということです。そういうところ、気をつけてほしいなあと思います。(A)

③集中力・注意力

- ・盲ろう者から言われたことをきちんと聞いて、例えば、電車降りないといけないのに間違っけて降り損ねてしまうとか、そういうこともあります。だから、盲ろう者の言うことをきちんと聞いて通訳・介助していただきたいなと思います。電車に乗ったときには、周りをちゃんと注意をして、降りる場所というのをきちんと確認をしておくということが大事だと思います。(K)
- ・車の運転中に触手話通訳をされると、ちょっと心配ですね。信号で止まってから話をするのはいいんですけども、運転中に触手話で運転されると自分の方が心配になります。(C)
- ・移動支援に関しては、少なくとも、ぶつけられないとか安全とか、効率的な移動支援はあるよね。(M)

(3) 対人援助技術

①盲ろうに対する基本的配慮

- ・「ちょっと待っててね」がどこか行っちゃったりとかね。戻ってきますけどね。その「ちょっと」

が長い。10分とか15分とか。(G)

- ・ちょっと触れていると、その人のわずかな動きでその周りの状況判断ができるという問題があります。全然触れてないと、本当にいくらすぐ横に座っていても、1人ぼっちというか不安に駆られる。そういうことをほかの場所で学んできて、その通訳の方は私のときにちょっと触れていてくれる。ありがたいなあってそんな感じ。(H)
- ・盲ろう者が集まるところを見ていたらね、通訳者の服装がみんないろいろ。うちの県はみんな黒いの着てるねんけど、ほかの県では、何を考えてるんだか。もっとロービジョン、弱視、盲ろう者への対応について、みんな本当に勉強が必要やと思う。(L)

②個別化

- ・全盲の方に対するやり方と我々、ロービジョンの介助のやり方とは違うと思うんですね。わざわざ触らなくても、言葉で伝えれば、分かるから、それは自分の聞こえの状態とかあるいは見え方の状態に合わせて、対応してほしいということですね。(B)
- ・書き方、歩き方、早くなる、慣れてくると。通訳の人がベテランになると、書き方や歩き方が早くなっていくという感じがする。普通です。私の場合は、年をだんだん取っているもんですから、若いころの自分と比べて感覚が鈍くなっているし、動きも鈍くなっているのが自分でも分かるんです。そのためにゆっくりしてほしい。歩くのもちいーと速度落としてほしい。書くのもゆっくりしてほしいというのが、年齢が進むにつれて思うようになってきたことです。(H)
- ・盲ろう者の様子を見ながら周りの様子、雰囲気を読み取って、通訳・介助をしてほしいという思いがあります。(I)

③自己決定・主体性の尊重

- ・例えば、頼まないのに次のいつかは通訳さんの方から、次の私が行きますよみたいな、そつと言われるとやっぱり、あ、じゃお願いしますって言わなきゃいけないようなかたちに持っていかれてしまうっていうか。(F)
- ・一番怖いのは、やっぱり病気の時なので……今は家族がいるけれども……私も病院も今大病してないので通訳・介助者さんと行きますが、病院の中での先生との会話をどこまで通訳・介助者さんが入り込むかっていうことなんですね。そんなに私が、例えば、生死に関わるような病気じゃないもんですから、整形外科なもんですから、入ってきてくださるんですけども。初めのころは、「えっ？」って、私が答えるのに通訳さん答えちゃうんですよ。「私聞こえてるから、私に言って！あなたは外出てて！」って看護師さんにやってもらったこともありますけど。あなたは外にいていいよって言うんだけど、大好きでその人入ってきちゃうんですよ。(G)
- ・情報を伝えてもらえずに、勝手に手を入れたり介入したりとか、おせっかいなことを失敗するということを経験したり、情報を伝えてもらえないまま黙っているということとか、盲ろう者の状況を見守らないときがあるときが悪いなと思ったです。(I)
- ・買い物に行くときには、盲ろう者の私が選んだものをやるんですけども、通訳・介助者はそれは古いからダメだよと、新しいの入れなさいとか、黙って交換するというようなことがあって、盲ろう者に判断するということさせないまま、盲ろう者が大丈夫だと言っても無理に新しいものと古いもの交換する、勝手にするということがだめだという経験があります。(I)
- ・おせっかいなことをするのではなく、盲ろう者に判断を任せる、盲ろう者を主にする、盲ろう者の

気持ちを考えた上で理解しながら上手に通訳・介助をする。(I)

- ・何よりも、盲ろう者の考え、気持ちを大切にしておかしいと思ったら、そういうことを考えているけれども、失礼と言いながらもおかしいと思います、そういうときにも通訳・介助者の上手に使うと普通に付き合っ、盲ろう者に判断を任せるようにしてほしいと思います。(I)
- ・通訳・介助員が自分の思った方向に連れて行こうとする。おかしいですよね？私が考えている道の方に連れて行ってほしいのに。それをまた、間違えたところに来たら通訳者が言い訳をするんです。(K)
- ・どうしても、通訳・介助員が先に、盲ろう者を引っ張ろうとする人がいる。(L)
- ・例えば、しゃべってるでしょ。そしたらね、通訳の人が「なんやかんやよー」って口出してくる。この人がそや言うてる違うよ。言っとくけどね。この人は違うよ。ほかにいる。とか、何か私が今から何かしようと頼んで、約束して一緒に行くときに、あれがいいよこれがいいよ……私の趣味と関係なくね。あれすごくおかしなって、「これ何色？何？どっちの方がいいと思う？」言ったら、「こっちがいい。こっちがかわいい」。あるでしょ？(L)
- ・通訳者のペースで進めるんじゃないで、こちらのペースに合わせて待つ余裕が持てるとか。押し付けないとか。自分の考えや趣味や好みを押し付けないとか。盲ろう者のわがまま全部聞く必要はないけども、必要なときは聞いてもらえる。盲ろう者に合わすことができる、通訳が。そういう気持ちや時間の余裕かな。(L)
- ・パターンリズムっていうか、もう通訳・介助者が決めて判断してしまっ、それに盲ろう者がくっついていくみたいな場面もよく見るから、そういうのは気になるよね。(M)

④受容

- ・ここはこういう風にした方がいいですよ。とか、アドバイスをしても「私はちゃんと伝えてます」とか反論してくるような人ね。盲ろう者からのアドバイスを聞かない人。(E)
- ・気持ちがよくなるように接してほしいかな？盲ろう者の方はストレスもあるよね？ストレスを通訳・介助者にぶつけるということもあると思うんです。いつもいつも人と会ってお話ができないから、通訳・介助者を頼んだときに、人と会ったときに、久しぶりに手話とか口話とかでいろいろ声とかでバーッと行ってしまっ。いろいろ話す。そのときに、通訳・介助者はいろいろ愚痴とか不満とか文句をいろいろ言われても、聞いて対応を、盲ろう者が気持ちが落ち着くように対応してもらえたらいいのかなあと思う。いろんなことを聞いて、それはだめとか、それはあなたが悪いから我慢しなさい、と言われるとますます嫌になってしまう。分かっ、ていても、やっぱり言いたくなることあるので、通訳・介助者は、それを言われて聞いて、盲ろう者の気持ちが落ち着くようにお話をして、話して盲ろう者の気持ちが落ち着くように付き合ってもらえたらいいなあと思います。(O)
- ・選ばない、お願いしない通訳者のタイプ、自分の通訳・介助する際のスタンスが定まっ、ていて、そのスタンスを変えようとしなない人。(E)

(4) 職業倫理

①職務意識

- ・通訳者がやっぱりお酒を飲むのはだめだと思います。ガイドをしないといけないのでね。通訳者はお酒を飲むことはやめた方がいいと思います。帰りのガイドでふらふらされると困ります。(K)

・きちっと約束を守ってほしいと思います。例えば、時間に遅れてくるということはないように。(K)

②秘密保持

・個人情報だから、ほかの方にはしゃべるのはちょっと、誰さんの介助したんだよとかよくしゃべる人は、平気にしゃべる人もいますよね。これはたまたまと思って、いつも聞いてますけれど。

(B)

・お話、成り行きで同じ団体に属している人同士でほかの人に、あの人はここへ行ったのよとか言われるのはちょっと嫌だなと……。 (F)

(5) 心理的サポート

①孤独感の解消

・通訳・介助の方だとだいたいっていうか、おそらく1対1についていてくださって、いつもその人がついていてくれるっていうか、どなたかが自分の責任みたいな感じについていてくださいますね。だからそのいろいろ分かるっていうか、あまり1人ぼっちじゃないっていう感じになる。(H)

②メンタルケア

・通訳・介助者さんとの会話っていうのはやっぱり自分の心のケアかな。そういう私、これはやっぱり年齢かもしれないんですけど、このケアになってるとやっぱり、自分も障害っていうのを忘れはしないけど、社会の一員だなと感じるんですね。(G)

・自分の気持ちの切り替え、障害になって苦しいっていうの、自分も通訳・介助者を通して、明るい人たちを通して、自分で自分をクリアできたかなっていうのもあります。(G)

・とにかく社会参加ができるんだってことですね。それで、全盲ろうでも、いろんなことができるということで、そのことが分かり、コミュニケーション手段の確立とともに障害の受容につながりました。(E)

(6) 近しい関係

①相性

・一緒にいてつままない人は、やっぱりお願いしていませんね。相性は大切ですね。(E)

・気持ちとしてどうも通じなかつたりとか、気持ちも通訳も通じないというのは困ります。(K)

②友人感覚

・ホームヘルパーさんの場合はとても規則がキチキチしてて、時間もすごく限られたサービスの時間だからって感じね。でも、通訳・介助の場合は、とつてももし時間が長くかかるときでも、あるいは用事がちょうど重なって何かあるときでも、とつてももしかもし親身になってくれるって言ったらいいか、何て言っていいか、長くみんなと。それだから、何かあの友だちプラス通訳っていうか、無しでは通れないって言っていいか、盲ろう（者向けの通訳・介助）、すごくありがたい。(H)

・前に手話通訳を使ってたときと比べてね、これは本当にもう情報、聞こえてることだけを伝えるだけの仕事だった。この通訳派遣、盲ろう者の通訳派遣になったときには、一緒に食事もできる。範

囲に入っているでしょ？ただの通訳・介助をする、この「介助」っていう中に、今までの手話通訳とは違うものが入ってるね。どう説明したらいいかな？「友だち」言うたらおかしいねんけども、もう少しリラックスした気分をお願いしますというかね、そんな面が手話通訳にはない。「介助」の中にはあると思う。(L)

- ・体が疲れてね、休憩したいとか、どっかでちょっとコーヒーでも飲みたいとかって思うときがありますよね。でも中にはね、自分はおにぎり持っていて、盲ろう者に付き合ってくれますよね。でもおにぎり持ってきて、そして盲ろう者の方に、私は自由に食べてください。または飲み物を持ってきて、自由にねコーヒーでも飲んでくださいという感じの人もいますよ。そしたら、やっぱり、こっちは、味がまずくなりますね。(B)
- ・行事に参加するときは、レクリエーションをやりたいときに通訳をする場合は、やっぱり気持ち的に合って、一緒に楽しめるよう人をお願いしたいと思います。(O)

(7) 熱意・意欲

①情報保障の意識

- ・一休さんはお墓があるけど、天皇、皇族の関係だから、お墓は見える人でも見えないわけ。お墓は囲ってまっぴらあるわけや。けれども、見えないけども、その歴史的ないろんな字を読んでくれたわけ。もちろん墨で書いてある字、今の人間では。けども、必死になって読んでくれたということがあるわけ。それは一番嬉しかったね。(J)
- ・個人で通訳を依頼しているときは、情報はできるだけいっぱいほしいと思う。筆記とか手話とかで通訳をしてもらうので、筆記と手話も情報提供の限界があるということを知っているんですけども、人の集まりがあって、みんなが音声で話している。それを聞いて通訳するのは大変だとは思いますが、やっぱり、全部聞きたい、知りたいと思う。(O)

②盲ろう者との対話意欲

- ・まずは、技術は身につけていなくてもいいから、とにかく盲ろう者にたくさん伝えたい。盲ろう者とたくさん話をしたい、一緒に歩んでいきたいと思ってきている人。直接話したときに気持ちが伝わってくる人を選んでいきます。(E)
- ・気持ちが伝わってくる人。指点字で指先から気持ちが伝わってくる人ですね。さっきも言ったように、まず新人さんにはいきなり通訳をしようと考えなくていいんです。盲ろう者といっぱい話したい、いっぱい伝えたい。それで一緒に歩んでいきたいという気持ちを持ってくれば、それで合格なんです。もちろん指点字のセンスがまったく無い人はだめですけどね。表を見ても名前も打てないような人がたまにいて、さすがに、性格とかはよくても、通訳者としてちょっと育成していく望みがないので……はい。(E)
- ・通訳者の方は、技術にこだわる人がいるので、盲ろう者の通訳は技術だけじゃない、気持ちもとても大切だよというような、授業も採り入れてほしいです。(E)
- ・人間関係をスムーズにしていくというための勉強も大事になると思います。新しい人はまず技術を磨くけれども、いつも聞いているのは、「私は手話は下手一。私、点字もまだ無理だし、車の免許も持ってないし、通訳・介助活動ができない」という人の声を聞いています。それならば、まず、友の会に入って、行事などに参加して、盲ろう者と会う時間を作ってほしいと思っています。そう

でなければ、人間関係を作る方法というのも、そういう勉強もカリキュラムの中にあつたらいいのになあと思います。(O)

- ・一緒に遊んで会う。そしたら、自然に教えて育てられるんじゃないかと思います。養成講座終わっていきなりっていうのは難しいでしょ？交流が必要です。一緒に会っているいろんなことをぼちぼち覚えていただく、そういうことが大切だと思います。(P)

③盲ろう活動への参加意欲

- ・友の会の支援、時々協力していただきたいと思います。ただ参加するというだけではなく、盲ろう者とともに歩んでほしいという気持ちと一緒に活動していただければ嬉しいです。(I)
- ・盲ろう者の活動で、盲ろう者と一緒に歩いていく、一緒に生きていこうという温かい気持ちを持って一緒に活動していただきたい。そして、次に、社会でも盲ろう者の情報保障を担っていくよう、共に歩いてくれたら嬉しい。(I)

④業務時間帯以外のサポート

- ・会議のときは、通訳・介助として来ます。たくさん人も来ます。盲ろうの役員1人に対して1人ずつ通訳・介助者がついて、通訳をしてもらいます。昼休み、お弁当を食べているときは、通訳・介助者も、通訳・介助者がみんなまとまってお弁当食べる状況多いんです。盲ろう者は、自分でお弁当持ってきた人は、そこに座ったまんま、会議の場所に座ったまんまお弁当を食べる。けれども、隣には誰もいない。通訳・介助者は、離れたところにみんなで固まって、声だけおしゃべりしながら食べている。(O)

(8) 既存の制度ではカバーできない支援

①緊急時対応

- ・声がまったく出なくなって。朝かな、通訳・介助者さんにすぐ電話して「風邪で声出ない。病院に行って。主人いない」って言ったら、バイクで走りつけてくれて、病院に行ってもらって。風邪薬ももらったけど、そういう形で出先へ行ったんですけど、泊まらないで帰ったんですけど、でもそういう緊急のときにでも電話して来ていただいたから、助かりましたね。(G)

②健康管理

- ・糖質や炭水化物とかたんぱく質とか脂質とか、糖質を55%ぐらいに収めんと、いくら僕が薬飲んで薬餌療法やっても食事療法してるつもりでも運動療法しても、血糖値やらヘモグロビンは上がってまうんや。そこまでやってくれる人今いないでなあ。(J)

③余暇活動支援

- ・訪問してほしいです。私、見えないので、例えば縫い物なんかお手伝いしてほしい。あと、買い物にも、いろいろ触ってやってみたいし。私そういうもの好きなんです。買い物とか、家に来て一緒に、縫い物とかしたい。あと、それと点字の勉強関係。英語、アルファベットの勉強、それも通いたいという気持ちもあるし、そういうのにも利用したい。(A)

④ホームヘルプ

- ・通訳・介助者も身体介護をはじめとしたホームヘルパーとしても活動できるようにしてほしいです。
(E)

⑤レスパイト

- ・やっぱり私も主人にも楽しませてあげたいっていう気持ちも持ちながら入っていったので、本当に通訳・介助者の方にはお世話になっているし、コミュニケーションも取りやすくなっていますし。以前は主人に送ってっていろいろ言ったけど、今はもういいよって、駅までバスで行った方が楽しいからっていうようにも本当になりましたし。(G)

⑥人間関係づくり

- ・友の会以外の団体の行事に参加するときは、もし通訳・介助者と一緒に行ってもらうときは、いろんな情報ももらえるし、私は話すのが苦手。自分から進んで声をかけるというのは苦手なんですけれども、通訳・介助者の人が代わりに声をかけてもらうっていうこともできるので、ちょっと得かなと思うこともあります。(O)

第4部

提言カリキュラム

1. 提言の目的

盲ろう者向け通訳・介助員養成研修事業については、これまで障害者自立支援法に基づく地域生活支援事業の都道府県任意事業として実施されてきたため、研修時間や研修内容等の養成カリキュラムは、各都道府県において大きく異なり、養成研修を修了した通訳・介助員の資質についても、相当の格差を生じていた。平成25年4月からの障害者総合支援法の施行に伴って、盲ろう者向け通訳・介助員養成研修事業が都道府県（指定都市・中核市を含む。以下、同じ）の必須事業とされることなどから、そのカリキュラムを統一して、研修修了者の資質の平準化を図ることが適当と考えられる。そのため、全国的に使用されることが望ましい標準的なカリキュラムの内容について、厚生労働省に提言を行うものである。

2. 提言の内容

別表「盲ろう者向け通訳・介助員養成カリキュラム」の通り

3. 提言の作成経過

盲ろう者通訳・介助員の養成カリキュラムの内容に関する調査の検討委員会を設置し、「盲ろう者向け通訳・介助員養成事業に関する調査」「盲ろう者向け通訳・介助員の状況に関する調査」「通訳・介助についてのニーズ調査」の各々の調査結果を踏まえるとともに、先行する手話通訳養成事業および要約筆記養成事業等のカリキュラムを参考として検討を進め、全国的に使用されることが望ましい標準的なカリキュラムを作成した。

4. 提言に関する留意点

提言する「盲ろう者向け通訳・介助員養成カリキュラム」については、速やかにすべての都道府県において使用されることが望ましいが、各都道府県の実情により、直ちにこのカリキュラムを使用することが困難な場合においても、少なくとも、カリキュラム中の「必修科目（42時間）」については、すべての都道府県において実施されることが必要と考えられる。

以上を踏まえ、「盲ろう者向け通訳・介助員養成カリキュラム」を表4-1-1の通り提言する。

表 4-1-1 盲ろう者向け通訳・介助員養成カリキュラム

盲ろう者向け通訳・介助員養成カリキュラム

【必修科目(42時間)】

養成目標	盲ろう者の生活及び支援のあり方についての理解と認識を深めるとともに、盲ろう者との日常的なコミュニケーションや盲ろう者への通訳及び移動介助を行うに際し、最低限必要な知識及び技術を習得する。
到達目標	盲ろう者と1対1での外出(買い物・食事などに伴う外出)などの日常生活上の場面において、必要な通訳・介助を行うことができる。

【選択科目(42時間)】

養成目標	必修科目の研修修了に加えて、盲ろう者向け通訳・介助員の役割・責務などについて理解と知識を深めるとともに、多様なニーズや場面に応じた通訳及び移動介助を行うに際し、必要な知識及び技術を習得する。
到達目標	電車、バスなどの公共交通機関の利用を伴う外出や複数の者が参加する講演会、会議などの場面において、必要な通訳・介助を行うことができる。

【必修科目(42時間)】

形態	教科名	時間数	目的	内容	特記事項(方法・講師など)
講義	盲ろう者概論	2	盲ろう者の障害の状態や程度、コミュニケーション方法の種類、生活状況等を知り、盲ろう者の現状を理解する。	盲ろう者の人数(全国・各地域) 盲ろうの状態・程度 盲ろうになるまでの経緯 コミュニケーション方法 盲ろう者の地域生活の状況(住居・日中活動・福祉制度)	視覚教材などを用い、盲ろう者の全般的な状況について理解できるようにする。
講義 実習	盲ろう疑似体験	2	視覚と聴覚の両方を遮断して行動する体験を通して、その状態・心理面の共感的理解を図るとともに、盲ろう者の支援ニーズや接する際のマナーを理解する。	基本的配慮(名前を言う、放置しない、話にあいづちを打つなど)を学ぶための疑似体験	盲ろう疑似体験セット(※)を用いて盲ろう状態を体験するとともに、受講者が基本的配慮を理解できるように討議や助言などの時間を設ける。
講義	視覚・聴覚障害の理解	2	視覚障害や聴覚障害の状態・程度による見え方、聞こえ方の違いを理解し、それぞれに応じた支援の基本姿勢を理解する。	盲ろう障害の発症原因 視覚障害・聴覚障害の状態・程度 見え方・聞こえ方に応じた配慮	視覚障害疑似体験セット(シミュレーションゴーグル・レンズセット(※))、視覚教材などを用い、障害の状態と支援の効果を理解できるようにする。
講義	盲ろう者の日常生活とニーズ	2	盲ろう者の日常生活における課題と、その支援方法を理解する。	盲ろう者の生育歴・障害歴 日常生活における困難 必要としている支援	盲ろう者による講演を中心に組み立てる。
講義	★盲ろう者のコミュニケーション技法と留意点	8	盲ろう者とコミュニケーションを取る際の留意点について、コミュニケーション方法(触手話・弱視手話、指点字・プリスタ、手書き文字、筆記、音声など)ごとに理解する。	各種コミュニケーションの方法(触手話・弱視手話、指点字・プリスタ、手書き文字、筆記、音声など)と留意点	地域の盲ろう者のニーズやコミュニケーション方法を踏まえ、地域の実情に合わせたコミュニケーション方法の選択や時間配分を行う。
実習	★盲ろうコミュニケーション実習	14	盲ろう者とのコミュニケーションを方法(触手話・弱視手話、指点字・プリスタ、手書き文字、筆記、音声など)ごとに、最低限必要な技術を習得する。	各種コミュニケーションの方法(触手話・弱視手話、指点字・プリスタ、手書き文字、筆記、音声など)の体験実習	講義「盲ろう者のコミュニケーション技法と留意点」の特記事項を踏まえ、盲ろう者とのコミュニケーション体験を中心に組み立てる。
講義	通訳・介助員の心構えと倫理	2	盲ろう者向け通訳・介助員としての盲ろう者への関わり方を理解する。	心構えと倫理(自己決定の尊重、秘密保持など) 対人コミュニケーションの基礎技法(受容・傾聴・共感など)	
講義	盲ろう通訳技術の基本	2	盲ろう者が主体的に自己決定できるようにするため、情報伝達の技術を理解する。	盲ろう者への情報伝達の技術(通訳内容、状況説明、補足説明、事後説明、環境調整)	
実習	◆移動介助実習Ⅰ	2	基本的な移動介助を安心・安全に行うことができる技術を習得する。	基本姿勢 場面別基本移動介助技術(狭所・段差)	盲ろう者に対する移動介助の実習を行う。人数的に困難な場合、ロールプレイにより実習を行う。
実習	◆通訳・介助実習Ⅰ	4	基本的な通訳・介助の技術を習得する。	移動中の情報提供の方法も含む場面別基本通訳・介助技術を想定した実習(第三者が介在しない買い物・食事など)	盲ろう者に対する通訳・介助の実習を行う。人数的に困難な場合、ロールプレイにより実習を行う。
講義	通訳・介助員派遣事業と通訳・介助員の業務	2	盲ろう者向け通訳・介助員派遣事業の運用の仕組みやルールについて理解する。	派遣依頼の流れ、報告の方法、トラブル発生時の対応	実施主体の自治体職員、あるいは派遣事業コーディネーターなどの講演を中心に組み立てる。
		42			

【選択科目(42時間)】

形態	教科名	時間数	目的	内容	特記事項(方法・講師など)
講義	盲ろう児の教育と支援	2	盲ろう児の教育における課題とその支援方法について理解する。	盲ろう児の現状 盲ろう児の教育方法 盲ろう児に対する通訳・介助方法	特別支援学校教員、盲ろう児の親、支援に関わっている盲ろう者向け通訳・介助員などの講演を中心に組み立てる。
講義	高齢盲ろう者の生活と支援	2	高齢の盲ろう者の生活における課題と、その支援方法について理解する。	高齢盲ろう者の現状 高齢盲ろう者に対する通訳・介助支援の方法	介護福祉士、地域包括支援センター職員、支援に関わっている盲ろう者向け通訳・介助員などの講演を中心に組み立てる。
講義	他の障害を併せ持つ盲ろう者の生活と支援	2	視覚と聴覚以外の障害(運動機能障害、精神障害など)を併せ持つ盲ろう者の生活における課題と、その支援方法について理解する。	重複盲ろう者の現状 重複盲ろう者に対する通訳・介助支援の方法	理学療法士、精神保健福祉士などの感覚障害以外に関わる専門職の講演を中心に組み立てる。
講義	盲ろう者福祉制度概論	2	盲ろう者が利用する障害者福祉制度や各種事業、地域の社会資源の状況等を理解する。	障害者総合支援法の仕組み 通訳・介助員派遣事業の実情 盲ろう者団体も含めた地域の社会資源の状況	実施主体の自治体職員、あるいは受託団体役員、派遣事業コーディネーターなどの講演を中心に組み立てる。
講義 実習	盲ろう通訳技術の実際	2	盲ろう者が主体的に自己決定できるようにするための情報伝達の技術を体験的に理解する。	盲ろう者への情報伝達の技術(通訳内容、状況説明、補足説明、事後説明、環境調整)の実習	ロールプレイなどの体験的手法を用いて実施する。
講義 演習	通訳・介助員のあり方	4	盲ろう者向け通訳・介助員として必要な支援技術を習得するとともに、社会福祉従事者としての盲ろう者向け通訳・介助員の役割を理解する。	盲ろう者の心理や通訳場面に応じた盲ろう者向け通訳・介助員の責務	事例検討の手法を用いて実施する。
講義	★盲ろう者の通訳技法と留意点	6	盲ろう者へ通訳をする際の留意点について、コミュニケーション方法(触手話・弱視手話、指点字・プリスタ、手書き文字、筆記、音声など)ごとに理解する。	各種コミュニケーション別の通訳方法(触手話・弱視手話、指点字・プリスタ、手書き文字、筆記、音声など)と留意点	地域の実情に合わせて、コミュニケーション方法の選択や時間配分を行う。
実習	★盲ろう通訳実習	8	盲ろう者への通訳を方法(触手話・弱視手話、指点字・プリスタ、手書き文字、筆記、音声など)ごとに、必要な技術を習得する。	各種コミュニケーション方法ごとの通訳(触手話・弱視手話、指点字・プリスタ、手書き文字、筆記、音声など)の体験実習	盲ろう者への通訳体験を中心に組み立てる。 地域の実情に合わせて、コミュニケーション方法の選択や時間配分を行う。
実習	◆移動介助実習Ⅱ	8	応用的な移動介助技術を習得する。	場面別応用移動介助技術(エスカレーター、電車・バスなどの公共交通機関の利用)を想定した実習	盲ろう者に対する移動介助の実習を行う。人数的に困難な場合、ロールプレイにより実習を行う。
実習	◆通訳・介助実習Ⅱ	6	応用的な通訳・介助技術を習得する。	場面別応用通訳・介助技術(第三者が介在する買い物、申請、面接、会議などの場面)を想定した実習	盲ろう者に対する通訳・介助の実習を行う。人数的に困難な場合、ロールプレイにより実習を行う。
		42			

※別紙『盲ろう者向け通訳・介助員養成研修会開催に当たっての留意事項』の「3. 研修会で必要な機材について」参照。

(別紙)

盲ろう者向け通訳・介助員養成研修会開催に当たっての留意事項

受講者の募集の要件、内容等についてのご検討に当たり、盲ろう者向け通訳・介助員養成カリキュラム（以下「本カリキュラム」）検討の際に懸案とされた事項を基に、若干の留意事項を記載するので参考とされたい。

盲ろう者向け通訳・介助員養成に当たっては、必修科目 42 時間、選択科目 42 時間、合計 84 時間程度の実施が相当と提言する。

しかしながら、各都道府県に対して実施した養成研修会の開催状況の調査結果によると、平均 30 時間程度実施しているところが多く、また、実施側の印象として、30 時間程度では、通訳・介助員として活動するには不十分なカリキュラムになっているとの結果を得たこと等を考慮し、最低でも必修科目 42 時間程度を実施することが実情に即したものだとする。

なお、あくまでも提示した本カリキュラムは、盲ろう者向け通訳・介助員を養成するに当たって、1 年間で実施する時間数、また、必要と考えられる科目、内容を示したものであり、これを基に地域の実情に合った指導内容を編成することが望ましい。

特に、盲ろう者のコミュニケーション方法は、多種多様であり、これらすべてのコミュニケーション方法を養成研修のみで習得するのは、現実的に不可能であることは言うまでもなく、また、盲ろう者への通訳・介助は、個々の盲ろう者の障害の程度、障害の受障時期、成育歴等によって、支援ニーズが異なってくることから、養成研修会だけでは、これらを全網羅的に習得することは困難であるという前提に立つてのことである。

よって、次のような点に留意して、指導内容の編成、受講者の募集、既存の講習会等の活用など進められることを提案する。

1. 指導内容を編成する際の留意事項

- ・盲ろう者向け通訳・介助員養成研修においては、必修科目の 42 時間と、選択科目の 42 時間、総計 84 時間実施することを推奨する。
- ・しかしながら前述したように、実情に即した対応としては、盲ろう者とコミュニケーションが取れる、必要最低限の通訳技能を身につける、移動介助ができる（概ね、各地域で実施されている盲ろう者友の会等の交流会での通訳・介助ができる）ようになることを目標として、必修科目 42 時間の実施を必須とする。
- ・具体的には、必修科目 42 時間を修了した者については、最低限、持ち合わせているコミュニケーション方法（手話、要約筆記、点字等。これら特別な講習が必要な技術を持ち合わせていない者は、手書き文字や音声）を使用し、盲ろう者と日常的なコミュニケーションや通訳ができるようになることを目標に指導内容を編成されたい。
- ・可能であるならば、必修科目 42 時間に加え、選択科目の中から、地域の実情に応じた科目を組み入れることで、時間数を増やした上での実施が推奨される。
- ・教科名の先頭に★、◆を付したものについては、次の点に留意されたい。

(★を付した教科について)

必修科目の「★盲ろう者のコミュニケーション技法と留意点」「★盲ろうコミュニケーション実習」、

選択科目の「★盲ろう者の通訳技法と留意点」「★盲ろう通訳実習」については、以下の点に留意するとともに、地域の実情に合わせて、コミュニケーション方法の選択、時間配分等の調整を行うものとする。

- ①コミュニケーション方法は多種多様にわたることから、地域のニーズを踏まえた上でカリキュラムを編成する（例：派遣依頼件数の多いコミュニケーション方法に重点的に時間を配分する）。
- ②1つのコミュニケーション方法（例：触手話・指点字等など）について、例えば講義1時間、実習2時間といった編成が通例であるが、講義・実習の両方を合わせて1コマで実施することも有効である。
- ③しかしながら、多岐にわたるコミュニケーション方法について、コミュニケーション実習を行いながら理解することが望ましいが、時間数の制約等で多種のコミュニケーションを取り上げることによって、通訳・介助員として活動する最低限のコミュニケーション手段すら身につかない場合などは、すべてを実習によるものとせず、概論の時間などで紹介するなどの方法を取る。
- ④コミュニケーション方法の選択・時間配分等の調整によって、時間を短縮できる場合は、選択科目の中から、地域の実情に応じた科目を必修科目42時間に組み入れることも検討されたい。

（◆を付した教科について）

必修、選択科目に共通する「◆移動介助実習」「◆通訳・介助実習」は、通訳・介助の実践を踏まえたものであり、相互に密接に関連することから、それぞれの時間配分については、地域の実情に応じて検討されたいが、両科目を組み入れることを推奨する。

- ・また、派遣事業登録盲ろう者との交流を図るプログラムの実施を積極的に行うこと（指導内容の一部として、友の会主催の定例の交流会への出席を盛り込むなど、実際に盲ろう者と触れ合う機会を採り入れること）も検討されたい。
- ・講師については、特記事項にない限り、盲ろう者や通訳・介助員、受託団体職員などが、内容や地域の実情などを踏まえて担当する。講師の選定に当たっては、国立障害者リハビリテーションセンター学院主催「盲ろう者向け通訳・介助員指導者養成研修会」（旧「盲ろう者通訳ガイドヘルパー指導者研修会」）、もしくは、社会福祉法人全国盲ろう者協会主催「盲ろう者向け通訳・介助員養成のためのモデル研修会」などの修了者を活用することも検討されたい。

2. 受講者募集、および既存の講習会等の活用について

- ・受講者募集に当たっては、その地域での通訳・介助員の充足度によるが、一般的にはその数は不足していることを考慮すると、特段の条件（例：手話通訳、要約筆記、点訳等の経験、ガイドヘルパー有資格者など）を設けずに、広く募集することを推奨する。
- ・その場合、既存の手話講習会、要約筆記講習会、点訳講習会、ガイドヘルパー養成研修会等を並行して（またはその後）活用することも望ましい。
- ・一方で、手話の習得には相当の時間を要すること、手話通訳ができるようになるには、さらに時間を要する（厚労省が通知している養成カリキュラムでは、手話奉仕員の養成に80時間、手話通訳者の養成に90時間となっている）ことから、その各修了者を対象に募集することは、手話の技能はもちろん、手話を母語とする盲ろう者理解の面でも有効であると考え。また、要約筆記奉仕員、要約筆記者の各講習会修了者、点訳経験者などにも、対象者の理解においては同様のことがいえる。

そのような場合は、受講者の有する知識・経験等に応じて、手話コース、点字コースに分けるなどの方策も有効であると考え。また、年ごとに内容を変えて（例：手話コースと点字コースを隔

年で設けるなど) 実施すること等も検討に値すると考える。

3. 研修会で必要な機材について

用具・器具		目的
シミュレーションゴーグル・レンズセット		屈折異常、白濁、視野狭窄などを人工的に再現する視覚障害体験用シミュレーションレンズを、専用のゴーグルに取り付けて装着する
擬似体験セット	アイマスク	見えない状態にするために装着する
	ティッシュペーパー	衛生を保つため、アイマスクの下に挟む
	携帯型音楽プレイヤー (MP3プレイヤー)	聞こえない状態にするため、ホワイトノイズ音を発生させる
	ヘッドホン	聞こえない状態にするため、ヘッドホンを通してノイズ音を聞く
	耳栓	聞こえない状態にするため、また、聴覚をノイズ音から保護するために装着する

4. 養成研修会受講者向けテキストについて

・現時点で入手可能な養成研修受講者向けのテキストとしては、以下が挙げられる。

『盲ろう者への通訳・介助－「光」と「音」を伝えるための方法と技術』

全国盲ろう者協会編著 [平成 20 年 (2008) 読書工房]

『指点字ガイドブック～盲ろう者ところをつなぐ』

東京盲ろう者友の会編著 [平成 24 年 (2012) 読書工房]

『盲ろう者の移動介助－盲ろう者にとっての安心・安全な移動介助方法とは』

前田晃秀著 [平成 20 年 (2008) 東京盲ろう者友の会]

『知ってください 盲ろうについて』

東京盲ろう者友の会編 [平成 22 年 (2010)]

第 5 部
付録

【調査 A】

盲ろう者向け 通訳・介助員養成事業に関する調査

【ご協力をお願い】

この調査は、厚生労働省の「平成 24 年度障害者総合福祉推進事業」として社会福祉法人全国盲ろう者協会が実施するものです。

本調査は、多様で専門的な対応が求められる盲ろう者向け通訳・介助員の今後の養成のあり方やカリキュラムを検討するため、都道府県を中心とする全養成事業実施自治体における通訳・介助員養成の現状や課題、新たに求められる人材養成への考え方などを把握することを目的としています。

お忙しいところお手数を掛けたいと思いますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

社会福祉法人全国盲ろう者協会
理事長 阪田雅裕

◆ご記入にあたってのお願い◆

1 記入の方法などについて

- ① 回答は全てこの調査用紙に記入してください。
- ② 回答は番号を選び選択方式と、具体的に記入または記述するものがあります。選択方式の場合は該当する数字やカタカナに○をつけてください。自治体または記述の場合は指定された欄に書きこんでください。
- ③ 自治体の盲ろう者向け通訳・介助員養成事業のご担当者にご記入ください。事業を委託して詳細が分からない場合は、お手数をお掛けしますが、**貴自治体の盲ろう者向け通訳・介助員派遣事業受託団体等に当該情報を照会したうえでご記入ください。**
- ④ 本調査は、受講後、通訳・介助員派遣事業で活動することを目標にした「**養成講習上のみについての調査**」です。登録者向けの「**現任研修**」などは含みません。

2 返送について

- ① ご記入いただいた調査票は、同封の返信用封筒に入れて、**平成25年1月18日（金）**までにご返送ください。
- ② 通訳・介助員養成事業の要綱、カリキュラム、シラバス、受託団体や講師作成のテキスト等の資料についても、返信用封筒に同封してお送りください（切手が不足する場合は送付しますので、下記までご連絡ください）。なお、資料の電子データ版がある場合は、電子データを当協会のメールアドレスまでお送りください。

3 調査に対する問い合わせ先

社会福祉法人全国盲ろう者協会 事務局 橋岡・小林・大久保
〒162-0042 東京都新宿区早稲田町67番地 早稲田クロアバービル3階
Tel : 03-5287-1140 Fax : 03-5287-1141
E-mail : info@dba.or.jp

I 基礎的事項

1. 自治体名・担当部署名
都道府県・市区町村名 ()
担当部署名 ()
2. 本調査の担当者・連絡先
担当者名 ()
電話 ()
FAX ()
メールアドレス ()
3. 通訳・介助員の養成目標を定めていますか。
 1. 定めている
・養成目標人数はいつまでに、何名ですか。〔数字を記入〕
()年（西暦）までに、約 ()名
単年度の目標の場合、年間 ()名
・その目標値はどこかに明記されていますか。
ア 明記されている → 明記している箇所： ()
イ 明記されていない
 2. 定めていない
4. 平成23年度に通訳・介助員養成講習会を実施しましたか。
 1. 実施した
・養成講習会の開始年度はいつですか？〔数字を記入〕 平成 ()年度
・これまでの修了者はおよそ何名ですか？〔数字を記入〕
約 ()名（平成23年度までの累計）
→上記にご回答のうえ、「II 通訳・介助員の養成状況」以降に進んでください。
 2. 実施していない
・実施していない理由は何ですか。〔あてはまるカタカナすべてに○〕
ア 講師の不在
イ 予算の不足
ウ その他 ()
→上記にご回答のうえ、「III-（4）養成にあたって必要だと考える事項（自由記述）」以降に進んでください。

II 通訳・介助員の養成状況

1. 平成23年度通訳・介助員養成講習会の実施状況について

(1) どのような実施体制をとっていますか。

- 1 直轄
- 2 団体等委託

どこに委託していますか。[あてはまるカタカナ1つに○]
 ア 盲ろう者団体 イ 聴覚障害者団体 ウ 視覚障害者団体
 エ 身体障害者団体 オ その他()

(2) 養成講習会に関わる自治体の予算額をご記入ください。[数字を記入]

①事業費	②事務費	③総予算額 (①+②)
円	円	円

2. 平成23年度通訳・介助員養成講習会の運営状況について

(1) どのような方法で広報しましたか。[あてはまる番号すべてに○]

- 1 自治体広報紙
- 2 自治体ホームページ
- 3 受託団体会誌
- 4 受託団体ホームページ
- 5 関係機関・団体広報紙
- 6 関係機関・団体ホームページ
- 7 チラシ
- 8 ポスター
- 9 ダイレクトメール
- 10 手話講習会での案内
- 11 点字講習会での案内
- 12 その他 ()

(2) どのような方法で応募を受け付けましたか。[あてはまる番号すべてに○]

- 1 郵送
- 2 FAX
- 3 電子メール
- 4 電話
- 5 来所
- 6 その他 ()

(3) 受講対象者の要件を設けていましたか。

- 1 設けている
- 2 設けていない

・設けている要件は何ですか。[あてはまるカタカナすべてに○]

- ア 年齢 イ 在住 ウ 在勤・在学 エ 手話経験年数
 オ 点字経験年数 カ 手話技能 キ 点字技能
 ク その他 ()

(4) 受講料はいくらでしたか。[数字を記入]

() 円 [テキスト代は含まない]

(5) 開催日はいつでしたか。[あてはまる番号すべてに○]

- 1 平日昼間
- 2 平日夜間
- 3 土日・休日昼間
- 4 土日・休日夜間

(6) 講師の人数をご記入ください。[数字を記入。延べ人数ではなく実人数で記入]

①講師の人数	②盲ろう講師の人数	③「通訳・ガイドヘルパー指導者研修会」修了者(国が主催者)ハビリテーションセンター(学院主催)	④「通訳・介助員養成のためのセブアル研修会」修了者(全国盲ろう者協会主催)(平成22年度までの養成研修会も含みます)
名	①のうち	名	①のうち
名	①のうち	名	名

(7) 平成23年度の通訳・介助員養成講習会の状況をご記入ください。[数字を記入]

①定員	②応募者数	③受講者数	④修了者数	⑤登録者数
名	名	名	名	名

(8) 区分(例：手話コース・点字コース、基礎・応用など)はありますか。

- 1 ある
- 2 ない

・それぞれの講習の名称と時間数、回数、日数を記入してください。

①名称	②総時間数	③総回数	④総日数
	時間	回	日
	時間	回	日

- 2 ない
- ・講習の時間数、回数、日数を記入してください。

①総時間数	②総回数	③総日数
時間	回	日

(9) 修了にあたってどのような条件を定めていますか？[あてはまる番号すべてに○]

- 1 出席回数 → 具体的な条件 ()
- 2 受講態度
- 3 修了試験の合格
- 4 その他 ()
- 5 特に条件を定めていない

(10) 通訳・介助員に登録するための登録試験を実施していますか？

- 1 実施している
- 2 実施していない

(11) カリキュラムの内容ごとの時間数、講師、指導内容の決め方、使用テキストについて、ご記入ください。[時間数には数字を記入] [該当する口に、チェック] [または] []

区分()	カリキュラムの内容 時間数(分)	※(8)でお聞きした区分が分かれる場合は、同封した別紙回答用紙を使用し、区分ごとに記入ください。		テキスト (複数回答可)	
		講師 (複数回答可)	内容の決め方 (いずれか1つ)	① 講師作成資料	② 寄附団体作成の資料
	言う方	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	講師	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	実習	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	派遣事業のルール・運用	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	倫理・マナー	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	音声	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	弱視手話	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	触手話	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	日本語式 (補聴手話)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	指文字	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	ローマ字式	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	指文字	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	手書き文字	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	筆記(筆談)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	筆記(パソコン)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	点字(ブリスタ)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	指点字	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	言う方	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	疑似体験	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	ロールプレイ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	通訳技術	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	講師	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	実習	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	講師	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	実習	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	体験談(言う方)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	体験談(通訳・介助員)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

(12) (11) 以外に実施している内容があれば、カリキュラムの内容と時間数、講師、指導内容の決め方、使用テキストについて、ご記入ください。[時間数には数字を記入] [該当する口に、チェック] [または] []

区分()	カリキュラムの内容 時間数(分)	※(8)でお聞きした区分が分かれる場合は、同封した別紙回答用紙を使用し、区分ごとに記入ください。		テキスト (複数回答可)	
		講師 (複数回答可)	内容の決め方 (いずれか1つ)	① 講師作成資料	② 寄附団体作成の資料
	言う方	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	通訳 介助員	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	寄附団体職員	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	その他	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	① 本格的指導内容を求める講師に依頼	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	② 体系的指導内容を求める講師に依頼	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	③ ももらふみん	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	④ 言う方 移動介助員	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	⑤ 言う方 移動介助員	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	⑥ 言う方 移動介助員	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	⑦ 言う方 移動介助員	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	⑧ 言う方 移動介助員	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	⑨ 言う方 移動介助員	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	⑩ 言う方 移動介助員	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

III 現在の養成における課題

(1) 受講者について、どのような課題がありますか。[あてはまる番号すべてに○]

- 1 受講者が途中でやめてしまう
- 2 登録レベルの技能が身につかない
- 3 養成を修了しても登録しないため、登録者が増えない
- 4 定員までの受講希望者がいない
- 5 特になし
- 6 その他()

(2) 運営について、どのような課題がありますか。[あてはまる番号すべてに○]

- 1 開催時間の設定
- 2 会場・機材等の確保
- 3 言う方の当事者講師の確保
- 4 言う方当事者以外の講師の確保
- 5 運営に関わるスタッフの確保
- 6 講習の期間
- 7 講習の時間数
- 8 適切なテキストの確保
- 9 特になし
- 10 その他()

(3) 通訳・介助員の養成にあたって、現在のカリキュラムに加えて必要だと考えた内容を自由にご記入ください。

(自由記載)

IV 通訳・介助員の派遣の状況

1. 言わう者の状況について (平成24年10月末日現在)でご回答ください

- (1) 貴自治体(都道府県)で言わう者(視覚と聴覚の両方の身体障害者手帳を併せもつ人)は何名ですか。政令指定都市や中核市も含んだ人数をご記入ください。[数字を記入]
 ()名
- (2) 貴自治体の言わう者向け通訳・介助員派遣事業の登録言わう者は何名ですか。[数字を記入]
 ()名
- (3) 派遣事業登録言わう者が通訳を受けるときの方法のうち、最も使用する方法について、それぞれのコミュニケーションごとに人数をご記入ください。[数字を記入]

	人数
音声(聴覚)	名
弱視手話(接近手話)	名
触手話(触聴手話)	名
日本語式指文字	名
ローマ字式指文字	名
手書き文字	名
筆記(筆談)	名
筆記(パソコン)	名
点字(ブリスタ)	名
指点字	名
その他	名

2. 通訳・介助員の状況について

- (1) 平成24年10月末日現在、貴自治体の言わう者向け通訳・介助員派遣事業の登録通訳・介助員は何名ですか。[数字を記入]
 ()名
- (2) (1)のうち、平成24年4月1日から10月末日に移働した実績のある通訳・介助員は何名ですか。[数字を記入]
 ()名
- (3) 現在のコミュニケーション方法ごとの通訳・介助員の充足度をご記入ください。
 [該当する□に、チェック(☑または■)]

	足りていない	どちらかといえない	どちらかという	足りている
音声(聴覚)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
弱視手話(接近手話)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
触手話(触聴手話)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
日本語式指文字	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ローマ字式指文字	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
手書き文字	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
筆記(筆談)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
筆記(パソコン)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
点字(ブリスタ)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
指点字	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

調査は以上です。ご協力ありがとうございました。

(3) 通訳・介助員の養成にあたって、現在のカリキュラムに加えて必要だと考えた内容を自由にご記入ください。

(自由記載)

(4) 通訳・介助員の養成にあたって、必要だと考える事項(カリキュラム以外)を自由にご記入ください。

(自由記載)

通訳・介助員の状況に関する調査

盲ろう者向け

【ご協力のお願ひ】

この調査は、厚生労働省の「平成24年度障害者総合福祉推進事業」として社会福祉法人全国盲ろう者協会が実施するものです。
本調査は、各都道府県の盲ろう者向け通訳・介助員派遣事業に登録している通訳・介助員の方すべてを対象に、通訳・介助に関する学習や活動の状況、通訳・介助に対する意識などを把握し、それを踏まえ、多様な専門的な対応が求められる通訳・介助員の今後の養成のあり方を検討することを目的としています。

この調査は無記名で、他の目的に用いることはありませんので、ありのままを記入してください。調査結果は、必要な方策を講じるための基礎資料とするとともに、報告書や雑誌、講演会などで公表する予定です。

お忙しいところお手数を重ねたいと思いますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

社会福祉法人全国盲ろう者協会
理事長 阪田雅裕

◆ご記入にあたってのお願い◆

1 記入の方法などについて

① 回答は全てこの調査用紙に記入してください。
② 回答は番号を選択方式と、具体的に記入または記述するものがあります。選択方式の場合は該当する番号に○をつけてください。
③ 記入または記述の場合は指定された欄に書きこんでください。氏名など、あなた自身を特定し得る情報を書く必要はありません。回収した調査用紙は無記名のまま統計的に処理されます。
④ 回答したくない項目があれば、無理にご回答いただく必要はありません。
⑤ 本調査における「通訳・介助活動」とは、自治体等に登録して活動する「公的派遣」のみを指します。企業・学校等の依頼による通訳・介助活動は含みません。
⑥ **2013年1月1日現在**で記入してください。

2 返送について

① ご記入いただいた調査票は、同封の返信用封筒に入れて、**2月15日(金)**までにご返送ください

3 調査に対する問い合わせ先
社会福祉法人全国盲ろう者協会 事務局 橋岡・小林・大久保
〒162-0042 東京都新宿区早稲田町6-7番地 早稲田クロアバービル3階
Tel : 03-5287-1140 Fax : 03-5287-1141
E-mail : info@jdba.or.jp

I あなた自身のことについて

問1 あなたの性別をお答えください。

- 1 女性
- 2 男性

問2 あなたの年齢をお答えください。

- | | | | |
|----------|----------|----------|----------|
| 1 19歳以下 | 2 20～29歳 | 3 30～39歳 | 4 40～49歳 |
| 5 50～59歳 | 6 60～69歳 | 7 70～79歳 | 8 80歳以上 |

問3 あなたのお住まいの都道府県を記入してください。

() 都・道・府・県

問4 あなたに障害はありますか。

- 1 ある
- 2 ない

・障害の種類をお答えください。[あてはまるカタカナ1つに○]

- | | |
|-----------|--------|
| ア 聴覚障害 | イ 視覚障害 |
| ウ その他 () | |

問5 あなたは通訳・介助派遣を除いて、職業に就いていますか。

- 1 就いている
- 2 就いていない

・雇用形態をお答えください。[あてはまるカタカナ1つに○]

- | | |
|-------------|--------------|
| ア 常勤の職員・会社員 | イ 非常勤の職員・会社員 |
| ウ パート・アルバイト | エ 自営業 |
| オ その他 () | |

・現在の状況をお答えください。[あてはまるカタカナ1つに○]

- | | | |
|-----------|------|------|
| ア 主婦 | イ 学生 | ウ 無職 |
| エ その他 () | | |

問6 あなたは福祉関係の国家資格や公的資格を持っていますか。

- 1 持っている
- 2 持っていない

・資格の種類をお答えください。[あてはまるカタカナすべてに○]

- | | | |
|-----------|---------|-----------|
| ア 介護福祉士 | イ 社会福祉士 | ウ 精神保健福祉士 |
| エ 介護支援専門員 | オ 手話通訳士 | |
| カ その他 () | | |

問7 あなたは通訳・介助以外の福祉関係の業務について、自治体や事業所などに登録していますか。

- 1 登録している
- ・登録の種類をお答えください。[あてはまるカタカナすべてに○]
 - ア 手話通訳者 (都道府県) イ 手話通訳者 (市区町村)
 - ウ 要約筆記者 エ ホームヘルパー
 - オ ガイドヘルパー (移動支援 同行支援)
 - カ その他 ()
- 2 登録していない

問8 あなたは複数の自治体に通訳・介助員登録をしていますか。

- 1 1つの自治体のみ
- ・登録している自治体と登録した年 (西暦) をお答えください。
 - 自治体名 () 年 () 年
- 2 2つ以上の自治体
- ・登録している自治体は何箇所ですか。 () 箇所
 - ・最も通訳・介助活動をしている自治体と登録した年 (西暦) をお答えください。
 - 自治体名 () 年 () 年

問9 あなたは社会福祉法人全国盲ろう者協会や通訳・介助員 (訪問相談員) 登録をしていますか。

- 1 登録している
- ・登録した年 (西暦) をお答えください。
 - 西暦 () 年
- 2 登録していない

問10 あなたは手話でのコミュニケーション経験はありますか。

- 1 ある
- ・経験年数をお答えください。 年数 () 年
 - ・どの程度、手話でのコミュニケーションが可能ですか。[あてはまるカタカナ1つに○]
 - ア 挨拶程度可能 イ 日常会話程度可能 ウ 通訳可能
- 2 ない

問11 あなたは点訳 (点字翻訳) の経験はありますか。

- 1 ある
- ・経験年数をお答えください。 年数 () 年
 - ・どの程度、点訳 (点字翻訳) が可能ですか。[あてはまるカタカナ1つに○]
 - ア 単語程度可能 イ 短文程度可能 ウ 長文点訳可能
- 2 ない

II 通訳・介助に関する学習状況について

問12 あなたは自治体で実施されている通訳・介助員養成講習会を受講しましたか。(登録者向けの「現任研修」などは含まれません)

- 1 受講している
- ・受講した自治体と受講した年 (西暦)、受講時間数をお答えください。
 - ※受講時間数は、全カリキュラムのうち出席したおおよその時間数を入力
 - 自治体名 () 年 () 年 受講時間 () 時間
 - 自治体名 () 年 () 年 受講時間 () 時間
 - 自治体名 () 年 () 年 受講時間 () 時間
- 2 受講していない

問13 あなたは以下にあげる講習会を受講しましたか。

- 1 全国盲ろう者協会主催「盲ろう者向け通訳・介助員養成研修会」(1996～2010年)、もしくは「盲ろう者向け通訳・介助員養成のためのモデル研修会」(2011年～)
- 2 国立障害者リハビリテーションセンター主催「通訳・ガイドヘルパー指導者研修会」
- ・受講した年 (西暦) をお答えください。 西暦 () 年
 - ・受講した年 (西暦) をお答えください。 西暦 () 年
- 3 いずれも受講していない

問14 あなたは盲ろう者のコミュニケーション方法を、どの程度身につけていますか。それぞれの方法について、あてはまる番号1つに○をしてください。

	経験がない	ほとんどできない	一対一の対話はできる	比較的やさしい内容で通訳ができる	比較的難しい内容で通訳ができる
音声 (聴覚)	1	2	3	4	5
視覚手話 (接近手話)	1	2	3	4	5
触手話 (触読手話)	1	2	3	4	5
日本語式指文字	1	2	3	4	5
ローマ字式指文字	1	2	3	4	5
手書き文字 (てのひら書き)	1	2	3	4	5
筆記 (筆談)	1	2	3	4	5
筆記 (パソコン)	1	2	3	4	5
点字 (ブリスタ)	1	2	3	4	5
指点字	1	2	3	4	5

問 15 (問 12 で「受講している」に○を付けた方にお尋ねします) あなたが身につけている (少ないとも 1 対 1 の対話ができる) 方法のうち、通訳・介助員養成講習会を受講することによって身につけたコミュニケーション方法をお答えください。[あてはまる番号すべてに○]

1 音声 (聴覚) 2 弱視手話 (接近手話) 3 触手話 (触読手話)
 4 日本語式指文字 5 ローマ字式指文字 6 手書き文字 (てのひら書き)
 7 筆記 (筆談) 8 筆記 (パソコン) 9 点字 (ブリスタ)
 10 指点字 11 特になし

問 16 (問 12 で「受講している」に○を付けた方にお尋ねします) 通訳・介助員養成講習会は、通訳・介助活動をすることで、役に立ったと思いますか。[あてはまる番号 1 つに○]

1 とても役に立つ 2 まあまあ役に立つ 3 どちらともいえない
 3 あまり役に立たない 4 まったく役に立たない

問 17 通訳・介助員養成講習会について、もっと講習が必要だと思う内容やあまり講習が必要でないと思う内容があれば、自由にご記入ください。

III 通訳・介助に関する活動状況について

問 18 あなたはこれまで通訳・介助活動をしたことがありますか。

1 活動したことがある
 ・活動が始めた年 (西暦) をお答えください。 [あてはまる番号 1 つに○] 年
 西暦 ()

2 活動したことがない
 ・活動したことがない理由は何ですか。 [あてはまるカタカナすべてに○]

ア 通訳・介助の依頼がないから イ 時間的な余裕がないから
 ウ 体力に自信がないから エ 技術に自信がないから
 オ 登録したばかりだから
 カ その他 ()

→ 活動したことがない方 (問 18 で 2 に○を付けた方) は、上記にご回答のうえ、問 24 以降に進んでください。

問 19 あなたは過去 1 年間 (2012 年 1 月 1 日～2012 年 12 月 31 日) に、登録をしている自治体で通訳・介助活動をしましたか。

1 活動した
 ・過去 1 年間の活動日数をお答えください。 約 () 日
 ・担当した旨のほうの人数をお答えください。
 ※AさんとBさんの通訳・介助を年間15回担当した場合、「15人」ではなく、「2人」として数える。
 約 () 人

2 活動していない
 ・活動していない理由は何ですか。 [あてはまるカタカナすべてに○]

ア 通訳・介助の依頼がないから イ 時間的な余裕がないから
 ウ 体力に自信がないから エ 技術に自信がないから
 オ その他 ()

→ 過去 1 年間活動していない方 (問 19 で 2 に○を付けた方) は、上記にご回答のうえ、問 24 以降に進んでください。

問 20 過去 1 年間 (2012 年 1 月 1 日～2012 年 12 月 31 日) の通訳・介助活動のなかで、あなたが担当したことがある旨のほうの年齢層をお答えください。 [あてはまる番号すべてに○]

- 1 乳幼児 (7 歳未満) 2 学齢期の児童・生徒 (7 歳以上 18 歳未満)
 3 青年層 (18 歳以上 40 歳未満) 4 中年層 (40 歳以上 65 歳未満)
 5 高齢者層 (65 歳以上)

問 21 問 20 でお答えになった年齢層のうち、過去 1 年間の通訳・介助活動のなかで、あなたが最も担当した日数の多かった旨のほうの年齢層をお答えください。 [あてはまる番号 1 つに○]

- 1 乳幼児 (7 歳未満) 2 学齢期の児童・生徒 (7 歳以上 18 歳未満)
 3 青年層 (18 歳以上 40 歳未満) 4 中年層 (40 歳以上 65 歳未満)
 5 高齢者層 (65 歳以上)

問 22 過去 1 年間 (2012 年 1 月 1 日～2012 年 12 月 31 日) の通訳・介助活動のなかで、あなたが担当したことがある旨のほうの受信コミュニケーション方法をお答えください。 [あてはまる番号すべてに○]

- 1 音声 (聴覚) 2 弱視手話 (接近手話) 3 触手話 (触読手話)
 4 日本語式指文字 5 ローマ字式指文字 6 手書き文字 (てのひら書き)
 7 筆記 (筆談) 8 筆記 (パソコン) 9 点字 (ブリスタ)
 10 指点字 11 その他 ()

問 23 問 22 でお答えになったコミュニケーション方法のうち、過去 1 年間の通訳・介助活動のなかで、あなたが最も担当した日数の多かった旨のほうの受信コミュニケーション方法をお答えください。 [あてはまる番号 1 つに○]

- 1 音声 (聴覚) 2 弱視手話 (接近手話) 3 触手話 (触読手話)
 4 日本語式指文字 5 ローマ字式指文字 6 手書き文字 (てのひら書き)
 7 筆記 (筆談) 8 筆記 (パソコン) 9 点字 (ブリスタ)
 10 指点字 11 その他 ()

IV 通訳・介助に関する意識について

問 24 次にあげた文章は、複数の通訳・介助員が「盲ろう者との関わり方」や「通訳・介助活動に対する考え」について述べた言葉です。それぞれについて、あなたの通訳・介助員としての関わり方や考えと近いかどうか、「まったく当てはまらない」「1」「非常に当てはまる」を“7”として、7段階でお答えください。深く考えず直感で、それぞれについて番号1つに○をしてください。

	まったく当てはまらない	1	2	3	4	5	6	7	どちらともいえない	非常に当てはまる
1	盲ろう者から無理を言われても、できる限り、それを実現できるようにする	1	2	3	4	5	6	7		
2	盲ろう者の判断が間違っているかと思ったときは、それを指摘する	1	2	3	4	5	6	7		
3	自分のプライベートで起こった出来事を盲ろう者に話す	1	2	3	4	5	6	7		
4	盲ろう者に楽しんでもらえるように接する	1	2	3	4	5	6	7		
5	盲ろう者が悩んでいるときは親身に相談にのる	1	2	3	4	5	6	7		
6	盲ろう者本人のことは、本人の判断が最も尊重されるべきである	1	2	3	4	5	6	7		
7	盲ろう者に困ったことがあれば、すぐにでも駆けつけたいと思う	1	2	3	4	5	6	7		
8	盲ろう者と対等に意見が言い合える関係が望ましい	1	2	3	4	5	6	7		
9	盲ろう者の行動に対して困惑することがある	1	2	3	4	5	6	7		
10	盲ろう者に危険や困難が及ばないように、かまひ守る	1	2	3	4	5	6	7		
11	盲ろう者に不愉快な思いをさせられたときは、本人に苦情を言う	1	2	3	4	5	6	7		
12	盲ろう者とのやりとりで感情的になることがある	1	2	3	4	5	6	7		
13	一生懸命サポートをしても、盲ろう者には理解してもらえない	1	2	3	4	5	6	7		
14	業務時間が終われば、それ以上のサポートをする必要はない	1	2	3	4	5	6	7		
15	できる限り盲ろう者に嫌な思いをさせないようにサポートする	1	2	3	4	5	6	7		

	まったく当てはまらない	1	2	3	4	5	6	7	どちらともいえない	非常に当てはまる
16	盲ろう者の問題は盲ろう者同士で話し合うのがよい	1	2	3	4	5	6	7		
17	盲ろう者の決定や選択に入り込んで、代わりにしてあげることがある	1	2	3	4	5	6	7		
18	自分に負担があっても、盲ろう者の喜ぶ顔を見ることができれば満足である	1	2	3	4	5	6	7		
19	通訳・介助についての悩みや迷いがあるときは、盲ろう者に相談する	1	2	3	4	5	6	7		
20	盲ろう者のために、通訳・介助員が先んじて行動することも必要である	1	2	3	4	5	6	7		
21	移動や通訳、コミュニケーション以外の支援も、盲ろう者に提供する必要がある	1	2	3	4	5	6	7		
22	盲ろう者との対話の際、自分から積極的に話題を提供する	1	2	3	4	5	6	7		
23	通訳・介助活動にやりがいを感じる	1	2	3	4	5	6	7		
24	盲ろう者が社会的に問題のある行動をとったときは意見する	1	2	3	4	5	6	7		
25	盲ろう者の希望をありのままに受け入れてサポートする	1	2	3	4	5	6	7		

問 25 通訳・介助活動にあたるうえで、あなたがお困りになっていることがあれば、自由にご記入ください。

調査は以上です。ご協力ありがとうございました。

検討委員会

1. 検討委員

東京大学先端科学技術研究センター 教授	福島 智
社会福祉法人東京愛育苑金町学園 児童指導員・ 社会福祉法人聴力障害者情報文化センター 要約筆記者指導者養成事業担当	森本 行雄
東京都盲ろう者支援センター センター長	前田 晃秀
盲ろう者向け通訳・介助員	森下 麻利
社会福祉法人 全国盲ろう者協会	村岡 美和

2. 日程

第1回

日時：平成24年8月12日（日）13:00～16:00
場所：社会福祉法人 全国盲ろう者協会事務所
議題：事業趣旨ならびに調査計画についての意見交換

第2回

日時：平成24年11月6日（火）13:00～16:00
場所：社会福祉法人 全国盲ろう者協会事務所
議題：調査内容に関する意見交換

第3回

日時：平成24年11月28日（水）9:30～12:00
場所：社会福祉法人 全国盲ろう者協会事務所
議題：調査内容に関する意見交換

第4回

日時：平成24年12月21日（金）9:30～12:00
場所：社会福祉法人 全国盲ろう者協会事務所
議題：カリキュラム案についての意見交換

第5回

日時：平成25年2月1日（金）15:00～18:00
場所：社会福祉法人 全国盲ろう者協会事務所
議題：調査結果およびカリキュラム案についての意見交換

第6回

日時：平成25年2月28日（金）13:00～16:00
場所：社会福祉法人 全国盲ろう者協会事務所
議題：最終カリキュラム案についての意見交換

発行日：2013年3月31日

編集・発行：～日本のヘレン・ケラーを支援する会®～

社会福祉法人 全国盲ろう者協会

〒162-0042 東京都新宿区早稲田町 67 番地

早稲田クローバービル 3F

TEL 03-5287-1140 FAX 03-5287-1141

URL <http://www.jdba.or.jp>

E-mail info@jdba.or.jp